

新法、客對うたふや、極
 アル、所し、出、入、ハ、ク、レ、バ、右
 客對うたふ、或上、に、極、氣、也
 し、メ、サル、所、一、部、之、上、ア、リ、タ、キ、与
 新法、改、れ、休、う、由、之、ヲ、
 今、糖、使、に、計、し、所、ル、ヲ、何、レ、
 名、に、於、テ、元、始、に、周、旋、ナ、ル、問、題、
 ナ、ル、ヲ、以、テ、引、起、ス、ク、ル、ニ、ト、ウ

夕 暮 月

ねがひに ねがふ、^中 ねがふに けり

何人、同様にしう 幸なる者こ

内流つ式に 出来ぬ限り

おぼしめすに なるべき事なり

今更なる事 なるべき事なり

涼し ^{念と申} なる事 なる事

● 配り ありきなり なる事

3 取りやれ 就てハ

▲獨逸皇帝陛下

陛下は國際的シゴエ也今や支那の動亂に乗じて大仕事を目論見居らるゝ如きも、支那の鍵は日英の手に有之、相手が異ひ申候、愈々支那に手を下さすの日は是れ陛下の運の盡くる時にして忽ち捕縛せられて絞首臺に下るの身と相成るべし、寧ろ南米にでも御出かけありて、合衆國に身をあかさしむるを上策と存候、御反省あるべし

七月廿一日 東京毎日 支那の

今日即ち何の事あるにせよ、お務め

を向ひて、支那の禁を解く事、

支那の事を、支那の事を、支那の事を、

支那の事を、支那の事を、支那の事を、

支那の事を、支那の事を、支那の事を、

支那の事を

附屬書類添附

受20120號

大正九年九月拾七日 差出

主政務局 第一課

表 四四一

大正九年九月

主政務局 第一課

主政務局 第一課



主政務局 第一課
大正九年九月
主政務局 第一課
大正九年九月

主政務局 第一課

附屬書類添附

大正貳年九月九日接獲

支務局 課長 課

長

號 4168 受被

第

21

敬啟者

部係為分內咸令リ
其回書及為周知備

A Conspiracy to Imperil Japan

When will Japan be ready to act for her own
sake as well as other Asiatic Countries ?

By

HASAN U. HATANO

THE AUTHOR OF

"THE ASIATIC UNION"

&

*"WHY SHOULD NOT JAPAN HELP INDIA IN
HER COMING WAR OF INDEPENDENCE?"*

&

THE EDITOR OF *"EL-ISLAM"*

CONTENTS

1. The real reason why the situation in China was suddenly changed	1
2. The Five Powers—England, Russia, Germany, France and America are trying to divide the whole of our Planet among themselves	3
3. Yung Si-gai is a mere puppet in the hands of the Christian Powers	8
4. How skillfully the game is being played by the real actors, keeping the puppet all the time into the lime-light! . .	13
5. Japan is held to be the common enemy of all the Christian Powers	17
6. The Russo-Japanese War and the diplomacy of the Christian Powers	22
7. The Anglo-Japanese Alliance is rather a Curse than otherwise	27
8. The true policy, which Japan ought to adopt.	31
9. A real scheme to solve the present Chinese problem . . .	33
10. Why should not Japan annex.....?	38
11. No Christian Power is in a position to declare war against Japan at present	44
12. The only scheme to save Japan	54

目次

- 一 急轉直下せる支那の真相……………一
- 二 世界を分有せむとする歐米五強……………三
- 三 袁世凱は一の傀儡のみ……………八
- 四 巧妙なる幻師の技術……………一三
- 五 日本は歐米共通の敵なり……………一七
- 六 日露戦争と歐米列強外交の真相……………二二
- 七 呪ふべき日英同盟……………二七
- 八 日本の執るべき百年の大計……………三一
- 九 支那問題に對する根本的解決案……………三三
- 十 何ぞ南洋諸島を併合せざる……………三八
- 十一 列強一として日本と戦ひ得るものなし……………四四
- 十二 日本の執るべき政策は唯だ是れのみ……………五四

要之に、日本は、自ら覇者となりて亞細亞合同を造るにあらずんば、竟に國家千歲の大計を樹て得べくは無し。

著者は深く此の事を信ず、故に、前には『亞細亞合同論』を公けにし、後には『日本は何ぞ印度の獨立を助けざるや』の一小冊子を草せり。然るに著者もさ豈にの筆に、馴れず、所説餘りに露骨、論餘りに激越、爲めに『國際的辭禮』の罰するところとなり、遂に共に發賣禁止の厄に遭へり。

本書や亦た、此厄に遭ふの恐れなきにあらず、而して其の敢て此の危きを目指すもの、即ち他なし、實に、冲沖の情己まむとして己む能はざるが故のみ。

今上第一天長節の朝

繫卵の日本

波多野烏峰述

肅啓

一 急轉直下せる支那の真相

急轉直下せる支那の現状は、眞に一個の奇跡と存候。否、たとひ奇跡と迄は往かずとも、是れ確かに一顧の價值ある幻技と存せられ候。貴意果して如何。

實に急轉直下せる支那の現状を見て、或は、今の時、袁世凱のみ若干支那統一の技倆ありとなし、或は、孫黃の徒竟に爲すところ無しと思惟し、即ち現状の急轉直下を以て、唯だ北軍の強と、袁の智能と、南軍の

急轉直下せる支那現状の真相

一

弱と、孫黄の不能とにばかり歸着せしめ、更に亦た、たとひ奇跡とまでは往かすとも、最も巧妙なる幻技位に看取せざるは、所詮、東亞の時事、延ては亞細亞の將來を語り得る資格無き者と存候。

されど、宇宙一切の事物、竟に、因無きの果無く、奇跡と云ふも、亦た奇跡を生ずるの因無きを得ず、況んや是れ此の幻技！如何にして袁は此の勢力を得たりしか——如何にして南軍は斯る敗北を取りしか——少しく思慮有る者、即ち少しく世界外交の裏面を窺ひ得る者は、よく、此の種の質問に就きて、此の幻技を演出したる老練なる幻師の、果して何者なるかに想到し得べく候。

二 世界を分有せむとする歐米五強

由來、基督教は、力めて謙遜の徳を教ふるものゝ、やがて『我は謙遜なり』てふ自覺が、基督教徒をして極めて傲慢ならしめ、實に吾人が内外基督教徒に見る、かの忌々しき一種の君子振りは、即ち是れに御座候。而して此事實は、又た國家の上にも之を認め得べく、即ち、『世界は基督教國の間に分有せざるべからず』てふ觀念は、歐米列強の間に、いと盛なるものに有之、從て歐米の外交が、列強以外に對し、常に傍若無人の態を有する次第に御座候。さればとて、支那が基督教國となり、印度が基督教國とならば、亦た齊しく世界分有の權利を得、よくそが獨立を尊重せらるゝかと申せば、全然此あり得べくは無く。要するに世界は、今の獨逸・三國同盟と、英佛露三國協商と、更に是れに米を加へた

世界を分有せむとする歐米五強

三

る七箇國——（然れども實は埃伊を除きたる五強のみ——）によりて分有すべきものとなし、即ち基督教は、渾圓球上唯だ此七國、否——五個國——の存在をのみ認むる時を以て、黄金時代の到來と信するものに候。故にクロバトキン將軍は、嘗て、

『日本人若しくは支那人にして、若し露國に向ひ攻撃を加ふるものあるときは、歐洲列國は、歐洲全局の幸福の爲め、露國を援助せざる可からず』

と云ひ、以て世界分有の理想を表白致居候。實にたとひ、三國同盟と三國協商とは、今の時、爾く利害相反するものあるに似たりと雖も、世界は所詮、獨と、佛と、英と、露と、米とが、一致協力、極めて平等に分割せむを期する所。現狀にして大變せられざらんか、大勢にして轉廻せられざらんか、餘り遠からざる將來に於て、世界地圖は、唯だ此の五色

を認むるのみと相成り可申候。

於是か、是等の列強は、所謂『新進國』なるものを惡むこと其度を過ぎ、從て、新たに立憲政治を行はむとするが如きは、所詮、是等列強の默過し得るところに無之候。乃ち、波斯に於ても、埃及に於ても、土耳其に於ても、墨西哥に於ても、はた支那に於ても、是等列強は、あらゆる策略を講じ、以て新進の銳氣を挫き、進歩開發の前途を斷つ次第に候。是れ之れを思はず、徒らに援助を是等列強に乞ふが如きは、狂愚の極と可申候。

試に、波斯に就きて申さば――

千九百六年八月、憲法を公布し、國民議會を開くや、新進の銳氣、國の上下に滿ち、眞に人をして、復た古への波斯大帝國を見るの時來たるあるかを想はしめたる程に候ひき。且つ夫れ、世界の中、波斯位平和なる

國は亦た之と無之、國民悉く宗教の心深く、若し『信仰の上に建てられたる國家』なる字句ありとすれば、そは、則ち此波斯を措きて、他には見出し得ざるべく候。

而るに、歐米列強、特に英と露とは、世界分有の大理想に基き、あらゆる策略を運らし、罪も無き理想的共和國の、そが新進の銳氣を挫き、開發の前途を絶つに力め、果して能く内訌息まず、月を追ふて衰へ、年を迎へて亡びに迫り、遂に今日の慘狀を呈せしめたる始末に候。事實上、南波斯の英に、北波斯の露に併吞せられたるもの、畢竟、世界分有主義の實現と見るべく、列強の大理想を知る者に取りては、亦何らの不思議とて無之候。

殊にかの、一昨千九百十一年、波斯財務顧問モルガン、シャスターが、一恣、富國利民の途を講じ、其の盡力大に見るべきものありしに、露

が、直ちに英を引き込みて、波斯政府に一大高壓手段を加へ、以て其の政府をして、此の忠實なる顧問を解雇せしめたるが如き、明らかに、著者の所説の眞なることを證明するものと存候。

又た埃及が、平和の裡に憲法を設立し、以て獨立と自由とを享樂せむとするや、常に英の姦惡なる阻害に遭ひて果たさず。又た墨西哥が、絶えず米の壓迫と術策とによりて内訌に苦しみ。又た土耳其が、獨と英とによりて、同じく内憂外患止む時あらざるを見る者、誰れか、思ひを日本の將來に及ぼし、暫らく寒心せざるを得べき。實に、世界の大勢にして、一大急變に接せざらむか、世界地圖は、餘りに遠からざる將來に於て、英と、獨と、米と、佛と、露との五色に占領せらるべく候。

三 袁世凱は一の傀儡のみ

一昨千九百十一年十月、武昌街頭、支那革命の雄々しき叫びを耳にするや、正直なる日本政府は、先づ英と露との勸告に基き、極力清朝の保存を念じ居り候。現に、某々元勳の如きは、時の英國大使マクドナルドの空語を眞に受け、支那にして共和國とならば、直ちに日本の國基を危ふするものゝ如くに解し居たるほどに候。

唯だ幸にして、一は、吾が參謀本部に、少數ながらも、よく東亞の將來を察知し得たるの國士のり、又た民間の志士——（此には金に餓えたる有象無象を指さず）——陰に陽に革命軍を援けたると。今一つは、前に清朝を援くべく日本に勸告したる英と露とが、其爲すところ、其言ふところと違ひ、或は金力を以て、又た或は兵力を以て革命軍を援けつゝあ

るの、今や分明となれるが爲め、流石の政府も少しは覺るところありたる次第に候。

斯る間に、革命は、兎に角も成功し、支那や、名ばかりにても共和國と相成候。

されど、革命黨の成功は、是れ、支那開發の最も健實なる第一歩に候、歐米列強は、斷じて、支那をして此の第一歩を取り、此第一歩をして、更に踏み出す百千萬歩の基本たらしめ得べくは無之候。支那分割の利は、なか／＼亞非利加の分割どころにはあらず。然るを支那の革命をして成功せしめ、此の共和國をして獨立と自由の眞光明に浴せしめむか、支那の分割は、所詮、空想となり了せざるを得まじく。畢竟するに、孫黃の徒や、歐米列強の眼には、最も惡むべき『魔の子』に外ならず候。實に、歐米列強は、如何してか、孫黃の徒を支那領土の外に驅逐し、出來得べ

三 袁世凱は一の傀儡のみ

一昨千九百十一年十月、武昌街頭、支那革命の雄々しき叫びを耳にするや、正直なる日本政府は、先づ英と露との勸告に基き、極力清朝の保存を念じ居り候。現に、某々元勳の如きは、時の英國大使マクドナルドの空語を眞に受け、支那にして共和國とならば、直ちに日本の國基を危ふするものゝ如くに解し居たるほどに候。

唯だ幸にして、一は、吾が參謀本部に、少數ながらも、よく東亞の將來を察知し得たるの國士のり、又た民間の志士——（此には金に餓えたる有象無象を指さす）——陰に陽に革命軍を援けたると。今一つは、前に清朝を援くべく日本に勸告したる英と露とが、其爲すところ、其言ふところと違ひ、或は金力を以て、又た或は兵力を以て革命軍を援けつゝあ

るの、今や分明となれるが爲め、流石の政府も少しは覺るところありたる次第に候。

斯る間に、革命は、兎に角も成功し、支那や、名ばかりにても共和國と相成候。

されど、革命黨の成功は、是れ、支那開發の最も健實なる第一歩に候、歐米列強は、斷じて、支那をして此の第一歩を取り、此第一歩をして、更に踏み出す百千萬歩の基本たらしめ得べくは無之候。支那分割の利は、なか／＼亞非利加の分割どころにはあらず。然るを支那の革命をして成功せしめ、此の共和國をして獨立と自由の眞光明に浴せしめむか、支那の分割は、所詮、空想となり丁せざるを得まじく。畢竟するに、孫黃の徒や、歐米列強の眼には、最も惡むべき『魔の子』に外ならず候。實に、歐米列強は、如何してか、孫黃の徒を支那領土の外に驅逐し、出來得べ

くんば其生命を斷ち、其志望を絶たむと欲せざる能はず候。

而して、悲しむべき哉、孫黃の徒、亦た多く世界の大勢を知らず、歐米列強の野心を解せず、竟に衰をして、支那を分割せんとする列強の傀儡たらしめ、以て支那滅亡の端緒を造り出だせる次第に有之候。實に、袁の支那に於けるは、猶ほキヤミル、バシヤの土耳其に於けるが如きもの、其の爲人、小にして狡、實に己れの手が、己れの國を滅ぼさむとする者によりて用ゐられつゝあるを覺り得ざる、眞に憐れむべき痴人に御座候。

加ふるに、正直なる日本政府は、素より、向後の成り行の果して如何なるべきかを知る由なく、唯だ『成るが儘よ』とばかり、舊に依りて『隨伴主義』を執り、何ら進みて遠大なる謀計の、東亞のためにも、はた日本のためにも連らせる無く。實に此の、愛國愛世の士の、最も奮起を要する

時に際し、何事ぞ、吾が政治家は、徒らに蝸牛角上、微々たる政黨の争ひを事とせる有様に候。

深く世界の大勢を知らざる孫黃の徒は、唯だ、歐米列強の敬すべきを思ひ、唯だ、基督教國の人道を重んずるを察し、比較的執着力を缺き、比較的正直に、遂に袁を推して假大總統となせり。此の一事、實に大なる誤りに候。實に一大禍根に候。夫れにしても、人間は、餘りに正直なるは、有害と存候。人も、國家も、是れに對するや、先づ以て、盜賊と視る位が安全なる處世法と可申候。

袁は假大總統となれり、特に借款問題は、何らの故無きに、荏苒歲月を空うし、此間、革命黨即ち孫黃一派の地位は、日に日に、危きを示し、袁派の勢力は、日に日に盛んなるを示せり——如何にして、一は危きを示し、他は盛んなるを示せるか、裏面に活躍せる巧妙なる幻師！而

して、宋教仁の暗殺と同時に、袁派と孫派とは、所詮、干戈を執りて交はらざるを得ざる運命に陥り申候。

而して、正直なる日本政府は、此時にありても、尙ほ歐米列強の志すところを察知し得ず、舊によりて『成るが儘よ』と拱手し居たるに、思ひきや、南北の開戦となり、孫黃等の亡命となるに至れり。然るに日本は、今も尙ほ、支那の近き將來を洞察し得ず、歐米列強の野心を看取し能はずとは、餘りに／＼に可憐なる義には候はざるか。

尊敬する日本の内閣諸公、袁は、唯だ是れ、歐米列強の傀儡に過ぎず候、猶ほキヤミル、バシヤの土耳其に於ける類に候。若し諸公にして、是れ之れを思はず、徒らに、『不逼不黨』とやら、大人らしき公言の下に、太平無爲を誇らむとするが如きは、誠に以ての外の事と存候。

四 巧妙なる幻師の技術

急轉直下せる支那の現状は、たとひ之れを奇跡とまでは見ざれ、實に最も巧妙なる幻技に候。而して其の熟練なる幻師は、取りも直さず、各自に世界分有を理想となし、不言不識の間に一大同盟を約せる、英と、佛と、露と、獨と、米とに外ならず候。

是等の幻師が、手を東亞に伸ばしたるは、早くも嘉永、安政に始まり、日清役前後には、餘程其手腕を示し、降りて日露役前後には、驚くべき熟練を示し居候。而して千九百十一年、支那革命の勃發するや、彼等に取りては、不幸にも伊土戦争あり、巴爾幹の騷擾あり、爲めに、手腕を振ふの思ふ存分なること能はず、一時は革命黨をして成功せしめたるも、其根本に於て、支那の發達を惡み、絶對に是れが獨立と自由とを許

さざらむとする彼等は、それが常套手段として、極めて巧みに、小にして狡なる袁世凱を捉へ、袁が、内憂外患、幾んど自失せるまでに煩悶せるに乘じ、蒙古より威嚇せる露と、西藏より威嚇せる英と、山東より威嚇せる獨とは、米を招き、佛を引き、袁に説きて曰く——『孫黃の徒は、所詮大國支那を統一し得るの材にあらず、隨て南方革命黨の存在は、歐米列強の欲せざる所、袁にして革命黨を根絶するにあらずんば、世界列強は長へに支那共和國を承認する能はず』
更に曰く

『袁にして、革命黨を根絶する意あらば、列強は直ちに借款に應じ、加ふるに、兵力の援助をも與ふべし』

小にして狡、其爲人、強き物によりて欺かれ易き、假大統領袁は、果して列強の術策に陥り申候。人若し、五國借款の成立と、宋教仁の暗殺と、

第二革命の發生と、更に脆き南軍の敗北とを、時間的に、はた論理的に、綜合して考へ、一考する、あらば、極めて容易に、歐米列強の内意を、想察し得べく候。

あゝ、宋教仁の暗殺、こは是れ、支那大騷擾の端、支那分割てふ一大悲劇の序幕に候ものを……當時の日本政府は、是等の秘謀に就き、毫も關知するところとてなかりき。

由來、宋教仁は、實に親日派の首領たるばかりか、實に亞細亞合同論者に候。惟ふに幾多の點に於て、孫よりも賢く、黃よりも大に、なか／＼胡瑛、胡漢民等の及ぶところには無之候。彼れが持論に云ふ

『滿蒙の統治は、支那共和國の力に過ぐ、如かず、之れを日本に分譲し、以て兩々手を携へ、而して極東千載の大計を定め、延いては亞細亞萬年の巨策を講せむには』

斯くの如きは、到底、歐米列強の默許し得る議論に無之。斯の宋教仁が、南北開戦に先だちて、暗殺せられたるは、蓋し數の定まれるところと可申候。

遮莫、幻帥の技術、眞に巧妙を盡せりと申すべきかな。

五 日本は歐米共通の敵なり

説きて此に至る、賢明なる讀者諸君は——渾圓球上、歐米の大野心たる世界分有の實行を妨げ得るものは、唯だ東海々上、自ら君子國を以て許す日出帝國あるのみなるを思ひ、而して此の君子國の、やがて歐米列強共通の大敵なるを自覺し得べく候。

然り、日本は、畢竟、歐米列強共通の大敵に御座候。

若し夫れ、日本の外交にして『日本は歐米共通の敵なり』てふ自覺の上に行はれざらんか、危いかな、日本の將來！ 實に、個人に在りても、はた國家に在りても、『敵を友なりと誤信すること』は、常に大害の因をなすものに候。偉大なる人は、古今東西、敵となりても偉大に、友となりても偉大。偉大なる國家や、亦た、敵となりても偉大、友となりても偉大な

るべきものに候。若し夫れ敵に向て友たることを求むる如きは、所詮、家を破り、國を亡ぼさざる能はず候。

乃ち、今の儘にしては、日本が、何の日に、歐米の聯合軍と戦はざるを得ざるは、眞に火を観るより明かなる事理に有之。若し開戦せずして濟む時あらば、そは、日本が、屈辱に屈辱を重ね、欺瞞に欺瞞を重ねられたる揚句、力既に戦ひ得ざる、悲惨至上の境に立つ際と可申候。

由來、狡猾に長けたる歐米列強は、謂ふところの『漁夫の利』を占むるに巧なり、故に、正直なる日本と、顧問なる清國とは、干戈を執りて相争ひたる次第に候。

顧ふに、千八百九十一年（明治二十四年）露は、佛と同盟を造り、西北利鐵道を浦鹽斯まで延長するの勅令を發布し、此に意を極東經營に集注するや、直ちに獨を招き、英を誘ひ、四國一致協力、如何してか、先

つ此小弱國日本を滅ぼし、繼いで老大國支那を分割すべきかを講究し、
そが常套手段たる『漁夫の利』を占むるの機會を捕ふるに餘念無之候
ひき。

もと、露の極東經營たる、實に英も、獨も、佛も、素より雙手を舉げて
喜ぶところに御座候。何となれば、露にして極東に向はむか、獨と英と
は、小亞細亞並に東歐に於て露と争ふの要なく。英は、印度、阿富汗、
乃至波斯に於て露と衝突するの恐れなく。従て露に對する資本家たる佛
も、亦た、其意を安んじ、同時に、南清政策に於て、間接に一種の援助を
受け得るが故に候。

斯くて四國は日清開戦の動機を造るべく餘念なかりしに、時なるかな、
千八百九十三年（明治二十六年）韓半島に東學黨の内亂起れり。於是か、
特に、英と露とは、李鴻章と袁世凱に説きて曰く

『日本の將來は恐るべきものなり、今にして之れを討たずんば、必らず悔ゆるの時來らん』

李や、流石に、よく日本の實力を知り、且つ極東の將來、日支同盟せざるべからざる所以を知れり、されど、英露の強勸、亦た拒み難きものあり、殊に正直にして剛勇なる日本の意氣と、傲慢にして頓間なる支那の態度とは、見事英露の術中に陥り、遂に日支の外交は斷絶するに至り候。——あゝ斯くと知りたる露國よ、知らず、破顔一笑、乃公の事既に成れりと傲語せざりしか。

當時の列強は、一として日本の敗戦を豫想せざる無く、實に、平壤の一戦を以て、日清役の結末とさへ公言し、彼等は、盛んに媚を支那に呈じ、殊に英の、幾たびか我に與へたる戰略上の不便は、今尙ほ我が海軍の切齒するところに有之候。

然るに、戦争の経過は、全く歐米の豫想に反し、平壤陥り、九連城降り、金洲、大連、旅順、相繼で日本軍の占領するところとなり、北洋艦隊亦た全滅するに至るや、外交界無雙の無節操漢たる英が、支那に寄せたる媚言の、そが舌の根、今尙ほ濕へるに、早くも秋波を日本に送り始めたるは、寔に老猾の極と可申候。英や乃ち、以爲く

『極東の分割は、支那より始めざるべからず、如かず、暫く日本を、吾が藥籠の中に納め、以て徐ろに枝葉を枯し、以て其の根幹に至らむ』

日本は勝てり、勝てる日本は、驚くべき力有るを示せり。於是か、單刀直入的な獨と、野猪的な露と、野火に似たる佛とは、赤裸々、公然の援助を支那に與へ、遂に日本をして、遼東半島を還附せしむるに至り候。

六 日露戦争と歐米列強外交の真相

そもく北清事變は、眞に東亞の危機なり。若し露にして、今少しく野猪的態度を取らず、即ち、今少しく公然の突進を試みず、實に自ら南滿を爾く確實に占領すると同時に、佛にも南清を確實に占領するの機會を與へ、獨には中清に於て、英には西藏に於て、所謂均等なる利益を得せしめ、又た米にも何ものをか得るところあらしめたりしならば、十中十迄は、日露戦争を見ずして、支那の分割は實現致され居たることと存せられ候。

唯だ夫れ、露の分前が餘りに大なり、於是か、慾の權化たる英は、大に不平たらしむるを得ず。乃ち、人知れず日本の歡心を買ふに力め、果して日本をして、露の滿洲撤兵問題に就き、爾く強硬なる態度を執らし

めたる次第に候。於是か、かの英國心酔者の隨一故小村侯が、百倍崇拜の程度を高めたるもの、亦た一理ある義と存候。

英國が、日本の歡心を求むる所以のものは、一に全く、露の餘りに我儘なる態度を責めむとし、又た其の餘りに大なる利益を割かしめむとするに在り、日本の位地を高めて、世界分有の權利を握らしむなどの念は、毫頭無之、即ち、たとひ露をして全勝の光榮を得さしむるは、極力之れを欲せざるところなれど、さればとて、日本に全勝の光榮を得さしむるが如きも、亦た素より其の欲せざるところに有之候。實に、姦黠なる英は、此にも、漁夫の利を求めたる次第。若し夫れ露にして、當時英に割くに波斯全部を以てし、はた西藏に對する英の優越權を認めたりしならば、英や、力を露に致して、日本を壓迫すべく力めたるや明白に候。

比較的單純に、加ふるに野豬的なる露は、事此に出です、唯だ何處まで

も、日本を突破し得るものと心得。且つ當時、露は、佛と面白からず、英は殖民地に悩み、米も亦た南米に忙はしく、露や乃ち以爲く——南滿と韓半島とを占領するは、時こそ今なりと。要するに日露戦争は、歐米列強特に英によりて——『日本を壓せむとすれば、時や今なり』と強くも慫慂せられたると、又た、大守アレキシイフ一派の——『日本は兵力に於て、財力に於て、竟に露の敵にあらず』と戦争熱を昂めたるに基因致居候。

而して、戦争の結果は、日清役よりも、更に幾十倍して、歐米列強の豫想に反し、日本や、連戦連勝の光榮を享くるに至れり。日本を援けたる英も、於是は、甚だ不快の感無き能はざる義に候。聞くとくところによれば、日本をして、復び遼東半島を還附せしめたるは、實に英なりし由に候。而して英國心醉者の随一故小村侯が、一も二も無く、英の歡告に従

ひ、譯もなく之れを還附したるは、亦た想察するに難からざる義と存候。

日露戦争の効果は何ぞ——曰く、歐米列強の敵意を強めたるのみ。そ韓國併合の如き、條約改正の如き、日露戦争の効果としては、餘りに餘りに微小なるを覺え候。實に是に由りて利したるは、單り歐米列強に候。即ち、露をして過大の利權を得せしめず、列強平等の歩武を取り、以て世界分有の理想を實現すべく努力し得るが故に候。於是は、敗れたる露も亦た、遠大の利益に浴したる義と可申候。

馬鹿を見たるは、即ち日本に候。是れによりて、軍人精神を鍊り、戦争方法を究め得たりと謂ふは可し、是れによりて、世界一等國の列に入りたりと誇る如きは、痴小人の事に候。否、前者の利益も、獨が、日本に先だちて『歩兵操典』『野外要務令』等を改正したるに徴すれば、むし

ろ、日本よりも、より多く益したるものが、他に是れ在るやう存せられ候。佛の某將軍が——『日本は、最新の戰術によりて、最新の武器を試験すべく實戰を演ぜり』と評せるは、至極尤ものことゝ可申か。實に、最新の武器を、最新の戰術によりて試験したるは、露にあらずして日本なりしが故に候。

遮莫れ、強露を破りたる日本は、全亞細亞の民に一大教訓を與へ申候。彼等の以爲らく

『亞細亞の一の國民が成したるものは、亞細亞の他の國民も成し得ざるの理無し』

七 呪ふべき日英同盟

敢て云ふ、日英同盟を以て、日本百年の長計の如くに考ふるは、眞に愚妄の極に候。

そもく、英は、南阿戦争(千八百九十九年——千九百二年)によりて、眞に想はざる損失を、財産と生命とに蒙り、爲めに甚だしく國力を減殺し、且つ是れが爲め、其の寶庫たる印度に於ては、著しく統御の弛めるを感じ、實に人をして、昔日の大英國今何くにか在るの嘆息を洩らしめ、俗に謂はゆる頭痛鉢巻の折柄。日本亦た、北清事變前後、西比利鐵道の全通に驚き、露の高壓手段に戦^かけるあり、於是か、英は、正直なる日本を招きて是れと結び、以て一は露の制肘に備へ、他は印度の統御に資せむと希望致候。

正直なる日本は、所詮、森點なる英の外交の裏面を洞察し得べくは無
し、千九百二年、第一次同盟を結び、千九百五年（明治三十八年）には、
益くべきかな——そも何の必要ありてか、日英攻守同盟を締結し、
馬鹿にも程こそあれ、全國を擧げてお祭り騒ぎを演じたる次第に候。

要するに日英同盟は、英が、日本の兵力を利用して、暫く力を亞細亞の
防備に休めむと考へたるに起り、爲めに利するは、英のみと可申候。故
小村侯一味の徒が、動もすれば、韓國併合、條約の改正を、日英同盟に歸
すれど、こは自畫自賛の類。實に韓國併合は、既に日清戦争に定まり、
條約の改正、亦た是の戦勝に定まれりと可申候。たとひ、無能なる外交
が、日清役後、直ちに韓國を併合し得ず、條約を改正し得ざりしとは云
へ、既に強露を破り、米の仲成によりて平和の局を致したる以上、韓國
併合と、條約の改正とは、即ち當然來るべき結果として、到來すべき譯合

事是れと異り、英に取りては、此の攻守同盟の結果——先づ露を極東に制肘し、是れをして印度、阿富汗、及び波斯に思ふ存分の活躍を致さしめず——印度民族に向ては『日本は汝等を殺すぞ』てふ威嚇を與へ、以て其の革命思想を抑壓し——獨をも、米をも、佛をも、其の亞細亞政策に就きて、日本をして索制せしむるところあり——實に、其餘力、よく、昔時の大英國を復活せしめ得たる次第に候。

是れに反し、日本が、日英同盟によりて、蒙りたる損失の如何に甚大なるもありしかは、殊に吾が參謀本部の熟知するところと存せられ候。又た、近き將來に於て、日本貿易唯一の顧客たるべき、印度の民心を失へるに至りては、心あるものゝ齊しく憤慨するところに有之。一言以て之を蔽へば、實に日英同盟は、有害無益の贅物に外ならず候。

斯くまでも日本は、英に利用され、英に蹈みつけられたるに。外交上無雙の無節操漢ジョン・ブル（英國の異稱）は、米と仲裁條約を結ばむが爲め、千九百五年八月より十箇年の間有効なるべき日英同盟を、實に期に先だつこと三年にして敢て改締し、遂に之れをして有名無實のものたらしめたるに至ては、眞に惡みて尙ほ餘りあるを覺え候。此に至りては流石の英國心酔者たる故小村侯一派の者も、顔色なかるべき筈。道路の言に、小村の死は、一は英國の無節操に對する憤怒と、一は此無節操漢に信頼せる自己の不明に對する苛責とに因れりと云へるもの、亦た萬更の億測とも申し難く候。

呪ふべき日英同盟！ 日本は、先づ英の姦策に對し、十二分の警戒を拂ふべきことに候。

八 日本の執るべき百年の大計

日本は、歐米列強の中、常に一の友邦を有せざるばかりか、實に列強は、一致協力、以て如何にしてか、此の積に障るジャツンを蹴倒しくれむものをと、是れが好機を捉へむとて、鵜の目鷹の目の有様に御座候。若し夫れ、強き形容詞を藉り來たりて云へば——『彙卵の日本』の語や、即ち至極尤ものことのやう存せられ候。

然らば、今の日本は如何なる手段に出で、以て百年の大計を定むべきか。著者、是れに答へむとて、昨冬、先づ『亞細亞合同論』を公にし、更に今春『日本よ何を印度の獨立を援けざるや』の一篇を出し、實に不完全ながらも、日本の執るべき百年の大計に就きて、卑見の一端を語たる次第に候。

要するに、日本に取りては、自ら覇者となりて亞細亞合同を成るとが、
 即ち百年の大計に有之。若し此の大計を採らざらむか、誠に申すも心惡
 きことには候へど、梟卵の日本は、やがて波斯の轍を踏み、埃及の末路
 を繰り返すに至るべく候。

此の見地に立ちて、當面の問題——支那問題、並に南洋問題——に就
 き、所思を披瀝可致候。

九 支那問題に對する根本的解決案

袁を傀儡として、南方革命黨を壓迫し、其志士をして亡命せしむるまでに、革命の業を破壊したる歐米列強は、即ち東亞平和の攪亂者に御座候。實に若し列強にして、早く借款を成立せしめ、誠意以て共和國の根柢を固むるに援助を與へたらむには、今時の民國は、既に干戈を納め、唯だ唯だ富國利民の業に多忙なるや明らかに候。唯だ夫れ、列強は、出來得る限り久しく支那を混亂の狀態に置き、以て分割の運を早めむことばかりを念するの故に、事今日に至りたる次第に御座候。

而して、此の列強は、又た如何してか日本を滅ぼさむを念せるもの、實に日本に取りては不俱載天の仇敵に候。實に列強を視るに、不俱載天の仇敵を以てするなくして、極東問題、日本の將來、はた全亞細亞の政策

を講せんとするが如き、是れ猶ほ、東方を知らずして、徒らに太陽の出處を求むる類に候。

既に之れを知る、乃ち日本は、日支協力、以て極東平和の攪亂者たり、日支共通の仇敵たる、此の歐米列強をして、全然手を極東に退けしむるが、即ち至上の策と可申候。

されど是の至上の策を行ふに先だち、日本は、支那現時の騷亂を鎮定すべく、大に爲すところあるを要とす。著者は、一個の私見ながら、支那問題に對する根本的解決案として、左記の言をなさむと欲する者に候。由來、日本は、唯だ支那の獨立保全を念とし、其の國體の、或は共和たり、或は王國たるは、毫も問ふところに非ず、また、其の主權者の、或は袁たり、或は孫たり、或は漢人たり、或は回教徒たるも、亦た毫も問ふところに無之候。唯だ、其人の力、よく支那を保全し得るに足り、加

ふるに日本と和諧協力、よく亞細亞政策に盡し得んか、是の人や、即ち日本の、進みて以て之を援助し、よく其人をして、支那統一の實を舉げしめむと欲する其人に候。

而して現在にありてや——袁は、世界の大勢に聞く、歐米列強の野心を看取し得ず、所詮、支那の保全を果し、極東の平和を保證し得るの材に無之候。且つ彼は、歐米列強に瞞着せらるゝの餘りに深く、今にして列強の羈絆を脱するは、全く不可能の事と可申候。

於是か、日本は

一 袁以外に、眞國土を見出し、敢て歐米の鼻息を窺はずして、斷乎此の國土を援け、唯だ東亞萬歳の和平を思ひ、以て其の爲すべきことを爲すべし。

二 第一步として、歐米列強の傀儡たる袁一派の權力を剝奪するこ

と。

三 唯だ國民全般の希望に基き、帝政なり、共和政なり、唯だ早く國體を定め、卒先して之れを承認すること。

四 滿蒙は、所詮 今の支那——永遠に於て然らん——の統治し得るところにあらず。乃ち滿洲及び內蒙古は、之れを日本に併合し、外蒙古は、露に對する中立地帶として、其獨立を保全し、且つ猶ほ之を日本の保護の下に置くこと。

五 清朝及び蒙古の皇族貴顯にして、日本の國籍に入る者に對しては、朝鮮の皇族及び貴族に對して爲せると同じく、優握なる聖恩を奉じ、以て永遠其名譽と地位とを保たしむること。

六 西藏の、支那領土たることを確保し、日本より、外交及び財政上の顧問を送ること。

七 支那の列強に拂ふべき賠償金は、向後或は十年、或は二十年、無利息据置となすこと。

八 陸軍は、日本の將校を以て訓練し、純日本式に組織し。海軍は、之れを新設せず、向後三十年若くは五十年、日本の艦隊を以て、支那沿岸を防備すること。

九 既に列強の掌裡に在る、既成の鐵道、及び未設鐵道の敷設權は、舉げて之れを支那の手に回收すること。

十 國民教育には、必須科目として日本語を置き、近き將來に於て、日支兩國を同文同言語の國たらしむること。

十 何ぞ南洋諸島を併合せざる

由來、南洋諸島は、極東の關門にして、實に亞細亞千載の安寧や、此に撃がれるものあるを認む。乃ち今の時、支那問題の根本的解決と相左右し、日本の、進みて南洋諸島を併合するは、賢者の齊しく主張するところと存せれ候。

而して、南洋諸島の併合たる、實に、今の時を措きては亦たと其好機あらざるべく、即ち諸島が、半死半亡の和蘭の手中に在りてこそ、始めて容易に併合運動も行ひ得るものゝ、和蘭にして一たび獨逸聯邦に加はり、カイゼルの荒息が、スダン海峡の波濤を騒がすに至りては、併合は愚か、日本や、全然幽閉の姿と相成り申可候。而して、和蘭が、獨逸聯邦の一となる機運は、今や大に熟し居候。夫れのみならず、和蘭政府が米國政

府と締結せる密約によれば、實に……（後日、就きて詳論すべし）

和蘭が、獨逸に合併するの、幾んど既定せる事實なるより察すれば、米國に支拂ひたりと稱せる、約三億萬圓は、實は獨逸の國庫より支出せられたるものにあらざるか。而して、獨逸は、是の艦隊の成立を待ちて、和蘭の合併を公言すべく。要するに獨逸の眞意は、世論——英の海軍擴張——に憚り、爲めに和蘭の名を以て、此の大艦隊の大注文を米國に發せるものなるからんや、是れ亦た、推察するの理なきにあらざるか覺ゆ。

是の艦隊が、其儘獨逸政府に入るにしろ、入らずにしろ、是れに加ふるに、米の太平洋艦隊を以てし、更に英の濠洲艦隊を以てせむか、如何に軍人精神の旺盛を誇るの日本艦隊とて、亦た大に寒心するものなき能はざるべく。要するに日本が、南洋諸島を、今の儘に放置するは——即ち進んで併合せざるは——日本に取りて、危險此上も無き事と可申候。

事是れに反し、若し南洋諸島にして日本の領土とならむか、諸島の富みは、以て著しく日本の財力を増加し、諸島の地位は、以て日本の戰略に

資するところ甚大。即ち、諸島を併合すると、併合せざるとは、其の生ずるところの差異、寔に喫驚に値するもの可有之候。思ふに、若し日本に偉大なる政治家のあるあらんか、則ち此人は、總てに先だちて、南洋諸島の併合を企つや明らかに候。

著者を以て之れを見るに、南洋諸島の併合たる、今に於ては、極めて容易なることに候。日本の政府にして、僅かに百萬圓を費すの度量あらば、諸島の日本に併合せらるゝ、蓋し三年を俟たざることと確信致候。然らば、問はん——其方法は如何……

今此に、是れが方法を縷述するは、快や即ち快なりと雖も、是れが實行に際して、甚だしく障害を招くの因となるを恐る。唯だ冀はくは、親愛なる讀者諸君の、南洋諸島を併合するの、好機即ち今に在

るを信じ、成算亦た著者の胸中に存するを信じたまはむことを。

* * *

一たび日本にして、南洋諸島の併合を開始せんか、歐米列強の驚きや大ならん——『外交上の低能兒ジャップ、如何なる風にや吹かれて、此の大事を企てしぞ』斯くて歐米列強の視線は、悉く日本の上に集まり、威嚇來たり、欺瞞生じ、誘惑現はれ、實に極力、日本をして斯る異常にして遠大なる計劃に成功せしめざらむと可致候。されど、此時、日本は、斷乎として動かす、其の成さむと期する事を爲すに於て、堂々王者の態度を取るべきに候。

而して、著者の成算に由る南洋諸島の併合は、之れを米の玖馬、布哇等の占領に比し、全然其趣を異にせるものあるを認む。即ち、彼れのは、領土擴張、商權伸張を目的とし、我れのは、極東乃至全亞細亞の平和を

念とし、更に、南洋諸島の人民が、現在の苦楚より脱せむとて、來りて我國に併合せられむを欲するもの有之候。實に、著者の爲むことを欲する南洋諸島の併合は、即ち王道の指示に基けるものに候。

而してたとひ、日本が、南洋諸島の併合を形式の上に終了せざるとも、既に日本が、之れを併合するの意志あるを示し、此に歐米列強の、皮肉なる干涉起るあらんか、實に印度の民は、勃然として革命の一大運動を起すべく、其餘波は、土耳其斯坦に及び、埃及に及び、爲めに、英と露とは、所詮、手を支那問題に留め置く能はざるの境遇に陥り可申。實に賢命なる阿富汗の君主は、中部亞細亞に於て驚くべき計劃を實行すべく、土耳其も、波斯も、奮起して、獨立自由繁榮の道に活躍すべく、於是か、謂ふところの大亞細亞合同は、手に唾して成就可致候。

何んぞ知らん、亞細亞に於ける是等の運動が、やがて、墨西哥に、南阿

に、比律賓に、驚くべき刺戟を與へんとは。若し日本にして、『人を制せずんば、人に制せらる』てふ古語の、眞なる所以を知るからには、則ち支那問題の解決を期すると同時に、須らく南洋諸島の併合に著手せざるべからざる義と存せられ候。

而して、著者は、堅く、日本の、南洋諸島併合運動より來たる、歐米列強の威嚇の、毫も恐るべからざるを信ず、何となれば、列強は一として、今の時、所詮、日本を敵として開戦し得るものあらざるが故に候。

十一 列強一として日本と戦ひ得る

ものなし

説きて此に至る、此に當然發すべき質問は、即ち——『歐米列強、何故日本に對し、最後の手段即ち兵力を以て壓迫し來らざるや』に有之と存せられ候。

就きて詳説するに先だち、著者は現下の狀況より斷案を下し、實に左の一事を前提と致さむを欲するものに候。曰く

『獨逸伊の三國同盟と、英佛露の三國協商とは、所詮、懸軍萬里、日本に對して、一致、軍を聯合すること能はず。米は、三國協商に列すべきも、是れ亦た、協商の三國に合して、軍を極東に動かすこと能はず』

何となれば、歐米列強既得の持分が、未だ安固ならず、加ふるに俗に所謂餓鬼の集り、甲が、少しく監視を怠れば、乙丙、直ちに來りて其持分を犯さむとし、實に、今、極東に於いて如何なる重大事件發生すればとて、歐米列強は、各自の持分を現状の儘放置して、一致協力、極東に向て兵を動かすの道に出づる能はざるが故に候。

* * *

先づ、露に就きて申さば――

露が、幾んど其全力を傾けて、巴爾幹問題に當れるは、人の明らかに承知せるところに有之。實に巴爾幹の騷擾だにあらざらんには、露の極東政策たる、己に業に成功の域に達し居るに相違なく、即ち、内外蒙古は、疾くの昔に露の物に候。要するに、巴爾幹問題たる、露に取りてや、なか／＼以て極東問題の比には無之、たとひ内外蒙古に於ける、そが苦心

慘憺の効果は、擧げて之れを放棄せざるを得ざる破目に至ればとて、巴爾幹に於ける利權は、些かも之れを滅殺し得ざるものに候。

而して、獨と、奥と、伊との、極めて機敏に活動し、寸時の隙間にも乘じて、尺許の利益をさへ、之れを獲得せむを期するあり。又た其の協商國たる、英と云ひ、佛と云ふも、到底油斷のなる代物には無御座候。

乃ち露は、巴爾幹騷擾の落着せざる限りは、所詮、大軍を極東に動員し、雌雄を日本と決し得べくは無之候。

且つ夫れ、虛無黨は改めて云はず、國內、祖先來の露人にして、尙ほ不平怨嗟の聲、鬱勃今にも發せむとするものあり、更に加はふるに、フランドの革命、ポーランドの獨立、トルキスタンの反抗、亦た大に憂ふべきものに候。

若し夫れ、日本にして、露に向ひ、大喝、其暴を叱するあらんか、彼れ

が、かの弱き犬の、尾を脚間に潜め、頭を地にして憐みを乞ふの醜態を演ずるは、眞に察し得て餘りあるを覺え候。

* * *

次に、英に就きて申さば――

佛と、露とを味方とせる英は、幾多の問題に於て、奥と伊とを味方とせる獨との利害の衝突に苦しみ。たとひ早晚、一大合同を形成し、以て世界分割の道に努力せざる事を得ずとするも、尙現下の状態にては、所詮、一致協同、利害を共にする等のことは、想ひも及ばざる義と可申候。

現に支那問題に在りては、英や、西藏に據り、是れを以て満足せることとて、獨の山東省に對する活動は、之れを頗る大目に見つゝあるものゝ、巴爾幹及び小亞細亞に於ける利害の衝突に至つては、眞に見る目も氣の毒の有様に御座候。此の英が、如何なる大事件あればとて、獨奥伊三國

列強一として日本と戦ひ得るもの無し

四七

を思ふ存分に振舞はせ、はた、佛露の二國にも氣儘放題を爲せ、自ら、米なりと協同して、極東に兵を動かす如きは、眞に夢想も及ばざるところに候。

要するに、現時、其境遇の、英國位、苦しきものは外に可無之、たとひ昔日隆盛の隋力により、其威權今尙は大なるもの無きにあらねど——波斯に在りては露と衝突し——小亞細亞及び巴爾幹に於ては獨と衝突し——西藏に於ける利權の獲得も、日本の腰にして強硬となれば、なかなか容易の業にあらず——南阿、埃及、特に印度の獨立運動は、實に月と共に其激しさを加へ來たり——折角日英同盟を破りて、仲裁條約てふ形式の下に、是と新たに同盟を結ばむとしたる米は、英、當人程には氣乗りせず、要するに英は、今の時、日本どころには非ず、埃及の民軍に對してさへ、戦ひを宣し得るものには無之候。即ち、ジョン、ブルは、全

『獨活の大本』に外ならず候。

次に、獨に就きて申さば――

英佛露三國協商に對し、そが武裝的外交の、常に緊張せざるを得ざる限り、さすがのカイゼルも、鵬程萬里、日本に向つて開戦し得べくは無御座候。由來獨は、即ち露と同じく、其の巴爾幹問題に對する利害關係たる、なか／＼以て極東問題に對するの比には無之。實に察するところ、たとひ既に得たる山東の利權を舉げて之を失へばとて、巴爾幹に於ける利權は、其一分一厘をさへ失はざらんを期するもに候。且つは、バグダッド鐵道の懸案あり、何を苦しみて日本と開戦するの愚にや出づべきや。所詮、獨は、支那分割の下地――足場――として、一大利權を山東に設定せむと力むべきも、實は、南洋諸島に對し、垂涎まさに三千丈に達せ

るものに候。故に、日本が、南洋諸島併合の運動を開始せんか、獨や、今支那人を煽動して日貨を排斥せしめつゝあるどころにあらず、是れが百倍千倍せる姦計惡策を講ずるや明白に候。されど、其爲すところたる、唯だ、姦計たり、惡策たるに止まり、畢竟、兵力に訴へて迄でも、邪魔せむの意氣込みは無之。此際、日本政府が、徒らに外交上の鬼面に驚かず、堂々爲さむと欲するものを爲すことが肝要と存せられ候。

*

*

*

*

*

次に、米に就きて申さば――

浮薄なる、金錢づくめの、憂國心なき米は、日本軍の重砲一つに閉口可致候。而して其の海軍は、既に定評あるところ、朝陽西より出づるの時代あらば、いざ知らず、然らざる上は、米が、日本に戦を挑むなどは、先づ愚人の戲言とより受取れず候。

夫れに、日本の外務省が、今ま、餘りに腰を弱くするは、却りて有害に
は候はざるか、外交とは、燕尾服を着て、華やかなる舞蹈場に臨むこと
には無之候。

若し、米にして日本の欲するところを妨げ、日本の要むるところを拒ま
んか、乃ち、布哇の併合に着手し、比律賓の革命に援助し、更に墨西哥
と攻守同盟を締結すべし。一種財力の奴隸たる米は、唯だ、日本の前に
低頭平身するの外はなかるべく候。

*

*

*

*

*

其他、澳と云ひ、佛と云ひ、伊と云ふ、是等は、獨の爲すところに従ふ
か、露のなすところに従ふもの、所詮、自ら進みて日本に對し、開戦の
布告を致し得るものに無之候。

要するに、著者は、今の時——『列強一として日本と戦ひ得るもの無し』

と斷言するの、毫も誤らざるを確信する者に候。されど、されど、『機會』の神は、前頭にばかり數條の頭髮を有するのみに候、一たび身を轉せむか、之れを捉ふるは、全く永久に互りて不能の業に候。實に、今の時、日本の要とする金銭は、即ち——『往け、汝の前途を遮るアルプ無し』の一句に候。

*

*

*

*

*

本章を起すや、素より財力に就きても一言するの意なきにあらず。現に、幾多の人は——『日本は財力に於て何れの國とも戦ふ能はず』と悲觀せるものあるを見る、されどこは思はざるの甚だしきもの、現在の日本は、國際關係上、即ち世界の大勢上、列強の何れよりも挑戦せられざる地位に立てり、たとひ其の財力が、如何に薄弱なればとて、亦た何ぞ此の優勢に乘じ、其の爲さむと欲するものを爲さ

ずして可ならんや。

著者近く、『日本の商業戦』てふ一冊子を公にし、以て、如何にして財力上、覇を世界に唱ふべきかを論せんの意あり。

列強として日本と戦ひ得るもの無し

五三

十二 日本を執るべき政策は唯だ是れのみ

今の日本を以て、敢て累卵の危きにありとするは、好個の譬喩と存せられ候。冀はくは、人よ、著者を以て、徒らに不吉の言を爲すものと誚るなからんことを。古語にも——『自ら死地に在るを知るものは活く』と有之候。日本が自ら、今ま、累卵の危きに在るを自覺することは、是れやがて、自ら活路を見出す第一歩なりと確信致候。

然り、此の自覺は、よく日本をして、『大亞細亞政策』を執らしむるに至る、即ち『大亞細亞政策』を執るにあらざれば、竟に他に、日本を救ふの道無きを確信せしむ。而して此政策を、直ちに實行するが爲めには、即ち左の方法を執らざるを得ず候。曰く

先づ、滿洲及び內蒙古を日本の勢力範圍内に收め、同時に、南洋諸島の併合に着手すべし。更に、印度の獨立を援助し、波斯の勃興に盡し、阿富汗、及び土耳其と修好條約を締結すべし。

斯くて、よく、近き將來に於て、日本を盟主とせる亞細亞合同の實現を期するを得べし。實に、日本の執るべき政策は、唯だ是れのみに候。

彙 卵 の 日 本 終

大正二年九月五日印
大正二年九月八日發

刷行

【定價十五錢】

著者兼
發行者

東京市赤坂區壺町四十一番地

波多野烏峰

印刷者

東京市本郷區湯島一丁目二番地

加藤直

印刷所

東京市本郷區湯島一丁目二番地

立教社印刷所

大正貳年九月廿日接受

圖書部 整理部 田生部

大正二年九月二十〇日起算
〇月〇日附

送第 四七〇 號

主管

7



大正貳年九月廿日 達濟

岡内務省警務局長 松井房長心得

出版物送附件

左記出版物送附有之書用済、付及

市送送美、手、片、查、収、机、成、度、其、版、中、進

第 27 / 1

庚午

一、癸卯、日本

彼等野鳥峰述

江上

別冊之甲、序文

外 務

告



大正二年十一月十九日馬在本邦支那代
理公使牧野外務大臣ヲ来訪シ別紙覺書
ヲ手交シ本邦新す中袁大總統ニ對シ極
端ナル侮蔑罵詈言ノ筆ヲ弄スルヲナル付
取締リアリ度旨申出タリ右ニ對シ牧野外相ハ指
定セラルタル新す紙ハ何シモ現政府ノ反對派ニ屬
シ袁大總統ノ攻撃ハ即チ間接政府攻撃
ノ手段ニシテ以テ政府ヲ苦メントスル目的ニ過キス
從テ政府之ヲ取締リントスルハ却テ益々火ノ手
ヲ熾ナラシムルハ可シ云々ト答ヘ同公使
ハ其依リ取りタリ

此迄年情此等政
府ニ適切アリタシ



大總統當選後日本報紙之論評

穩健派

東京朝日新聞

十月八日

題曰大總統選舉

中外商業新報

十月八日

題曰袁大總統當選

中央新報

十月七日

題曰日支親善

時事新報

十月十日

題曰選舉後之袁總統

大阪朝日新聞

十月八日

題曰支那共和國承認

大阪每日新聞

十月八日

題曰支那共和國成立

大和新聞

十月八日

題曰大總統選舉

以上七種立論均尚平穩惟敘述選舉時情形仍有

軍警干涉金錢收買等語

激烈派

東京二六新聞

十月八日

題曰袁之野心遂成

又

十月八日

題曰友邦民國前途

東京日日新聞

十月八日

題曰袁總統之當選

報知新聞

十月七日

題曰大總統袁君

日本新聞

十月九日

題曰友邦共和國承認

東京每日新聞

十月九日

題曰專制的大總統

門司新聞

十月八日

題曰袁君萬歲

國民新聞

十月八日

題曰大望成就

以上八種詞旨侮蔑有沐猴而冠罪惡醜怪虎狼曹操董
卓老獠殘暴惡辣權詐篡位帝制及買收誘拐等語

申報

號受 5888 號

大正貳年十二月廿九日接受

第 20 號
寫送付 朝鮮總督府

高圖秋發第五四号

大正二年十月二十八日

朝鮮總督府發務局長明石元二郎

報 光

新聞紙知事：閣下

左記新聞紙「治安」妨害不仁之認、焚賣
頒布ヲ禁止之押收知事致候條利紙譯又相係此
段及報先候也

左記

註政務局

出

第一課



一、勸業新聞

第七九号

諺文

十月十一日 露 頒 佈 行

一、同

第八〇号

同

十月十一日

發行

勸業新聞

第七九号

論文

十月十一日 霞飲浦夕發行

寄書

私党ハ存置スヘカラス

誠正

(前略)

嗚呼今日祖國ノ現状ヲ察スレハ吾人ヲ亡ホス雖
敵ノ政令ハ日ニ新ミシテ奴隸ノ西轡絆ニ束縛セ
ラルル我カ同胞ノ状態ハ一日三秋ノ如ク到底堪
ヘ得ヘキモノニ非サルナリ就中暗黒ナル鐵窓ノ
下ニ呻吟シ鐵鞭ノ竹針ノ惡刑ニ堪ヘスレテ余ヲ

墜スモノヲ孤海絶島ニ憲兵巡查ヲ友トシテ餓死スル
モノアリ其他各般ノ惨情言フニ忍ビズ此ノ時ニ當リテ尚ホ
或ハ地方的感情、宗教的觀念、外國倚賴ノ習慣等ニ
依リテ各々黨派ヲ樹テ相争フハ即チ私党ニシテ吾人ノ社
會ニ一刺モ存置スヘキモノニ非サルナリ (了)

勸業新報

第八〇号

誘文

十月十九日 露領浦夕發行

李誠齋先生ノ演説

(誠齋、李東暉ノ号)

十月十二日 勸業會館ニ開催シタル本港

各社會聯合歡迎會ニ於テ

記者筆記

諸君、李東暉ノ為、斯ノ如キ盛大ナル歡迎宴ヲ
張リタルモ余ハ少しモ歡心ナリ只悲憤ノ情爆發
スルノミナリ、本夕此席、於テ話ヲ為ス、當リ虚飾
ノ巧言ハ勿論必要ナク且演説ラシキ説調ヲ用ユル

ニモ及ハサレハ互ニ胞襟ヲ披イテ不平ヲ懣ムトス嗚呼
諸君、人生此世ニ處シテ若シ已レニ恥辱ヲ加フルモノ
アレハ之ニ對抗シ德ヲ施スモノアレハ之ニ感謝スルハ
人情ノ自然、アリスヤ然レテ諸君同胞ハ西伯利亞ノ
朔風ニ十有餘年ノ星霜ヲ櫛リ祖國ノ慘狀ヲ聞クヤ
諸君ノ胸中ニ熱血沸クヘレ且諸君ハ當地移住ノ先鋒隊
ニシテ日夜祖國ノ爲ニ力ヲ盡シタルハ余ノ深ク謝スル
所ナリ余當地到着ノ日ヨリ諸君ヲ一々訪問シテ微意
ヲ陳ヘムト思ヒタルカ未タ本意ヲ果サバル内却テ
諸君カ不肖ノ爲 歡迎會ヲ催サレタルハ余ノ慚愧ニ

堪へサルトコロナリ

今日吾人ハ悲シキ心ヲ以テ相見ルヘク喜ビキ顔ヲ以

テ相對スヘカサルノ秋ナリ然ラハ此ノ歡迎會ニ於

テハ他日吾人カ豆満江ヲ渡リテ祖國ノ錦繡江山

ヲ光復シ獨主宴ヲ開キ以テ歡嬉ノ握手ヲナサ

ムコトヲ望ムムノミ今ヤ吾人ハ異域ニ於テ相會セ

リ宜シク肝膽ヲ披瀝シテ祖國恢復ノ策ヲ講スヘ

シ余ハ素ヨリ好辯者ニ非スト雖余ノ見聞ニタ

處ヲ茲ニ忌憚ラノ諸君ニ告ケタトス

一 祖國ノ慘狀

一 葦ノ河ヲ隔テタル吾カ祖國ノ現状ハ諸君ニ亦
常ニ聞知シツツアルヲ疑ハス而モ余ハ之ヲ目撃セル
ノミナラス身自カヲ経験シタリ此レヲ言ハントスルヤ胸
裂ケントシ候目ヲ掩フテ云フ所ヲ知ラス

諸君、此ノ宇宙ノ間ニ於テ最モ悲シク最憐レニ
而レテ最劣レルモノハ何ソヤ即チ國家ヲ喪ヒタル民
族ナラス（滿場侯ヲ流シ牧者ナキ羊群ノ如ク四方ニ流
離顛沛シテ五尺ノ身体ヲ容ルヘキ処ナリ一片ノ情状
ヲ訴フヘキ処ナキハ吾人ノ現状ニ非スヤ然ラハ内
地ノ慘状ヲ述フルニ當リテ所謂五條約七條約

ナルモハ姑ク金キ併合式^ハ於テ其ノ極ニ達セリ
 第一吾人ノ五百年間傳來シタル宗廟社稷ハ如何
 彼ノ雖敵ハ吾人ノ宗社ヲ以テ果樹園又ハ動物園ニ
 充テタリ神聖ナル明君賢相ノ靈位ハ皆禽獸
 ノ巢窟ニ代セリ且我君主ニ對スル恥辱ハ如何主
 辱臣死^ルノ古言アリ吾人豈君主ニ對スル忠節ヲ
 忘ルヘケムヤ彼ノ吾人ノ君主ナル光武帝隆熙帝
 ノ在リテス德壽及昌德ノ兩宮ハ恰モ監獄ト別
 ナク息ヲタビ大ニスルヲ得セシメス慘憺ナル歲月
 ノ中ニ暮ラシマシヤ^リ (滿場涙ヲ流ス)

此、他ノ慘状又何我國ニ於テ數千年來最尊
 重シタル美風ハ即チ祖先ノ墳墓ヲ守ルニ在リ而
 己誠力ヲ盡シテ碑碣ヲ立テ四時ニ随テ祭祀
 ヲ勤カサリキ若シ之ヲ名ヲカ人非人トシテ社
 會ヨリ擯斥セラル此ヲ以テ各自名山ノ明堂ヲ求
 メタルニ非スヤ然ルニ今日我カ祖先ノ墳墓ハ如
 何彼ノ摧敵ハ之ヲ破壊シテ江水ニ流サスルハ火
 中ニ投スル豈ニ痛憤ニ堪エケルヤ我カ國ノ誇
 ニテ父祖ノ墓ヲ摧ケタルトハ無上ノ恥辱ヲ加ヘ
 タルヤノ代用鏡ナリ今ヤ倭敵ハ幾千万ノ衆人

祖先ノ墳墓ヲ發掘セムノミナラス
 利ハ其ノ白骨ヲ
 毛碎キ以テ果樹ノ肥料ニ供シ
 ツウアルニ非スヤ
 (満場涙ヲ流ス)又國家ノ為ニ
 忠義ヲ盡サトスル
 志士若ハ勇敢執烈ナル義士等
 對シテハ彼ノ敵
 敵ハ世界ニ類ナキ惡刑ヲ以テ
 悉ク殺戮シツツ
 アリ吾人若シ執血アル者ナ
 ラバ其ノ定痛ヤ骨
 髓ニ徹スヘシ乙巳以來ニ國ノ
 恨ニ堪エスレテ義
 旗ヲ竿ケ敵ト戦ヒ以テ血ヲ流
 シタル者幾人
 シヤ諸君希ハ彼等ノ為ニ一掬ノ
 涙ヲ灑ケ
 今月國家ヲ愛シ正義ノ道ノ為
 身ヲ獻スル已

/ア34カ世界ノ人類與テ之ヲ尊敬ス但ト雖
 已彼ノ讎敵ハ我愛國志士等ニ付シテ忍
 辱ヲ極メ余數年前甲山近傍ニ至リ或義兵ノ
 妻女ヲ讎敵ノ手ニ殺サルルヲ目撃シタルニ
 彼ノ憐ナレ婦人ノ面脚ヲ縛リ高樹ニ倒懸
 シタル後言フニ忍ビサル處ヲ燒傷シタル今日
 讎敵ノ我同胞ニ付スル行為ヤ概不斯ノ如シ
 (滿場涙ヲ流ス) (未完)

註：別項「李氏歡迎會感嘆」ト題ス新報
 2 據ルハ本演説ハ一、祖國ノ慘狀、二、日本ノ

現状、三、我民族ノ神聖ナル歴史、
同胞ノ義務、五、自今カ海外ニ出
テ其ノ所懷
等數千言アリカ如シ次
別ヨリ連載スルナリ

(了)

大正貳年十二月廿九日接受

常務理事 〇 號

寫送付 朝鮮總督府 主政務局

第一課

高田秘發第521號

大正二年十一月三日

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

報告

新設鐵道之關係件

左記新設ハ治安ヲ妨害スルモノト認メ發賣頒布ヲ禁止シ押收処分致候條列鐵道又相承此段及報告候也

左記

市報

號 5389 稅受

一、勸業新聞

第八一號

謄文

十月二十六日
發行
總發行所
發行

勸業新聞

第八一号

謄文

十月二十六日 霞谷浦行

木子誠齋先生ノ演説 (後)

夫レ我カ愛國者ヲ殺戮スルヨリ一層憎ムハキハ即チ臺々
々我カ朝鮮民族ノ精神教育ヲ撲滅セムトスル惡策ナリ古キ
歴史ヲ有スル神聖ナル民族ノ青年子弟ヲレテ彼ノ蝦夷
族ナル野蛮ノ教育ヲ受ケルハ實ニ悲惨ノ極ト云フハ
レ然リト雖我カ青年學生ハ尚ホ空却ニ健全ナル精神
ヲ養ヒフ、アルハ此レ不幸中ノ幸ニシテ吾人ノ快哉ヲ叫
ブ所ナリ、我カ第二世ノ青年ハ其ノ精神堅固ニシテ

赴湯蹈火ヲモ尚辭セサルノ如ク如何ナル威力ヲ以テス
ルモ此レヲ奪フヘカヲサルハ余ノ深ク信スル所ナリ學
校ニ於テハ我カ國說ヲサヘ禁ムト雖亦百年ノ國家の
精神ハ月ニ月ニ進歩シツツアリ此レ彼ノ難敵カ吾人ノ
精神ヲ奪ハムルニ及動力ニシテ吾人ノ最喜ムヘキ所
ナリ（滿場喝采）

其他ノ慘狀ハ如何彼ノ難敵ノ經營、係ニ於テ會
社ノ移民ナルモノ絶エズ渡来シテ錦繡江山到處ニ
倭兵充満セリ故ニ吾人ノ生涯ノ道ヲ失ヒ扶老携幼
以テ四方ニ流離セサルヲ得ス此レ吾人ノ心ヲ寸断スル

我ノニ非スヤ勿論國家ヲ失ヒタル民族ナルヲ以テ安樂
ハ望ムヘカラスト雖吾人ノ祖先カ護リ傳ヘシ山林河
澤我ハ鍛冶、水産ヲ志シ儲蓄ノ年々奪ハレタリ
我カニ牛馬ノ同胞ハ將ニ何ヲ以テカ衣食ノ資ニ供セ
リヤ斯ノ如キノ慘狀故筆ニ遺テテス品希クハ諸君
ニシテ竹針革鞭ノ惡刑ヲ受ケ鉄窓ノ下ニ呻吟セル
志士ヲ忘ル、ナカラスヤ、彼ノ豆満ハノ一筆ヲ渡
レハ吾人ノ同胞、二人以下ノ集會ヲ禁セシ通々偶
談スルモノアリカ猛虎ノ如キ發吏ハ直ヤ之ヲ捕縛レ
テ獄ニ投セサルハ其ノ命ヲ奪フヲ遙想セヨ(滿地安)

ヲ流ス

然ニ諸君ハ露西亞帝國ノ恩澤ニ依リ此地ニ於テ
安全ナル生活ヲ営ミツツアルノミナラス我カ民族ノ善男
信女一輩ニ會フハ得ルハ實ニ天帝ノ賜物ト云ハ
サルヘカラス諸君ハ内地ノ慘狀ヲ聞クノミナラス何事
益スル所無カルヘシ宜シク此カ救助ノ策即チ恢復
ノ途ヲ深ク研究ス可キナリ

六 敵ノ現狀及將來

完結後ノ大義俠大五上ニ於テ我カ要足安重根氏
カ吟甫賓ノ停車場ニ於テ伊原村文ヲ叙述シ旅順ノ

獄裡ニ寶血ヲ流スヤ膏ニ世界ノ靈氣ヲ一掃シ
ルノミナラス彼ノ敵ノ首ニ亦碎ケル授言スレハ
睦仁ノ死ナリ此レ則チ天ノ然ラレムモノニシテ吾人
ノ最快トス心所ニ非スヤ（滿席唱来）彼ノ敵ノ其
ノ後ノ内情ヲ察スレハ取テ以テ吾人ノ慰安ニ供ス
キモノ慟カラス一朝ニシテ彼等ノ首碎タルト同時
ニ海陸軍ノ反目官民ノ衝突等紛擾ノ絶間ナシ余
ノ愚見ヲ以テ推セハ今後若シ日本カ他ノ列國ト戰
端ヲ開カンカ今日迄忠勇無比ト稱シタル日本兵ハ戰
ハスレテ破レニ何トナレハ今ヤ彼等ノ貴族及官吏ハ

淫亂奢侈、民ノ苦痛、至リテハ、毫毛之ヲ顧ミサ
レハナリ（満場喝采）

其ノ中最注目スヘキハ、彼ノ幸徳一派ヲ慘殺シタル後、
其ノ主義ハ暗々裡ニ於テ益々發達シ、政府ヲ眼中ニ
置カス又彼等ノ財政ハ、非常ノ困難ヲ来セリ水
無クハ魚枯死スルト同ク、彼ノ小ナル島夷ニシテ大
膽ニ己目清、日露ニ大戦争ヲ經國債ハ二十五六億
ニ達シ、彼等ノ鐵道及税関ハ秘密ニ之ヲ外國ニ入負
セタルノ結果、近來餘義ナル財政ノ整理或ハ經費
ノ節減ヲ唱ヘ、官吏一万有餘名ヲ淘汰セリ此等ハ孰

レモ政府ニ對シテ及旗ヲ翻スモノタルヘシ誘ニ小鳥ニレテ
鶴ノ歩シヲ習ヘハ其ノ脚裂ク、過ルノ大慾ヲ抱キ為メ
斯ノ如キ困難ニ隔レリ吾人之レヲ見テ豈ニ準備スル
所無カルヘケヤ

又日本ノ外交政策ハ常ニ失敗ニ歸シツツアルニ非スヤ夫レ
德義無クハ個人ノ交際モ永續スヘカラス況ヤ國際
上ノ關係ニ於テヤ日本人ノ常ニ誇リトスル所ノ彼ノ
日英同盟ナルモノモ今ヤ形式ニ止リ且中國ニ對シテハ政
府ト人民トヲ問ハス絶対的ノ惡感ヲ惹起セシムルニ至
レリ彼ノ讎敵ハ國交上ニ於テモ反覆常ナキ手段ヲ弄

人カ故、斯ノ如キ結果ヲ来シタルナリ又本國ニ對スル所
 謂加州問題ハ種々ノ政界ヲ用エタルニ逐々失敗ニ了レリ
 (當時習来) 吾人人類ノ一日ニ缺クヘカラスル要素ハ即チ道德
 ナリ而シテ彼ノ日本人ハ毫ニ道德心ナシ余内地ニ居タル時
 或外人宣教師トノ談話ノ際余カ日本人間ニ耶蘇教信者
 ノ少キヲ歎スルヤ宣教師曰ク「是レ日本人ニシテ耶蘇教ヲ
 又信スルニ至ラハ貴下等ハ何ヲ為サトスルヤ」ト且聞ク所ニ
 據レハ東京ニ於テハ外人ノ宣教師カ多クノ金錢ヲ持テ来
 レハ即席ニ「ハイアル」ヲ牛ニシテ集ルモノアリト雖其ノ
 翌日ヨクハ更ニ来ルモノナレト云フ推シテ他ヲ知ルヘシ

人倫上ノ醜態ニモ亦極マレリ即チ彼等ハ從兄弟ノ間ニ
於テ結婚スルモ市例トシテ怪マス余ハ嘗テ日本ニ在
ヒタル者ヨリ聞クニ或日隣家ニ夫婦ノ喧嘩アルヲ見テ
其ノ由ヲ尋ナシメテ主人公カ其ノ定女ト不倫ノ行為
アルヲ知リ妻ニ發見セラルルニ依ルト云フ斯ノ如キハ
實ニ獸類ト擇フ所ナシ羞シキ根柢ノ如キモノナレバ
東京ノ太守ヨリシメハ大金ヲ攫取スルナラム(湯場大矢)
天帝ノ最憎ムコトハ淫乱ニシテ人類ニ於ケル大罪惡ニ
亦淫乱ナリ彼ノ禽獸ノ如キ倭奴ハ到ル処ニ醜聞ヲ
遺セリ彼ノ欧米人ハ貴重ナル金銭ヲ費スルニナラズ

一身ヲ犠牲ニ供シテ神ノ道ヲ宣傳スルカ爲ニ外國ニ
 来リテ人民ヲ道德的文明ニ導クト雖彼ノ敵力
 犬豚ニ加カサル行爲ヲノミ爲セルハ諸君ノ見聞セル
 如ニアラスヤ余間島ヨリ琿春ニ至ル迄道ノ各地ヲ祝
 祭シタルカ所謂日本ノ領事館ナルモノアニ近傍ニハ
 必ス料理屋アリテ多教ノ淫賣女ヲ抱ヘ居ル此ノ
 村カ^神聖ナル朝鮮民族ノ目ヲ以テハ真ニ見ルニ忍ビ
 不能ニ兆スヤ(湯坊唱来)
 敵ノ現状ヲ以テ將來ヲトスレハ敢テ吾人ノ悲憤ヲ
 銘ムルニ足ルモノアルヲ疑ハサルナリ(未完)

因之李^新崗ハ勸業會ノ経堂ニ係ルモノニシテ今因
李相島ヲ以テ社長兼主筆ト爲シ李東暉、李
鍾佐ヲ以テ理事ト爲シタリトノ記事アリ

文書課長

大正貳年三月四日 接受

大正貳年三月廿九日接受

第三〇二號

寫送付 朝鮮總督府 駐政務局

大正貳年三月廿九日

高岡秋光第五三三號

大正貳年三月十八日

朝鮮總督府駐政務局長 明石元二郎

九日達濟

大正貳年三月

寫送付 大正貳年三月十九日

機密送付

ホニル

機密送付

ホニル

一九號

二號

新聞紙知分二箇二件

左記新聞紙ハ治安ヲ妨害スルモノト認メ發賣頒

布ヲ禁止シ押收處ニ致修條別紙記文相添此

段及報共候也

お記

一、國民報

第一八号

譯文

十月十一日布哇市八八八發行

一、同

第一九号

同

同
十月十一日

一、同

第二〇号

同

同
十月十一日

一、同

第二一号

同

同
十月十一日

國民報

第一八張

號

十月十日布哇ホーレン発行

國民報維持策ニ就テ

(前略)

吾人ハ父母妻子ヲ離レ萬里ノ海外ニ流離漂泊スルヤ
遙カニ祖國ヲ望ミテ恨疾ヲ慼カサルノ目ナシ然レ
ハ己吾人五千有餘名ノ赤誠ヲ盡シテ以テ顛死セ
ルニ千萬同胞ヲ救フト同時ニ檀箕ノ遺業ヲ
光復セムトスルノ大希望無キニアラズ故ニ吾人ハ
如何ナル苦痛ヲモ能ク忍耐シ唯一ニ機關タル

國
民
報
ヲ
維
持
セ
ル
ハ
力
ヲ
入
ル
ニ
由
ル
也

(
3
)

國民報

第一九号

第五

十月十五日布哇より発行

國民報維持策二就テ(續)

(中畧)

今日ノ大韓人タルモノハ一時ノ虚名或ハ批評ヲ願フ
又恠心同力以テ敵ニ向ハサルヘカラス同胞ノ患ハ
他族ノ善ヨクモ吾人ニ取リテ害ナク同胞ノ短ハ他
族ノ長ヨクモ取ルヘキモノアルニアラスヤ我ラハ吾人
同志ニ於テハ善惡長短ヲ諦スルナク相愛シ相宥
シタル後始メテ彼岸ニ達スルノ日アルヘシ國民報ノ

主義ハ此ニアリ希クハ同胞諸君此ノ主義ヲ賛成ス
ルト共ニ大助力ヲ與ヘンレヌトヲ(後果)
(了)

國民報

第二〇号

譯文

十月十六日布哇市ノルル發行

東西格言

塞翁の馬

「心得」國民舉ッテ國家ノ為ニ生命ヲ捧グルノ時塞翁独リ安全ヲ得ル果シテ幸福ナルヤ夫レ人ノ禍福ハ一刻ノ後ト雖豫知スヘキモノニ非ス人若シ明日死スヘキヲ知ラハ將ニ國家ノ為生命ヲ犠牲ニ供スルモノ多クアラム然レトモ人ノ慾ハ百年ヲ猶ホ短シトシ個人又ハ國家ノ恥辱ヲ多ク顧ミサルモノ多シ此レ志士ノ慨歎スル

所ナリ吾人同胞ノ志士宜シク達觀シ國家及ニ民族
ノ為有益ナル秋ニ當リテハ生命財産共ニ惜ムコト勿
レ
（了）

國民報

第二一號

譯文

十月二十二日布哇ホ一乙〇發行

創刊第六周年紀念

國民報ノ特性ト特色

國民報「今日ノ世界」ニ存在セル朝鮮民族ノ性

一ノ新聞ナリ

本報ノ主義ハ自由思想及ニ獨立運動ヲ獎勵シテ

父母ノ國ノ恢復ヲ期スルニアリ

本報ノ精神ハ政治、宗教、實業ヲ各方面ニ力ヲ注

中テ同胞ノ精神上又ハ物質上ノ發達ヲ圖ルニアリ

リ
本報ノ性質ハ布哇羣島ハ勿論各國ノ出来事ヲ
一々報道シ就中日本、支那ノ事情ヲ詳細ニ記載
スルモノナレハ我カ同胞ノ志士ヲレテ将来活動ノ
時機ヲ逸セシメサルニアリ
(了)

大正貳年十月廿九日接受

祕受 5391 號

申 係

第 三 〇 三 號

寫送付 朝鮮總督府 註政務局

大正二年十月廿六日

第一課

高岡秋英第五三七号

大正二年十月十一日

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

報

告

新聞紙処分ニ関スル件

左記新聞紙ハ治安ヲ妨害スルモノト認メテ發賣頒布ヲ禁止シ押収処分致候條別紙譯文相添此致及報告候也

左記

勸業新聞

第八二號

諺文

十一月二日露領浦沙発行

報告通報先

朝鮮總督

政務總監

外事局長

內務部長官

警視總監

內務省警保局長

勸業新聞

第八二號

諺文

十月二日露領浦潮発行

李城齊先生ノ演說(續)

三 我カ國ノ神聖ナル歴史

最近ニ於ケル我カ國ノ歴史ヲ看レハ、或ハ七國史ト

モ云ヒ得ヘシ然リト雖モ余ハ之レヲ雖新史ト稱セ

シトス至午一(明治十五年)ノ亂ハ惡政府ヲ顛覆シテ

國政ヲ改革セントシタル金玉均氏ノ革命思想ニ基因

ナルモノニシテ其ノ後幾度カ革命的政變アリキ乙巳

(明治三十八年)以後幾多ノ英雄的人物ヲ產出シタ

ルハ尚キ吾人ノ記憶ニ存スル所彼ノ関忠正公ノ血竹、
倭奴ノ粟ヲ食ハスシテ餓死ヲ遂ケタル崔勉菴、志魂
義魄未ク汝セサル許為氏及其他ノ義士等カ孤軍
弱卒ヲ率ヒテ彼ノ強敵ノ倭奴ト戦ヒタル海外ニ出
テ國家ノ為メニ鏖敵ト血戦ヲ試ミタル諸烈士哈
爾賓停車場ニ於テ霹靂一聲世界ヲ從聳動セ
シタル安義士、桑港停車場ニ於テ鏖敵ノ爪牙ヲ
狙撃シ今猶ホ獄裡ニ呻吟シツアル張仁煥氏、白晝
大道ノ上賣國賊ノ腹ヲ刺シテ自己ノ生命ヲ捧ケ
タル李在明氏、此等ノ諸公ハ孰レモ己以後ニ出

テタル偉人ニ非スヤ、滿場喝采)

今日此ノ席ニ會シタル諸君モ亦大韓魂ヲ養ヒタルハ皆ナ乙巳以來ノコトニシテ江東義兵ノ首領タル李範允、崔在亨、洪範道諸氏モ皆最近ノ人物ナリ今日國ノ内外ヲ問ハス國家ノ爲メ命ヲ致シタル忠節ノ士ヲ數ヘ來ラハ余ノ知レル所ヲ以テスルモ十萬ノ上ニ出ズヘシ三南ニ於ケル閔肯鎬、李康年、東北ニ於ケル朴正彬、延起男等ノ諸氏ハ不幸悉ク敵手ニ敵死シタルモ郡下幾多ノ志士ハ今尚熱烈ナル忠血ヲ流シワハアルモノ幾千名ナルヲ諸氏其レ知ルヤ不口ヤ

我が民族ハ當ニ斯クノ如ク壯烈ナル民族ナリ以テ世
界ニ誇ルヘキモノニ非スヤ一滿場涙ヲ吞ンデ唱来

今日國ノ内外ヲ通シテ實ニ數百萬ノ熱血男兒アルニ
アラスヤ一朝事アルノ日ニ當リテハ彼等ハ悉ク國家ノ爲
メニ生命ヲ犠牲ニ供セントスルモノニシテ又此レ吾人ノ大
ナル希望トスル所ナリ元來古キ歴史ヲ有スル民族ハ決
シテ亡ブルモノニ非ラス久カラシテ祖國ヲ克復スヘキヤ
確信シテ疑ハサルナリ一滿場唱来

四海外在留同胞ノ義務

内地ノ同胞ハ以上述べタルカ如ク國家ノ爲メニ血ヲ

流スモノ多ク海外在留者亦然リト雖モ一層團結力ヲ
鞏固ニシ以テ時機ヲ待タサルヘカラス過去數年間ニ
於テ諸君ハ暫時モ休止セズ各方面ニ伺フテ熱誠ヲ
盡シタルハ余ノ深ク感謝スル所ナリ吾人ハ今日如
何ナル地位ニアルヤ鯨濤ヲ突キ鰐浪ヲ冒シ以テ彼
岸ニ達セントスル同舟ノモノナリ宜シク楚越ノ人ト雖
モ相愛シ^相助ケサルヘカラザルナリ（滿場喝采）
三三五々ノ羊羣ニシテ猛虎惡狼ニ遇ヘハ合シテ一
羣ト成リ自衛ノ道ヲ講ズルニアラスヤ諸君ハ諸君
ノ境遇ヲ顧ミ以テ協^心同力ニ努ムル所アラント切

望ス然ラサレハ第二ノ滅亡ヲ招クヤ敢テ疑ヲ容レサル
ナリ祖國ノ元復ヲ希シ王スルモノハ殺父殺兄ノ鑑ト雖
モ及目セスシテ合心セサルヘカラス今後モ亦舊日ノ如ク四
分五裂ノ状態ニ陷ンカ今日ノ會合ハ無効ニ歸ス
ルノミナラス最モ恐ル可ク且ツ悲ム可キノ結果ヲ見ルノ
外ナカルベシ（満場喝采）

更ニ一言ヲ賞サントスル所ハ勇敢是ナリ世界何レノ
國ニ於テモ腐敗セル民族ハ勇敢ナレ吾人朝鮮民族
ハ上古ヨリ中古ニ至ルマデ最モ勇敢ナル民族ナリシ
カ近代ニ至リ文尊武卑ノ惡政ニ依リテ暫ク其ノ

衰退ヲ來セリ然リト雖モ今日更ニ之ヲ發輝シ得
 ヘキ時ハ來レリ勇敢進取ノ性ハ我カ祖先ノ遺傳ナリ
 諸君ハ勇往邁進以テ百尺竿頭更ニ一步ヲ進メヨ
 進メハ則チ自由獨立ノ幸福ヲ享クベク進マザレハ則
 チ死スルノミ今ヤ吾人ノ練習スヘキハ劔戟ヲ蹈ムニアリ
 水火ヲ冒スニアリ 雖敵ノ現状及將來ハ上述ノ如ク吾人
 ニ希望ヲ與ヘタリト雖モ吾人ニシテ實カヲ養ハス
 ハ何ヲ以テ 雖敵ニ臨マンヤ（滿場喝采）
 彼ノ茫々タル大海ヲ見ヨ一朝一夕ニシテ斯クノ如キノ
 大ヲ成シタルニ非ス千山萬谷ノ烟流晝夜潺々トシ

テ休止セサルノ結果ニ至スヤ白頭崑崙亦能ク一拳
石ヨリ成リタルニアラスヤ吾人モ亦休止スル所ナクニハ必ス
ヤ大成ノ日アルヘシ

又吾人ハ誠心誠意互ニ服従セサル可カラス既往ニ於テハ
然ラスニテ各々自カラ尊大ニ構ヘ人ニ服従スル所ナカ
リキ爲ソニ或ハ軋轢ヲ生シ或ハ排擠ヲ事トセリ故ニ
何事モ爲シ能ハザリキ若シ互ニ相愛シ互ニ服従セス
ンハ何ヲ能ク大事ヲ成シ得ヘケンヤ人ニシテ赤誠ナ
ク而カモ黄金塔ヲ築キ獨立戦争ヲ爲サントスルモ
亦得ヘケンヤ滿場ノ諸君ヨ若シ同族相愛ノ念アリ

ラハ今ヨリ相信シ相服從セサルヘカラサルナリ（満場喝采）
又目下吾人ノ最モ勉メサルヘカラサルハ何ゾヤ捨生取
義即チ之レナリ関忠正公ノ「生ヲ欲スルモノハ必ス
死シ死ヲ求ムル者ハ生ク」ト此レ將ニ吾人ノ眷々服
膺スヘキ米ノ金言ニ非スヤ祖國ノ慘状ハ言フニ忍
ヒサル所アリト雖モ海外ニ在留スル五人數百萬ノ同
胞カ涕ヲカ如キノ熱血ト確乎不拔ノ精神カニ
アラハ雖適ノ壓迫甚ダシキ程吾人ノ敵愾心ハ益々
緊張シ必ズヤ驚天動地ノ大舉ヲ遂ゲルヲ信シ
テ疑ハス然ラハ則チ祖國ノ慘状ハ悲觀スヘキニ非スシ

テ寧^ニ樂觀スヘキモノタルナリ（満場喝采）
吾人ノ讎敵ハ其ノ驕横凶惡極度ニ達シ既ニ列國
ノ歡心ヲ失ヒタリ彼ハ希望ナキ日本ニシテ且ソ孤立セ
ル日本ナリ吾人ハ歴史アル民族ナリ決シテ此儘七
フヘキモノニ非ラス諸君ヲ宣シテ拘死セサランコトヲ勉
ムヘシ吾人若シ虎病又ハ黒死病或ハ肺病等ニ依リ
テ死センカ實ニ劣等ノ人間ナリ彼ノ豆滿江ヲ渡リ
テ一度ヒ活動シテ死スルヲ無上ノ光榮ト思ハサルヘ
カラス（満場喝采）

以上述ベタル團結、勇敢、不依服従、捨生取義ノ

五ヶ條ノ義務タルヤ當ニ吾人ノ負担ナリ豈ニ其レ實行
ニ努メスシテ可ナランヤ

終ニ臨ミテ余ノ所懷ヲ簡單ニ陳ベントス前ニ余ノ
敬愛スル諸兄ヨリ過分ノ讃辭ヲ拜シ汗顔ニ堪
ヘサル所ナリ余幸ニシテ魔網ヲ脱シ海外ニ出デタ
ルハ只諸君ノ驥尾ニ附シテ國家民族ノ爲メニ死ニ
至ル迄敢テ微カク盡サントスルモノナリ諸君ヨ今日
ノ歡迎會ヨリハ寧ロ李東暉ノ追悼會ノ催シノ
一日モ早カラント切望ニ堪ヘサルナリ

(満場含涙唱米)
了

大正貳年十二月廿九日接受

文書課長

第三〇〇號

大正貳年三月四日 接受

寫字 第三〇〇號 總務局 管政務局

出

高圖秋宛第五四一號

大正三年十一月十四日

祕受 5892 號

九日達濟

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

寫字付 大正二年三月九日

機密送第一八號

おしる

新聞紙處分ニ関スル件

告

おしる

左記新聞紙處分ノ妨害スルモノト認ノ發賣頒布
ヲ禁止シ差押処分致候條別紙譯文相添此致
及報告候也

左記

機密送第一八號

一國民報

第二二號

諺文

十月廿五日布哇ホノル、発行

第二三號

諺文

十月廿九日布哇ホノル、発行

國民報

第二二號

譯文

十月廿五日布哇ホノル、発行

論說

獨立ノ骨子

(前略)

嗚呼吾人ノ國家ハ既ニ滅亡ニ民族ハ將ニ衰微
セントスルヤ傍觀者或ハ吾人ヲ目スルニ獨立ノ骨子ナ
キ七國民ヲ以テスルヤヲ疑フ然リト雖モ現今内外ニ於
ケル韓人ノ思想界ヲ察スルニ自由ト獨立トヲ生命ヨ
リモ重シトシ一朝國家又ハ民族ノ利益ニ遭遇セシカ

赴湯蹈火モ尚ホ辞セズ勇往邁進セントス此レ獨立ノ
骨子ニ非スシテ何ソヤ希クハ我カ同胞諸君ヨ^自重自
尊ノ念ヲ以テ益々努力セラレシテ、今日ハ弱肉強食ノ
時代ナリ獨立ヲ喪ヒテ豈ニ能ク生存スヘケンヤ我
カ韓人ニシテ他^々族ノ金錢或ハ勢力ニ惑ハサレ自國ノ
恥辱ト同胞ノ利害ヲ顧ミサルモノハ即チ吾人ノ公敵
ナリ宜シク排スヘシ

國民タルモノ獨立ノ骨子ナクンハ百萬ノ兵千艘ノ軍艦ア
リト雖モ頼タニ足ラサルノミナラス却テ禍根タルヘキナリ吾人
ハ茲ニ見ル所アリテ大声疾呼シテ以テ我カ同胞ヲ警醒セントス

國民報 第二三號 藝文

十月廿九日布哇ホノル、発行

雜報

故李範晉公ノ墳墓修築

浦潮來信ニヨレハ故李範晉公ノ墳墓ヲ修築セ

シカ爲ソ有志ノ發起ニ依リ義捐金ヲ募集スト云フ

公ハ一昨年一月廿六日露都ニ於テ我カ祖國ノ爲メニ

生命ヲ致セリ嗚呼大韓人タルモノ苟モ忠義ノ心アラ

ハ誰カ公ヲ追慕セサランヤ公ノ銅像ヲ白頭山頂

ニ立ツヘキハ他日國家ヲ光復シタル後ナリト雖モ唯

公ノ墳墓ヲシテ荒原秋草ノ中ニ委スルハ吾人ノ忍
ビサル所ナリ

了

大正貳年十二月廿九日接受

第 2 /

祕受 5893 號

大正貳年正月

九日進濟

高田 紀彥 第五四六號

大正二年十一月十八日

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

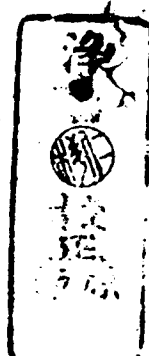
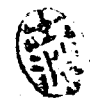
市取第三〇五號

寫送付 朝鮮總督府

大正二年一月廿六日

管政

出



寫送付 大正二年十一月九日

機密送第一七號

新聞紙延分 = 関スル件

機密送第四〇號

左記新聞紙ハ治安ヲ妨害スルモノト認メテ

賣頒布ヲ禁之押収延分致候條別紙譯文

相添此既及報告候也

左記

一國民報 第二号 八月十六日 布哇ホル、発行 諺文

一同 第三号 今月二十日 今 発行 今

(但之第一面は八月十六日発行トアリ)

一同 第四号 今月二十三日 今 発行 今

一同 第五号 今月二十七日 今 発行 今

一同 第六号 今月三十日 今 発行 今

一新韓民報 第二九二号 十月三十日 桑港 発行 諺文

一勸業新聞 第八三号 十一月九日 露國浦沙 発行 諺文

國民報

第ニ号

諺文

八月十六日布哇ホノル、糸行

東西格言

亡羊歎

(註) 天ノ我ニ命ニタル國家ヲ喪ヒシ我モ

能ク天堂ニ上リ得ベキヤ「アタムエワ」「アデ

ニ」樂園ヲ失ヒ「イスラエル」種族カ「カナニ

」福地ヲ失ヒシハ孰レモ罪ヲ犯シタルモ

ノニシテ吾人カ朝鮮ノ山河ヲ滅亡セシ

メタルモ亦大罪ナリ如何ナル人ト雖モ國

家ヲ恢復之能ハス之ヲ死セハ罪ノ印ヲ
免カレサルベシ

國民報

第三號

諺文

八月二十日布哇ホノル、発行

論

說

布哇及滿州

對スル

日人ノ政畧

(前畧)

現今日本ノ人口ハ年々増殖シ土地ノ狹
少ヲ感シ多數ノ貧民ヲ布哇及滿州ニ移

住セシモノトス近ク數年來布哇ヲ中止
之專ラ韓國及滿州ニカラ用ユルニ至レリ
為メニ韓滿人ハ生存競争上活路ヲ
失ヒテ溝聲ニ轉ズベシ日人ノ暴虐無
道甚タ之カラスヤ然レトモ神聖ナル朝鮮
民族カ遂ニ彼ノ島夷ノ餌ト成リ終ルヤ
否ヤ噫

國民報

第四號

誘文

八月三十日 布哇ホノル、發行

論説

二個師團増設ニ就テ

夫レ日本カ韓國ヲ壓制セント欲セハ二個
師團ヲ増設セザルヘカラス而モ日本カ將ニ
軍費ノ為ノニ減亡スヘキハ列國ノ認ムル
所ニシテ日人自ラモ憂慮スルモノ無キニ
非ス日本ノ國土ハ狭クニシテ人民ハ多額
ノ納税ヲ負擔シ軍費ハ益々膨脹ス日本
ノ運命知ルベキナリ本記者ハ實ニ日本ノ
為ノ嘉仁ノ運命ヲ吊フト同時ニ大韓國

光復ノ日アルヲ信シテ疑ハス噫我カ國光
武ノ軍人及有志ノ青年諸君ヨ須ラク奮
起スヘキナリ了

國民報 第五號

譯文

八月廿七日布哇ホルル彙行

論說

愛國者ノ忠魂ヲ吊ヒ獨立國ノ光榮ヲ慕

フ

夫レ今固ノバルカン半島ノ戰爭ハ專ラ

愛國者ノ至誠ヨリ出テタルモノナリ彼ノ土
耳古カ四百五十年間彼等ヲ虐待シ来タリ
之間幾多ノ英雄身ヲ殺シ其ノ恨天ニ徹
セリ昨冬「バルカン」半島ニ一度風雲起ル
ヤ當地在留ノ希臘青年七名ハ奮然トシテ
戰陣ニ赴キ六名ハ既ニ國家ノ為ニ生命ヲ
捧ゲタリ此レ吾人ノ吊ヒ且ツ慕フヘキモノ
ニ非スヤ希クハ我カ同胞モ亦彼等ノ流
血ノ勇ヲ各自ノ腦裏ニ銘セニテ

國民報

第六号

諺文

八月二十九日布哇本ノル、祭行

十年間ヲ予備シタル李朝ノ三代ノ下

本紙第一面ニ「大韓國ヲ亡ス為メ」題シ

大院君李太王、李王ノ眞實ヲ掲ケ左ノ

三詩ヲ記載セリ

。後第四年八月二十九日

光武帝 又醒

為國君王四十年、作威作福獨專權、放
淫巫妓時呼酒、謀害忠良日侵錢、覆宗
絕祀何丈恨、碎玉蒙塵是憐、嗚呼德壽

宮中月、底意教人不堪眠

亡國午

梟雄權乃罪、奇怪產風雲、埋沒檀基
盡、可憐大院君

隆熙帝

失國君王正可憐、楚懷餘恨又朝鮮
他日東風明月夜、聲々何忍聽花鵲

新韓民報

第二九二號

諺文

十月三日未國桑港桑行

論説

青年ノ決心

嗚呼、今日大韓ノ青年タルモノ一大決心
無カルヘカラス其ノ決心タルヤ即チ重キ荷
ヲ負フテ險ニキ遠路ニ赴クニアリ此ノ荷
重ニト雖モ片刻ダモ卸スコト勿レ此ノ荷
我カ青年ノ當ニ負フヘキモノニシテ山高水麗
東海ニ突キ出シタル我カ半島ヲ恢復シ飢
寒ニ迫ラシテ四方ニ流離スル同胞ヲ救フヘ
キモノタリ古人ノ言ニ事ヲ謀ルハ人ニ在リ

事ヲ成スハ天ニ在リト然リト雖モ今日我カ祖
國ヲ克復シ民族ノ自由ヲ享ケシムルハ我カ青
年ノ決心如何ニアルナリ

勸業新聞

第八三號

諺又

十一月九日 露領浦沙發行

北間島日本ノ惡手飯

本社特派員

世上最モ悲ムヘキハ國家ノ滅亡ニ非ス実
ニ國民的精神ノ滅亡ニアリ北間島ニ於テ日

本ハ所有奸惡ノ手餃ヲ用テ我民
族ノ懷柔ニ努メツ、アリ此時ニ當リテ等
シク朝鮮ノ衣冠ヲ着シ朝鮮ノ言語ヲ
語ル吾同胞ニシテ甘ニシテ彼ノ讎敵ノ
爪牙トナリ同胞迫害ノ功ヲ競フモノア
ルヲ見ル莫ニ其ノ肉ヲ食フモ亦飽キ足ラサル
ナリ

大正二年三月

參日機受

寫送付

朝鮮總督府

警務處

第一課

田

秘受 5990 號

高田和弁第五五四號

大正二年十一月二十四日

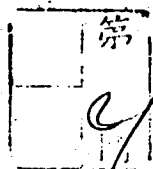
朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

報告

新聞紙処分ニ関スル件

左記新聞紙ハ治安ヲ妨害スルモノト認メ
賣頒布ヲ禁止之押収処分致候條別紙
譯文相添此既及報告候也

左記



一觀業新聞

第八四號

諺文

十一月十六日 露領浦沙發行

觀業新聞第八四號

諺文

十一月十六日 露領浦沙發行

論說

善ヲ以テ惡ニ克ツ

(前畧)

嗚呼吾人ニ取リテ最モ尊重且ツ敬愛
スヘキ朝鮮人テフ稱呼ハ今ヤ日人ヨリ畜

生馬鹿ノ叱辱ヲ受ケ居ルニアラスヤ
而モ昔日ノ刑間、朱牢等ヨリモ
一層烈之キ惡刑即ケ鞭、鉗、大箸等
ヲ以テ我が大皇祖檀君ノ神聖ナル子孫
中ノ忠臣烈士ヲ日々ニ殺害シツ、アリ
此レ真ノ侮辱ニアラスヤ此ノ侮辱ヲモ
尚ホ忍フ吾人ニシテ同族ノ惡口又ハ政
打ヲ以テ互ニ侮辱チ加フルカ如キコトハ
断シテ為スヘカラス吾人相尊敬スルハ朝
鮮人ト云フ貴重ナル稱呼ヲ恢復スル

ノ日アルヘク鐵窓ノ下ニ呻吟セル志士ヲ救
フノ途アルヘク何トナレハ吾人自ラ善ナレハ
難敵ノ悪ニ克ツニ難カラサルナリ勉メヨ
ヤ同胞ヨ



號 6006 受稅

大正貳年三月

四月接獲

官辦第三一號

寫送付朝鮮總督府
大正二年三月一日

駐政務局

第一課

高國和苑才五五五號

大正二年十一月二十五日

朝鮮總督府警務總長明石元二郎

報告

出版物処分ニ関スル件

左記出版物ハ安寧秩序ヲ妨害スルモノト認メ
發賣頒布ヲ禁止シ之押収処分致候條別紙
譯文相添此段及報告候也

左記

一國民皆兵說

全

諺文

建國紀元四千二百四十四年五月一日新韓民報社發行

一崔都統

全

建國紀元四千二百四十五年四月十五日少年書會(桑捲)發行

一國民讀本

全

隆熙三年十月日在米韓人少年書會重刊

一韓^國條約類聚

全

建國紀元四千二百四十四年八月日新韓民報社發行

一軍人須知

全

建國紀元四千二百四十四年七月四日 新書館發行

一
어셈블리어
는 비공
식

(先生 英語 母本) 諺英文

但之書名上部

English Tagt Without a Teacher
by Wernick L. S. Leight A. B.

ト記載アリ

隆熙二年十一月五日發行 桑港生之新報社

國民皆兵說 全

著述者 朴容萬

發行所 新韓民報社

印刷所 今上

建國紀元四千二百四十四年四月十日印刷

五月一日發行

令

第四十三頁ヨリ四十四頁ニ亘ル

嗚呼朝鮮魂哉朝鮮魂哉今日朝鮮魂ナルモノ何処
ニ在ルカ孤舟ヲ大海ニ浮ヘシカ風波汪洋タリ船上ニ
車轉々タルハ獨立ノ鼓ナルカ風前ニ飄々タルハ自由ノ旗ナ
ルカ何レノ時ニカ黃金世界ヲ成シテ大平安樂ヲ
受ケニカ敢テ問フ今日朝鮮魂ヲ招カントセハ武
育アルノ之而シテ國民皆兵ノ外ニ途ナシ教育ト

暴動トナ一時ニ為スヘ之嗚呼、朝鮮ハ朝鮮人ノ朝鮮ニ非ズヤ愛スヘキハ我カ朝鮮ニテ敬スヘキハ我カ朝鮮ノ同胞ナリ

崔都統

著述者

錦頰山人

發行所

少年書會(北京桑港)

印刷所

新韓民報社(今上)

建國紀元四千二百四十五年四月十五日發行

第八章 崔都統蒙古ヲ所リ

近世國家學者ノ言ニ國家タル要素三アリ一土地
 ニ人民ニ政治ノ主權ト然ルニ國土與奪ノ權人ニア
 リ國王黜陟ノ權又人ニアレハ其ノ土地ト主權トハ
 既ニ亡ヒタルモノニシテ餘ス所ハ人民ノ之則チ國家
 ノ形体ハ破壊サレタルモノナリ噫檀君ノ子孫トシテ
 之レヲ見ルニ忍ブベキカ扶餘ノ種族トシテ之レ
 チ點過スヘキカ塚中ノ枯骨タル東國人民ハ何時蘇
 生セントスルカ東國ノ歴史史ヲ讀ムニ當リ淚滂沱ト
 シテ云フ所ヲ知ラサリシ而モ崔都統ニ依リテ一先
 ノ靈魂躍出スルノアリキヲ

國民讀本

大韓漢城桂洞

玄米原著

在米韓人少年書會

重刊

米國桑港新韓民報社照印

本書ハ隆熙三年五月五日押収処分ニ付シタル

「幼年必讀」ノ原本ヲ寫真版ニ取り合冊シテ

國民讀本ト改題シタルモノナリ

了

韓日條約類聚

編譯者

新韓子（北米桑港）

發行所

民報社（一）

建國紀元四四三年八月日發行

口繪（第一）ペン畫

韓日條約ノ模倣ト題シ

韓國皇帝ノ面前ニ於テ數名ノ日韓當事

者會見シ條約文ヲ起草シフハアル想像畫ニ

シテ漢英諺文ニテ韓日條約、韓帝倭兵、

倭賊、五賊等ト記載シアリ

全（第二）

寫真銅版

倭兵カ韓國良民ヲ砲

殺スル眞景ト記シ三名ノ朝鮮人ヲ十字架ニ縛シ附近ニ四名ノ日本巡查及憲兵ノ徘徊セシモノ

其ノ他五條脅迫、七條脅迫、司法權見奪條約、通信機關見奪條約、警察見棄條約等ノ題下ニ條約ノ本文ヲ掲載セリ

了

軍人須知

譯述者

村容萬

發行所

新書館

建國紀元四千二百四十四年六月二十四日印刷

全 七月四日發行

六章 軍人ノ誓

如何ナル人ヲ問ハス身ヲ國家ニ獻ジ軍隊ニ
入ルノ日ニハ當ニ手ヲ舉ケテ左記ノ個條ヲ
誓フヘシ

一、余ハ手ヲ舉ケテ嚴肅ニ誓フ余ハ將ニ

大朝鮮國家ノ爲メニ余ノ忠義ト才能ヲ盡

サントス

一 余ハ將ニ内外國人ヲ問ハス苟モ我が大朝鮮
國家ノ讎敵ナルモノニ對シテ極力抵抗セ

ントス

一 余ハ將ニ大朝鮮國家ノ主權者及余ヲ指揮
スル上官ノ命令ニ服従シテ軍紀ト風紀トヲ
維持スヘク若シ此レニ反スル時ハ軍法又ハ
軍律ヲ悉マスシテ受ケントス

了

寫送付 朝鮮總督府

年 月 日

English Taught
without a
Teacher
by

Wannich L. S. Leigh a, B,

大學得業生

李元益著

선성 영어
업시 영어
교재

(先生英語學本)

隆熙一年十一月日 印刷

五 日 發行

印刷兼發行所 桑港 共立新報社

第十 仕事口ヲ探ス時

君ハ支那人デモ日本入デスカ

私ハ支那人デモ日本入デモアリマセン

然ラハ何國ノ人デスカ

私ハ韓國人ニアリマス

ソウデスカ私ハ韓國人ニ初メテ逢ヒマス

第十九 各國ト都會

大韓國 清國 印度 日本

大韓人

文書課長

大正貳年三月參日 接受

大正貳年三月參日 接受

文書課

大正二年

三月廿二日

同月

第一課

別紙

森

主政務局長

出

機密送第三十八號

機密

大正貳年三月參日

立浦猛

野方經領事代理

牧野大正

勸業新内、無及、
果元付

土地農、勸業新内、海毛、領布

有るは、
 日、
 所、
 此、
 執、

禁止及押収等分、件、同、
 子、成、
 期

解、
 信、
 持、
 社、
 事、
 者、
 長、
 子、
 報、
 出、
 多、
 六、

付、
 口、
 查、
 関、
 水、
 砂、
 な、
 高、
 木、
 取、
 テ、
 之、
 候

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、
 新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

新、
 号、
 一、
 無、
 二、
 上、
 協、
 合、
 一、
 依、
 リ、
 テ、

大正二年三月



祕受 6080 號



六日接受

正第三

三號

寫送付

朝鮮總督府

警務局

第一課

小村

高圖 秘發第五九号

大正二年十二月一日

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

報告

新聞紙処分ニ関スル件

左記新聞紙ハ治安ヲ妨害スルモノト認メ發賣頒布ヲ禁止シ押收処分致候條列紙認文相添此段及報告候也

左記

新中野藩 乃部 氏

一、勸業新聞

第八五号

諺文

十月二十三日 露飲浦 發行

草魚新書

勸業新聞

才八五号

謗文

上月二十三日 霞領浦に發行

本國通信

義兵大將金學鴻氏逮捕

咸鏡、平安、黃海三道ノ要地ニ根據ヲ置キ
多數ノ倭兵及一進會負ヲ撲滅シツツアリニ義兵
大將金學鴻氏ハ彼ノ日人ノ憲兵巡査且ヲ惱マ
シタルコト四年ノ永キニ且リタルモ未タ失敗
セシコト無キノミナリ本年ノ夏ニモ永興保德
軍ニ於テ倭兵十餘名ヲ擊殺シ陽德老城ニ於

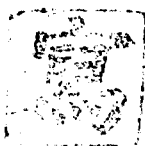
ヲ補助負一名ヲ殺シタル後咸南、平南、黃海各道
方面ノ同志ヲ糾合シ大ニ爲サセトスル所アリシ
力不幸ニモ去ル九月頃遼安郡獨谷駐在ノ憲
兵隊ニ襲撃サレ逐ニ逮捕ノ厄運ニ逢ヘリ
其ノ際ハ部下ノ義兵ヲ一名モ幸ナク單身
前記ノ地方ニ赴キタルカ彼ノ極悪ナル探
偵手ニ掛リシモノニシテ目今種々ノ惡刑ヲ
受ケツツアソト云フ

(了)



大正

號 0012 受 祕



大正三年 宣月 六日 接受

高田 秘 才五九一號

大正二年十二月二十七日

朝鮮總督府警務總長 明石元二郎

朝鮮總督伯爵寺内正毅殿

報告

内地言論、朝鮮人ニ及ボス

影響實例ニ関スル件

内地發行ニ係ル新聞雜誌、記事ハ問
題、輕重大小ヲ問ハズ多ク一般朝鮮人

出



ノ注意ヲ喚起セシメ殊ニ朝鮮統治ニ
 對スル不謹慎ナル言論ニ至ツテハ頗
 ル悪影響ヲ及ボシ施政上ノ妨害ヲ為
 スコト甚ナカラズ有之候処就中三宅
 雪嶺ノ主宰スル雜誌「日本及日本人」ハ
 本年八月十五日發行第六百十二号ニ
 於テ茅原萃山ノ起草ニ係ル「日本孤立
 」完成ト新人生觀ト題スル記事ヲ掲
 ゲ帝國政府ノ施政方針ヲ非難シ殊ニ
 韓國侯合ノ不可ナルヲ論ジ韓人同化

ノ如キハ到底期スベキモノニ非ズト
ナシ寧口鮮人ヲ懲遏シテ獨立ヲ企圖
セシムルガ如キ不穩ノ言議ヲ試ミタ
ルコト有之當時内地ニ於テハ之レガ
頒布ヲ認メラレシト雖モ然カモ朝鮮
内ニ於テハ到底黙過スヘキモノニ非
スト認メ其ノ發賣頒布ヲ禁止シ押収
処分ニ附シ候儀ハ八月中ノ言論状況
ニ於テ既報ノ通りニ候処該記事ハ果
然排日不逞鮮人ノ歡迎スル処トナリ

布哇ホ、ル、在留鮮人ノ經營發行ニ
 係ル國民報、如キハ客月二十九日、
 紙上ニ於テ論説トシテ、我韓國ニ對ス
 ル日本人ノ意見ト題シ其ノ冒頭ニ本
 文、記者ハ日本ノ輿論ヲ左右スベキ
 歐米、新智識ヲ輸入スル代表者タル
 ベキ萬朝報ノ主筆茅原華山氏ナリ氏
 ハ日本社會主義者ノ一人ナルガ故ニ
 内外人ノ熱誠ナル歡迎ヲ受ケ名聲噴
 々タルモノアリト論シテ朝鮮統治ヲ

攻撃セル記事ノ全部ヲ鮮譯シ其終ニ
 於テ愛國子此ノ文ヲ讀ミ終リテ日本
 ノ名士茅原氏ノ如キモノアルヲ奇異
 ニ感ジ且ツ我大韓國及日本ノ運命ヲ
 トスルニ足ルト附言致居候
 而シテ該國民報ハ桑港ニ於ケル新韓
 民報浦潮ニ於ケル勸業新聞ト共ニ鼎
 立シ東西相呼應シテ不逞ノ徒ヲ煽動
 シ我羈絆ヲ脱シテ所謂國權恢復ヲ鼓
 吹スル唯一機關ニシテ其影響スルトコ
 三

ロモ亦在外鮮人ノニ止ムラズ彼等
ノ所謂内國通信者則チ朝鮮内ニ隱レ
タル危険分子トモ脉絡ヲ保テ延テ善
良無垢ノ鮮人ヲ動サントスルコト明
瞭ナル事實ニ有之候
右ノ次第ニ付前記國民報ハ不取敢差
押込分ニ付シタルコト昨二十六日既
報ノ通りニ候モ是等言論ノ惡影響ヲ
與フルコト極メテ直覺的ニシテ且又
彼等間ノ脉絡系統等ニ鑑ミ内地當局

候 = 於テモ相當考覈ヲ要シ候事ト被存
付中此段及報告候也

寫送付先

政務總監

內務部長官

外事局長

內務次官

外務次官

內閣書記官長

警視總監

內務省警保局長

大正參年壹月

六日接獲

駐政務局

第一課



小

機密鮮第一

二號

大正三年十二月二十七日

在浦潮斯德

總領事代理野村基信

外務大臣男爵牧野伸顯殿

勸業新少譯文返戻件

當地發行勸業新少件、要、本月
四日付改接客送、三、八、十、貴信、以、

21

祕受0096

古車越部致取承者為信追
書吊越所別致及返安案
以書收者書信此所進一教矣

大正三年七月廿日 接受

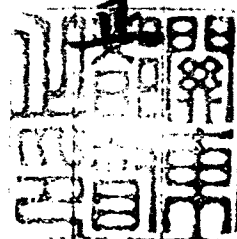
警務部

第一課

機外第一〇九號ノニ

大正三年七月十四日

關東都督男爵福島安



外務大臣伯爵加藤高明殿

劉大同、編纂、係ル印刷物取締
並、曰人、動靜、聞、ル件

本件、聞、ル本月一日附政樞密送第二三号
貴信、ソ、ル、事、性、取、油、方、出、照、合、事、以、ル、事、
真相、ハ、不、成、民、政、局、大、部、告、知、ハ、聞、ル、有、之、
ル、事、ハ、事、内、方、ル、事、ハ、事、内、方、ル、事、ハ、事、内、方、
越、来、釣、一、夕、話、一、部、送、付、中、ル、事、ハ、

受
不

四三

秘受5114 聯

大民營高祿收才九七九号

大正三年七月十一日

大連民政署長 大内丑之助

民政長官白仁武殿

支那人ノ出版物ニ関スル件ニ付回答

本月八日付様外第一〇四号、一ツ以テ商地在住支那人
劉大同ノ出版ニ係ル趙秉鈞一ツ話ト題スル書籍
頒布取締方ニ関シ以照會ノ趣ヲ承調査係左
ノ通ニ爲シ茲桑此旨以テ知事未分知也
一趙秉鈞一ツ話ト題スル書籍、青島市攝津町参
拾五号地に住ノ華僑支店員劉大同ノ編集

係んモノニシテ同人ハ昨年五月支那國を解散ノ際
小東ノ方ニ避難、爲商賣ニ來住シタル者ニ由リ
間々ナリ中風病ニ罹リ半身不随ト爲リ市内醫院
市市療病院ニ入院中本年五月中病勢漸々
衰ヘ慘狀夾味ニ病リタル時ニ利用シテ病褥、
聲リ敷シテ同志ニ分與セシカ爲之ヲ編集ス市內
支野方一丁目印刷而同仁号ニシテ印刷ニ附セシメタル
モノナリ

其ノ出版シタル冊數ハ係リ二千部ニシテ其ノ印刷費本
料等ノ費用リ今七拾圓ヲ要シタル由ナリ其ノ出版時
苗畧ニ於テ之ヲ發見シ取調メタルニ列ハ此ノ書籍ハ
貴重ナルモノニアラス單ニ同志ニ分與スルモノニ外ナラス
又今回限リニテ引続キ出版スルモノニアラス旨申

立ち上る冊子、末尾に代價を拾銭と記し、
表裏の形式、具備するに付、代價の文字、
捺印し、非賣品なる文字、捺印せしめ、
以後、禁止なり。到ち、其の後、該書、
無代價にて同志の者と分給し、盡し、
現在、於て一部
を残冊ナシ

一、利大同、近状、取調、六月、中旬、市街、
病院、入院し、今、尚、全治、セザル、
要、本月、一日、至、京、
中、同志、より、其、健康、を、
保、ん、東京、其、三、南、修、久、
向、外、氏、因、社、の、
發行、に、係、ん、民、團、ト、
題、る、に、雜誌、の、
編輯、費、ト、し、
同人、に、上、京、り、
促、し、來、り、
タ、ん、
三、病、氣、
ノ、故、ヲ、以、テ、
固、ク、之、ヲ、
辭、し、
書、分、
書、地、に、
在、り、
テ、
因、社、
ノ、
寄、稿、
其、通、信、
り、
為、ス、
テ、
ト、ト、
し、
其、
方、
返、信、
シ

らん由たる未夕一圓より客の移又通信の爲
ニ至るに病系治療中と有る尤も病系
全治法の次第上あるに中なり
近き諸乗の一夕治の観るに本籍一部に系
考及送付也

趙秉鈞
夕語
編 秣山經葉
一

中華民國芳園

務院

總理清帝賜謚

文藻

趙秉鈞止小象



錢家如山一丈

汪先生之死

千秋



趙秉鈞一夕話



趙秉鈞 一夕話

前國務總理趙秉鈞彌留之際。其私人某某侍疾寢宮。秉鈞自知大限已迫。不覺天良發現。失聲歎曰。秉鈞死矣。秉鈞不恨秉鈞之死。第秉鈞以何而死秉鈞實不能默爾。顧某某曰子前來。子知死余者之所以死余乎。言下自指其口。曰祇爲此耳。雖然彼死余者將使吾口永遠失其能力。及今一息尙存。吾誓於最後五分鐘。使吾口之能力。對於世間萬事雖盡失其效。而獨對於死余者之隱私。則雖至海枯石爛。天終地滅。亦凜然如生。其能力無毫髮喪失。使死余者知余雖以口而死。而余口則終未嘗死。知所變計。後有繼余而爲彼畫陰計者。不至如余之冤死狗烹。則余死冥目矣。子謹誌之。

余出身微賤。浮沈宦海。前清時自末吏超遷至民政部貳鄉。雖多蒙袁慰亭周旋其間。然余之事慰亭則無所不至。箇中苦楚。誠有不堪爲外人道者。彼慰亭何人。豈無爲而能富貴人者。抑余何人。豈無爲而肯卑下人者。慰亭旣以富貴致余爲之效命。余亦以心腹自居。關係密切。逾於骨肉。民國成立以來。政潮劇烈。慰亭欲以國務總理畀余。某夜私室秘議。懼民黨反對。籌所以抵禦之策。余曰民黨勢力。不過幾張報紙。一新聞反對。甚於三千毛瑟。拿翁故甚其辭耳。今軍警要人。皆傾心袁氏。參議院又多利祿薰心之輩。誠授意軍警。畧一示威。吾恐毛瑟有靈。新聞無效矣。果用吾策。余遂居然爲民國總理。

慰亭之用余總理內閣也。徒以民黨監督綦嚴。動多阻礙。惟余與之

夙昵。以爲用余則總統與總理比。可以爲所欲爲。得放意肆志焉。余亦以不世奇遇。惟總統之志意惟順從。

余以旣受慰亭恩遇。刻同胞。滅中國。苟有可以歉慰亭者。吾無辭爲之。孰知殺身之禍。乃暗伏於此乎。

前歲爲民國國會選舉之期。當時慰亭卽隱憂民黨勢衆。正式總統之選舉。恐遭失敗。囑余熟籌善策。余曰昔秦人欲逞志關東。輒多予客金。聽其自便。不問所用。用能破滅六國。稱始皇帝。今挾一國元首之資。誠犧牲名譽。不佞金錢。何事不可爲。何求不能得。區區民黨。安足介意。慰亭領願者屢。予乃退而授意洪述祖。述祖沈思多時。曰吾計得矣。余詢以計將安出。述祖低聲曰此計名爲民制民。某所悉有應夔丞者。在民黨中頗稱幹練。民黨要人。多倚任之。

僕悉其人素無行。啖之以利。可願指氣使也。語云桀之犬可使吠堯。跡之客可使刺由。況以政府名義。通神金錢。事必有濟。余欣然遂謂述祖曰。此事悉以委公。用款多少。盡從余取。從此禍機一露。遂惹起政海莫大之風潮。

元年秋洪蔭芝南下。一以偵察民黨動靜。一以接洽應夔丞。專委以破壞民黨之任。夔丞多方要挾。蔭芝難之。密電來商。余私計夔丞素接洽民黨。一朝見利。不惜陰圖坑陷。其人格概可想見。雖然值此時機。正利若輩。且漢方不利。無緣禁韓信之王。事苟濟者。有齊彭生晉程濟梁柳燦之先例在。身且不保。何有要挾。當時卽電洪概允所請。噫螳螂伺蟬。不知黃雀之乘其後。孰知余之所欲施諸應者。而慰亭乃以施諸余乎。

十月蔭芝還京師。言夔丞意欲中央畀以差委。以便在長江一帶活動。更請設法取消鄂督通緝之電。先是夔丞在武昌糾集黨徒。陰謀不規。爲黎督偵悉。欲置之法。夔丞覺而逸。故有此電。余悉許之。遂偕蔭芝見慰亭。詳陳其故。慰亭亦謂若不假以地位。事恐未易著手。慰亭且囑蔭芝令夔丞僞作一條陳。以解散黨會裁汰兵隊爲名。以便據以任命。於是應夔丞乃得爲江蘇駐滬巡查長。

然慰亭雖任夔丞爲巡查長。終慮其與民黨共事久。一旦與圖機密。恐爲民黨利用。弄巧成乖。遺笑中外。亟欲夔丞來京一面。就觀其爲人。若果有幹才。傾心戴袁。便秘委以南方之事。且深示親密。慮無翻覆。

十二月夔丞來京。余卽語以慰亭相望之殷。並畧言政府付託之意。

某日與之共謁慰亭。慰亭詢以民黨近況。並其勢力所在。夔承言民黨近日最注意之點。全在此次國會。聯絡運動。不遺餘力。對於臨時政府。排擊尤烈。國會一開。正式政府將無袁系人立足之地。孫黃而外。宋教仁勢力特橫。尤爲多數民黨所傾向。言下附慰亭耳語。慰亭默然良久。遽頓其足曰行矣。當斷不斷。反受其亂。悉如君謀。即顧余曰必如此方可除吾心腹患。應先生所領之款。可會同財政部儘先撥給。無誤乃公事。

夔承既挾欵而南。慰亭及余遂靜待好音。三年一月某日秘議於總統府。蔭芝忽失聲曰幾誤大事。幾誤大事。余詢以何事。蔭芝謂余曰密電碼夔承携去否。事未發而先聞。危也。機關敗露。所關非小。慰亭亦遑遽異常。目余曰携去否。否。可速專人加快送去。時余卽匆匆

手草一函。並密碼付差。飛送前去。令其以後有事直用密電寄國務院。慰亭且囑余凡夔丞處來函電。關於對待民黨者。無論何時。務即刻呈閱。

是時歡迎國會團發生於上海。慰亭甚以爲憂。召余及蔭芝秘議。深懼夔丞獨力難支。應付不暇。使此團一成。恐國會之趨勢。不在北而在南。軍警之武力卽失其效。乃出巨款。復令蔭芝南下。與夔丞協力。布置一切。且授以三大要畧。一爲文字。二爲金錢。三爲暗殺。文字者卽賄買報館。令其於民黨舉動。務極力詆毀。多方敗壞。金錢者卽賄買民黨中複雜分子。令其從中偵察秘密。離間黨員。暗殺者擇民黨要人。其材局尤得社會之歡心者。文字不能毀。金錢不能動。則以武器而致之死。

夔丞既得蔭芝爲助。措施自覺裕如。而慰亭及余亦以爲籌畫周詳。可以高枕而臥。無南顧之憂。某日蔭芝回。偕見慰亭。備言南方之事。三畧並用。已操必勝之勢。且民黨議員。更有多數爲政府所用。雖何海鳴戴天仇等日肆狂言。其勢已成獨倡寡和。而夔丞更有特別妙策。對待此輩。慰亭喜甚。且曰於今三畧已用其兩。而成效大著。若再加以其三。雖有百孫文。豈能奈予何。蔭芝即言昨已有信致夔丞云大題目總以做一篇激烈文章。方有價值。大約三畧。不日即見諸實行。機關一發。民黨胆碎矣。但夔丞爲人貪而狡。不免需索過奢。然事到如今。箭在弦上。不得不發。總統總宜曲諒。慰亭笑而不言。其意若致憾洪應比周。乘機要利者。又似深悅其能先意承志。算無遺策者。余謂述祖君亦太多心矣。堂堂大總統辦事。安有不舍穠

秋

稊而打雁者。乃相與一笑而罷。旋又得夔丞電。報告詆毀孫黃宋三
人之策。出奇無窮。挾制萬端。余卽交蔭芝面呈慰亭。此番慰亭與
蔭芝如何計議答覆夔丞處余皆不得其詳。第聞諸蔭芝總統閱電。十
分嘉許而已。迨宋案發生。宣布証據。見蔭芝致夔丞二月八日函。
始知所謀。專爲處置宋遜初者。慰亭向余亦未道及。惟語余以夔丞
往來密電。除巡查長公事外。宜令蔭芝一人經理。

諺云用人三等價。中央既付託夔丞以誅鋤民黨重要人物。而夔丞乃
狡展多端。需求無厭。然細揣其注意之點。多在金錢。時政府財政
困難萬分。急無以應。慰亭與余謀。不如酬以勳爵。因語蔭芝轉致此意。
而夔丞竟欲以私款從事。慰亭愈喜。

三月十四夔丞來電。知彼已從宋遜初氏著手寔行第三畧。慰亭語余

曰昔荆卿報秦。舞陽變色。積威之所劫也。今宋遜初氏。聲聞雷行。風動社會。咸陽宮中。吾恐其有變色之舞陽也。余曰夫水搏而躍之。可使過類。激而行之。可使在山。柔弱化爲剛強。在所用之而已。三國演義。非大總統之專經乎。定軍山黃忠立斬夏侯淵。非孔明有以激之。曷克臻此。語云用將不如激將。正今日之事。吾將使蔭芝激之。度無不濟矣。

余退而以語蔭芝。蔭芝曰吾已得操縱夔丞之術矣。余曰何哉爾所謂術者。蔭芝附余耳曰夔丞詳昵民黨。現授其運動費十萬元。常恐有人用此譖之中央。屢爲吾言。今誠急夔丞曰事若無效。則忌汝者之言將見信於中央。則夔丞之致力。捷於私仇矣。

果也不三日而吳福名之手槍夜半奏效於滬寧車站。而宋教仁殤。夔

承連發號簡兩電。均即刻令蔭芝呈報慰亭。慰亭撫掌曰：遜初既死。孫黃無能爲矣。因召余籌所以賞變丞者。余曰：宋教仁雖已就戮。民黨恐不甘心。況李烈鈞、柏文蔚、胡漢民等挾數省都督之資。冷逼歐陽武、陳炯明等等兵權在手。一旦生事。吾恐中央政府食之不得下咽也。及今天下方在疑惑之際。莫若秘遣心腹。四出運動。仍不外文字金錢兩大要畧。一面離間彼黨。一面厚植兵力於沿江一帶。著著進行。使彼不知不覺入吾彀中。迨窩弓備妥。機網已張。然後雷霆一震。使彼蒼黃失措。急不暇擇。狂奔亂突。同歸於盡。而後乃今莫予毒也已。乃未幾而宋案事發。吳福名應變丞先後就擒。陰謀敗露。衆口同音。要余及慰亭歸案就質。余乃謂慰亭事已如此。無可姑息。語云：先發制人。請陽示安閒。陰施毒計。可先通電中外。掩飾其迹。

然後稍稍吹求民黨之握重柄者。以次削奪其權。一面賄買民黨議員。誘爲臂助。一面多設機關報。反對民黨。又派親近人秘密運動北七省各師旅長。以離間南北。并收買民黨軍隊。以殺其勢。經費無出。可極端退讓。以速五國借款之成立。袁氏興亡。在此一舉。況國會甫開。程度幼稚。儘可先行定約。令其追認。使政府果得兩千五百萬金磅。以爲與民黨宣戰費。則雖殺若宋教仁者八九。亦無憚矣。其時劉大同方組織監督國會團於都門。慰亭召余立刻戒嚴。當時捕拿多人。經陸建章槍斃。而京師爲之一靖。又相繼罷李烈鈞胡漢民等都督。故南方之患亦稍紓。乃未幾而九江徐州並興。賴防之有素。皆不旋踵而滅。余乃謂慰亭曰而今而後可以爲一網打盡之計矣。孫文與黃興陳其美輩皆民黨渠魁。今其黨中分子大半躬犯內亂之罪。

可明降訓令。嚴加緝捕。使遍國中無彼等容身之地。國民黨三字不難永遠絕迹於天地間也。迨選舉正式總統時。慰亭又用余計。以軍隊脅迫。而正式總統。慰亭始得當選。

慰亭之才局。慰亭之智畧。雖足任總統而有餘。然性多猜忌。無所不疑。往者張勳連勝而南。遂疑張勳而以馮國璋尾其後。倪嗣冲既弭顧亂。因疑嗣冲而以段祺瑞控其上游。彼武人易與。卒莫覺悟。胥爲效死而不倦。慰亭殆所謂沛公天授非人力之所能爲者與。

由此而民黨之勢力愈形消滅矣。然平心而論。其中寔不乏智畧堅強之士。雖見屈於一時。終求伸於異日。況到處有人。秘密機關。所在皆是。畿輔之下。猶以天津爲衝要。故慰亭命余都督其間。余自以與慰亭並心並命。膺此重寄。即密布偵探。嚴飭軍警。防範民黨。

直無微不至。凡來津門稍有嫌疑形迹者。不曾放過一箇。故各省皆風聲鶴唳。時有該黨擾亂。而京畿一帶。直如山岳不可撼。

當是時五國借款。早經成立。雖於國權多所喪失。而正式政府實賴以鞏固。軍警因此愈形得力。遂宴然而解散民黨。取銷國會。天下亦莫敢誰何。余因念宋案功臣。除吳福名已瘦斃獄中。洪述祖深潛青島。應夔丞伏罪天津。惟余尙儼然坐擁方鎮。深慶余與慰亭相契。非泛泛可比。然夔丞之死。寔非余意。方韞吳肅靖之時。余輒出賄金謀脫之獄。某日以語慰亭。慰亭默然良久。曰智菴此舉。可謂智者千慮矣。吾以爲宜與吳福名同其處置。蓋先是吳應被獲。辭連中央。慰亭及余秘籌滅口計。專委某某駐滬。相機行事。吳福名之事既妥。某某以夔丞於中央關係尤切。以爲奇貨可居。乃挾以與余市。

余甚惡之。洎乎民黨散滅。天下大權。集中政府。政府行爲。雖十倍宋案者。天下亦莫敢不服。此口卽不滅。抑又何患。乃乘上海民黨潰散之傾。決然出之。孰知慰亭欲潔其身之念過重。更加夔丞來電政府。自鳴其功。又深中慰亭之忌。遂愀然而置之死。

慰亭雖殺吳福名。殺應夔丞。無稍顧惜。然余以平素淵源。寔不疑慰亭與予有他。噫余惟不疑。遂有今日。詩云安能子面如吾面。未必他心卽我心。可爲余詠矣。今余將死矣。計謀殺遜初者。慰亭而外惟余四人。吳死於前。應繼其後。今余又繼之。繼余者。其蔭芝乎。

子謹誌之。余今後無言矣。余之所言。非故爲此喋喋也。亦非有所要於天下後世也。余蓋逆推死余者之心理。其所甚不欲余言者。余

則罄言之。余固知余言一出。余之罪雖孝子慈孫百世不能改也。然余一死耳。死之外罪匪有加也。使余默爾而死。使死余者私慶其計之得。余雖甚愚不爲也。噫死余者徒知余死即不能言。不知余死乃無所不言也。向使余不死者。子烏得聞此言云云。今從某某秘密傳出。亟著之。用補民國史之闕。



大正三年五月八日印刷
大正三年五月十日發行



分售所

〔日〕

本那

東京、神戶、大阪、橫濱、各書局
北京、天津、上海、漢口、香港、各書局

印刷所 同

仁

號

發行所 青木冷次郎
東京麴町一丁目三番地
大連吉野町一丁目廿一號地

翻譯者 石川鈞者
長崎南山手十一番地

編輯者 秋山紅葉
東京青山南町五丁目廿一番地

正價金參拾錢

則罄言之。余固知余言一出。余之罪雖孝子慈孫百世不能改也。然余一死耳。死之外罪匪有加也。使余默爾而死。使死余者私慶其計之得。余雖甚愚不爲也。噫死余者徒知余死即不能言。不知余死乃無所不言也。向使余不死者。子烏得聞此言云云。今從某某秘密傳出。亟著之。用補民國史之闕。



大正三年五月八日印刷
大正三年五月十日發行

正價金參拾錢

東京青山南町五丁目廿一番地

編輯者 秋 山 紅 葉

長崎南山手十一番地

翻譯者 石 川 鈞 者

東京麴町一丁目三番地

發行者 青 木 冷 次 郎

大連吉野町一丁目廿一號地

印刷所 同 仁 號

分 售 所

支日

那本

東京、神戶、大阪、橫濱、各書局
北京、天津、上海、漢口、香港、各書局

文書課長

大正參年七月廿二日接受

112

大正三年

七月三十一日

起算

別紙

同

年

七月

廿二日

附

第一課

森

機密第二三九號

主管政務局長

少

大正參年七月廿五日達濟

少陽代埋多岐

加高片

大連、松本支那人劉大同等、

出版物取締；美文件

如件ノ案ニ六月十六日付様寄才二三

三才ヲ以申知ニ沙中多ク然付

關東都督ノ對ニ事實ノ古出カ

聖大印等ノ以狀知調方及訓令

關東都督ノ對ニ狀知調方及訓令
關東都督ノ對ニ狀知調方及訓令

報告書
關東都督ノ對ニ狀知調方及訓令

右ノ如ク
關東都督ノ對ニ狀知調方及訓令

以テ知、上支那側ノ對ニ後ヨク

以思為事，根於心，以行也。

中
大成初學行，後主上二四等，以爲書。

大正參年八月 九日接覽

警務處

第一〇五號

公第一〇五號

大正三年八月三日

在哈爾濱

總領事代理領事官補

川越茂



外務大臣男爵加藤高明殿

為多
敬啟者

受17399

東京市芝區發行民國月報

ニ関スル件

東京市芝區佐久間町發行民國月報

ナルモノハ支那革命ヲ鼓吹シ治メ安

ニ防害アルヲ以テ之ヲ力取締方ニ関

シ當地李道平措辦，情形別紙記
文ノ通東清鐵道機關紙遠東報
ニ掲載有之候間御參考
右及呈報候具

寫
譯文

治安ニ妨害アル新聞紙取締

(八月三日東帖鉄道機関紙遠東報所載)

本埠道尹公署(濱江道道尹兼交涉員李

家鏊公署)ハ吉林巡按使通令ニ接奉セ

リ曰ク査スルニ新聞條例第十一條第

一款政體シテ淆乱スル者第二款治安

ニ妨害アルモノハ均シク登載スルヲ得

ス第十一條外國ニ於テ發行スル新

聞紙ニ登載アルモノ、第十條第一款

ヨリ第三款ニ至ルノ事體ハ國內

ニ發賣或ハ散布スルコトヲ得ス第

二十五條 第十一條ノ規定ニ違反シ外
 國新聞紙ヲ發賣或ハ散布スル者
 ハ二百元以下二十元以上ノ罰金ニ科
 並ニ其新聞紙ヲ沒收ス
 查スルニ日本東京市芝區南佐久間
 町一丁目三番地
 ルモノハ通體文義ニ於テ革命
 鼓吹シ人々心ヲ煽惑シ實ニ政體ヲ
 淆乱シ治安ヲ妨害スルモノニ屬ス
 若シ例ニ按シ取締シ行ハスハ殊
 ニ民國前例ニ大ニ妨礙アリ之カ
 爲メニ所屬一體ニ通令查禁ス
 シトノ趣ナリ
 聞ク李道平ハ以命

令ニ接列直ニ警區ニ轉令シ若シ
該新聞紙有ルニ遇ヘハ査禁ヲ行
ヒ以テ乱萌シ杜クニ務メリト

圖書部

大正參年八月拾五日接受

60

淨書田校正
原和利田

所寄雜誌為瑞重

大正 乙 年 八月 一 日 起
同 年 八 月 一 日 附
別 錄

以送第 二 冊

書 刊

主 管 政 務 廳

大正參年八月拾五日 送 稿

小 池 局 長

安 田 警 務 局 長 宛

東 京 市 芝 区 農 務 民 國

月 報 關 系 件

本件、周之左哈爾濱川
越德欣事代理、別式字
、迴報告、是、其、為、以、矣
考古、及、送、所、作、也
別式、川、越、欣、字
、代、理、字、信、一、口、五、字、字、信、好

附

度18370號

大正參年八月廿九日接獲

警秘檢第一八九號內

警務局

第一課

大正三年八月二十四日

安河內內務省警務局長



小池外務省政務局長殿

本月十五日政送中二三四號以高內
部二系新聞紙「民國」漢口紙寫
通警視總興司回答有之矣付中參考
迄及送付外

寫

丙秘第二九六號

大正三年八月二十二日

敬言視總監 伊澤多喜男

中務省警保局長 安河內麻吉殿

新聞紙民國三關三件目答

去年八月日警保局長第一八九號御照會新聞紙民國三關三件目答
答云也

左

一發汗所及右橋

是已南估之間以一月之審地支那革命黨本部

民國雜誌

一 現況

初號發刊後日尚淺僅々三四(部宛印刷)發行
セシニ過キス而レテ其發賣主目的地タル支那
方面ハ支那政府ノ制肘ヲ受ケ居ル爲其目的
ヲ絶タル内地ニ於テモ單ニ一味徒党ニ配付タル過
スレテ印刷セシ九十部中實際ニ賣捌キモハ
其半ハニモ遠セス故ニ僅カニ十四圓資本金モ消
費セシヤ趣キタル之ニカ維持ハ殆ト覺束ナカレ

一 笑原者

支那革命黨負ミシテ元吳淞砲臺總司令官
「居止(別名東壁)」ハ之ニカ経々者ニシテ同黨
負元衆議院議員田相「本誌執筆シ居ル

一 維持方法

雜誌、費上、代金及廣告料、以維持之

以上

文書課長

大正三年九月壹日 接受

88

新嘉坡 703 瑞成

瑞成 瑞成 瑞成

大正三年

八月三十一日

起算

第一課

機密

送第

第

主任

主管 敬務局長

機密送第四

哈爾賓

川城總代理

加藤大臣

東京市芝區發行民

月報、閱者件

第81

機密

五、辨貴位報告書・内務省、

視總監四卷字送付成紙共四

群为参考以送付也

外政弊保局長未信和更一八三七。号

附，吳視陽堂四卷，一字添付，上

大正參年九月拾壹日接受

管政務局 第二課

長 平 子

計

司法省 大正三、九、十一日發給
法務局 二號

貴省三浦參事官上責省主任官上協議致
係河也新報、記事、并元件別紙、通所
轉於事、回客旁、申遺保保、念此、改
通降保也

大正三年九月十一日

貴省法務局長法博士豐島直通

司法省 法務局長之印

外務省政務局長小池張造 啟

仙台、下、北、行、
九月十一日、抵、
外務省、
記事、



視受74

本内各拾乙第之五〇號ヲ以テ河世新報紙
 上掲載ノ件存御照會ノ趣領承在ハ新
 同紙出ニ遠及スル事項ナリト被認候處外
 務省トモ協議ノ結果今面ニ限リ起訴ヲ爲
 ス及子ノ所定切込候條不起訴處分
 仕セシタラ但し斯ル記事ヲ掲載スル事實
 在テハ場合ニ依リ毫モ侵借スルコトヲ得サル
 件ナリト思考致候ニ付其ノ旨今後
 續ニ斯ル行キ無之様將來ナシ最重
 大ニ警告スル所ノ様致度四今ト申
 進候也

大正三年九月七

丁巳年法特局長

仙臺拾事口宛

第門

134

134

政務局長

第一課

村

田

田

134

十一月言 先般里令提出

外交、軍、之見、主、物、

警備、後、友、中

不、人、上、指、政、

止、横、記、布、或、配、布、セ、ト、

ル、ヤ、七、知、サ、レ、ケ、一、の、本、少、範圍、

領布、此様にて方依頼したる後
夜まね友、答へ依り第一讀り解布
せし^{（のき）}切合し^{（し）}も^{（し）}動共仕^{（し）}てるに
し^{（し）}め、^{（し）}キ在中し^{（し）}も非^{（し）}又^{（し）}注文^{（し）}適用
テ領布ヲ持^{（し）}あ^{（し）}キ性^{（し）}快^{（し）}ノ^{（し）}ち^{（し）}も非^{（し）}甚^{（し）}に
然^{（し）}し^{（し）}鬼^{（し）}、^{（し）}中^{（し）}何^{（し）}た^{（し）}方^{（し）}面^{（し）}に^{（し）}付^{（し）}し^{（し）}り^{（し）}ア^{（し）}ヤ
探^{（し）}索^{（し）}ス^{（し）}レ^{（し）}ト^{（し）}リ^{（し）}ト^{（し）}ナ^{（し）}リ^{（し）}し^{（し）}付^{（し）}て^{（し）}誤^{（し）}之^{（し）}見^{（し）}る^{（し）}ヲ
旧^{（し）}書^{（し）}証^{（し）}實^{（し）}、^{（し）}誤^{（し）}し^{（し）}キ^{（し）}事^{（し）}者^{（し）}ナ^{（し）}リ

此、日夜日記あり、電話する所
敢て之を見せ、今此先より取調、是れ

去年十月三日、百二十部より削之先り

元老、杞寧、福江、友、及宮中、福江、友、

配布し、品名、外名、大正、陸海軍、安

部、及老、家、富、院、誠、長、二、送、了、後、残

部、^{一、下、}及、改、定、中、り、送、了、多、ト、不、

是以上、配布せしむる、た、ろ、の、レ、ト、不

ナリシハ其以上サ範圍ヲ拓メ其
經戒ヲ明カス冬、或ハ何カノ民
及リ依テ中ニ結ナト申ス
此ニ主見者ハ其方ニ借見ニ成
トナトハ其承諾シキ

其方ニ借見ニ成

附屬書類添附

被受9978號

第8

大正參年十月 四日接受

主政務局

第一課

甲叔牙三一七

大正參年十月

敬請親總監 仰澤 貴方

知大臣男爵加高 氏

殿

外相 內相

夏那苗其子生 仰制物是輝

東振區月島石寺通中目下奉安志成學堂校有書舍

夏那苗其子生

夏那苗其子生

夏那苗其子生

物、本年九月発行、標題、新報、掲載、しる論文
り、翻譯、し、多少、批評、あり、ハ、しるモノ、ミ、シ、目下、在京、支
那、留學生、全部、配布、し、目的、あり、ト、申、さ、る、り
石、而、名、大、正、二年、二月、入京、志、成、學、校、（來、國、人、陸
軍、係、ル、モノ、ミ、シ、校、長、ハ、シ、エ、ス、ハ、イ、ラ、フ、サ、ー、グ、ー、ン、者、ナ、リ）ミ、入
學、し、目下、費、ハ、分、三、學、年、田、ハ、分、二、學、年、生、ナ、リ
ナ、及、申、報、ス、也

日居人國。益懷祖邦。所聞所見。無一非圖我之謀。一言一動。在他人監視之中。甚矣生不為強國民。無往而不受人擲揜也。自歐洲戰起。日人幸之。欲乘此列強相持之際。屬行併吞我國之策。議於廷。噪於野。演說於集會。宣言於報章。甚至形諸圖畫。編入小說。其陰狠毒辣。嘲罵侮辱我國之處。不勝言。亦不忍言。願及國交。且不敢言。今則馬足馳於中原。相逼業至再三。西望魯邦。已作戰場。言念將來。忿極欲死。昨日議論。今成事實。猶復忍默。後將無及。爰取東京拓殖報九月號論文二則。譯印分寄。吾同胞閱之。當知日人對我之深心。滅我之酷術矣。譯文如左。

興朝鮮同一運命之中國

朝鮮併於日本之原因 今日中國為東洋擾亂之源。其國情恰與昔時朝鮮相類。回憶明治九年。朝鮮於日本內地。種西南戰爭之因。自後朝鮮之疑忌日本。至於何極。不可得知。當時日本雖認朝鮮為獨立。而中國傲然自大。仍以藩屬視之。鮮人亦有喪心病狂。謂日本微小。不若中國強大。為足恃者。於是今大總統袁世凱。遂入朝鮮。而專其國權。及東學黨亂起。鮮政府不能自鎮。請兵於中國。日本亦發兵。遂有日中兩國軍隊衝突之事。黨亂甫定。而日中之戰起矣。向所謂微小之日本。至是乃屢戰屢勝。此役以後。鮮人始輕中國。而重日本。當時之人。以為朝鮮且併於日本矣。顧我政府不之取。立其王為帝。為定萬年永久之基。鮮人宜知感矣。乃竟背德而親俄。俄國此時勢力已包有南北滿洲。而兼朝鮮。遂不得不更持利劍。以與強俄戰。最後勝利。復歸我國。於是物議囂然。漸有日韓合併之說。明治天皇。俯順輿情。朝鮮遂由此合併。於我使朝鮮始終感我德惠。實心信賴。毋迫我以不得不併之勢。其國之名。或猶可存。乃上下愚昧。必欲取亡。夫朝鮮無論矣。何中國今日情形。與之酷相類似耶。

無論東西古今。利害之道。恒出一轍。今日對我之中國。無異昔時對我之朝鮮。殊堪駭異。中國自與英法交戰後。其兵力之薄弱。始聞於世。及日中戰役告終。世人乃共知其戰鬪力之薄弱。直等於無。當時因三國交涉。歸還遼東。以為中國當德我而棄怨矣。乃反與俄德相親。因之滿洲及山東一部。失我勢力。致起日俄戰爭。之。用戰勝之後。滿洲本應屬我。我政府竟以無條件歸還中國。向列國聲明。機會相等。示無野心。以保全中國之故。不得已結日英同盟。俾列強不得染指於中國。又與俄法締結協約。以防包藏禍心之德美。乃中國一若朝鮮之背德。反自結於吾所防之德美。此殆袁世凱及顧問英人瑪利遜等所主張者也。然則日本其將與諸國瓜分中國乎。中國朝鮮。均於日本有生死存亡之關係。日本前既以朝鮮之故。毅然與中俄交戰。使他國不得染一指。今於中國亦當決然奮起。不獨俄德在所必抑。即英美亦須遏制。日英雖曰同盟。然試問於日本有何利乎。以同盟之故。使日本在中國南方經濟發展。大受英人阻害。日本果欲謀中國根本上之解決。更或啟美國之惡感。然日美戰爭以前。或當先與同盟之英國。以干戈相見。蓋自日英同盟以來。日本勢力。僅限於中國北部。不得圓滿發展。今欲確實保全中國領土。不得不伸勢力於南方。事至於此。與英國利害相衝突。必然之勢也。夫中國根本解決與否。影響於日本之國運至大。非若英國之無直接關係者可比。故無論如何。必為中國代操此解決之勞。日本既以保全朝鮮之故。斷然與中俄為敵。今以保全中國之故。與世界一二強國宣戰。亦未嘗不可。然則余之所謂中國問題。根本解決者。何有。如左列。

- (一) 廢中國共和政體。改為君主立憲。
- (二) 中國各重要位置。悉用日本顧問。而使尊順其說。
- (三) 設日語學校於中國各地方。
- (四) 根據條約。力行以上各項。

中國既為共和政體。即宜重視民意。乃袁總統假共和之名。行君主專制之實。尚不如改為君主立憲。改

治較爲相類。我當代退不倡不義之袁世凱。擁立適當者。使爲君主。中央各要津。既悉置日本顧問。各地方亦然。此所謂顧問。非三五十人之謂。蓋欲使之聘用至千百之數也。既以顧問之名。而握其實權。則所有行政軍事外交一切。無不爲所欲爲矣。於中國內地。分設日語學校數百處。以期日語普及。凡在此校卒業者。得爲官吏。蓋今日之中國。猶沿官尊民卑之陋習。彼醉心官吏者。必爭出此途。不數年間。日語當能普及中國。全國中國各省方言互異。此殆以日語統一中國國語之良機歟。惟此等學校。當以日人組織之。視生徒之多寡。及其他情形。由日政府酌給補助費。費少而收效至巨。此等事均當以條約規定。總之。不論對於何國。發生何種國際交涉。均當乘此歐洲戰亂之時。以帝國政府之力。必使帝國在於中國之威權。達於極點。而後已。加藤外務大臣之意見。雖不盡可知。至於大隈首相對中國之政策。吾人固深信其素抱此根本解決之主義也。夫中國依日本之保護。領土始獲保全。終乃不成我。而輕舉妄動。至於今日。直與亡國朝鮮同一末路。噫。亦可憐矣。右文爲對支聯合會員內田良平所作。此會專以侵吞我國爲目的。

今日爲日本解決二大問題之絕好時機

所謂二大問題。前略今日之日本爲東洋唯一之強國。對於東洋問題。自當立於主宰地位。東洋範圍雖廣。區區如中國。就名實言。日本皆其主人翁也。乃袁世凱挾往年個人之恨。用瑪利遜排日之言。託庇於德美列強之下。將有不利於我之謀。日本於此。對於中國。不得不早爲處置。以確立東洋和平之基礎。此實現今一大問題也。其次即太平洋問題是矣。日本之於美國。向以誠厚相待。初無纖毫敵意存於其間。乃彼竟於太平洋盛倡排日之論。歷見事實。至抱種族上之僻見。蓋美國自美西戰爭以後。頗有斐立濱群島。見日本國勢勃興。將插足於其地。遂爲中傷之策。且彼對於中國。包藏絕大野心。視日本爲贅疣。時欲一施攻擊。俾日本於中國及南洋。悉不得置喙。而後快。若此準備。至今不怠。但日本既爲東洋主人翁。則中國及太平洋問題之解決。實日本目下最要之二大問題也。

中國及太平洋問題爲日本存立之二大問題。世人或謂日本於中國及太平洋問題。無插足之必要。殊不知此實日本國家存亡上一大問題。稍不注意。則日本將不足以圖存。肇亡國之禍。何則。往年以朝鮮之故。致日中俄三國之勢力。時相衝突。是朝鮮爲東洋禍亂之源也。今日中國政治財政以及陸海軍備。既無秩序。又不整理。與當日朝鮮實無纖微之別。朝鮮朝依日本。夕結中國。又欸強俄。有如無根之草。隨處漂泛。中國今日亦復如是。潛結於德。修好於俄。連勢於美。國基日動。國事愈非。幾無寧時。於是列國失其均勢。互相猜疑。互相牽制。於東洋方面。令日本有不勝其煩之擾。加之又無保守能力。自中日俄戰役以後。至於歸還遼東。其間德借膠州。俄據旅大。英租威海。各謀發展國力之根據。近年以來。西藏蒙古一任英俄擴張勢力。邊疆日蹙。革命時起。內憂外患。相逼相乘。袁世凱並無維持之力。行見滅亡之至。夫中國存亡。日本首蒙直接之感應。當視爲日本內國事。不當與泰西各國同一視察。換言之。即不得不由日本處置之也。然中國常被動於德美。致日本在北京外交界屢處劣敗地位。中國一舉一動。悉影響於日本。苟不依吾人之手。爲根本解決。以確保東洋之和平。則長此因循。日本國勢之危。三歲兒童當亦熟知。太平洋之問題。亦猶是耳。吾人今尚不驟然奮起而解決之。恐日本將久爲美人所壓迫。一蹶不振。所謂中國問題者。中國固無絲毫之主力。朝依於德。暮連於美。日本勢必受其絕大影響。則吾人毋寧於此時毅然出其積極手段。以解決之爲愈也。夫太平洋問題者。首倡自美。而日本常處於被動地位。立國於大地之上。受他之脅迫。始計及於利害。爲計亦左。今爲國家計。不得不隨處覺悟也。然日本亦非有取奪

大正參年十二月 五日 接受

駐政務局

第一課

必



ひ秘第ニ九六號

十一月四日

内田良平

内田良平、拓殖新報、記事、聞、後、在、那

支那留學生、環文、如、意、不、訪、為

予、支那問題、解決、今、西、絶、好、時

機、下、九月、拓殖新報、掲載、

予、知、論、支、朝、鮮、通、共、

六、朝鮮、如何、行程、

古今東西同一也。四支那、領土保全、爲るは外國トノ
 戦争ヲモ辞スル処ニ在リ。去々所問題解決ノ意見義
 義題下ニ、論じタルモノ、支那國、將來ニ深甚ナル
 同情ヲ示シ、平常ニ維持シ、其意ヲ示ス。過タル然ル
 故意トシテ曲解シ、在在支那留學士等漢譯シ
 同胞ニ檄スベシ。數年後、機文ヲ印刷シタル其黒幕
 米國人アリ。休逸人タルト明カニ。素テ立教大學
 校長米國人ニエス。其意ヲ示ス。各校講堂ニ於テ

接道

彼等

手

拓

拓

拓

拓

10



大正參年十一月拾壹日接受

警視第一二五九號

ハ

出

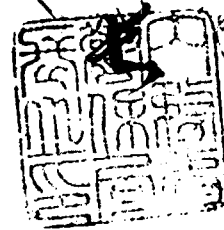
附屬未著

秘受10334

大正三年三月十日

おのゝかたきあはる

山久おのゝかたきあはる



大正

三月

十日

午後

アリ

林正公使館へ宛てて

去月二十七日に記した通り

所々妨害を蒙るに及んで

市に於ては更に不利及び

抑々多量に被害を蒙るに

即ち、斯る末及運送等

に

一、合併吾中國之野心

此乃維日進命之支那

一、日本解決二大問題之絕妙時機

吾人素未詳

進之月日滿德兩步及物及之
亦非也

大正參年十二月拾貳日接受

發見視察一三三九號

白 添付物

別紙送付乃至也

大正三年十二月十六日

安河内内務省警務局長



池外務省政務局長殿

（印）

印刷顛末

支那廣東省人范志陸(三十二歲)正則英
語學校學生本年九月發行、拓殖新報
九月號、掲載セル記事ヲ翻譯シ且ツ批評
及不穩、文章ヲ附加シテ日本併吞中國ノ
野心與朝鮮同一運命之支那、日本解
決二大問題之絶好時機ト題シ之ヲ謄寫
版ニテ印刷シ九月十九日上海ニ向ケ歸國セ
シ力其際現今神田區猿樂町一丁目五番
地下宿業群星館ニ止宿シ正則豫備學
校ニ通學セル廣東省大浦縣ノ蕭菊魂
(三十二歲)ナル者該印刷物各五拾部宛同人
ヨリ貰ヒ受ケ蕭菊魂手ニ於テ南洋方面ニ約貳拾

部廣東省貳部郵送之殘餘全部蕭
一手許、存在セルヲ押收セリ、最
初范志陸
力該印刷物ヲ幾部謄寫セシヤ
同人ノ手
於テ何地ニ發送セシヤ否ヤ
其他關係者ノ有無
等同人ノ歸國後ナルヲ以テ判明セス
京橋區采女町二十九番地印刷業金光堂
事高木重信ナル者十月二十三日京橋區
月嶋西中通十丁目七番地志成學校學生ニ
レテ同校寄宿舎ニ止宿スル文那陝西省人
賈葆中(三十一歲)同田無爲(三十四歲)ヨリ前
記ト同一支那文ノ印刷物壹萬枚ヲ依頼サ
レタル旨去月二十八日高木重信ヨリ敬言視廳
ニ密告セシニ依リ該印刷物ヲ見ルニ同月二十

七日林示上處分シタルモノト同一ノモノナルヲ以テ
翌二十九日午後六時頃賈葆申及薛季萱
志成學校生徒ハ兩名高木方ニ到リ該印刷
物ヲ受取り志成學校寄宿舎ニ運搬ノ途
中ヲ要シ取押（印刷物）全部（壹萬枚）ヲ
差押（上）取調（タル）該印刷物ハ本年九
月發行ノ拓殖新報ニ掲載シタル論文ヲ翻
譯シ多少ノ批評ヲ加ヘタルモノニシテ目下在
京支那留學生全部ニ配布スル目的ナリト
申立タリ右兩名ハ大正二年二月入京志成
學校（米國人ノ經營ニ係ルモノニシテ校長「J. E. ス、ライフスナ
ー」ナル者ナリ）ニ入學シ目下賈ハ第三學年
生、田ハ第二學年生ナリ

（終）

文書課長

大正參年十二月廿日 接受

淨書校正
仁科

本件
大正參年十二月廿日

第一課

別紙

小池政務局長

政務局長

大正參年十二月廿日

女高由智育會保局長

禁止出版物互送件

十月十日附教之秘視部一二九号答件

以テ送付之類は禁止出版物

第2門

此處以爲出產收買於此所申
自今戶

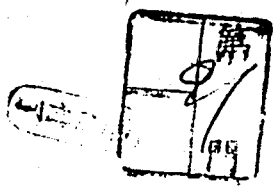
洋付

如子孫付ノ子
其代送付ノ子

一日本係在中之野人
此野人還命之友那
一日本解決天國之施好時機

27
17
ト
ス

人
家
會



政務局長

第 四 課



八

大正四年二月八日 立本邦支那

公使館劉参事及事省小池

政務局長日ニ對シ 御致意

キ東京日日新聞切振

在リルハ記事ハ餘リニ乱暴

ナルニ付去當ニ對テリ反目十連

出

入、付、政務局長ハ之、對レ

馬ト取納、上、~~建~~事、~~長~~ト入、止

テ何分ノ義以答ヘスレト述ベシ

アリ

二月十日劉氏不在

右、就キ二月十日劉參事官ニ

對レ電話ヲ以テ右ノ件ハ本

省、~~旅~~有、~~旅~~新、~~旅~~所、~~旅~~機、~~旅~~界

ハ新、~~旅~~檢、~~旅~~閱、~~旅~~係、~~旅~~廻、~~旅~~付、~~旅~~レ、~~旅~~馬ト

斯ル記事掲載ニ付

取由ヲ為サレタル如キ事罰ス

適當

ヘキ法規十キ有何者之方

法ノ講ニ難キモ東京ヨリ

昨社ニ對シテハ十分注意ヲ加ヘ

記事ヲ掲載スル

申今後其ニ如キ事トナシ

標取主中法主キル旨休命

事務局長代理トシテ

田卷ニ呈キテ



大正四年四月廿六日

外務次官 殿

内務省 庶務課

危記 新刊 残 西 市 多 老 及 市 送
付 予 市 用 濟 上 市 民 疾 大 成 交
候 也

記

一 東京 夕刊 新 報

四月廿三日 日 廿 五 日 迄

三部

文書課長

大正四年四月廿八日接受

淨書

松平

大正四年四月廿八日
五月 月 廿六 日附

日起草

別紙

機密

機密送第

第一課

主任

機密

主管

政務局長

大正四年四月廿八日

第2門

機密

要再回

內務省警保局

外務省政務局

採集者別紙束夕刊新報

三部用信、台、新、及、近、庚、秀、中

別號 康寧 刊新字三部 係

文書課長

大正四年六月廿八日接受

臺灣山陽縣

大正 年 月 日 起草
同 年 月 日 附

送第 號

第一課

主任

主管 政務局長

半公信

大正四年六月廿

下田内務次官

松井次官

第 門

再

拆啓陳者 爲 候 未 丈 々 取 締 然
果 本 邦 雜 誌 新 聞 紙 上 友 邦 元

首ニ果スル記事殊ニ支那袁總統

果スル批評等大ニ其數ヲ減シタルモ

尚全ク其跡ヲ絶メサル次第ニテ例ハ

雜誌うきよ第二十九号第八四頁

袁世凱ノ戀愛生活ナル記事ノ如キハ

固ヨリ有識者間ニ一顧ニ値セザルモノナリ

ト虽一紙支那人ニ好感ヲ抱カレザル

趣右ニ付ニ在リ本邦支那公使館ヨリ非難

津東郡、次第之有、之、之、今後、之、
右、^等外事、記事、取締、方可、然、中、取、斗
相、成、度、以、後、得、貴、意、矣
敬、告

有附屬物

大正四年七月

主政務

第一課

附屬朱著

警務部第二八〇五

大正四年七月二日

關東都督府民政長官白仁武

外務次官松井慶四郎殿

支那出版物送付ノ件

一 繡像

英雄漢國事悲

全集

全八冊

右出版物ハ日本ノ韓四合併及露國ノポーランド併合

ヲ説明シテ利権ノ擁護ヲ唱ヘ特ニ安重根カ伊藤公

ヲ殺害セシ記述ヲナシ全体ニ於テ排日目的ヲ以テ

著述セシモノト認メラレ候處上海ヨリ大連支那書店

ニ來リタルヲ發見シ公安ヲ害スルモノト認メ其ノ發賣ヲ禁

圖書部

秘受6153號

之押收致候ニ付爲御参考一部及御送付候也

大正四年六月 式小三

警務局

第二課

警務局第七〇號

大正四年六月一日

安河内内務省警保局長

不池外務省政務局長殿

客年十一月出版法才九条依り費売領
布杜示止分カラ為ラル志良菊ト題スル根
藝文書目あり南に件致て視聽監ノ報告
ニ梅コト多ク本年十一月月中旬右出版物數百部
ヲ采園又采港にゲリー街ハ野五車堂ニ表却
ラシム趣ニ付御冬ノ考ノ為別致致て視聽監
報告書ハ當一通知及送附之也

大正四年五月廿一日

警視總監 伊澤多喜男

內務大臣子爵大浦兼武殿

禁止出版物「志良菊」發行ニ關スル件報告
客年十一月四日檢發第四五六號ヲ以テ報告
候猥褻文書「志良菊」八同日出版法第十九條
ニ依リ發賣頒布禁止御處分相成候處其實
際ノ發行者不明爾來搜查中今回發見致
シ取調候處狀況左記ノ通ニ候條此段報告候也
一本出版物ハ大正二年十一月發賣頒布禁止御處

分相成候

「袖」ト袖

ヲ改題

セルモノニシテ昨年十月

中神田區仲猿樂町五番地活版印刷業町井壽

三郎ナルモノ右原本一部ヲ所持シ居リ同人力糊

口ニ窮セル結果神田區猿樂町二番地製本業森

川直藏ト謀リ麴町區五丁目九番地活版印刷業

坂本福太郎ニ依頼シ其五百部ヲ印刷セシメ發行

セルモノニシテ右ヲ前記森川方ニ於テ製本中其二十

部ハ既ニ差押ヘタルモ殘部ハ當時前記町井自宅

ニ運搬シ内三百九十一部ヲ神田區錦町小川菊松

ノ手ヲ經テ横濱市伊勢崎町一丁目十七番地松信

大助及同市西戸部町百五十一番地貿易商小田切

駒男ヨリ本年二月中米國桑港ゲソ一街千六百

廿五番地小野五車堂(賣却シタルモノニ有之候

一其後前記町井ハ談出版物ヲ學生間ニ歡迎セラル、
ヲ察シ再版ヲ思ヒ立テ神田區西小川町二丁目八番
地石川砂ニ謀リ石川ハ更ニ神田區五軒町一番地山
岸利束ト共謀シ資金ヲ得テ昨年十月中前記
坂本福太郎ニ壹千部ヲ印刷製本セシメ之ヲ神
田區五軒町三番地宇和野銀二郎方ニ隱匿セル事
ヲ探知シ本年四月三十日其残部七百九十六部並ニ
坂本方ニ隱匿シアリタル右紙型壹組ヲ差押執行セ
リ尚ホ司法處分ニ付テハ取調中ニ有之候

以上

再回

機密

第9門

文部省長官

大正四年六月 六日接覽

22

淨書

大正四年

六月

七

別紙

主任第二課

松田

長岡

長云

大正四年六月

七日

機密送第一七號

在桑港

加藤大臣
野總領事代理宛

并賣頒布禁止出版物

桑港へ輸出、件通牒

桑港へ輸出、件通牒

客年十一月

衆

賣頒布禁止處

分ラ爲シタル志良菊ト題スル猥

褻文書本年二月中数百部ヲ

米國柔港ゲリー街小野五車

堂ニ賣却シタル趣ニテ別紙警告

視總監ヨリ内務大臣宛報告

写内務省ヨリ送付越ハニ付右

写爲御参考茲ニ差進ハ間

御查閱相成度此役申
進也

別紙警保局長來警秘視中
八。附屬書寫係付

大正四年八月

五日接翼

主政務局

第二課

機密公第五七號

大正四年七月十六日

在華港

親領事 → 代理
沼野安太郎

外務大臣 加藤高明

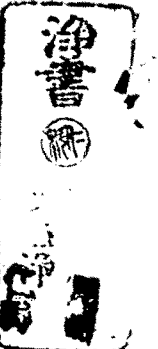
敬請禁止出版物

物 壹 領 布 禁 止 分 支 五 車 聖 務 入 股
 一 件 二 箇 三 箇 七 日 附 政 機 密 送
 牙 一 七 號 三 以 下 以 申 城 一 極 密 乙 更

改、左ハ左留民風紀上一夜取締
必要、ト有徳、被負、ト、同
店、就、所、備、為、致、山、交、同、店、主、ハ
換、香、輪、入、殿、責、一、事、實、ヲ、告、白、之、高、張
分、ト、之、ヲ、去、部、一、ヲ、任、意、提、供、之
之、ト、超、之、ヲ、同、被、負、ヲ、筆、ト、其、不、却、在
ヲ、説、諭、之、殿、ヲ、得、来、ヲ、致、之、ト、右、之、部
ハ、之、ヲ、取、上、ク、事、ヲ、之、ト、及、報、告、以、之
竹、右、燒、棄、政、局、ヲ、為、該、書、ハ、積、懐、ホ、ト
以、之、ト、地、竹、村、高、会、ヲ、入、道、ヲ、事、ヲ、
之、ト、之、ト、又、本、邦、之、托、下、本、件、檢、査、ハ、
事、實、ヲ、之、ト、同、高、会、ヲ、通、知、し、来、リ、タ、リ、ト、
之、ト、之、ト、有、之、ハ、右、及、報、告、ヲ、
如、上、

文書課長

大正四年八月 六日接受



大正

四年

八月

七

日附

別紙

政務廳送第八〇號

主任第二課

主管政務局長



長



七日

大正四年八月

小池政務局長

内務省警務局長宛

貴重物品止出版物之関件

第 門



客年十一月、数賣頒布禁止を以て爲し
る「志良菊」ト題スル猥褻之畫本年
二月中、数百部ヲ米五桑港ゲリ―街小
野五車賣ニ賣却シタル件ニ関シ本年
六月一日付終秘視第七八。号ノ芳稿ソ以テ
以照存ス。次第ニ當時有テ左桑港沼陸
臨領事代理へ取内方訓示^{相持}本中事ヲ爲ス
今般令臨領事代理より別紙寫し通回

郭有子秀子委細有子龍子以弟長子

別張 左葉巻 河地代理 第五七号 字係付个

五
八



人

務

1.11

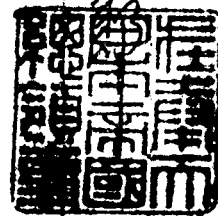
大正四年八月 貳日接受

一七〇

大正四年七月二十六日

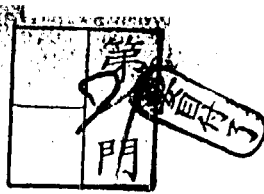
在奉天

總領事 落合謙太郎



外務大臣男爵加藤高明殿

馬田



受161735

支那側革命黨出版物取締方ノ件

奉天上將軍行署内支那人謀者ヨリ得タル

處ノ内報ニ據レハ支那政府ハ革命黨員

戴天仇ノ著述ニ係ル最近ノ中日問題ト

題ニ書冊取締方ニ関シ別紙談文寫ノ如

中訓電ヲ發セル由ニ有之候處斯ニ出
版物カ果シテ東京ニ於テ發行セラルル事
實有之候哉否ヤ尚又其内容等本件謀
報者ノ價值判定上為參考兼知致度候
条其筋ニ於テ事實調査相成候様御
取計御回報ヲ仰キ度矣段報告旁及
稟請候 敬具

本信寫送附先 在支公使

譯文

北京統率處發(七月二十九日午前九時着電)

各省將軍巡按使徐州巡閱使秉德張家口歸化

各都統福州貴陽西護軍使上海鄭鎮守使楊道

員均鑒亂徒戴天仇八東辟戰二名ヲ託シテ書

名「最近之中日問題」ナル一書ヲ著ハシ言ヲ曰

支問題ニ籍リテ妄想邪説ヲ捏造シ人心ヲ惑

乱セントス而シテ其内容ハ第一編ニ日本ノ

對支態度ヲ第二編ニ日支交渉ノ真相ヲ第三

編ニ福建人ニ告グヲ最後ニ日記文ヲ加ヘ東

京ニテ萬餘部ヲ印刷シ以テ内地ニ送ラント

セラル者ノ如シ希クハ所屬ニ令シテ各書店ニ

テ取次販賣スルコトヲ禁シ且ツ郵便局ヲシ

ム テ
 コ 取
 ト 扱
 ヲ フ
 新 コ
 ル ト
 ・ 勿
 ラ
 シ
 ト
 シ
 テ
 人
 心
 ヲ
 安
 カ
 ラ
 シ
 ト

文書課長

大正四年八月 參日接受

淨書田代正原

大正
同 八 五

江 送 第 二 五

主 管 政 務 局 長

五 日 發 行

大正四年八月

第 一 課

別 紙

主 任

少 佐 政 務 局 長

安 河 内 縣 署 長

革 命 黨 員 戴 天 仇 著 述 二 件

書 冊 二 件

書 冊 二 件

第 一 門

本件ニ関シ在奉天居住合總領事

ヨリ致書、通稟請、次第有之

以ニ付、~~本件ニ及リ、通稟請、次第有之~~

照シテ、戴天仇ニ付テ、斯ル書冊ヲ發行シタルヤ否ヤ、若シ發行シタルハ其内容等

~~本件ニ及リ、通稟請、次第有之~~

分ノ儀、内回示、本成、示、試、取、及、照、令

也

不致

奉天來七月廿六日付、第、一七〇号
駐、附、属、書、送、付、目

有附

初受8558號

大正四年

圖

三六六

註
管
局

第一課

大正四年十月

湯澤中務省庶務局長



山田おるる田村るる改

三多支稿集

革命党員著作集

関大伴由吉

本年八月五日送付二日書了

と候々母と本年八月三十日在東京

派、革命党員、居正(新島)東洋

正島東京市北區美土代町即創業

三秀社と称す此千部即創、大都会

別冊

文書課長

大正四年拾月 七日 受



大正

四年

十月

七日

受

有附屬物

同

八年

八月

八日

附

第一課

18

機密

機密

機密 第一〇九號

主任

主管 政務局長

大正四年拾月

七日

小池政務局長

內務省 湯沢保局長

第一門

重再出

革命党員著作之係之冊

近 庚 件

十月四日付 聖秘閣 第三
大信ヲ以テ

以送時表也

最近之中日問題

革命党員著作、係ハ書冊中、

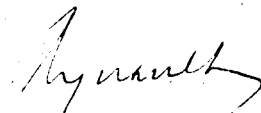
其用、係ハ付、及リ、近頃也

前冊、最近之中日問題、下、題、ハ、書

冊、片、修、係、付、下

le plus tôt possible une publication qu'il n'est certainement pas dans les intentions du Gouvernement Impérial de tolérer./.

Veillez agréer, Monsieur le Comte, les assurances de ma très haute considération.



Tōkyō, le

要翻譯
漢文ト云
大後有

Monsieur le Comte.

J'ai l'honneur, en conséquence, de signaler la Revue précitée à l'attention de Votre Excellence persuadé qu'elle voudra bien provoquer les mesures de nature à arrêter

dc.,

文書課長

大正 年 月 日 起草

大正 年 月 日 附

送第 號

主任

主管

互譯課長

代

千九百十五年九月十七日東京支店
初五二日

ルニヨール

外務大臣土曜伯魯閣下

以書翰致局上之課 "Hand in hand" + 2

表題 英文及漢文ヲ以テ東京ニ

七十九 出板部

四

刊行 日本字に記載之宛名ヲ佛文ニテ記

メタニ封筒ニテ河内ニ住ルニ或ハ

人ニ宛テ九書ヲ部行以官廳ラニテ

押收セタル起印度支那總務府ヨリ

在便ニ通知ス之

記事ノ出所ヲ獨逸ニテ見取所載

宛タルモノニテ獨逸

ノ書揚克
唱見
解調

ナ用ヒルニテス

由リハ右雜誌ハ帝國政府ノ知悉セリ
知悉セリ
内

子之

病勢計畫ノ一事業ニ外ナラズ

右 雜 志 閣 下 二 五 志 二 三 閣 下

於丁
●
疏
帝
國
政府
力
默
許
其
意
思

ヲ
知
セ
ウ
レ
サ
ン
ヘ
キ
ナ
ミ
知
認
ミ
對
シ
知
行
禁

止
一
方
法
ヲ
講
究
ス
ル
ニ
メ
ル
ハ
二
ハ
三
ハ
七
使
ハ
確

信
五
所
之
之

古くは、
（漢）
之を利便
し、
最上
の
所
に
在
る

胡之玄表之玄表之玄表



第一編

機密

文書課長



大正四年九月廿七日接受

大正四年

同

九月廿六日

日

多木

三號

別紙

主任第一課

主
政務局長

大正四年九月廿八日

松井

内務省

生順物到以禁止方
佛西大住是物相照件

淨
仁
正
原

紙
 文
 1

秋
 著
 乃
 漢
 文
 う
 多
 事
 了
 了

利
 少
 也
 先
 Hand in Hand

止
 順
 物
 印
 及
 多
 所
 官
 家
 台
 於

う
 押
 収
 せ
 せ
 趣
 う
 口
 う
 之
 加
 利
 う

林
 上
 う
 同
 し
 今
 取
 佛
 玉
 古
 使
 う

別
 紙
 通
 照
 令
 越
 う
 付
 書

別
 紙
 通
 及
 海
 中

本
 文
 中
 有
 誤
 字
 等

文書課
長岡了

大正四年拾月廿貳日接受

註政務

第三課

國務省

祕書二〇九八號

大正四年十月廿一日

久保田内務次官



松井外務次官殿

出版物之件 二付回答

寄月廿八日政探密送第一。三編ヲ以

テ Hand in Hand. ト題スル出版物之件ニ関

シテ中越ノ趣ヲ示シ難誌ハ既ニ休刊シタ

ルモノナリ最路早ク為

スルモノナリ最路早ク為

スルモノナリ最路早ク為

出版法第十九条

文章秩序ヲ妨害シ又風俗ヲ懷乱スルモノト認ムル文章圖書ヲ
出版シタルハ内務大臣ニ於テ其ノ發賣頒布ヲ禁止シ其ノ刻
版及印本ヲ差押フルコトヲ得

印本差押要分お成、新集よりお成、
為右出版ノ事實左記ノ通ニ有之、是等考マ
テ、中述也

一、發行所、發行人、編輯人、

發行所、東京市本郷区湯島切通^坂八番地南江堂
編輯人、全取、小笠原二郎

二、發行事實

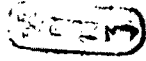
大正二年十一月初号發行、爾來本年八月二
五日まで毎月一回、お發行ヲ継続シ、茲々モ本
年八月二ヨリ發行維持困難ノ為メ休刊セリ

之在雜誌ハ独ニ文日本文ヲ以テ主トシテ語學研
究ノ目的ニ該セリ其リ部數モ最初ハ二十部ヲ即
刷ニ決メタリ最近ハ二十部ニ減少シ其ノ頒布先モ專ラ高
等學校生徒其他ノ需用ニ充テ居タルモノナレトモ
需要減少シ本年八月最終号ノ如キモ其リノ残部
數モハ今尚ホ残存セシ状態ナリ因リ外ニ入
入直掛費者アリ其送レタル事莫クナシ

此雜誌ハ特ニ主幹者タル者アリ之モ主
トシテ校面其ノ地編輯ニ從事セシ
ハ山崎高孝學校教授文學士山岡鷹
市ニシテ外人主幹者ハ独ニ人タル京
都府立高等學校教授オット、ヘンフリッナ

ユ及令「エフ、ブラウシユ」ナリ日本、人トシテハ
七年、云外十數名、コレヲ蒙リ、者自身、經覺
ナレ、後、タ、ン、モ、

以
上



文書課長

大正四年十月二十五日

同年八月廿八日

政送第七〇號

主任 第二課

政務局

左本部

佛玉大佐宛

出版物 Hand in Hand 配布
(林玉乃回居、件)

石井 左

以去輪改、成、少、從、陳、若 Hand in Hand

10 爲我 陳若少佐、爲、部

10. 2



上題元出版物より抄り抄り止方一因
本年九月十日付分五二号より
以下より一題一題取次
別途由務省一及特種年一
同省より田舎一
元来語学研究の目的より
本年八月より
為し休刊し
有之

為數百部、登り者、許、所存也
、付出版法、十九条、依、教養館
布禁止、及、刻版、即、本、及、押、更、分、
、之、免、趣、有、一、何、百、右、標、付、了、知、處
、分、中、出、手、本、及、之、者、之、重、を、
、関、下、之、向、之、教、養、館、表、之、所、教、養、館、

FD
1

十五

附
錄
附

大正五年三月廿六日接

雙鼓

第一課

第一七號

大正五年二月十六日

在齊力哈爾

領事館事務代理 吉原大藏

外務大臣田力爵石井菊次郎殿

館令追認方面請一件

今般當館館令上三時句、黑之新聞
電報及通信等取締方別紙寫、通リ
抄定其處名及通執行、事務有之種
仁、暇寸之布、陳其、什、中、追認、
成、其、探、候、分、計、及、索、請、其、取、具、

寫

館令第壹號

居留民一般

今般更何分、通知ヲ為サス、爾今露
國系、聯合軍、行動ニ関スル總テ、新聞
電報及通信、發達前必ス當領事
館提出シテ檢閲ヲ經ヘテ、及シタルモノ
ハ五拾圖以下、割金拘留又ハ材料ニ
處ス

大正五年二月十六日

在齊、哈爾

領事館事務代理吉原大藏



文書課長



大正

大正五年

三月二日

起草

同年

三月三日

附

政送第

六

主任

主管政務員

大正五年三月二日 達濟

在、省々、哈爾

二瓶 領事

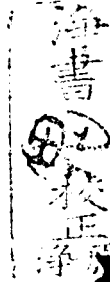
石井大臣

館令追認、件

本件

二月十六日付第百一十七号ヲ以テ追

Handwritten notes in the right margin, including '海防部' (Maritime Defense Department) and other illegible characters.



Handwritten signature or initials at the bottom right.

認方票中、越了承右、別支
障冬之標被認、付及進認、右
標、承却、右半、右中、進也

進之館令本文中、何令、通知、之

为サス、マテ、ト、ア、ル、何令、通知、之、右

マテ、誤字、十、ハ、ト、思考、後、之、右

中、誤也



有附屬物

大正五年三月十一日接受

號 2701 接受

第 二 三 三 號

警務部

第二課

長岡

大正五年三月十日

湯内務局長

池外務部政務局長殿



出取物、罪を以て

又、此書收物、其交り害を以て、嫌有る、
按、此書、東院、及、送付、其、如、
方、付、書、者、以、意、見、至、意、以、向、
追、査、中、場、上、に、取、扱、を、以、返、
度、に、取、扱、を、

一、
文庫、
日本、
の、
歌、
謡、
集、
入、

阿比矢鳳著

一冊

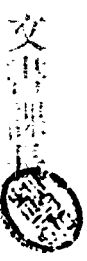
東京市立草子編
其一二五
一冊

芳乃人

池村鶴吉

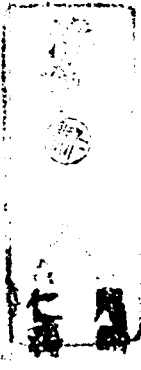
第15

新聞換元



大正五年參月拾六日接受

新報社



五 月 十六

有附屬物

第二課

大正五年參月拾六日
政務局

政
機密送第三七號

內務省

湯淺警保局長宛

小池外務省政務局長

阿武王風著日本ノ政治侵入ノ點ニハ

出版物ニ關スル件

知事方

本件ニ關シ大正五年三月十四日附テ以テ御照

會^{あふり承}阿武大風著^{右看}日本、歐洲侵入ト

題^し冊^し當者ニ於テ取調、結果國交ヲ

害スルモト認^う申^し候間^{年 元慶 願 亦 事 止 方}可然^し并取計相成

度右冊ニ相添此段及回答候也

阿武大風著

日本、歐洲侵入

同封^し以テ廻送^{ノコト}



秘受3662第

大正五年四月

高秘才三九九第

第三課

大正五年四月六日

長崎縣知事李家隆外

内務大臣法學博士木喜徳郎殿
外務大臣男爵石井菊次郎殿

新聞記事ニ関スル件

管下長崎市に於て發行、長崎日日新聞及大
坂毎日新聞長崎號外、四月五日號外、其他
四月六日付同市發行東洋日出新聞亦四
三二二號九日日出新聞亦五〇〇大號
長崎新聞亦三五九二號長崎プレス亦五
四六四號及四月六日付佐世保市に於て數リノ

佐世保新報中四、一、九號、軍港、新聞、亦一
 の四七號、い、何しも、若、二、面、に、於、て、日、露、協、約、差
 々、日、露、協、約、に、對、し、別、紙、同、一、部、事、ヲ
 掲、載、し、た、ん、い、同、盟、華、新、の、成、立、と、も、カ、如、く、想
 像、せ、し、た、ん、カ、如、く、報、道、キ、リ、し、た、ん、モ、一、し、テ、右、行
 爲、に、大、正、三、年、九、月、十、六、日、外、務、省、令、第、一、號、及
 新、聞、紙、協、約、に、二、十、七、條、を、違、背、し、た、ん、モ、ト、認、め、
 ら、し、候、事、此、等、及、豫、告、候、也

○日露新協約

露國

太公ゲオルギミハエロウイツ殿
下御來訪の結果過般來ベトログラード
に於て露國外務大臣サゾフ氏と本野
大使との間に協商を重ねありし日
露提携に關する交渉は兩國の主張既に
合致するに至りたるが新協約の目的と
する所は目下行はれつゝある對獨逸戰
闘の繼續せらるゝ限り日本は露國所要
の軍器、軍需品に關し日本の國防計畫
及び製作能力の容す限り極力之を供給
援助し且滿蒙に於ける秩序を保障すべ
く之に對し露國は日本の支那に於ける
地歩を承認し且東亞の平和を確保す
爲今後兩國互に隔意無き協議を遂げ同
一の歩調を執らん事を期するにあり而
して此趣旨を基き協定せられたる條件
の内容左の如し

一、露國は東清鐵道中長春
以北哈爾濱より稍南方に至
る鐵道を日本に譲與する事
二、日本は現に行はれ、ある對獨
逸戰闘の繼續する間軍器及び其他軍

需品に關し國防計畫及び製作能力の容す限り之を露國に供給する事
三、露國は東部西比利亞北部樺太並に北滿洲に於ける東清鐵道附屬地内に於て日本人の居住、農商工業を營む事に關し寛容な待遇を與ふ事
四、露國は浦鹽斯德を通商港に開放し日本の誤解を招くべき一切の軍事的設備を爲さざる事
五、日露兩國は滿蒙に於ける兩國の利益を互に尊重し現に行はれざる事獨逸戰闘の繼續中露國の勢圈内に擾亂のある場合日本は露國の要求に應じ之が鎮壓に助力を與ふる事
六、露國は日本が支那に對し領土保全機會均等主義を以て平和確保の爲必要な行動を執る場合には其自由を容認し且日本の行動に對し第三國が妨害を加へ日本に於て之に對抗する必要を生ずる場合には露國は日本の要求に應じ協同動作を執るべき事
以上の新協約は目下東京に於て行はれつつある軍器供給の數量に關する兩國の協議續り次第直にベトログラードに於て兩國全權委員の間に調印せらるゝ趣なり

有附屬物

大正五年十月十三日接受

管政務局

第九〇五號

大正五年十月十二日

永田内務省警保局長



第1085號

川池外務省政務局長殿

調查

出收物之附屬件

左記出收物納布有之小廣國交之取端
要無之モノ也貴見承取致之別冊
及送付可也
此項用済以即取可也送取可也

第2門

一
 日本之在界託
 東京市下谷之中根岸七十五
 樋口破魔子之書

文書課長

大正五年十月十八日抄受

6

浄書校正
原
尾

大正 年

月

日起草

岡部

右

11月15日

大正 年

月

日

十月十八日

機密

機密第一七〇號

第一課

主任

政務局長 主管 大正五年

永田敦彦局長

小池局長

出版物之案件

本月十二日付送下第九〇五号貴庁より所

送付物成り、日本之世界征服、肉見政等

處別段所歸，必要多々様所存并及
同存也

尚現不用済二付及返戻并

(日本之世界征服 其済 済付)

128
乃
金
印
乃
乃
又

拜啓 邦家多事、際益々御清康、段奉大賀候陳者
生等多年支那問題、研究ニ從事罷在候處日英、
國際關係ハ在界大戦後ニ於テ頗ル危急ヲ告ガ來リ之ニ
處スルノ方策トシテモ對支問題、解決ハ最モ急務ト認
メラレ候右同盟國タル英國ニ對スル突然ノ唱論ハ一面
甚カ危激ニ亘リ國交上不穩當ト、思召モ有之候ヤモ
難計候得共日英國交ノ危殆ハ到底免ルベカラザル事既
ニ明白ナル以上之ガ對策ノ研究ハ誠ニ止ムヲ得ザル儀ト
存シ候ニ付痛憂、餘リ別紙界見起草、上敢テ御内覽

二候之候次第二座候何卒御覧、上邦家、爲
充分、御高慮ヲ煩ハレ度此段奉得貴意候 敬具

大正五年十一月十三日

内田 良平

公爵 德川家達 殿

大正五年十一月上浣

(以印刷代謄寫)

日英國交
の危殆
支那解決論

黑龍會本部

極秘

附屬書類添附

文書課
長関了

大正五年三月十五日受

内務省秘第二五三三號

大正五年十二月十四日

駐外事務局



第二課

久保田内務次官



第12837號

幣原外務次官殿

出版物送付ノ件

左記出版物ハ安寧秩序ヲ害スルモノト認メ發行ト同時ニ發賣頒布禁止
及差押處分相成候ニ付御參考迄ニ及送付候間御用濟ノ上ハ至急御返戻
相成度候也

記

支那

一、國論
一、日英國交
の危殆
支那解決論
十二月五日發行
第二卷第十二號

「支那解決論」

壹冊
壹冊

文書

大正五年三月十八日 接受

機密

外省

第 門

政務會議第二一五號

政務局長

第一課

大正五年三月十八日

各省官署

部令以發

各省官署

大正五年

本月十日付由各省官署秘書第二五三號
以各省官署秘書第二五三號
各省官署及支那秘書處
用濟二付及御返候也

別紙

一國論
支那秘書處

其儘添附

文書課長

大正五年十二月廿一日 受

52

海軍省
文書課
仁科

大正 年 月

日起 草

第一課

次官

十占

五年

十二月

廿一日

日附

大正五年十二月廿二日 發

主任

政 機 第 一九二號

主管 政務局長

機 密

海軍省文書課
秘書長 佐野
主務官 佐野
主務官 佐野

佐野由勝作

佐野由勝作

日英馬交、忠見官刷物

加清、界文件

急

第一門

今般

豐島、摩那千、塔、谷、原、島、百、六

齊地大川圖

出版

出何處
扶老
剛健
下

交際馬氏の運動の現状及び其の由來

ト頌乞市刷物ハ集日英馬交上有共

九毛ノト 調子ト 変者 何友カ 考者 係

友弓陸政光於休六
讀書刷物一部

3 和布しえ、此高多敷減価、存在是

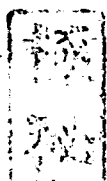
古
煩、
有
之
日
六
右
味
解
分、
社

至急
武
力
配
布
、
禁
止
せ
ら
れ
、
標
本
所
付
を
如
意

子及子也

大正五年十一月（代曆寫）

印度に於ける國民的運動の現狀及其の由來



謹呈

大
川
周
明

文書課長

大正五年十二月廿四日接受

29

大正 年

月

日起草

同 年

月

日

第一課

第 門

次官

政 務 第 一 號

一九三 號

大正五年十二月廿四日發送

主任

朱林田

主管

政務局長

後援由縣方

市役方

日英西文、有東大官印刷

石部、果元件

大川國同印刷部取有材料件

以機空

急

22/11

大正六年一月十五日

別紙

同人
文
年
一
月
廿
日
附

機要集卷第三
七
驢

主
任

次官 十

機密



Tenison Sunday Journal -
Ostiaertside Lloyd -

左兩紙、モ付際本館紙の禁止方特別に
是よりテ強張ラ由希知、此等加（こゑ）
か、云々云々

大

會議
松田
天野
日英馬交、東凡下刷物

取件、果壳件

本件三果二十日年亥付政核

英大使、回考内務省、
之向分先上ノ事、皆又
由防有数度追及する由也、此ハ
本件大川ノ出取物
正截の六日英、商間
ヲ目的トスル者、殊ニ
鋒サレトシ内務省（米、會
内務大臣）おテ家々ヲ
清張シ此後トナシテ論議ノ
為地幸、小カキ親密セル片
元分大目又ハ次子等、
上、口語下格片云

大川因所，出阪九下，列物。

ト
ク
シ

淨書
校正
原

文書課長

大正五年一月十五日

久

浄書

校

印

大正 年

月

日起草

別紙

同 年

一月

十六日

附

送第七號

主任

主管

18

後茂由務太 本野太

會議

松田

天野

田英乃交、中見下刷物

取部、果元件

大川国、必取元下刷物

本付 三 果 十一月 平云付 政校

Handwritten notes and stamps at the top left, including a circular seal.

送中一九二号
 予先頃所
 未及出版也
 大快彼等
 元、五、廿五
 以、計、種、不、利、物、出、版、企、思、極
 大、快、探、分、之、見、為、中、城、足、以、見、其、一、片
 後、視、大、川、出、版、物、之、預、當、不、下、

以右再服，分卜時，記布標止方以
往誠也。標法分付如中手也。

(前一月十日付英西大使君及友家書物
英文，他日留所)

attempt to prejudice Japan's ally in the eyes of a large section of her people.

I have been informed that Mr. Okawa in publishing his book privately and distributing it secretly has violated the law and, if such be the case, a ground ~~for~~ suppressing the work is, it would appear, already provided.

I may add that there is in my own mind little doubt that the funds which have made it possible for him to carry out his task of gratuitous distribution have reached him, through the channel of seditious Indians, from German sources.

I am unable to furnish proofs of my conviction, but it is within the knowledge of His Majesty's Government that large sums have been paid to such Indians by German agents in the United States to be used in anti-British propaganda, and it is hard to see from what other source the money used in the present case can have been obtained.

Yours Sincerely
Cum gratia

January 11th, 1917.

Dear Mr. Shidehara

大正六年一月十九日接受

You will remember that some time last month I mentioned to you that information had reached me of the forthcoming publication of a book by a Japanese writer attacking British rule in India, and that I represented to you the advisability of taking measures to prevent this work from appearing.

Unluckily I was unable on that occasion to furnish you with the title of the book and the name of its author, which I had not been able to ascertain and, still more unluckily, my representation to you came too late, because, though I did not know it, the work had already appeared.

The Imperial Ministry for Foreign Affairs has doubtless made enquiries into this matter since the date of our conversation, and is aware that the book in question is called "The Nationalist Movement in India: its present Condition and Origin," that its author is Mr. Shumei Okawa, that it was published privately without any indication of the publisher's name, that it has been secretly but widely distributed free of charge in Japan by Indian seditionists and their Japanese sympathizers, and that it contains bitter attacks on the British administration in India while carefully omitting anything which could be said in its favour.

My reason for writing to you today on this subject is that, according to information which has recently come into my possession, the first edition shews signs of exhaustion and the author is preparing, and intends shortly to issue, a second.

I trust that it may be found possible for the competent authorities to take immediately such steps as the law allows to put a stop to this audacious and apparently too successful

attempt

管正彩

第一課

寫

大正五年七月文日接覽

機密第一九號

秘受第一二五〇五號

大正五年九月廿一日

在蘭

特令全權使

淡合謀太郎

石井外務大臣宛

竹越英三郎等、魚責任ナル議
取締方、英シ稟請ノ件

竹越英三郎等、蘭領印交ニ要スル不謹慎ナ
ル議論付播セラレテ當王言辯社令ニ勾引
本年二月當國議會ニ於テモ議論甚々タリシ

エト、英シテハ本年三月一日附公方三二号ヲ以テ
 稟報、次第モ有之亥處其、後本件ニ关
 係成行、就テハ施工ス、注視隊居亥カ今日
 至ル迄格別、予ニ魚之只先報報告（九月
 十日附公第一七〇号）、如ク蘭領即亥防備
 ノエト、付政府ノ注意一層緊切トナリタルシ
 況ノモタル次第、有之亥處最近數週呂宋
 島上諸市ヲ視察シタル東亞帝國大學農科
 大學教授八田理忠村士ノ語ル所、依テ
 日本ノ蘭領印支、對ルニ意向、莫クハ蘭西人
 ノ間、於ケル猜疑心ハ、廣ク付播セルモノ如ク
 相當ノ位置、在ル人士迄介越等、譏諷シ
 引延シテ日本ノ歸心ヲ疑ヒ且攻撃スル者

アリタリト、有之云、其引便報告ノ其月十
九日尚王議會并院式、於テ蘭王皇帝
陛下ノ議會ニ下サレタル勅語ノ末段ニ於テ
蘭欽印至所備改良ノ事ト、言及セラル者
不斗少減ノ注意ヲ急キ其言其件ニ付テ
亦十分注意ノ上ニ然ル如何ニ依リテ之ニ對シ
テ當ノ手段ヲ講スルノ必要アリ、ナカト存
在、其為記外越、是般向題トナリタル
能ハレ、於ケル果論、止ラズ更ニ本年四
月為刊ノ中央公論ニ於テ蘭欽印至
更ニ一層不穩ナル果論ヲ公ニシ居ル由ナ
ル、就テハ或ハ又、尙王言論界ノ物議ヲ
紛起セシムルコトアリヤ、計ラレズ、斯ノ如キ日

蘭ノ就文ニ文障ヲ来スニト
 鮮^タカラ^モスニ思^サ奉^ル
 セウ^シ重^ニ就^テ何^ト歟
 取^ル緋^ニ方^ニ法^ニ法^ニ注^ス
 議^ス友^ニ中^ニ立^テ標^ス成^ル至^ニ成^ル及^テ稟^ス清^ニ玄^ニ敬^ス忌^ス

平書亭、計分、以策、並、總、至、

計、蘭、如、部、

奉天中繼	電送	第 三 〇 〇 號	平
	大正	年 十 月 七 日	前 午 時 分 發

お又

	第
〇	〇

電信課長 小倉

政務局長

支 支
林 公 使
第 四 六 三 号
十一月十七日、当地ニ三新會社上ニ
北京特電トシテ、近來支那新會社中
友邦代表者ニ對シ不禮儀、及子

方 向 方 向



第一課

森田



森田

周^井元^井毛^井子^井才^井玉^井夫^井二^井害^井う^井及^井あ^井ス^井モ^井ノ^井足^井ニ^井
 有^井右^井ニ^井果^井シ^井敵^井主^井取^井傍^井方^井ニ^井付^井日^井英^井
 露^井佛^井回^井國^井ハ^井使^井有^井支^井那^井政^井府^井ニ^井
 共^井回^井通^井牒^井ヲ^井發^井シ^井乞^井趣^井シ^井
 采^井シ^井テ^井事^井ヲ^井買^井ナ^井リ^井ヤ^井何^井分^井ノ^井新^井申^井回^井
 電^井アリ^井否^井シ^井

七

次官

b6
b7C

一〇二〇二
(四)

寺内外務大臣

株公使

北京 癸巳年十一月十八日 後七

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

第 2 門

第一〇一七号

(新商社取片、向之步同血牌)

立林田 生田 宗 四六三 号 庚 子 寅 陽 歷 三 月 使 人 奏 議

基中本月三日独填，除于冬回代表。

者曰支那政府、向之御東亞、如牛交涉

ツナレタ人、事實ナリ、
毒、細郵、報、済

奉天經由十月十八日發六五〇。

五月辛巳夢道情

内務省

部之保身長

初月長

初月長 保身長 保身長 保身長

保身長 保身長 保身長 保身長

保身長 保身長 保身長 保身長

保身長 保身長 保身長 保身長

法制研究室中國書中
Cristoforo

~~State~~ of State of New York, 11.86.

上
御
氣
賦
意
所
入
法
令
集
備
白
々
見

新刊
肉と骨
の付

貴方、此、上、教、

以問者又曰、此戒、多少、以多少、

ナルヲヤ
科
モウ
之
早
也
ヤ
ン
レ
ウ
エ

三戸あり
中七
回
株
と
た
う
中

材料　うゑまのふゑしゝに就ていふ

又作せしは調子、便任うゑまのふゑしゝ

たふやほ

おしほほしゝはふゑしゝ

自大正五年十二月
至同九年二月

新聞雜誌等出版物取締
關係雜件

三

目次

- ① 東三省公報記事、関し奉天總領事代理了敬告、件
- ② 一大帝國、登賣頒布禁止、件
- ③ 黎總統、献上品、周之新聞記事、関之件
- ④ 特別要視察人比山潜、査研ニ係ル雜誌平民ニ関之件
- ⑤ 新聞電報検閲方ニ関スル件
- ⑥ 露國洋軍、威赫滿洲地方物、恐ニ関スル件
- ⑦ 陸軍省、露國交通信社取締方ノ件
- ⑧ 阪田、使出、英、周ニ奉初報記、件
- ⑨ 國際間に於ける日本の孤立、ニ関スル件
- ⑩ 浦潮、能多、甚リ、排日、出、多、種人、新報、ニ関スル件
- ⑪ 雜誌「大民」、登賣禁止、件
- ⑫ 本邦ニ於ける支那人ノ出、販、物、ニ関スル件

目次

- ① 東三省公報記事、関し奉天總領事代理了報告、件
- ② 一大帝國、登賣頒布禁止、件
- ③ 黎總統、献上品、周、新聞記事、関、件
- ④ 特別要視察人比山潜、麦研、係、雜誌、平民、周、件
- ⑤ 新聞電報檢閲方、関、件
- ⑥ 露國、津、津浦、地方物、関、件
- ⑦ 陸軍、露、交通、信託、取締方、件
- ⑧ 阪田、使、出、英、周、新聞記事、件
- ⑨ 國際間、に、於、ける、日本、の、孤立、件
- ⑩ 浦潮、に、於、て、是、り、柳、の、出、歩、紳、人、の、報、言、件
- ⑪ 雜誌、大、民、登、賣、禁止、件
- ⑫ 本、刊、に、於、て、出、版、人、の、出、版、額、に、関、件

- ⑬ 臣細野時務の東京時務主幹名簿二冊ノ件
- ⑭ 支那新聞紙刊行禁止ノ件
- ⑮ マニニエリス、テリリーニエリス紙記事取締ノ件
- ⑯ 日支軍事協約ニ関スル新聞記事及電報通信取締ノ件
- ⑰ 遣英御使節吸込ノット殿下ニ関スル海外電報取締ノ件
- ⑱ 西北利亞干涉問題ニ関スル新聞記事取締ノ件
- ⑲ 神戸銀行、ジャバ、クロニル取締ノ件
- ⑳ 小幡三使任令ニ対スル京津ノムスル件
- ㉑ 北京政務ニ関スル本邦新聞記者會旨
- ㉒ 日支兩國ノ政治及民情ニ関スルマニニエリス紙記事(案流ノムスル紙所載)
- ㉓ 支那人新聞封鎖事件
- ㉔ 小幡三使任令ニ對シテ日支問題ノ件
- ㉕ 上海新聞紙ノ刊行禁止ノ件

20 本邦遺失那宛為信取締一件

21 回國義會配付外交問責圖元印刷物配付一件

22 上海三松平氏、鐘、石、時、福、方、上、經、之、名、徵、思、高、鼓、吹、冊、子、取締一件

23 神ノハルト新少取締一件

24 路通通信取締一件

25 支那ニ於ケル米國關係、新聞取締一件

(濟南日報排米論說三閱聯排排米記事相互取締一件)

26 秋山民政長官、雜誌「大觀」寄書一件

27 海軍省ニ、東京朝日新聞告発一件

28 上海共同租界局、新皮取締規則一件

29 中央西伯利「新」時、掲載記事一件

30 中外日報寄贈一件

31 北京「共同通信」對支軍國策破、電報一件

32 新聞記事誤、件

39 醒世小説英雄淚ト稱する不穩出版物ノ件

40 帝國對外行動ニ関する機密漏洩ニ付キ通信社取締方ノ件

○ 華商入件營業妨害ノ件

41 最近日本に於ける政治運動ニ係る通信

42 我軍ノ行動ニ関する在支傳單等ノ新聞記事ノ件

43 上海「チヤイナ・プレス」ノ我皇聖容ニ關する記事ノ件

44 對露同盟會印刷物配布ノ件

45 獨逸赤海軍大臣「ケルピツ」著書中訂正ニ關する件

46 本邦海軍南洋諸島ニ於て軍事防禦之事凡説打消ニ關する件

47 中日通信ニ對する支那人ノ言論動向ノ件

48 支那人出版物「曙光」ニ關する件

49 加奈陀新報掲載廣告ニ關する件

50 「日米戦争のき」及「日米戦争未來記」

福州閩報劉崇偉攻殷手取締件

自大正八年七月

奉天蒙文報記載文取締方件

全 九月

唯一報論說ニ関スル件

全 十月

支那政府ニ於テ英米系新聞取締件

全 十月

55

56

57

58

59

60

61

電信課長

十五

大臣

木野

暗

奉天農大正五年十二月六日

一四、五〇
一、五五

次官

木野

木野外務大臣

矢田總領事代理

政務

第五一號

森田

岡部有田

岡部有田

岡部有田

通商

在支公使、大、通

人事

第三九一號

會計

十二月五日ノ東三省公報紙上ニ修省議會議長

文書

ノ談トシテ林公使ハ奉天中本邦人上田某ハ先換

參政官

問題ニ關係アルヲ以テ取調ノ上退去セシムベシ

副參政官

云々ト語リシトノ記事アリ一般ノ注意ヲ惹キタ

ルヲ以テ坂東書記生ヲ派シ張督軍ニ該新聞ノ



廠憲取歸方ヲ要求ニ其ノ快諾ヲ得タリ
在支心使、電報セリ

海防

有附屬物

大正六年四月十九日接受

警務局

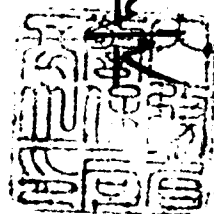
第二課

號 3966 受 稅

內務省
警務局
警發第二九〇號

大正六年四月十八日

永田内務省警務局



小幡外務省警務局

一大帝國送付件

本月初發の一大帝國外務省

別冊附刊の一大帝國(初月八日發)一同

別冊附刊の一大帝國(初月八日發)一同

別冊附刊の一大帝國(初月八日發)一同

別冊附刊の一大帝國(初月八日發)一同

別冊附刊の一大帝國(初月八日發)一同

文書課長

大正六年四月十九日接受

有附屬物

大正六年四月十九日
同月一日

發送濟

機密

政

機密送第九九號

大正六年四月十九日

主任第一課

主管警察局長

小幡 昭 長

由 抄 本

各 司 署 長 保 衛 大

一 大 事 業 到 返 送 任

本月十八日付 警 署 第 二 五 〇 號 長

第 二 門

後可明乎何送母古中

時
刊

一大事中國用金銀幣

返送矣今以盡之收去及

順

算

一大事國一冊所得後付

附屬書類添附

大正六年四月 四日 接受

主文務局

第二課

紙添

機密 一一六號

大正六年三月二十八日

在支那

特命全權公使 林權助

後援者 博士 西澤 幸次郎 殿

黎總統ノ献上品ニ関スル新聞

記事ニ関スル件

本月二十七日發刊「キンカゼツ」ハ別紙切抜

通り汪特使ノ携帶品黎總統ノ献上

品ニ関スル東京朝日新聞、記事ヲ引

用セル東京支那通信員ノ通信文ヲ掲載

沈

十

3301

2021

2021

2021

2021

之論評之加一居候。付委細別紙。就于御
查閱相成度候將又對支政策上我新聞
記事、取締、付于八屢次卑見聞陳之及
置候次第有之候處尚往々有、如キ不謹
慎之記事、散見セラルルコト了ハ頗ル遺
憾ニ不堪候。付此上共之ヲ取締、付十分
御取慮相成候様致度此段及具申候
也

件
名

very mean on the part of the Chinese Government to give so little." The point of this crude thought is easy to understand. Before the arrival of the mission, the Japanese papers reported what they believed to be a big draw from China in the form of presents. They said that as much as \$2,500 had been spent for the packing of the presents, and that no one but a Chinese could be so lavish in giving gifts. They are now disappointed, because the presents do not come up to their expectation in quantity. The greedy expectancy at once expresses itself in the sense of the wild barking of a hungry dog. Such a lack of self-respect and shame is beyond human understanding. A Chinese proverb says: "If you try to feed the dog, you will surely be bitten by it." This is true. I am writing these words to inform the mind of my friends in China, who are still looking forward to friendly relations between China and Japan.

Yours etc.
Ching Tien.

Tokyo: March 20.

切 新
聞
抜 名

年

月

日

LT 1.3, 1.4

1118

CONCERNING THE MISSION OF WANG, THE BEARER OF GIFTS.

CHINESE "TRIBUTE" TO THE MIKADO.

We have to direct the attention of Premier Tuan Chi-jui to the following letter which a Chinese correspondent in Tokyo has sent us for publication. It discloses the most insulting thought which could have occurred to the diseased mind of the Japanese, in connexion with a mission, despatched in the interests of friendly relations between a country whose people have always been the torch-bearers of Far Asian enlightenment and the Japanese who have in the past received the light of culture from China. We have never approved of the mission to Japan, although reasons of courtesy prevented us from publicly dissenting from the Premier's decision to despatch Mr. Wang Ta-hsieh to Tokyo to decorate the Emperor Japan with the Grand Order of Merit. And whilst we anticipated that the intellectual crudity of the Japanese and their gross moral indelicacy would tempt them to some act of international gaucherie, it never crossed our mind that their press would ever dare insult the Chinese nation with the infamous description of the rare gifts presented by the Chinese envoy to the Japanese Court as "Tribute from Li Yuan-hung." For this affront, Premier Tuan Chi-jui must be held responsible. He had no business to expose this country to an exhibition of Japanese vulgarity, even though he may not have had any reason to expect that the Japanese had added to their many undesirable qualities that of an intellectual apache. We publish in our Chinese Section to-day the original text of the letter:

THE LETTER.

The Editor, the Peking Gazette.

Dear Sir:—It has been to show our friendly feeling towards Japan that Mr. Wang Ta-hsieh has been sent as a special envoy to the Emperor of Japan. But long before the arrival of the mission, the Japanese began to criticise the Chinese action. And on the day of arrival of the mission in Japan, the Japanese papers indulged in veiled derision of it by suggesting that the mission was a "thick cloud" covering the Shimonesaki Treaty [which settled the Chino-Japanese war]. Within three days of the arrival of the mission at Tokyo, a list of the Chinese presents to the Japanese Court was published in all the Japanese papers under the heading, in large type—"Tribute from Li Yuan-hung." Now General Li Yuan-hung, as all know, is the President of the Republic of China. And although a President is not an emperor, he is—in his capacity as the chief representative of a nation—as much the head of a country as an emperor. In status, therefore, the Japanese Emperor and the President of China are equal. The use of the expression *hsien shang* or "Present to the Superior" by the Japanese press is clearly most improper. If the Japanese wish to remain as slaves to their Emperor, they are quite free to do so. But they have no right to abase us and link the words *hsien shang* with our presents. In the sense of the Spring and Autumn Annals, this is plainly a grave insult.

But this is not all. In its issue to-day the Tokyo *Asahi* makes this remark: "It appears that all the presents respectfully submitted by Wang are articles which were forcibly taken by Yuan Shih-kai from the Imperial Treasury of Fengtien [Mukden]. Since these things are robber's booty, there is no reason why China ought not to have given us more. It is

切新聞
坂名

北京
か
セ
ツ
ト
紙

大
正
六
年
三
月
二十
七

日

三月廿日 東京朝日新聞

●大總統の獻上品

▽汪特使より捧呈

汪特派大使の我天皇、皇后兩陛下に對し、黎大總統閣下より獻上せられたるもの左の如し

△天皇陛下へ獻上品

- | | |
|--------------|---------|
| 一、乾隆仿景泰琺瑯佛龍 | 一、座(臺附) |
| 一、康熙黃龍 | |
| 一、乾隆三彩雙盤 | 各一個 |
| 一、五代人金碧山水畫 | 一軸 |
| 一、明黃其昌書畫冊 | 一幀 |
| △皇后陛下へ獻上品 | |
| 一、乾隆五彩盤 | 一尊 |
| 一、乾隆雕漆多寶閣 | 一對 |
| 一、乾隆珊瑚雕雙螭碗 | 一匣 |
| 一、明邊城昭百鳥朝鳳長卷 | 一軸 |

大正三年三月二十日 大坂朝日新聞
天決人なる様

▲汪特使が奉獻した品々は、袁君が奉天の寶庫からセシめたものらしい、ソレなら今少し澤山持つて呉れば好いの、クチ臭い。

大正六年三月二十七日
東京カゼト漢字欄

◎關於日本報紙侮辱我國元首

我國政府鑒於中日國交。宜敦睦誼。故特派專使東渡。贈日皇以最高勳章。並賡以奇珍禮物。意至厚也。日政府之接待以禮。日皇亦禮貌相加。表面上之酬酢。固無所訾議焉。不圖彼國報紙。竟公然任意譏諷。甚至侮辱我國元首。而彼政府固若罔聞。豈有以縱使之乎。所謂中日親善之口頭禪。至此真暴露其真相矣。本報昨得郵來一函。述及日本報紙之無狀。亟錄之以供衆覽。

記者足下。此番特使東來。在吾初意。原欲敦好。乃日人於吾使節未至之前。已數數作論嘲罵。抵日之日。各報復

中華民國六年三月二十七號 (四)

藉馬關濃霧。寓意譏刺。入東京未三日。而各報登載贈品名目。竟敢大書特書曰黎元洪之獻上品。夫黎元洪何人。固堂堂大中華民國之大總統也。民國總統雖不值一錢之帝王。然代表國家。即一國之元首。元首與元首相酬酢。固屬絕對的平等。今吾元首惠贈以品物。何獻上之可言。日人自帝其國。自奴其民而已。與吾何涉。何能奴視我而斥之曰獻上也。例之春秋。當大不敬。

尤可駭怪者。今日東京朝日新聞評論欄內。有曰。此次汪特使所奉獻之禮物。似均由袁世凱從奉天寶庫中橫奪而來者。橫豈是盜來物。胡不多送些來。今所獻止此。可謂鄙吝極矣。云云。蓋當未來之先。日報盛稱餽品之豐。謂包裝費一項。已去二千五百餘元之鉅。非支那人不能闊綽至此。今見其少也。乃一變其垂涎以俟之態。而爲怒號狂吠之聲。其鄙吝無恥。真爲世界上雙料頭等之國。而吾人之好意。誠如俗諺所云。(疍屎給狗吃換狗咬矣。)吾憤其無狀。爰書告記者。幸加論譏。以餉國中之猶言中日親善者。

經天拜手三月廿日

大正六年五月十二日接覽

發稅費一七六兩

大正六年五月廿

永田內務省發保令長

少嶋北務省以務令長

特別要親善人忙並執証書之件

(台五五)

前之親善人忙並執証書之件

以標案送付九號

大正六年五月廿日

本野外務大臣

在桑港

恒久增殖飲記

特別要記案人使山潜ノ數刊ニ係
執法示民ニ要之件

令之各

子為社有之案名所周可及存

編者附言

東方通社社友會同通社社友等，為擴張宣傳，

特設此部，以資宣傳，除社友外，凡有志者，

務請加入，



第二課

新聞檢閱係



第5407號

機要第二八號

大正六年五月廿八日接受

主政務局

第一課

大正六年五月二十三日

在浦潮所德
總領事 菊池 義郎

外務大臣法學博士子爵本野一郎殿

貴地方狀態、聞之、新少記事、件

露王革命後、貴地方狀態、聞之、在邦新少、要

事實ヲ誤マレ、記事又ハ事實ヲ虚撰或ハ誇大

セ、通信ヲ掲載スルヲ以テ、豫テ之レカ、惡影響ヲ及

慮、故、居リ、要、最近、歐、露、ヲ、突然、在、邦、カ、極、東、露

領、併、吞、ノ、野、心、アリ、ト、凡、説、傳、ヘ、テ、之、降、死、ニ、結、語、艦

千載系統にえり以て右風説に種々ノ流言蜚語ヲ
 生じ或ハ全艦ヲ陸兵アリト傳へ或ハ全艦ノ外ニ港
 外ニ數隻ノ艦船游弋シテ當地ヲ監視ニ居レリナト
 移レ相當ノ教育又ニ地位アル者ヲ在留邦人ニ
 向フス之レカ眞偽ヲ問合スルモノアリ斯クテ革命
 後何トナク漸ク稀薄ナラント云々露西人ノ對本邦
 好感ハ今ヤ却テ疑懼ノ念ニ化セントスルノ傾向
 認めラレ玉ふ上甚ク望ミシカラサル現象ト存ス
 本官ニ當地保安委員會長ヲ對シ以上ノ事實ヲ述
 ヘテ新ナリ紙上ヲ以テ諒解ノ打消方ヲ要望シ片邊
 全委員會長ニ之ヲ通告スルト同時ニ本官ヲ對シ
 本邦新ナリカ當地方ノ狀態ヲ圖シ露西ノ為メ不利
 益ナル誇大的又ニ捏造的記述ヲ掲載スルヲ

指導し、其當注意ヲ加へ、之ヲ中旨に預有之ヲ
右ハ、至當ノ事ナリ、付、其邦新事ノ當地方ニ
同之記事ヲ掲載スルニ、豫メ事實ノ轉查ヲ逐
々可成テ、大の記述ヲ為サ、ル按、其當ノ方法ヲ以テ
新事記者ノ注意ヲ喚起セシメ、其邦新事及宣傳片
致具

附屬書類添附

大正六年六月廿三日接受

駐政務局

第...課

秘受6652號

機密第一二二號

大正六年六月十九日

在浦潮斯德

通商局



公領事菊池我



第二課

外務大臣法學博士子爵本

野一即致

新聞檢閱係

吟爾賓露亞通信社取締方針

客月二十一日發刊大阪每日新聞第二頁所載

「無稽」流言曰在出兵況下題之吟爾賓露電

報「浦潮斯德」駐在、日本總領事ハ凶賊ノ為

メ街上ニ於テ拳銃ヲ以テ暗殺セラルトノ風説

アリ云々ヲ報ニ起ヘテ本月十日發刊東京朝日

第...門

新聞論説「対露交渉説中」……昨今極東露
 領各地ニ於ケル日本軍來襲説ノ熾ナル最近在
 浦港日本総領事館ノ同地ノ露國執行委
 員ニ依リテ此ノ浮説ニ基キテ家宅搜索ヲ蒙
 レリトノ報道サハアルニ拘ハラス云々ノ記事有之
 由今般露領水産組合到組長稻川竹江
 氏ヲ特ニ當館ニ寄贈越火吟甫家露亞
 通信社本月二日発刊第二四九号露亞通信
 ハ「領事館ノ家宅搜索」ト題シ浦潮斯德露
 亞及露ハ在留邦人カ自衛ノ爲メ我勇團ヲ組
 織セントスル計畫アリトノ風説ヲ聞知セタルヲ以
 テ我勇兵名簿ヲ得ントシ東洋学院ハ日本語
 教師ヲ隨ヘテ總領事館ニ到リ館内隈ナリ

二二
三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
一〇

三三
四四
五五
六六
七七
八八
九九
一〇

搜索ヲ行ヒタルコトアリ 暴ニ在空地帝國領
事カ殺害サレタリト、風説下リタルハ右搜索カ
誤傳セラレタルモノナリト、恐るヲ報ニ右カニ付前
記東京新聞日新、記者ハ多分全通信ニ基
キタルモノト存、右カニ在空地民自衛ノ為メ固
作組織ノ我ニ副ニテハ右付枝示才三三号批
信ヲ以テ申付、右カニ在空地民自衛ニ付シテハ
慎重ノ態度ヲ以テ空地日本人居留民會内組
織セシメ其当地カ憲カ派組織ヲ探知シテ
自衛部名簿入手、為メ其後ノ監視シタリト
ノ通信ハ全カ根據ナキ謠言ニ有之カ尤モ東
洋學院ノ日本語教師云々、一句ニ付テハ審判
二十台付公才一一〇号ヲ以テ及報告置カ通リ

今月二十五日、秋、東京、換圖及ナル東洋学院及
 授「スバル」^ニ式カ莫斯科換圖及ノ誤ッテ用
 封シタリト稱スル在、全地、帝、王、領、事、領、事、
 公信ノ、処理方ニ、同シ、在、及、来、訪、シ、免、ニ、ト、有
 之、其、得、共、以、事、實、ト、新、記、少、故、搜索、ノ、凡、説、ト
 ハ、何、等、事、態、モ、其、之、事、ト、思、考、改、展、在、而、シ、ス、斯
 ノ、如、キ、荒、誕、無、稽、ノ、凡、説、カ、哈、爾、濱、ノ、事、態、何、人
 ニ、尋、流、布、セ、ル、ハ、カ、ハ、之、ノ、案、知、ス、ル、ヲ、得、サル、モ、何
 等、目的、ノ、為、ノ、利用、セ、ン、ト、シ、者、ウ、テ、意、ニ、之、ヲ、傳
 播、シ、タ、ル、ニ、ア、ラ、ズ、ヤ、ト、思、考、成、在、其、目的、ノ、
 如何、ノ、間、ハ、ス、其、種、ノ、凡、説、カ、日、露、王、交、上、甚、タ
 有、害、ナル、疑、ヲ、生、ジ、サル、我、ニ、在、事、邦、人、ニ、シ、テ、通
 信、ノ、業、ト、ス、ル、者、ハ、其、凡、説、ノ、事、實、ノ、有、無

確否ヲ精査スルノ責有之ト相良ニ拘ハニス當他
 月比較的近距離ニシテ而テ常ニ信領事館ノ
 所在地ニ在リテ容易ニ之レカ調査ヲ為シ得(キ
 前記通信社カ何等事實ノ取調ヲ為サスレテ
 無責任ナル通信ヲ為ス形跡有之ハ遺憾
 至極ト相良ニ付將來出來得ル限リ全通信
 社ニ對シ相良ノ取締ヲ加ヘラル、損失強議
 相良該通信一部取係(其如及常務大教
 具

軍還付先在哈爾濱常駐信領事代理

文書課長

大正六年六月廿五日接受

45

大正六年

六月廿六日

附大正六年六月廿六日發送済

送第

送第

號

第一課

主任

第一門

機密

機密送第一

號

政務局長

主管

浦塩

馬送付

正六年
六月廿六日

佐藤総領事代理

機密送第

號

本野大臣

第二課

松田

新聞檢閱係

兎 合南賓露亞通行取締件

本件ニ関スル在浦塩菊池総領事度本

重査



大臣宛六月十九日付機密第三二号来信

寫ハ既ニ御覽悉ノコト、存スル處談通信

ノ如キ荒唐多稽、煽動的報道ハ、常ニ

目下過敏ナル露國官民、神經ヲ刺戟

興奮セシムル、ミナラス帝國、立場ヲ甚ク

困難ナラシムル虞アリ國交上害毒ヲ流布

スルコト歎カラサルノト存~~キ~~ 思考セラレ

其ニ付貴官ニ同社ニ對シ共通行、影響

輕視

スツカウサル

所以ヲ説示シ

十の引率ニ注名
第一の通所

~~捏造~~

様

馬ト

或

筋

度

度

尚

貴

官

於テモ

今後

之シカ

取締

方ニ

一特ニ

配

慮

お成

様

後

付

申

進

也

大正六年七月十一日接受

管政務局

第一課

政

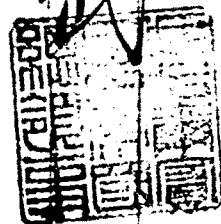
機密第三五號

内務

大正六年七月六日

在哈爾濱

總領事佐藤尚武



係 保

外務大臣陸奥子博士子爵本野一郎殿

第二課

露亞通信及新聞記事取締と關する件

本件は前記の如く六月二十一日付政機密送第百號
の如く在滿洲各地總領事各閣下宛往信の趣
旨御目刻の趣敬承致仕右の如く之の要旨を當館
に於て一般新聞通信業者の如く記事通信の關し
戒飭を加ふに必要と認め六月十日彼等一同に招集

第 門

機密

在 哈

秘受7347號

注意方親シテ面諭シ加ク且ツ必要ニ應ジ時
々書面ヲ以テ戒飭ヲ達致置修得共今因更ニ露
亞通信編輯人リ召喚シ記事通信ノ関シ尤分注
意方嚴重申聞ク置修モ猶向後一層之カ取
締シ勵行致漸次記事精選ニ力クナリ標指
道ヲ可致不取敢右田谷申達修敬具

本信寫送附先、在浦潮總領事

電信課長

五

大臣

次官

十

五四四四(平)

堀江省令
本省着

大正六年六月

十二日午後三時
十二日午後三時

本野外務大臣

坂田公使

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官



昨夜ノ萬朝報夕刊ニ本官ノ會見談話載シアル
モ本官ハ出發前萬朝報記者ニ會見シタルコト
ナシ隨テ談話事ハ全然構造セルモノナリ左ハ
デリケイトナル關係ヲ有スル事極ト思考スル
ニ付取消方可然、即取計ヲ請フ

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

武略

堀江 白雲
大正六年六月
二月十四日
三月

本野外務大臣

堀江公使

昨夜ノ萬朝報夕刊ニ本官ノ會見談話載シタル
元本官ハ出奔前萬朝報記者ニ會見シタルコト
ナシ隨テ談話傳ハ全然構造セルモノナリ左ハ
テリケイトナル關係ヲ有スル事極ニ思考スル
ニ付取消方可然所取計ヲ請フ

更ニ伊勢新聞記者室河江ニ西濱方中ノ至キ者ハ
たね子リ社会部ノ記者ニ対シテ時々談話ニコトアリテ聞ク
トヤアリジガツキニ此今更ノ人ニ往ジ星カレ西濱ノヤ
五ナリ耳ノ如クシテ

13-6-1917

M1 1.3.1.4

1144

■坂田西班牙公使の東京驛出發

西班牙公使坂田重次郎氏は、書記三浦荒次郎氏他一名を随へて、十一月午
前八時三十分東京驛發下ノ開急行列車にて赴任の途に上れり、朝來芝區三
田四國町の同邸には、八代海相夫人を始め、親戚の人々や多數の見送り引
きも切らざりき、

て、政子夫人及び重雄(マ)王子(マ)國臣(マ)の三兒と共に自動車に乗り東
京驛に向ふ、同驛には本野外相、石井前外相、幣原外務次官、日置公使、
若槻總次郎氏其他外務の高官、實業家、貴婦人等三百餘名の見送り人にて

賑ひたり、公使は
記者に向つて「最
近の情勢に見るも

獨逸潜水艇が西領
モロッコ港に至り

て宣意と消息を通
じ同地宣意が依然

獨逸に好意を有し
て陸に便宜を與へ

てゐる事實は蔽ふ
ことが出来ぬ、さ



う云ふ國へ赴任する困難は覺悟の前であるが、併し事情を察するには、和蘭
瑞西以上に却て便宜が多からうと思ふ、それに、西班牙は表面歐正中立國
であるが、講和の仲介者としては極めて格好の位置にあると、多くを語
さる中にも、其抱負を窺ふとを伺たり、政子夫人は「國府津まで見送つて
別れるんですが、主人は京都へ下中して、桃山御陵に参拜し、大阪と九州の
親戚の許で一泊留して、十九日門司から連絡船で釜山に上陸、西伯利亞
線で露都に出で、瑞典、諸國を経て、倫敦と巴里とで大使と打合せ、それ
から任地へ着くのは二個月後の豫定ださうで、私たちは來春後地へ参る
都合になつてゐます」と語りぬたり

要旨

五四四
(平)



堀江省令
本省着

大正六年六月
十二日 午後
十二日 午後
十二日 午後

本野外務大臣

坂田公使

昨夜ノ葛朝報夕刊ニ本官ノ會見談話記載シアル
モ本官ハ出發前葛朝報記者ニ會見シタルコト
ナシ隨テ談話事ハ全然權造セルモノナリ左ハ
デリケイトナル關係ヲ有スル事極ト思考スル
ニ付取消方可然、傳取計ヲ請フ

震

第 2 門

平號七三一第送電

今年十月十四日 0 时 6 分 發

龍

生

小治路

之

大坂遷移、南島、新島、

坂田重昭子宛

博以經書

世申、世直、世清、世通、世結

余々此の果
就ておゝ
此の
下
の
揚
射

5

野史拾遺

取消
 使來京駐出使の記事に關し、左の中
 達にありたれば公使の脱話は取消す
 其は十一日發行紙夕刊紙上に坂田
 公使談話御披露ありたるも右は同公
 使談話に於て貴社記者と會見した
 ること無之隨つて脱記事は全然無根
 にして且つデリケイトなる關係を有
 する事柄と認むるに付此全文御披
 載の上御取消相成度候
 大正六年六月十三日
 外務省新聞檢閲係

大正六年七月（代勝寫）

國際間に於ける日本の孤立

全亞細亞會

Private and Confidential.

BRITISH EMBASSY.

TOKYO.

July 18th. 1917

Dear Mr Shidehara

I learn from a confidential source that a further work by Mr Okawa, author of "The Nationalist Movement in India, its present Condition and Origin" which, as you will remember, was published secretly at the end of last year, has now appeared.

I understand that it is called "The Isolation of Japan in World Politics" and that it has so far been issued only in Japanese, though the publication of an English edition is contemplated.

Please excuse me if I am troubling you with information which you possess already.

I am,

Dear Mr Shidehara,

Yours sincerely

For Jormay

H. Shidehara, Esq

Vice Minister for Foreign Affairs.

M 1.3.1.4

1151

"Shumei".

Has anything been, or can anything be, done
to stop the circulation of the work?

I am,

Dear Mr Shidehara

Yours sincerely

H. G. Morgan

Private and
Confidential.

T
B

British Embassy,

TOKYO.

25 July, 1917.

Dear Mr. Shidehara

With reference to my letter of July 18 about the book recently published of which Mr. Okawa was said to be the author, I write to say that according to the latest information which has reached me, the work is a translation into Japanese (I do not know by whom) of a book by the Indian seditionist, Tarak Nath Das, published in English in the United States.

In case you may not have seen the book, I enclose for your information a copy of the inscription on the wrapper from which, I am told, it appears that it contains a preface by a Mr. Hogi Oshikawa and an epilogue by a Mr. Yujiro Miyake and that it is published by the Pan Asiatic Society.

At the end of the book is inserted a slip inscribed "Pan Asiatic Society. Representative, Okawa

Shumei

the Ministry of Communications
for ^{an} ~~their~~ early reply. I ~~am~~ ^{request}
~~excuse me~~ for the delay in
the matter.

Believe me,
Dear Mr. Norman,
Yours sincerely
次友

of "some days" ago, we took
necessary steps to move the
authorities concerned to stop
its circulation, and ^{now} I have
~~had~~ much pleasure ~~to be~~ in
~~a position~~ to inform you that the
said authorities have issued an
order prohibiting the sale and
circulation of ^{the} book in Japan.

As for the question of presentation
of intercepted letters in the United
States open courts, ^{we have urged} ~~I shall be~~
~~able to write to you~~ ^{on the subject} ~~at no distant~~
~~date, as we are hurrying up~~

Dear Mr. Norman,

With reference to your letter of July 18 and 25 about the book in Japanese, entitled "The Isolation of Japan in World Politics," the information which you kindly placed at my disposal confirms ~~exactly~~ what we had heard from the police authorities.

~~Immediately~~ ^{Having} ~~after~~, examined ~~notion of~~ the book in question immediately on our receipt.

宿大正十四年十月十日 拙文

林虎三氏宛ハテ

昭和十一年一月

大正十四年十月十日

立碑者

山崎主江 岩城美重

ふりかへる村士も春市に下りぬ

ゆめをみる其りき排。新大

排。新大。新大。新大。

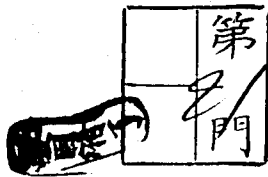
新大。新大。新大。新大。

新大。新大。新大。新大。

新大。新大。新大。新大。

新大。新大。新大。新大。

[illegible]



秘13124號

大正六年十二月卅日

接



主政務司

第一課



木村田

4
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 5

愛國士
 出願書
 配布先
 土收買
 牛中國之
 原日者
 詳
 余

Japanese relations at a moment when both Powers have every reason to wish that these should become increasingly cordial.

I am,

Dear Mr. Shidehara

Yours sincerely

H. J. Morgan

Private and Confidential.

Confidential.

British Embassy,

TOKYO.

9 November, 1917.

228

Dear Mr. Shideham

大正六年十一月十二日接受

The Ambassador bids me call your attention to a monthly review which has recently appeared called "Ajia Jiron".

The principal object of this publication would seem to be the creation of bad feeling between Great Britain and Japan and it devotes itself especially to indictments of British administration in India which are both inaccurate and malicious.

The tone of the articles published in this review is no less objectionable than that of the book by Mr. Shumei Okawa of which the Imperial Government, at the instance of this Embassy, consented to forbid the sale earlier in the present year and Sir Conyngham hopes that they will see their way to take effective steps to put an end to this abuse of the liberty of the press which, while it can serve no conceivable Japanese interest, must necessarily exercise an unfavourable influence on Anglo-Japanese

Copy.

November 14th.

Sir,

I have done my best. I am sorry that I cannot help it. But I will, of course try to cut away all the passages unfavourable to our Allied Country in any translation. I hope and trust you will not think I ~~am~~ ^{am} a Japanese unfriendly toward your country. Pray may you be sympathetic with the translator. Even the title of my translation will be changed.

yours obediently,

signed) N.U. Hatano.

some measure for his loss and undertook to leave behind him here the book and the partial translation already made. He added that the silence of the Embassy (due to my own failure to write to him) had led him to imagine, and to tell the editor, that no objection had been raised here to the publication of his translation.

Mr Wingfield, in reply, while observing that the last question which he had raised was one to be settled between Mr Hatano and the editor of the TOYO JIRON, explained the disadvantage from the point of view of the Embassy of giving money to anybody who chose to ask for it because he had translated, or agreed to translate, a seditious and mendacious book directed against an allied Power. He declined to be moved by Mr Hatano's plea (which by the way is a false one) that this was a first offence on his part.

I trouble you with this long story partly to warn you against Mr Hatano who, having failed to blackmail the Embassy, may not improbably try to induce the Imperial Government to bribe him not to proceed with his work on the ground that, if he does, the Ambassador will make trouble, and partly to express Sir Conyngham's hope that steps will if necessary be taken to prevent the publication of Mr Hatano's translation if he decides to fulfil the contract he has made.

*I am,
Dear Mr Shidehara,
Yours sincerely
J. G. Gorman*

P.S. Since I wrote the above Mr Wingfield has received from Mr Hatano the letter of which copy is enclosed showing that we may expect his translation to appear with an altered title and slightly modified in form, unless steps are taken to stop it.

British Consul". Many of these do in fact represent incidents which actually occurred in Persia (notably at Tabriz). I think in about 1909, and they appeared at that time in London illustrated papers, whence they have doubtless been reproduced. It is needless to add that no British Consul had anything to do with them. The Ambassador discussed the matter with you in June 1916, as you will probably remember.

As Mr Wingfield left Tokyo for a week's holiday shortly after Mr Hatano's visit he did not write to the latter as he had said he would. I for my part determined not to communicate with him but to wait till he called again to receive an answer to his enquiry. I decided on this course because, from my previous knowledge of Mr Hatano's character, I had little doubt that his sole motive in approaching the Embassy was to get money in return for a promise not to publish his translation, since he must have known that he could never obtain their approval to any such proceeding and that his enquiry was therefore in itself absurd. Mr Wingfield entirely shared this view.

On Mr Wingfield's return he asked Mr Hatano to call again which he did on November 13th.

Mr Hatano then stated that he had received his copy of the book, which he believed to be the only one in Japan, six years ago from a well-known Indian revolutionary (or supporter of Indian revolutionaries, for I cannot say whether she is herself an Indian) known as "Madame Cama" who used to live in Paris. The editor of the TOYO JIRON had seen the work in Mr Hatano's house and had asked him to translate it. A contract had accordingly been concluded last month between the two and Mr Hatano had received payment for the first two monthly instalments of the translation. If he now broke his agreement he would have to repay the money to the editor, which he could not do as he had unfortunately spent it and had nothing to live on for the rest of the year. He accordingly begged the Embassy to recompense him in

some

British Embassy,

Private and Confidential.

Tokyo, November 15th 1917.

Dear Mr. Shidehara

On October 30th, Mr N.U. Hatano, a person long and very unfavourably known to the Embassy who, when I first arrived in Japan, was the director of an insignificant news agency, called and showed to my colleague Wingfield a book in English called "The Indian War of Independence" which he had been asked by the editor of the TOYO JIRON to translate for publication in that magazine in monthly instalments beginning in January next.

He stated that on a previous occasion the Embassy, by representations to the Ministry for Foreign Affairs, had prevented the publication of a book which he had translated so that this time he wished to make sure that there would be no trouble of this kind before proceeding with his work of which he had already completed one chapter.

Mr Wingfield promised to examine the book and let him know in due course the views of the Embassy about it.

The book is nothing but an attack on British rule in India, an incitement to Indians to rise against it and a eulogy of those who made the Indian Mutiny. The part of the title page bearing the place of publication is torn from the copy left here by Mr Hatano but the work is stated to be by an Indian Nationalist. An illustration entitled "Victims of British Brutality" was also missing, which is doubtless a picture representing Indians being blown from the mouths of cannons, an incident said to have occurred at the time of the Indian mutiny. This picture has done duty on previous occasions in similar works and was used in an article in NIPPON OYOBI NIPPONJIN of December 1915, when it figured in a series depicting acts done by the Russians in Persia "at the instigation of the

British



警察局長

第 91 号

十 七

文書課長

大正六年十二月廿九日接受

大正六年十一月廿九日起草
同 年 月 日 附

別紙

大正六年十二月廿九日發送済

檢 査 送 第 二 四 號

主任

檢 査 員

幣原の秘書官

水野の秘書官

亞細亞時論及東洋時論主幹

者等、警告、件

亞細亞時論、印度、於今英國治政
死、第 七 記 事、毎々掲載セ、我、一、



在本邦美玉大使候より別我甲子年
 通申世更に同使より波多野（ハタノ）
 （タタノ）某力東洋村（タウラ）係咄に基き
 the Indian Year of Independence たる美
 玉、蘇丹に在りし件に就き強請
 的、美玉大使候に會ひて人より交換シ
 名次才に弄し、我乙子等、寫し、直照
 會書、布下、貢、付奉、目付、以テ本音より

不召教外我西平官、
夏玉方使彼、
致回若幸、
付君中令、
上右二

雅德主幹者、
并現、
我时木、

毛布、
我興、
玉名、
美玉、
中、
反、
於、
名、
指

改、
り、
死、
聚、
スル、
如、
キ、
花、
事、
以、
執、
符、
物、
上、
種

其、
捲、
裁、
リ、
美、
拉、
ハ、
称、
夫、
々、
中、
翠、
告

方、
少、
配、
定、
古、
煩、
ハ、
シ、
交、
ね、
又、
事、
件、
、
性

賢、
上、
彼、
多、
野、
某、
、
并、
シ、
テ、
モ、
兼、
林、
同、
時、
、

相孝翠告シ並ク方免ト認ナラシムル
是亦少配をリ炊ハシメ共共及少信歌
ハ歌々

山ッテ本件ニ并レ少措並信、上ハ
大才三三
振振成道
教お乳女右為金持也

~~prone to be effervescent, and I am doubting its wisdom in the~~

~~present case~~

also

In reference ^{also} to one Hatano and his translation of a book on India, about which you called my attention in your note of the 15th instant, ^{we were} ~~I am considering the course best to be taken.~~
similar steps of warning will be

I am,

Dear Mr. Norman,

Yours sincerely,

(Signed) K. Shidehara

再回

Tokyo, November 29, 1917.

文書課長

大正六年十二月廿九日接受

~~agree altogether with the views set forth in your note. As a~~
It however seems to us that
~~matter of fact, criticisms against British Administration in~~

fact that criticisms in any form against the British rule should

tion for only what it actually contains. ~~We might want the editor~~

but that has often ~~produced the contrary effect with~~

~~some of these literary, cultural and other, as you know, interests~~

To the Secretaries,

Bengal Provincial Committee,

62, Bowbazar Street, Calcutta, India.

Dear Sirs,

The "Asia Jiron" is a monthly magazine printed in the Japanese language. Its object is to deal with the questions affecting the welfare of the Asiatic nations. In our last issues we have dealt with the Home Rule Movement and the internment of Mr. Besant and her two colleagues. In the next issue we are going to publish the photo and career of the late Mr. Dadabhai Naoroji. As information regarding the present political condition of India at our disposal, are insufficient, we should be much obliged if you would be so kind as to supply us the necessary books and pamphlets dealing with the questions. I should be much obliged if 10 copies of "Our Demand for Self-government" by Mr. Prithvis Chandra Ray could be sent to us. We hope to publish extracts from it for the information of the Japanese public as to the true situation in India.

Yours faithfully,

Sd. Y. Kuzu.

Tokio,

15-9-17.

We should be glad to have a copy each of the photos of the interned persons for publication in our magazine; also any other photos re social customs, architecture, Indian Gods & Goddesses etc. etc. would be welcome.

probably agree with me that my definition of the object of the "Ajia Jiron" is not very wide of the mark.

The signatory of this document is presumably Mr. Yoshihisa Kazu.

I am,

Dear Mr. Shidehara

Yours sincerely

H. G. Ormoy

Private &
Confidential.


British Embassy,

TOKYO.

11 January, 1918.

Dear Mr Shidehara,

T.B. In my letter of November 9 I permitted myself certain strictures on the tone of a monthly publication called the "Ajia Jiron" which, I gather from your reply of the 29th idem, you do not consider justified.

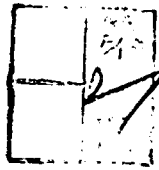
 Since I received your letter the Indian censorsh^p have intercepted circulars addressed by the manager of this review to certain persons and societies in India, copy of one of which I send you herewith by the direction of the Ambassador.

A perusal of this paper shows the intention of those who control the review to continue their attacks on British administration in India basing them on materials supplied by a certain section of the Indian Nationalist party whose constant aim it is to vilify and misrepresent British rule by every means in their power.

In the light of this new information you will
probably

再四

機密



郵局

十七

文書課長

大正七年一月十七日發

大正七年一月十五日起卓
同七年一月十七日附

別紙 大正七年一月十七日發送濟

檢閱委員 第八號

主任

檢閱委員

主管

水野内務次官宛

常原内務次官

亞細亞時報主幹：注意件

亞細亞時報：即云：於美玉治政の

記事の掲載セシ義、一突ン在本

邦美玉大使使より申出、次子及之、一突

手紙の送り手



シ同志主幹、相率、報告方、付、客歲
十月廿九日、檄、檄、送、方、二、四、号、リ、以
テ、中、進、主、主、次、才、布、併、并、告、今、取
英、王、方、使、使、リ、同志主幹、リ、印、交
ニ、於、先、政、治、問、題、オ、ニ、要、ス、ニ、資、料、蒐、集
自、的、リ、以、テ、同、主、諸、方、局、殊、ニ、印、交、治、政
、政、治、リ、事、ト、セ、向、ニ、回、状、檄、モ、リ、送、付
セ、ル、リ、印、度、検、閲、官、ニ、於、テ、差、押、一、リ、執

シテ我等、互主多中世併此
 保印^ハ成^ニ於^テ美玉有^ニ靈^ニ、神怪ノ猥
 リ^ニ刺戟スル如キ此種^ノ斧措^リ本邦
 人^ニ於^テ教^ヲスルコト^ニ甚^ク原^カスト認^メラ
 ヲ併^ニ付^テ亞細亞時^ノ帝^ノ主^ノ幹^ノ、由^テ來
 太^ニ極^ニ措^ニ主^ニ、此^ノツルコトナリ称^ス我^ノ中^ノ世^ノ主^ノ
 相^ニ炊^ニハ^ニ成^ニ美玉^ノは^ニ倭^ノ一^ノ換^ニ抄^ノ
 都^ノ今^ニモ^ニ存^ニル^ニ付^テ其^ノ結果^ノ一^ノ反^ノ中^ノ回^ノ示^ス

駁

依此

[illegible]

宣

解面七

次官
古

第2877號

大正七年二月 六日接受

内務省六、秘第二四一一號

大正七年二月五日

水野内務次

幣原外務次官殿

亞細亞時論及東方時論主幹者等ニ警告ノ件回報

客年十一月二十九日附檢機密送第二一四號ヲ以テ御申越相成候本件ニ

關シ管轄官廳ニ於テ夫々戒飭ヲ加ヘ又警告ヲ與ヘ候處亞細亞時論主幹

葛生能久ハ從來ト雖國交ヲ害スルカ如キ記事ハ之ヲ避クルニ力メタル

モ將來尙一層注意ヲ拂ヒ戒飭ノ主旨ニ反スルカ如キ事無之旨申述致シ

又東方時論主幹中野正剛ハ客年九月下旬頃波多野春房ニ料金一部前拂

マテ印度ニ關スル出版物ノ翻譯ヲ依頼セシモ其後同人ノ人格ニ付非難

アルヲ聞キタル爲辭譯原稿第一回ノ送付ヲ受ケタルモ之レカ掲載ヲ見

合居タル次第ナルヲ以テ警告ニ基キ其料金損失ノ覺悟ニテ契約ヲ取消

ス旨警告致候尙波多野春房ヨリ英國大使館ニ向ヒ強請的交渉ヲ爲シタ

主筆檢閱委員
松田

手記
波多野

官
印

波多野



ル儀ニ付テハ同人カ右依頼ヲ受ケタル出版物ハ翻譯刊行スルモ敢テ差支ナキモノトハ認メタルモ豫テ同大使館ニ出入スル關係モ有之勞々念ノ爲同大使館參事官ノルマン氏ニ之ヲ確メタルニ過キス尤モ其際料金問題詰頭ニ上リタルモ敢テ強請的言動ニ出タル事無之旨申述致候得共多少誤解ヲ招クカ如キ言動有之タル哉ニテ深ク將來ヲ戒飭致候處本人モ其旨ヲ諒シ引取りタル趣ニ候條此段及回報候也

内務省秘第一一三號

大正七年二月二十日

水野内務次官

幣原外務次官殿

古

亞細亞時論主幹ニ注意ノ件再報

客月十七日附檢機密送第八號ヲ以テ御申越候本件亞細亞時論主幹者印度諸方面ニ同狀送付ノ義ニ付テハ管轄官廳ニ於テ右主幹者ニ對シ將來此種舉措ニ由ツルコト無之様嚴重注意ヲ與ヘ候處將來ハ深ク留意スヘキ旨誓言致候條御承知相成度尙右同狀送付ハ雜誌經營上參考材料蒐集ノ爲ニシテ決シテ他意アルニアラス從テ英國官憲ニ對シテモ此邊ノ誤解ヲ解カレ自由ニ材料ヲ蒐集シ得ル様御盡力アラシコトヲ望ム旨申述候條御參考迄ニ申添候也

新聞檢閱係

吳



舊控

THE GAIMUSHO
Tokio

23
February 23, 1918.

(Dear Mr. Norman,)

The contents of your note of the 11th January last ~~were~~ at once referred to the Department of Home Affairs which informs me, in reply, that a ~~severe~~ ^{strict} warning has been given to the manager of the "Ajia Jiron" against sending to India circulars such as enclosed in your note. The manager, while promising to the authorities to exercise utmost care in the future in such matters, explains that the circulars in question were sent with the sole and single object of obtaining in a general way reference materials in connection with editing his magazine, and that there was no ulterior motive whatever ^{in his proceedings.} to it. He further states to the authorities that he ^{is} welcomes whatever material the British authorities in India ^{may be} ~~are~~ disposed to give him and asks the assistance of the British Embassy in the matter.

I am,
Dear Mr. Norman,
Sincerely Yours
(Signed) K. Shidehara



第
門

受513145

大正六年十二月廿八日接受

管正

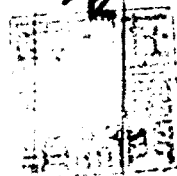
録

公第一四〇

大正六年十二月十七日

在厦門

領事矢田部保吉



外務大臣法學博士子爵本野一郎殿

支那新聞、發行禁止ニ関スル件

當地發行漢字支那新聞、因南報ハ從來ノ系統上
南方革命党ト系縁ヲ通シ、舊東ニ臨時政府、後
置セリシムル前後ヨリ常ニ北方政府ノ施術力共和
ノ趣旨ニ及セン忌ムル中、政治ナリトナシ、政教ノ華
ナシメス、為メニ當地支那官憲ノ注意スル所トナリ居ル

ルカ近來廣東福建間ノ年際愈々緊急トナリシニ
依リ益々其ノ忌避ヲ高メ來リ候新聞主筆蘇
少公ハ容月二十四日迄所用アリテ外出中ナル先
ニ於テ廈門警察廳ノ手ニ逮捕セラルル其供物禁
セラルルカ嗣テ今月二十六日午後ニ至リ廈門警察
廳ハ男以物ト會内シ軍警三十余者ヲ以テ全新
聞社ニ至リ家宅搜索ヲ行ヒ印刷機械一切ヲ悉
鎖シタル爲メ全新聞ハ其供物期爲メ停止シ已ムナキ
ニ至リ一方全主筆ハ引能中監禁中ニテ尚又新聞社、
印刷機械ハ其後第壹部方ヲ取外シ活字約三分ニ
ト共ニ当地支那友黨ニ平ニ没收セラルト云々有之候
尚当地ニ於テ發行セラルル支那新聞トシテハ該新聞ノ
外ニ民衆、機關新聞トシテ民權日報アリ右ニ對シテ從

米支那官憲ハ其監視ヲ急ウス、曩ニ今紙ノ登載
記事カ地方ノ治安ノ妨害トナシ居ルヲ以テ兩
三回之カ警告ヲ與ヘ、置キタル次オカリ近來今
新聞ニ付シテモ封鎖ヲ命セントノ意向アルヤニ
噂セラル居レタカ、未タ其一手ヲ下スニ至ラザルモ人々
新聞紙ニシテ從來ノ態度ヲ一変セサルニ於テハ早晚或
ハ兩南報ト類似ノ運命ニ遭遇スルナキヤヲ係レ難キ
現状ニ有之候

右報告申進候教

本件字送付先、在支公使、

福州領事、台灣總督府
民政長官

電信課長

上

大臣

次官

た

七八七

幣原外務次官

民政長官代理

旅順農本省署

大正六年七月十九日

后一、一〇
八一五

政務

秘第九一號

通商

貴電第廿二號

敬承

本件之閣下ハ已ニ

人事

去ル七月十四日大連民政署長ヲシテマン

會計

チニア、テリリ、ニエウス」紙ニ對シ當該

文書

記事ノ取消及將來ニ對スル嚴重戒告方

參政官

電訓セシ處左ノ通七月十六日農行「マンチ

副參政官

ニア、テリリ、ニエウス」第二五八〇號第六

面ニ取消文ヲ掲載セシ故在標御取知シ



要旨

要復書

濟

諸君

○去ん金曜日ノ紙上ニ於テ報道セム加奈
陀太平洋鐵道會社汽船「エムプレス」才
バロシヤ「錦」青島入港及出帆ノ記事ハ
談報ナク（譯文）

七八七〇
平

旅順費
本署署

大正六年七月十九日

后一、一〇
八、一五

幣原外務次官

民政長官代理

秘第九一號

貴電第六一號

既致電本件之閣下ハ已ニ

去ル七月十四日大連民政署長ヲシテ「マシ

チユリブ、デリーリ、ニユウス」紙ニ對シ當該

記事ノ取消及將來ニ對スル嚴重戒告方

電訓セシ處左ノ通七月十六日發行マシテ

ユリア、テリーリ、ニユウス」第二五八〇號第六

面ニ取消文ヲ掲載セシ故在標印取知リ

○請

○去年金曜日ノ紙上ニ於テ報道セル如奈

陀若洋鐵道會社汽船工ムブリス、才

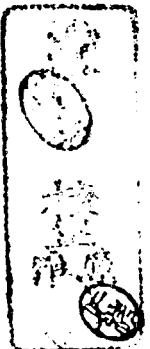
加口モヤリ 濟青島入港及出帆ノ記事ハ

誤報ナリ (譯文)

波多市下第

文書課長

大正八年一月 七日 接受



16

大正八年一月八日 附

大正八年一月八日 發送済

機密

機密送第

號

主任

大

要目付

機密

事務

主管政務局長 決

幣原次官

左旅順

宮尾関東都督府民政長官

「カンチユリアン、デーリー、ニユース」件

満洲日々新聞英訳版件

過般在本邦米國大使来省、砌本官ニ對シ満

洲ニ「カンチユリアン、デーリー、ニユース」ナル新聞紙アリテ

英字

機密

第2門

滿鉄乘客ニ對シ廣ク無代價ニテ配布セラレ居シ

ル處同紙ハ近來頻リニ排米煽動的ノ記事ヲ掲

ケ而モ何等具體的事實ヲ示サズ唯漠然西比

利亞及北滿地方ニ於ケル米國ノ活動ヲ云為シ

荒唐至極ナル流説ヲ根據トシ排米煽動的ノ記事ヲ掲ケ

ル為メ米國側ニ於テ事實ヲ擧ゲテ之ヲ辯明セ

ヨリ米國側ノ阻害者ヲ鮮カラスニ以テ滿鐵ノ害ヲ傷リ

ヤコトモ成リ難キ次第ニ至リ米國側ノ阻害者ヲ鮮カラスニ以テ滿鐵ノ害ヲ傷リ

暹ノ國政府ト密接關係ヲ有スルハ一証ニ因知ノ事實ヲ不疑ニ信スルハ米國側ノ阻害者ヲ鮮カラスニ以テ滿鐵ノ害ヲ傷リ

第才此番申出係在米國大使申分ハ一應不

ニテ殊ニ同紙ノ裏ニ五百人ノ米國商人西比利亞

ニテ殊ニ同紙ノ裏ニ五百人ノ米國商人西比利亞

ニ入り込ミ盛ニ活躍シツツアリト云フカ如キ
凡説リ為ス
報道ヲ掲
ルモ自今ノ存チス限ニテ
ケタル趣ニシカ右ニ付米國大使ノ説明書目下

西比利亞地方ニ在ル米國實業家ハ僅々五名ニ

過キサル實情ニ由テ斯ル筆鋒ヲ棄テハ周紙

必シ多クハミテ動リ揣摩懸測セヨト定ニ迷惑ト化ヘスルカ

力事實滿鉄ノ經營ニ係リ從テ關東都督府

甲カクハ右英字就中ホカ利ニ在リテハ如實ニ多クハミテ

トモ密接ノ關係アリトハ米國側ニテモ風ニ承

浮遊シ得ル米名工便米名工通ル

知ル所ニシテ欺蒙ニシテ金ニシテ事ヲ賂メ不虞ア

バカハ此ノ面ヨリカ

ト次第ニ付貴府ヨリ同紙ニ對シ可然注意ヲ促

サレ爾後此ノ種記事ハナハ揚直ヲ遂テ且筆鋒ヲ懷
諭達方御取計ヲ煩度此段御依頼旁照會
申進修也

附屬書類添附

大正八年二月三日 接受

駐露務局

第課

機外 第八號三

大正八年一月二十八日

關東都府府民政長官代理鈴木三郎

外務次官幣原重二郎殿

「コレチエリア、デリーニエ」ノ記事ニ關スル件

本件ニ關シテハ廿月十々日附機外第八号ニリ以テ
回答申進候次有之候事爲別紙寫し直
大連民政署長ヨリ報告有之候事ハ以テ
上ニ在寫送し候中進之候事ハ查閱相成爲矣
也

第2門

秘受 195 附

大民警署政令七八号ノ一

大正八年一月二十一日

大連民政署長中野有光

关東都府男爵中村雄次郎殿

新聞記事ニ关スル件

本月十日関橋高等法院一六二号ノ一ヲ以テ御通牒相
成候「マンチユリヤ、デリーニユウス」排米記事、記載ニ关
スル件、直ニ主幹候村善吉、注意スル所、候處
本日希正の津出有之候、系全文謄写及、報告候

右ハ全然事實相違致成リ列車ノ一部ハ物販
販賣人ヲ通シ数部販賣致シ居リ也

一、英唐各社ノ流転ヲ根拠トシテ排米煽動的、
記事ヲ掲ケ日米親交ヲ阻害スルコト甚少ナラ

ス

経済ハ滿蒙、西伯利亞ニ果スル記事ハ主トシテ材
料ヲ大連ノ和字新聞ニ採リ来リ候ハ記事
正否ニ付テハ採集ノ違ヒ之ヲ去故ラテ排米煽
動的、記事ヲ掲ケタルコト勇テ多ク之ヲ様々に抽
象的、排難ヲ蒙リ候テハ迷惑甚カリサニ次
中ニ有之候

一、マンチウヤ、デリーニウハ滿鉄ノ経済ニ係リ云
々

當初より満鉄ノ干渉スル所ニ至之唯不足費
金ノ供給ヲ仰キ候譯極メ者之文責ニ要シテ
ハ主筆兼主幹トシテ少生カ全責任ヲ負ク候
事ト相成居候

一 排米記事一例トシテ五百ノ米國商人西伯利ニ入
込シ活動シツテアリ

右ノ記事ニ当地和字新聞ノ報導ヲ記載セシメ
ノニ者之執筆^者肥後ニ排米^者及米の動
機ノ痕跡ヲ至之候

從來トテ之爲メ米國ニ對シテ疑念ヲ挑撥スル浮説
ヲ傳フルカ如キコトハ至之候得共今回ハ御注意
ヲ体レ一層注意可仕矣

先般ハルビニ當社ノ通信費ヲ設置仕候得ハ

今後ハ少陽兼ニ西北ノ方ニ對シ比較的正確
ナル數導ヲ得ン便ニ得至リ付爲度申候候

機密

至急

第
門

文書課長

大正七年五月廿一日接受

大正七年五月二十一日
同 年 八 月 八 日

別紙

大正七年五月廿一日發送済

機密送第一九〇號

主任 松岡 義典

主管

田邊 信次官宛

常原 少次官

日支軍事協約ニ関スル新沙記

事及直付取締ニ関スル件

本件ニ係リ本日所屬總理大臣、陸海軍、
逓信、財務及外務各大臣、官、外、我、寫

、臣職定於年小付老柳中多矣
交貴省古正、而位勝毛布右寫
送付身其為中意小也

一、本件職定於年小付、

和

七年九月二十日閣議

内務省
新聞紙
局長

日又軍事協約ニ関シ本年四月十二日附テ内務省ヨリ地方長官ニ對シテ左ノ通牒令セラレタリ

左記事項ニ付新聞紙ニ掲載スルトキハ禁止セララルコトアルヘキニヨリ各社ヘ嚴重警告セラレ

レ右依命一日又軍事協定ニ関スル事項(ニ以テ省署)

ルニ已ニ日又軍事協約成立セル事實ニ顧ミ此際全國新聞社等ニ改メテ左ノ通牒警告方地方長官ニ訓令シ且此標準ニ依リ新聞電報通信ノ機關ヲ行フコトト致度但又抑ミ於ケル新聞紙等

ノ記事ニ^(等)關スル電報通信ノ檢閱ニ就テハ可成
寛大ノ手心ヲ用ユル事

一、日又軍事協約ノ内容ハ軍機ニ涉ルモノナルニ付
之ニ關スル肯定的ノ記事ハ一切掲載セサル事
一、日又軍事協約ニ關スル商議ノ經過ニ就キ日
又兩國ノ國交ヲ害シ又ハ世間ノ疑惑ヲ招ク力
如キ記事ヲ掲載セサル事

平

第 門

第 門

電送第二四六八號平

七年九月五日 十時十分發

十

收

香川縣知事宛

後再分移在

模園事務



昨日貴電奉閱悉差止又告
教、要、右、昨日已、事務者、
返、虎、伯、下、付、之、為、名

文書課長

大正七年五月廿九日接受



特密

再四

急 上

大正七年五月廿九日

廿九日

大正七年五月廿九日發送済

檢 機密送第一九七號



吳

上管

田邊信次官宛

幣原次官

達英中使節及フシノト殿下

三希名(海外電報) 取締、件

我達英中使節及フシノト殿下ニ宛テ

新少記事取締方ニ付、所望者有リ、在

收送及店留秋
其旨ニ供圖
以式四端
守備
7/

此、直に地方長官、訓令布告、熟考、
より、海防、虎、穀、本訓令、熟考、標
準、トシテ、模範、スル、トシ、敬希、望、交、知、
方、情、識、考、力、半、ナ、リ、
為、可

記

特派使節中交換、件、ハ、亦、今

公表セラル、モノ、外、他、事、項、掲、載、セ、

モ、サ、レ、標、取、斗、ハ、レ、タ、シ、右、依、年、

一日本より、中候遣ニ昇シテ一切

、記事

一ツシ、ト飯下ニ昇シテ中候

船中敷着地及日時、中

旅程等中候中、危候ヲ

願
虎
セ
ラ
ハ
カ
如
中
記事

次官 計 5

第 10790 號

大正七年六月六日

新聞紙

大正七年六月五日

廣信

第一

事務

次

官

幣原外務次官

新聞紙掲載禁止事項

ニ関スル件

國交又ハ對外政策ニ障害ヲ及ボスベ
新聞記事ニ係リテハ近時
者上場ノ上掲載禁止事項ヲ定メ
豫メ之ヲ全日本新聞通信社ニ警告

第 2 門

檢閱密

收

檢閱委員

次官

占

大正七年六月十日

堀切田務書記友

人事課長

松岡外務書記友殿

吉石總領事

秋吉官

特派使節團先鋒書記友殿

別紙寫、通各地方長官、通譯等、府

右様園季

以参考、及送付也

森田

人



守康信田



正天野



内務省秘第二九九號内

大正七年六月十五日

内務省警保局長

右廳村縣(陸東急)長官死

五月廿五日特派使節ニ関スル電報第二項ヲ左ノ如ク致ム

一、コンノート殿下御行動ノ時刻但午前午後ヲ區別スルハ支ナシ

右依命

次官

十日

松岡重良

名位



五七四

大正七年六月二十一日

堀切内務書記官

有二十日接到

松岡外務書記官殿

日英兩皇室特派使節ニ関スル新聞記事取締方ニ付テ別紙寫し通り各地方長官ニ通牒候ニ付御系考迄ニ及御送付候也

警因 癸第五七四號

大正七年六月二十日

永田内務省警保局長

縣知事殿

日英兩皇室特派使節ニ関スル

新聞記事取締 件依命通牒

コニト殿下ニ関スル新聞記事ニ付テハ目下本月十七日電
報通牒ノ通り其行動ノ時刻ヲ表示スルモノニ限り掲載
ヲ差止メ居ル次第ニ有之ル如現在ノ取締方ノ外尚御退
京廿九日)後ノ御行動、御出發ノ地莫旦時及御乗船並ニ

其ノ航路等危険ヲ顧慮セシムルカ如キ記事モ新聞通信
等ニ掲載セシメサル様嚴重御配慮相成度尚我國ヨリノ
御派遣ニ関シテハ絶對ニ秘密ノ必要有之リニ付取締上
特ニ御注意相成度

次官

十b

昭和五年八月九日

検閲委員

大正七年六月二十五日

堀切内務書記官

模範委員
若佐

松岡外務書記官殿

コンノート殿下ニ漢スル新聞記事取歸方。
付別紙寫ノ通り各地方长官ニ電報致
候條御案考込ニ及送付候也

←

山手

山手

山手

山手

山手

山手

コンノート殿下七月六日迄御動靜ハ公表
ノ筈ナルモ七日以後ノ御行動御旅程ハ時
局ニ鑑ミ御旅行中ノ危険ヲ顧慮シ絶
對ニ秘密ノ必要アリ新聞通信等ニ掲載
アルトキハ直チニ差押處分ヲ為スノ止ムナキ
旨新聞通信社ニ懇篤注意シ一切掲載セシ
メサル様配慮セラレ度若シ掲載シタルトキハ
直チニ差押執行ノ上電報アリタレ右依命

人事部長

大正七年九月十六日

堀切内務書記官

法

松岡外務書記官殿

特派使節ニ関スル新聞記事、件
本件ニ関シ本月十六日宮内省ヨリ、協議ニ
基キ更ニ取締方各地方長官ニ通牒候ニ
付御參考迄ニ寫及送付候也

寫



十六日

我皇室ヨリ英國へ御派遣、御答礼使ニ
関シテハ御動靜ヲ推知シ得ヘキ一切、記
事及御寫真ヲ掲載セサル様此際改メ
人可御各社へ嚴重御注意、上七月十日依命
通牒ニ依リ取扱ハレタレ右依命

松岡重久様位

敬具





新步模閱委員各位



4



次官

十b

秘受11217號

政務局長



ノ件

西北利亞干涉問題ニ關スル新聞記事取締

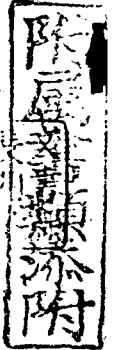
本件ニ關シ本月十四日取締方各地方長官ニ通牒候ニ付御參考迄ニ寫及送付候也

幣原外務次官殿

小橋内務次官

大正七年六月十四日

内務省秘第一三四〇號



大正七年六月十四日

主筆新聞檢閲委員



(字)

内務省秘第三四〇號

大正七年六月十四日

永田内務省警保局長

西北利亞干涉問題ニ関スル新聞記事取締ノ
件 依命通牒

英佛其他ノ言論界ニ於テシベリア干涉問題再燃セル
模様アル此際ニ當リ帝國政府ト聯合與國政府ト間ニ
右問題ニ付何等カ特ニ交渉ニテモアルカ如ク傳フルハ
徒ラニ疑惑ノ因ヲ作ルモノナリニ付一切新聞紙ニ掲載セ
シメサルヤウ取計ハレタシ

尚支那に於て敵國人追放中止ノ事實及理由ニ關スル
切ノ記事モ同様取計ハレタシ

機密第五〇號

大正七年六月十三日

在米

聯合全權大使子爵 石井菊次郎



外務大臣男爵 後藤新平殿

「シヤパン、クロニクル」紙排斥ニ関スル件

輓近日米兩國ノ關係者數改善セシレ輿論ヲ代表
スル言論機關モ概シテ其論評ヲ慎クノ傾向ヲ生
タルストハ夙シ御リ認相成居ル義ト存候處神
ミ於テ刊行スル「シヤパン、クロニクル」ハ依然排日
的筆鋒ヲ弄シ上海發刊「リイド、レダ」等排日紙



呼應シ本邦ニ對スル中傷的論說ヲ掲載シ
右ハ屢々米國ニ於ケル新聞雜誌ニ掲載セラレ
事増々通セサル一般米人ニ不良ナル感想ハ與
、居ル傾向アルハ甚タ遺憾トスル所ニ有之現ニ最
近本使ノ面會セル一ニ有力者ノ如キモ本件ニ言
及レ帝國政府ニ於テクロニクル紙ニ對シ十分取締
ヲナスト共ニ同紙排斥ノ手段トシテ日本實業
家側ニ於テ同紙購讀ヲ見合スハ勿論新聞ノ
生命ナル廣告ヲ撤回スルカ如キ處置ニ出ツルニ於
テハ必ス有効ナル結果ヲ齎ラスコトヲ得レト進言シ
タル向モ有之候ヲクロニクル紙ノ論調ニ付テハ豫テ本
省ニ於テモ注意ヲ拂ヒ從テ相當ノ方法ヲ講シ
居ル、義トハ存候得共右進言ノ如ク廣告撤回

ノ方法ヲ試ミテハ式ト一策ナレハシト存シ御参考ナリ迄
右特ニ申進候也

追テ日本ニ於テ発行セラル、外字新聞中「クロニクル」
ハ週刊ヲ有シ且ツ記事簡明ナル等ノ面像ヨリ
他ノ外字新聞ニ比シ米人間ニ比較的廣ク購讀
セリレ意外ノ潛勢力カヲ有シ居候ニ付此點ハ御
注意相成候様致度候

日本

(神戸ニ外紙事件)

CHRONICLE AND HERALD IN TROUBLE

Robert Young and J. S. Willes
Accused of Dealings with
Enemy Says "Asahi"

ILLEGAL ADVERTISEMENTS

Taken from German Teacher
and Austrian Hotel-
keeper

Mr. Robert Young, proprietor of the "Japan Chronicle" of Kobe, and Mr. J. S. Willes, proprietor of the "Kobe Herald" also of Kobe, were charged on Tuesday by the Sannomiya police for violation of the enemy trading act, says a Kobe telephone message to the "Asahi."

Mr. Young, continues the "Asahi," inserted in the issues of July 18 and 19 of the "Japan Chronicle" which he owns an advertisement of German lessons at the request of a German subject, named E. Plackes (?) residing at Kumauchimachi, Kobe, receiving an advertising fee of Yen 2.50.

Mr. Willes, proprietor of the "Kobe Herald," also is said to have inserted in his paper an advertisement of the Central Hotel at Shimoyamate-dori Nichome, Kobe, at the request of the proprietor of the hotel, who is an Austrian subject named Edward Buckner(?), the advertisement running from October 5 last year till July 19 this year, for which the accused received from the advertiser an advertisement fee of Yen 80. Mr. Willes purchased the paper from Mr. Curtis, a British subject, on the 1st of May last and has since been publishing the paper.

The act of the two papers which thus gave facilities to enemy subjects by inserting their business advertisements constitutes a violation of the enemy trading act, and hence the prosecution.

It is said that the present proprietor of the Kobe Herald, as soon as his attention was called to the advertisement, which was accepted before he assumed control, immediately discontinued it.

大正七年
七月廿二日

夕
4
ス

大正七年
八月

大正七年
八月

大正七年
八月

大正七年
七月二十四日

東報

大正七年
八月

大正七年
八月

大正七年
八月

●二外字新聞

社長告發

神戸市浪花町ジャパン・クロニクル新聞社長ロバート・ヤング(英)及同神戸ヘラルド新聞社長ジョン

シルベン・ウィルス(英)の兩人は紙上に掲載し又ウィルスは本年五月に掲載方申込みを受け其處掲載
對敵取引禁止違反して廿三日三月一日英人カーチス氏よりヘラルドし本月十九日迄同紙上に右廣告を
の宮警署より告發されたり右は下新聞を買収後神戸下山手通り二掲載せるに依る者にて兩新聞社は
クロニクル紙が神戸熊内町獨逸人丁目奥地利人セントラルホテル主何れも敵國人の生活に損及したる
イー・フレクス(英)より獨逸語教エドワード・ブッケル(英)が昨年ものにして對敵取引禁止命令に違
反の廣告を依頼され料金三圓五十十月五日より向ふ一箇年間ヘラルド反したりといふにあり(神戸電話)

正七年七月廿七

駐務局 第三課 信

兵外發第 二四一號

大正七年七月二十二日

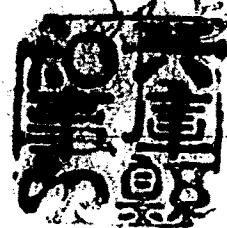
兵庫縣知事 清野 長太

解回

内務大臣 法部博士 水野 錬太郎 殿
外務大臣 奥平 新平 殿

外字新聞論争 英對敵取
遠及ニ関スル件

管下居住 独逸人 エー、クレバスヨリ 本年
五月十五日付 英佛独語學 教授開始希望
ノ趣ヲ以テ 願書ヲ 本廳ニ 提出セリ 其理由
ハ 同人ニ 独逸人 ヲリ スキヤンホルスターン



Handwritten signature or mark.

ノ書記トシテ毎月百二十五円ヲ受ケ居
レルモ他ニ收入ノ途ナリ且八月ヨリハ右書記
ヲ天解傭セラルヘキ趣ニテ生計上困難ナ
ルヲ以テ一月一人ニ付十円内外ノ報酬ヲ
得テ生計費ニ充テムトスルモノ有之調査
ノ上不得已モノト認メ六月十八日付之ヲ許可
セリ然ルニ同人ハ本月十八日発行ノ当地
クロニクル紙ニ「独逸語教授」ノ廣告ヲ
掲載セシニ對シ同日発行ノ当地ヘラルド
紙ハクロニクル紙ヲ非難シ「クロニクル紙ハ
之ニ對シ非難的記事ヲ掲載セ教員間
互ニ攻撃」レ居リ其大要左記ノ通ニ有之
エーグレブスガクロニクル紙ニ「廣告依頼

レタル件及セントラルホテル経営者ブツケル
ノヘラルド残ニ廣告依頼レタル件ハ對敵
取引遠及トレテ目下關係者取調中ナリ
又ヘラルド残取載ノクロニール残カ独逸人
ヨリ補助金ヲ受ケ居レリトノ風説アリ
云々ノ点ニツキテ目下調査中ナリ
右不取敢此所及報告候也

左記

記事要領

一七月十八日ヘラルド所載

社説聯合國ニ對スル侮辱

七月十八日クロニール残上ニ「独逸紳士独逸語
ヲ教授セムト欲ス日本官憲ノ許可書ヲ

有不時間ハ學習者ノ便宜ニ從ヒ限定ス
我社宛申込マルヘト廣告シヤリ
クロニクル紙ハ英人ノ經營ナルニ不拘斯カル
敵國人ノ廣告ヲ掲グルハ不都合ナリ云々
尚校書トシテ敵國人ノ廣告掲載非難文
ヲ掲ク
一七月十九日クロニクル紙所載

雜報

十八日一紳士來社シ本紙所載独逸語
教授ノ廣告ニワキ異議ノ申込アリタルカ
独逸紳士ナル文字不當ナリト云フコトニワキ
ナハ愛國的感情ノ其度ヲ逸セルモノト
云フノ外ナリ又敵人取引違反行為ニ近

レトノ件ニツキテハ一片ノ肉ヲ賣渡シタルト
同様何等對敵取引違反類似ノ行為ア
ルヲ認メス敵國人モ生存ヲ許サレ之カ為
ニ働リニトヲモ許サレアリコノ廣告ヲ揭
ケタリトテ何等戰線ニ影響者ナレ敵人
ヲレテ救済ノ下ニ生活セレメ又餓死セレム
ヨリハ自治セレムヲ可ナリトスル以上ハ個人
トレテ普通ナル斯レ行為ヲ排斥スルニ
及ハス云々

一七月十九日ヘラルド所載

社説 鐵多

前日ニ引續キクロニール残ヲ非難シ從來
同社力独逸人ヨリ補助金ヲ受ケ居レリ

トノ風説アルハ或ル事「實」伏在セルモ
ノナルフトヲ知リ得ヘン同社支配人エヴ
アンス氏力航海ノ途上英國々歌ノ合唱ニ
際レ他ノ者ヨリ三回返注ス思フ受ケタル
ニ不拘起立セサリレヲ非難レ之ヲ己穢多
ト称スヘキナリ云々

一七月二十日夕ロニール我所載

雜報

或ル校書者ハ英國臣民ニレテ敵國人ヲ
援助スルハ不可ナリト言ヘルモ右校書者カ
赤十字會社ニ出捐スルフトアリトセハ如何赤十
字ハ彼我ノ別ナリ救護スルニ非スヤ尚カ
廣告ニワキヘラルド残ハ庫リ攻撃スルモ

ヘラルド我々亦某國國人經營ニ係ルホテル
廣告ヲ其紙上ニ掲ケタルニ非スヤ云々

一七月二十日ヘラルド所載

社説 ヤング氏ニ多謝ス

ヤング氏ノ注意ニヨリセントラルホテル廣告

ハ今夕ヨリ之ヲ撤廃ス但談廣告ニワキ

讀者ヨリ何等ノ異議ヲ招カサリキ尚

人ハ之ヲ独人ト同一ニ論スヘカラス且本廣告

ニ于テハ何等ノ收入ヲ得ヘキニアラサルコト

ヲ一言ス云々

一七月二十一日クロニクル我々所載

雜報

ヘラルド記者ハ國人經營ホテルノ廣告

ヲ為シ同ホテルヨリ廣告料ヲ出せスト
云フ又ホテル經營者ヲ利シタルフトハ爭
フヘカラス云々

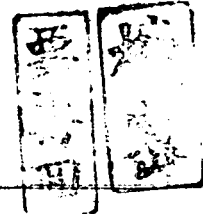
文書課長

大正七年

九月十四

同、年、

月廿五



政

機密送第一七八號

大正七年九月廿五日發送

第二課



急



古

政務局



内務省

杉田

内務次官

常務次官

神戸銀行

取締

神戸：於テ利行スルヲ止ヤバシク口

ニクニ残ハ從來常ニ排日の筆鋒
ヲ弄シ單ニ本邦ニ於テ日本中
傷ハ筆ヲ振ツノミナラス又ニ匿名
又ハ偽名若ハ在英日本人ナル名
義ノ下ニ英國新ス紙ニ不穩ノ記
事ヲ投書シ日本反對ノ氣勢ヲ
煽リ居ンヤノ事實ハ當時貴省
大臣ニモ送付済ノ同年十一月二

十音着在英陸田大使電報第
五三大號中ニモ記載セラル
以處今般在米石井大使司
別改寫、通照令致越然
御承知、通同紙、比較的
外人間、講讀セラル
發行、英字新了中、最モ大
ニ勢力ヲ有シ居ルヤ、認メラル
從テ

今紙に掲載せうじん中傷的論議力
 事情に過せけん一般外人に對し
 せん要影響願ん方ナルモノアルハ
 日本、対外國際上願ん寒心
 へんモノ有也、右様、次茅三付本
 紙取帰方、関してハ貴者、於て
 従来爲ト考量せうレ居ルコトハ
 思考改メ、半際断然相需ノ
 要別等、るは筆、るは筆、是也

増置、請ふらん様、致度、此後
及照會、也

別紙本年六月十三日附在米
石井方便寺信栴密第五。
号、寫添付、コト

卜

務

自

電信課長



大臣

次官

十

政務

決

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官



一四四九
略

北京
本有著
大正五年十月
三月五日
四月八日

内田外務大臣

芳澤代理公使

第一五一九号

小幡公使ノ任命ニ関聯シ十月二日ノ京

津タイムスハ別電第一五三。号ノ如キ記

事ヲ掲ゲ殊ニ其末段ノ如キハ不都合ナ

ト認メタル所本官ヨリ英國公使直

談ニ及バハ少シク角立チ過ガルヤニ思考

シタルニ休今三日徳川ヨシヲ英國公使館

一等書記官ハートンヲ往訪ノ上本官ノ
傳言トシテ該記事ニ関シ英國公使ノ注
意ヲ喚起シ度ク右ニ對シ同公使ニ於テ其
返答ト認ムル要置ヲ執ラントモトヲ希望ス
ル旨申入レシメタルニ對シハートンハ右轉達
方ヲ快諾シタル概ナリシガ其後間モナク
徳川公使信ヲ以テ英國公使ハ京津々
ムス主筆ニ對シ苟クモ聯合國ノ不調和
ヲ煽動スルノ嫌有ニカ如キ批評ハ送テ
好マシカラサル旨ノ電報ヲ發スルコトトシタル趣
申越シタリ、不取敢。三旦

電信課長

大臣
次官

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

要書

濟

快

16

一四四八五

(暗)

Peking November 3, 1918. 8.20 p.m.
Received. " 4. " 8.10 a.m.
Gaimundaijin.
Tokyo.

No. 1520. Betanden.

The selection of Mr. Obata as the Baron's successor at Peking is either very tactless step on the part of Hara ministry or betoken intention to continue the aggressive policy initiated with the representation of famous 24 demands. It is well known of course that the appointment of a minister is dependent upon the approval of Government to which he is accredited, and as under the circumstances Mr.

Obata must certainly be persona
^{non(!)}in grata to the Chinese Govern-
ment, it may be expected that
the latter will lose no time
in intimating that such is the
case to Tokyo.

Yoshizawa.

電信課長

大臣

次官

✓ 政務

通商

人事

會計

文書

文書
附
送
付
了

參政官

副參政官

要
領
書
附
送
付
了

一、臨時
北京電
本省着
大正七年十月十日
林公使

第一五四九号

往電
第一五四九号
天津
暗号

郵送
セリ

大正七年十月九日午後五時
奉天經由

電信課長



大臣

次官

古

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

一九一四年
(暗)

内田外務大臣

林公使

北京
本署着
大正七年十一月十二日
〇〇

第一五六〇號

貴電第一〇三二號及往電第五四七號、因之往電

第一五九號申入、行掛リモアルニ付十一月十日徳川

ヲシテ「バートン」ヲ訪ノ上、前記西度、新聞記事

ニ関シ前記貴電御訓示ノ趣旨ニ依リ英國公使

ノ注意ヲ喚起シタキ旨申入レシメタル所「バートン」

ハ法律上之筆記事ヲ取歸ノ道ヲキモ右申入バ

次第ハ香細史國公使一轉達ス可ナラヲ諾スルト
同時ニ、ヒンツエ松平會談ノ件ハ如何ナル筋ヲ
決レタルモノナルヤ驚キ入りタル次第ナルガ（往
電第一五四ノ號ニ於テ述ビタル通りナルガ我々
ニテハ最初ヨリ其トハ此ノ點ニハ觸レザリシ次第ニテ
右先方ノ所言ニ對シニモ徳川ハ此ニ同居ヲ表シ
タルニ止メ深入リスルハ其ノ意ヲ知ス）其ノ他ノ突合
事ハ新聞紙ガ其ノ得タル報達ニテモ是ヲ是トシ
非トシテ其ノ誤謬ヲ知フルハ此ヲ得ズル思方
スルモノナラズ其ノ所爲ハ其ノ程度ニ止メ有ニ

討ニテ云フニ非ズニ昂津、タイタス、
シテ右ノ程度ヲ超越シ冷静ナル批評トシテ受取
リ難キ者アルヲサス儀ナルモ篤ト説明ヲ加ヘ置キ
タル趣アリ。

（奉天陸田十二日前一二五）

大正七年七月十一日 受

第三果

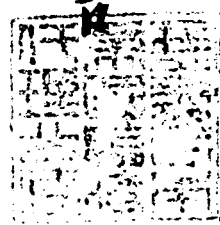
機密第四三一號

共 五

大正七年十一月五日

在支那

臨時代理公使若澤謙吉



外務大臣子爵内田康哉殿

小幡公使、對スル新聞記事、關聯レ

英國公使館ヨリ、回着寫送付ノ件

本件、關スル英國公使館ト、往復大要

ハ往電第一五九号報告ノ通、有之候處

同電末段所載同公使館一等書記官

來翰、別紙寫ノ通、有之候、付右茲、



編號18716號

及御送付候間御査閱相成度此段
申進候也

British Legation,

Peking.

3 November, 1918.

Dear Mr. Tokugawa,

I was able to deliver your message to Sir John ,
before his Departure to the country, and he desires
me to let you know that he has telegraphed personally
to Mr. Woodhead deprecating the use of any criticism
which may bear the appearance of instigation to
discussion amongst the Allies at this time.

Yours sincerely,

(Signed) S. Barton.

電信課長

大臣

次官

政務
決

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

要目付了

第
2
附

一四九四
暗

内田外務大臣

林公使

北京後
本省著大正七年十月十三日午後三時十分

第一五六二號

往電第一五六二號
（往人一件）

在天津統領事へ暗号、依郵送也リ。

（奉天經由十月十三日午前九時十分）

木村孝年啓

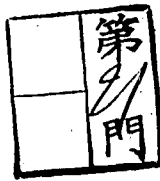


北京政變ニ關スル本邦新聞社説要旨

大正六年十一月十八日朝刊

大阪毎日

逆取逆守ノ段内閣其半歳ニ充タスレテ破滅セル怪ムニ足
ラズサレド前途ノ形勢ハ容易ニ揣摩スヘカラス段派ヲレ
テ捲土重來セシムルノ餘地絶無ナリトハ云フヘウラス唯何レ
ノ手ニ政權ヲ握ルトスルモ日支親善ノ方針ヲ維持シテ進
行スルニ有カナルモノナルヲ要ス我々亦内閣タルモノ機宜ニ処
スルノ道ヲ誤ルヘカラス



大阪朝日

段氏今倒ルトセハ寺内内閣ハ討支策ノ根本ヲ破壊サレタル
形ナリマタ段氏失脚ノ原因カ寺内内閣トノ關係ニアルモ
ノトセハ寺内内閣モ亦責ヲ負ハサルヘカラス吾人ハ是即此形
勢ヲ決シテ單純ナル排段トハ見ス實ハ猛烈ナル排日惑
情ノ潜ムモノト爲ス而シテ寺内内閣ノ露骨ナル討支政策ハ
英米ノ反感ヲモ實ヘリ英國公使ノ活躍ハ何ヲ意味スル
カ英國公使ノ南方派 旨ナル調停ハ寺内内閣ノ裏ヲ
搦クモノニアラスヤ若シ更ニ段氏ノ後ニ排日内閣ノ出現
セハ如何寺内内閣ハ重大ノ危機ニテト對シヘシ

九

[illegible]

MT 1.3.1.4 1269

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

次

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

東

第

一

卷

上

第

一

回

目

時事

寺

寺

満

既

上

ト

止

即

地

タリト評也

往來三回

大隈

関係

東

中

三

野

萬

47

卷之四

針灸學

[illegible]

五、金瓶梅

[illegible]

常々此の如く
論議せしむる
可ラス

而支那南北之交通

步
一
遊
山
記

世界

段氏一旦辭職スルニモセヨ更 捲土重來ノ賢^悟ナルモ
ト見做サレ可ラス迄チ今次ノ政變ハ段氏ノ没落
ヲ意味スルモノナラザルヲト何ト雖想像ニ難カ^サ
ルナリ段氏今回辭職ハ北方ハ北方南方ハ南方トシテ
先ツ統一セラレ終ニ其間優勝者^者手ニ依リ南北統一ヲ
見ルニ至ルヘキ道程ニハ歩ヲ進メタルモノニシテ格別注
意ヲ拂フニモ及ハザレド馮氏ノ態度如何ニ依リテ現
狀以外混乱ヲ重ネストモ限ラス我帝國ノ如キ依然傍
觀ノ態度ヲ執リ支那政局ノ變轉ヲ以テハ種ノ變
動燈トセハ則チ可ナラン

「工不工不」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

「工」之「工」之「工」之「工」

ナク後業を承継するもの
セラルルナリ

日本ヲ見テ、諸國ノ
新地ハ更ニ大ニ開墾スル

形シテ三ノ部ニ屬スル地ハ、
ハレト云フ一事ヲ以テ、

版ノ如キモ、全部ニ
鐵鑛ノ如キ皆、

大ニ進歩スルモノ
置カレ、

例ニ

Handwritten text in Chinese characters, likely a list or index, arranged in several columns. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely.

親王爲之系古人、多山、多水、多石、多草、多木、多竹、多果、多實、中使、以此、下、使、終、ト
世、獻、之、國、ヲ、最、名、剛、毅、也、人、物、之、ト、評、之、眞、也、

極東問題之存亡

予ハ潛心日本研究ヲ遂ゲテ、終ニ終ニ終ニ極東問題ヲ述ベル

極東問題ハ、確信スルニ、眞ニ文明ノ國ニシテ、東亞ノ人々、其、容、意、ヲ

起サシム(其問題)存セザルヲ信ス、其、邦、之、情、勢、的、ハ、不、炭、及、鐵、ニ

於テ世界最富國ナリ、現在ハ、鐵、道、ヲ、有、ス、ル、五

國、之、一、ナ、リ、其、理、ニ、延、長、ス、ル、要、ヲ、在、邦、ハ、開、港、セ、ウ、シ、サ、ル、カ、故

ニ、思、ハ、サ、レ、ル、ヲ、然、レ、ト、文、明、ノ、進、歩、ハ、不、可、少、ナ、リ、其、故、中、輕、合、文

明、人、ハ、其、理、ヲ、最、モ、明、白、ニ、説、キ、テ、其、理、ヲ、合、極、優、増、殖

重なる風よりあしそ支那ノ上流階級ニ對シテ象徴ス意カハ
彼等ノ心ヲ七精神由體共ニ強健ナリ故ニ書カセテ筆ヲ操リ上
流階級ノ廣シク其意ヲ示ス所ナリ故ナシ



受30792號

大正七年十二月拾六日接

警務局

第三課

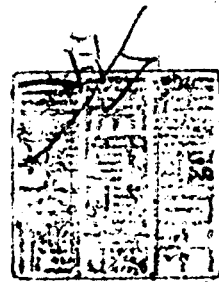
實成

公第 三〇五號

大正七年十一月七日

在支那

特令全權公使署林接



外務大臣子爵西原貞敬

八新聞封禁事件

既經端內閣人日本使館長書致故、以、及社
紙接與八新聞及通信社等、封鎖し、又件
、因、八送、以、電報、及、公、信、以、及、報、生、等、以、後
處、其、故、因、公、報、以、下、六、新、聞、八、何、等、特、別
、之、經、由、明、示、其、封、鎖、之、解、決、之、方、法、ハ、ウ、ズ

交函社主幹何重賓、吳鍾士、幹梁直榮

中華郵政特准掛號認爲新聞紙類
張熾華白負翁

摩之 手 揆摩之 彭 所 移 上 兩 之 移 軍

北京、北方審判廳、
審判部、
審判廳、
審判部

大
方
如
夫
判
決
了
了

何重芳五等有期徒刑延後二角

單直筆
物後
二十日
癸亥
三年

庚、張
= 名
同上

在、實、何、人、直、拉、折、中、出、之、他、各、人、之、六、部

南卜四
事
十
物
之
異
罰
處
分
受
之
多
少

不順と上前ノ等ナリ事有之

將又支那國民之此種青年之新法律

之
處
日
政
各
人
上
報
紙
去
三
十
三
年
三
月
新

在 京 日 本 公 使 館

田會一提出件、
 嘉生所托、
 和成、
 升山、
 收為、
 令併、
 及、
 牛和

電信課長

大臣

次官

古

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官



三四月六日 暗

内田外務大臣

有吉從領事

上海 大正七年十月二十一日夜五時五分

第九號

本官發在支公使宛電報第一七三號

數日亦發刊以來之排日的記事、揭載之

上海が、十月二十六日 Japan would

take Shanghai and plans to win three

seats in Shanghai Municipal Council

印刷物

大正八年一月十一日 記録第二部接受

地虹口方面各所ニ貼リ附々次イテ翌日ノ新聞

更ニ其意味ノ記事ヲ掲載スルニ付右ノ機會ニ愈

々相當ノ手段ヲ執ルニ決定_{此地}工部局警察ニ中

入レ上同警察ヲミテ右新聞主筆 *Coleman*

ハ、當地英國洛廷ニ起訴_{セムルコトセリ}蓋シ同新

聞ハ、入耶シンヂケート_ト所_ニテ其主_一版_一

岐_附有仁ナルモ同人ハ目下渡来不在ニシテ前記_リ

ハ主筆トシテ該記事ノ責任者ト認_ラレ現ニ英國

國籍ニ屬スル以テ故有之リ然_レ此種外國官

憲_{（反）}事件、戰爭中英公使刻令下ニ高等法院

ニテ審理セラルル趣ニテ既ニ Chron
 國公使ニ必要訓令ヲ仰イタル趣ノ要同公使ハ我
 公使ヨリ一應照會ヲ得タキ前申越シアリタル趣ナレ
 付、右奏訓方ニ関シ可然ク御交渉相煩ハシ度ク
 猶本件ハ未ルニ十七日頃ハ豫定ニ付出来
 得可クハ電報ニ訓示方兩申添ハ願ヒ度シ
 外務大臣ハ電報セリ

秘

上海 大正七年十月二十一日午後五時五分
常務局 二十一日正午

内田外務大臣 有吉從領事

第一九二號

本官發主文公使宛電報 五二號

數日可發刊 註目的記事ヲ掲載ス

上海ガゼット 十月二十六日 Japan would

take Shanghai and plans to win three
seats in Shanghai Municipal Council

云々 印刷物

地虹口方面各報。附。次。日。新聞。

更。其。意。味。極。其。簡。截。付。本。報。會。愈。

相。當。予。以。決。定。之。地。部。局。警。察。中。

人。上。同。學。會。在。新。園。主。等。Cecilinda

地。當。地。英。界。之。延。延。同。新。

聞。人。即。之。其。立。一。版。

歧。有。仁。人。目。下。渡。冬。不。可。不。記。

主。等。主。任。者。現。英。國。

國。務。為。之。然。此。種。外。國。官。

實。事。件。此。等。事。英。公。使。訓。令。下。為。官。院。

ニテ審理セラルル趣ニテ既ニ
國公使ニ必要訓令ヲ仰テタル趣
公使ヨリ一應照會ヲ得タリ旨申越
付右奏訓方ニ関シ可然ク御交渉相煩
楯本件ハ來ルニ十七日頃
得可クハ電報ニ訓示方御申
外務大臣ハ電報セリ
願ヒ度シ

電信課長

大臣

次官

白

政務

法

通商

市

人事

會計

文書

參政官

副參政官

五
(略)

内田外務大臣 小幡公使

北京發 大正八年一月四日 前二五七

第一編

(全文再電セシモノトシテ一月七日)

本使 奏在上海總領事館電報一月

二日 第二編

事 貴電第二十七號 (上海ガゼット附記事) 予ノ件英國ニ

使ハ申入レ置キタル、對シ同ニ使ヨリ十

二月三十一日附ス文ヲ以テ、リリニ起訴

ノ理由一應十分ト認ムル、於テ一審

理方取行フ、ト同二十七日、クラウ

ニ、アボキート、元電訓、夕々趣申
趣セリ
大層、電教セリ

附屬書類添附

大正八年一月六日 接獲

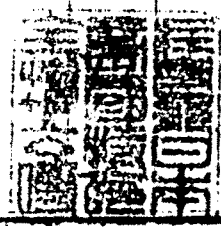
紙添附

五二〇

大正七年十二月二十六日

在支那

特命全權公使小幡西



外務大臣子爵内田康哉殿

上海「ガゼット」排日鼓吹ニ関シ英國公使、

申入ノ件

本件ニ関シ有吉總領事發芳澤代理公使宛電報
第二七三號ノ次第有之候ニ付十二月廿日別紙公文
寫ノ通英國公使ニ申入置候條右様御兼知
相成度此段申進候也

第門

00129

本信寫送付先
在上海有吉總
領事

December 24, 1918.

Monsieur le Ministre,

I have the honour to inform Your Excellency that I have received a telegram from the Japanese Consul-General at Shanghai of which the substance is as follows : -

" On November 26 the 'Shanghai Gazette' posted at many
" places in Hongkew district placards with a highly anti-Japanese
" sentence, and the paper of the next day published an article to
" the same effect. Thereupon the Municipal Police authorities
" have decided to bring an action to the British Court against
" Mr. Lee, Editor of the 'Shanghai Gazette', who is a British
" subject. Such cases as this being in the jurisdiction of the
" Supreme Court during the war, the Crown Advocate has asked the
" the British Minister for instructions, but I understand that
" His Excellency wishes to be approached by you in the matter.
" Please communicate with him at your earliest convenience. The
" court is to be opened on or about December 27, and it is most
" desirable that the British Minister's instruction will be in
" telegram."

In communicating the above to you, I beg to request Your Excellency to be so good as to consider the matter, and to issue necessary instructions, if agreeable to you, to the Crown Advocate at Shanghai as desired by Mr. Ariyoshi.

I avail myself of this opportunity to renew to Your Excellency, Monsieur le Ministre, the assurances of my highest consideration.

(Signed) U. Obata.

His Excellency

Sir John Jordan,

British Minister,

etc., etc., etc.

附屬書類添付

大正八年一月九日 接

主政務局

第一課

別紙添附

公第 三 號

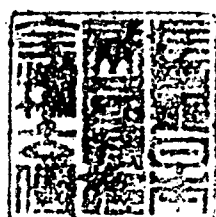
大正八年一月四日

在 支 那

特命全權公使

小 幡

西 吉



外務大臣子爵 内 田 康 哉 殿

大正八年一月四日附内田外務大臣宛公第

在上海有吉総領事

二

號信寫送付

上海ガゼットノ排日鼓吹問題ニ關シ

英國公使ヨリ回報ノ件

館使公本日那支在 受00884號

寫

公第 二 號

大正八年一月四日

在 支 那

特命全權公使 小 幡 西 吉

在 上 海

總 領 事 有 吉 明 殿

上海ガゼットノ排日鼓吹問題ニ關シ

英國公使ヨリ回報ノ件

本件ニ關シ電第二號ヲ以テ申進置候處右英國公使來翰ハ別紙寫ノ通
ニ有之候ニ付右茲ニ及御送付候間御査閱相成度此段申進候也

本信寫送付先 外務大臣

British Legation.

December 30th, 1918.

Monsieur le Ministre,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Excellency's Note of December 24th informing me of your desire that an action be brought against Mr. Lee, Editor of the "Shanghai Gazette" and a British subject, for certain placards posted in the Hankow district on November 26th and for an article published by the paper on the following day.

Mr. Lee being apparently a British subject, the charge against him must be heard before His Majesty's Supreme Court for China. Acting therefore upon the request contained in the penultimate paragraph of Your Excellency's Note, I telegraphed on December 26th to the Crown Advocate authorising him to take up the case against Mr. Lee, should he consider that there were good prima facie grounds for a prosecution.

I avail &c.

Signed: J. N. Jordan.

His Excellency,

Monsieur Y. Obata.

&c. &c. &c.

添附

大正八年一月六日 接受

警務局

第一課

00205

大正七年十二月二十七日

在上海

總領事 有吉

明

外務大臣子爵内田康哉殿

「ミラズ・レビュー」排日論文送付件

當地週刊英文雜誌「ミラズ・レビュー」ハ其態度親支排日的ナル事ハ兼テ當館ノ報告ニ依リ己ニ御承知通りニ有之候處本月二十一日ノ同誌ニ於テハ在支英米人ノ日本ニ対スル態度レテフ題目ノ下ニ在支英米人ノ日本ニ対シ抱ケル悪感ヲ述ヘ就中一英國人ハ支那ニ於テ日本人ト協力ス事

ルヘカラザル旨ヲ論難セル匿名投書ヲ掲ゲ次デ同誌ハ其ハ
杜説ニ於テ右論文ニ雷同シ盛ニ日本ノ對支政策ヲ攻擊シ
論中屢ニ荒唐無稽ノ言ヲ弄シタル次第有之而シテ右論
ハ前者ハ英人ノ投書ニ掲ケタルモノノ如ク而シテ後者ハ右筆
代理米人ハバウエルノ筆ニナリタルモノト存セラレ候右為御參考
別冊添付及送付候條御査閲相煩度此段申進候故同ハ
本公信發送先在北京公使館宛

大正八年三月七日

駐政務局

第1課

(次長内文)

一月六日

三月六日

電報

三月五日午後五時五十分着
三月六日午後十時五十分着

次長

宛

在野

東

少

將

支極秘九六

近來日々当地ニ到着スル内地通信ニ有藤中將カ何

等カ我外交圈外ニアリテ行動スルカ如キ冒ヲ置キ政府

ハ至急

同中將ヲ召還スルコトニ決セル意ヲ

記載シ其都度在支日支及外字新報ニ掲載

セルカ右ハ内地抄紙ニ軍閥跋扈等ノ偏見ヲ

有スル記事掲載サルヤ其都度東方共同通信者等カ

之ヲ轉電セルモノナランモ如ノ如キ記事ハ軍人ハ

名譽ヲ毀損スルミナラス偶々政府内部カ統一ヲ

飲んか如ク内外人ニ誤解ヲ與フルコト甚シク
是レ等ノ記事ハ斷シテ國家ノ利益ニアラム政ニ
支那ヨリ内地ニ向テスル電報ヲ甚簡ニテ檢閲シテ
ルカ如ク内地ヨリ支那ニ向テスル電報モ檢閲スル手
段ヲ講ヤランコト必要ナリト信ス



第08662號

大正八年三月廿七日

管正務



大

高知第四五〇號

大正八年三月二十七日

愛媛縣知事 若林 實



外務大臣子爵内田康哉殿

申通報先内相外相各廳府縣市官

國民義會配付外交問責ニ関スル印刷物件

首題ニ付本月十四日付高知第四五〇號ヲ以テ

京都(貴)府ヨリ通報ニ接シ内領スルニ管下松山市

ニ於テ發行ノ愛媛海南伊豫日々ノ各新聞社ハ

京都(貴)府通報ト同一印刷物ヲ郵送シ來

愛媛新報社ニ於テハ本月十四十五ノ兩日ニ涉リ之

ヲ掲載シタル事實凡そ其他ノ各新聞社ニ於テハ

更ニ顧ミ知ナク其ノ依放置ニ居ル模様ナリ
右乃申(通)報云也

(先)



授受04996號

大正八年四月卅日 接受

管正務局

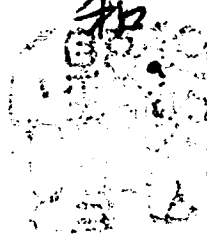
第二課

警秘第一二六三號

外交問責ニ関スル印刷物配布件

大正八年四月二十八日

和歌山縣知事 池松時和



内務大臣 床次竹二郎殿

外務大臣子爵内田康哉殿

京都府知事馬淵鏡太郎殿

客月十四日附高秘第二一五號ヲ以テ京都府ヲ通報ニ係ル
外交問責ニ関スル印刷物ハ當管下ニ配布ニ来リ先形跡無
之候條以故及申通一候也

電信課長

大臣

次官

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官



要復書

濟

五(略)

上海復大正五年五月廿六日
本省著
內田外務大臣 有吉總領事

第二〇號

四月廿九日平民鐘(原名時福音)
題暗殺暴動富豪、私有財產取消
等、唱極端、過激思想、鼓吹、小
冊子、革命歌、樂、入、帶封及表紙
、上、八、日本俱樂部、云、印、押、當
地、事、立、夕、元、吾、商、社、銀、行、新、聞、社、云、字、印
社、長、陸、公、子、云、印

日本郵便に依り配布セルモノアルヲ概知
シ直ニ郵便局ト打合ハセテ配達ノ手
数部ヲ押收ヤリ。右冊子中ニ現ハレタ
思想ハ概シテ、思想、露華命家
ルモノ、内ニ吾ガ同胞ハ、西亜ニ於テ
研究シツクアルニ非ンカ等、文句アリ、右
ノ出所引續キ調査中ナルモノ、右ハ今
迄果然ハ支那内地宛投送セラレタ
ル形跡ナク、單ニ当地ノ有ル日本
商社等ニ宛タルニ止マリ、其宛名モ

種々ノ内装等且ハ印刷模標等ヨ
リ察シテ或ハ他ヨリ持参セラレ日本人
以外ニ関係者アルモノト察セラル。
尚當館押収ノ外ニモニ配達セラ
レタルモノハ僅々十部内外ニ過ギサ
ル可レトノストナリ。右冊子ハ郵送ス。
北京へ電報セリ。

電信課長

大臣

次官

七b

第三一六号

内田外務大臣

有吉総領事

七三〇暗

上海英大正六年五月六日在二〇
本署着 全 七日前三〇五

往電第二一〇号ニ関シ

同小冊子ハ二三年前当地民政社ナル主トシテ

革命主義ノ秘密出版ヲ為シ居タル所ニテ刊行

セル漢訳ノモノヲ翻訳セルモノニシテ曩ニ京

都ニテ搜捕セラレタル山鹿某ノ出版物ト同一

ニアラズヤト察セラルル委細郵便

在支公使へ轉電セリ

第2門

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

參政官

要復書

濟

內務大臣
呈送
下

（二）

號05302授



政機密公第四七號

大正八年五月一日

在上海

總領事有吉明

外務大臣子爵內田康哉

過激派思想鼓吹、印刷物、圖之件

往電第二一。號並機密公第四五號、以

報告申進置候極端之過激思想鼓吹、

印刷物平民、鐘及革命歌、圖、當地、於

上海經濟時報及上海經濟日報、發

行致后、深所、作、次、事、並、本、如、秋、特、別、

大正八年五月八日 第一

主政務局

第二課

附屬未著

要視察人ニモ有之且ツ其印刷所ニ類小冊
子使用ノ字形較似寄リタル活字ヲ有ス
ルヤ推セラル一應同人私宅及印刷所ヲ精密
搜索セシメ候得共何等手掛リトナルモノヲ
發見セズ然ルニ同人宅書棚内ニ無政府主
義ノ小冊子數部排列シアリ内ニ漢文平
民ノ鐘アルヲ見出し同人ニ訪問及ヒタル處
右ハ兩三年前當地民聲社ヲ入手セシ
モノニテ同社ハ支那人師復ナルモノニ經營ニ係
リ無政府主義ノ書籍類ノミヲ刊行シ居
タル處一兩年前同人北去ト共ニ同社モ解
散スルニ至レル趣又今回京都ニ於テ檢舉
セラルルニ山鹿泰治モ曾ラ當地ニ在リテ右師

復ト同宿致居タルコトモアリシヤ：テ今次ノ擧
擧モ多分右冊子ノ翻譯：基因セルモノナルヘ
シト察スル旨申居而シテ右數部ノ印刷物
中民聲社記事錄ナルモノアリ 千九百十七
年四月一日ノ出版：係ルモノニテ内其八頁：日本
無政府黨ノ近況ト題シ日本吾黨同志山
鹿素治ノ書翰：依シバ同人ノ近來個人
能力ヲ以テ吾主義ヲ各方面ニ傳播シ其狀
况大ニ發展現：既ニ平民ノ鐘ヲ日本文ニ譯
出シ不日將ニ刊行セリトストリ一節有之旁々
惟：今回當館ニ於テ押収セル邦文平民ノ
鐘ハ前記山鹿力本邦ニ於テ翻譯刊行
セルモノニテ其同類ノ邦人若クハ支那人カ當地

：携帶、上配付、試ミタルモノナルベシトモ被
推候、今回右深所宅搜索、際押收セン印刷
物左ノ通り以別便及違違候同所査収相
成度候

一 平民ノ鐘

一 無政府淺説

一 無政府主義

一 破神執論

一 軍人ノ寶笈

一 總同盟罷工

一 伏虎集

一 實社自由録

一 世界風雲

一 民聲社記事録

一 民聲叢刻第一集

以上

將又深町申立、依_レ今春某支那人ヨリ同冊
子ノ翻譯カ不日日本ニテ印刷配付セラルヘキ
旨聞及_レベン_レアリ且_レ革命歌ナルモノモ略ホ同
様ノモノ數年前ニ既存センニ付今次「ロシヤノ
同胞」云々ノ文句ヲ新_レ：押入セルニ止マレンモノト
考_レツル趣：有之右深町ノ前述ノ如ク經濟日
報等ヲ經營シ同誌等ニ主トシテ取引所
ノ機關ヲ最近大ニ行動ヲ慎ミ妻ヲモ迎ヘ
家庭ヲ有シ自_レ過去ニ於テ無責任ヤン言動
ヲ敢テセルヲ悔悟セリト稱シ寧_レ口真面目ノ生

活ラ營ミ居ルカ如ク尚引續キ注意中ナ
ルモ唯今迄ノ所今回冊子、印刷乃至配布
若クハ其他無政府主義者ト連絡アル等ノ
實証モ無之ニ付其中立ニ若干信ヲ措クニ
足ルベシト被認係就テハ今後搜索上ニ必要
モ有之ニ付本件冊子ヲ曩、京都ニ於テ山
鹿事件ト同一ノモノニ屬スルヤ否其旨助ニ付至
急而確ノ上何方、而回報相成候様致度
此段報告旁及上庸清候敬具

附屬書類添付

癸卯年五月八日

主政務

第三課

機密分第四五號

大正八年四月三十日

專

在上海

總領事有吉明

受05300號

外務大臣子爵内田康哉

政務局第二課

過激派思想ノ鼓吹ニ印刷物

平民ノ鐘及革命歌ニ関スル件

極端ナル過激派思想ヲ鼓吹スル小冊子「平民ノ鐘」

(原名時ノ福音)及革命歌ニ関シ今三十日往電

第二一〇號ヲ以テ及報告置候處右各二部

茲ニ同封及送達候間市查收相成度尚當

第門

印刷物一冊

方、於テハ印刷物ノ押收ヲ始メ印刷個所突
留メ等、圖シ夫々必要ノ手段ヲ講ジ置キ
付更ニ後報可致候
右報告申進候敬具

文書課長



大正八年五月十日

發

60

大正八年

五月

九日起草

別紙

同

年

五月十日

附

大正八年五月拾日發送濟

機密

政

機密送第六九號

主任

專

政務局長

政務局第一課



內

敬啟者

保

局

長

光

政

務

局

長

第門

要再回

印刷物、平民、鐘及革命歌轉

送件

印刷物上海
 民鐘及革命歌
 社銀行供
 等日本郵
 便之配布
 之日地

極端之過激派思想ヲ鼓吹ス小冊子、平
 民、鐘、及、革命歌、
 送東京上海有光

總領事ヨリ送付越シハ付右御参考迄

茲、各一部及轉送ハ同御查收相成度

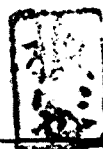
尚同總領事ニ於テ印刷物押收其ハ他印

印刷所突角、方等関シ夫々必要ハ御

講ニ置キハ振ハ間後報ニ接シハ部

東可通此後中送也
 (印刷物一部充テ付)

調査の結果、故に右の冊子、
兩三年前、山梅民政社に其主、
に革命主義、我、私に出版する、
に、故に、所、に、刊、行、を、漢、譯、ノ、モ、
に、翻、譯、を、ん、モ、に、表、に、京、都、に、
搜、捕、を、ん、山、鹿、其、の、出、版、物、ト、
同、に、を、ん、ヤ、ト、受、取、を、ん、ト、起、し、有、之、
方、牛、乳、中、に、進、む、也、



大正八年五月十二日接受

86

大正八年五月十二日

政務局

政務局

別紙

大正八年五月十二日

大正八年五月拾貳日發送濟

床以内務大臣殿

政機密送第七號

内田外務大臣

追散惟果想教の印刷部

関之件

本件は関の別紙の場、由る上海有

吉原の事より報告し存する間

呈貴國頭由別我事役
 関后也、時、事連、面報
 海、下、係、至、急、事、調
 査、上、何、因、主、成、子、様、海、分
 牛、取、由、逢、去、也

右、吉井、信、松、密、公、方、里、七、号、及
 冊、子、十、部、添、附、す

要分

第 5886 号

大正八年五月廿日

主務局

第二課

警察部第二六一號

大正八年五月十九日

川村内務省警保局長

埴原外務省政務局長殿

上海の鐘一七五
 過激派思想鼓吹印刷物禁断件
 於テ其見係心出反物平民
 貴省大臣ヨリ本省
 照會ノ次第ニ依リ
 大正八年五月十九日
 山鹿泰治、新為、中、保、人
 法、吏、及、ト、シ、テ、審、理、中、ニ、係、ル、

事件、秘密に爲り、サレザカリズルハ
其、新政府におもひせられ、調中
其、候條より、今あるまで

文書課長

大正八年五月廿四日接受



大正 年

月

日起草

分組

要目付了

八年

五月

廿四

日附

大正八年五月廿四日發送濟

立



機密送第二〇號

主任

第一課小

主管

政務局長

上海

有吉德領事

白田大目

遇激液思想鼓吹、印刷

物ニ関スル件

本件：關之五月一日附機密牙
思乎貴信所中裁、趣內務省
一及照會、盡其處、無所氏安
通因報有之、其間仔細、右、
御承、故本、故以候中、途、其也

（左、右、五月十九日附、原、原、原、
牙、二、二、一、一、原、附、一、）

大正八年七月

受 8119 號

警保署第三二號

大正八年七月四日

川内務省警保局長



垣原外務省政務局長 殿

通信取締に關する件轉送

本件、實に別紙寫、通信次官ヨリ回覽有之候
要右、五月十日政機密送第六九號ヲ以テ御
送附、係ル「平民の鐘」並、革命歌ニモ本件ト
同標上海郵便局、於テ差押（同地帝國總領事
引渡サレタム）九箇、内ト察セシ
山鹿恭悌ニシテ其、當時ノ狀況及取調、結果

へ左記ノ通、有之候爲本人ノ秘密出版物「サンヂ
 カリスム」及「パン」略取、出版法違反トシテ審月十三
 日京都地方裁判所、於テ禁錮二年、處セラル。因
 下控訴申立中ニ付、右^爲御参考申進候爲頒布
 者、就テ上海郵便局ニ於テモ嚴探中ノ申、有
 之候。共御協力、上御内偵御配慮煩度。
 一「平民・鐘」大正六年春頃上海民聲社支那人
 師復ヨリ送附シ来リタル漢譯「平民之鐘」及
 同年秋頃米國人「ホルト」ヨリ郵送ヲ受ケタル「上
 スペラント」語譯聖書「マタイヤ」傳ト書ニ因リ
 山鹿力著述シタルモノニシテ「革命歌」本年二月
 出版シタル「サンヂカリスム」卷末、掲載セル革命
 歌ト同一内容ノモノニシテ何レモ自完ニ於テ密ニ五百

部ヲ印刷ニ同志ニ頒布シタル趣ニテ目下其ノ頒布
先取調中ナルカ本件ハ公訴時効經過ノ爲メ京
都地方裁判所複事局ニ於テ起訴セサル由ク
有之也

追テ別冊添用済ノ節ハ直接逋信省ハ
御返戻相成度

親
版



外第ニ九九八號

大正八年六月十九日

逓信次官

内務次官殿

外務次官殿

通信取締ニ関スル件

今般上海郵便局ニ於テ發見シタル別箇郵便物「平民」鐘ト題スル
小冊子竝ニ革命歌ト題スル小歌譜各一部ヲ包容ニ右内容ニ無改
府主義若ニ過激思想ヲ唱道スルモノト被認候ニ付御參考迄ニ
供回覽候條用濟次第御返戻相成度候也

追テ本件郵便物同一内容ノモノ各一箇在上海日支新聞社並邦
人經營ノ著名ナル會社銀行等十箇所ニ宛テ差出シタルヲ
發見シ全部之ヲ差押ヘ其ノ内九箇ニ同地帝國總領事館

ニ引渡シ目下差出人嚴探中ナルヲ不取敢殘一通ヲ當省ニ
送付越々次第ニ有之此ノ種ノ郵便物ニ對シテ上海局ニ於
テハ引續嚴重監視中ニ候知内地ノ關係郵便局ニ於テモ
之ヲ輸入等ニ對シ充分監視スル様通達致置候條併テ申
添候



文書課長

申

大正八年七月

五十九日

別紙

大正八年七月十九日

主任

多

取送第九門

主管 稅務局長 桂

幣原次官

秦遜次官

西村次官

本件關於八月十九日附外牙三九九

字內稅收官連署在內附抄本

83

長 官

平氏鐘一歌
天子在堂
歌下歌
天子在堂
天子在堂

大正七年四月附錄
牙三三丁附錄書七件

次

官 6056 第 6056 號



大正八年五月廿三日接覽

警務局 第三課

大正八年五月三十日

大正八年五月三十日

兵庫縣知事 有吉忠一

外務大臣子爵内田康哉殿

外字新聞發行人判決事件

客月八日付兵發社第六六三號ヲ以テ及報
告置候元カクヘルト新聞發行人兼編輯
人トシツウイルスニ對シ新聞紙法違反事件
ハ今回大審院ニ於テ新聞紙法第四拾一條
依リ發行人兼編輯人トシ各別ニ罰金百五

拾圖ニ處セラル候此段及報告候也

To Kennedy.

16

Have you any suggestion to
make to meet the situation created
by the following extraordinary
telegram which your Tokio Office
received April 5 from Reuters Peking.

第二
一
一

"Please don't telegraph Chinese
news whereon Tokio's views generally
inspired. usually incorrect."

Shidchara.

電信課長

大臣

次官

十

政務

通商

人事

會計

要文書

參政官

副參政官



要複書

濟

五六
暗

本署覆大正八年四月十七日
前二二。

内田外務大臣 松井大使

講才五八号

貴電第二四〇号之旨

幣原次友へ尤之通りリケネデシヨリ。

東京國際社ニ対シ直接

Ignore Wearne's instructions Fifth
cable (7-103) direct London duplicat
ing Shanghai 一電報又倫敦路透

本社 Managing director Sir Roderic
Jones 宛在東京通信員ノ態度ハ
迄来甚ダレク不穩当ナリレガ、本件ハ
特ニ其甚ダレキモノナリ。此善後處
分ニ付テハ全然查察ニ委スモ、東京
ニ前頭電信ヲ發送セリトノ趣旨
ノ書面ヲ送レリ。

電信課長

大臣

次官

七六

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

要複書

濟

十四時

巴里發大正六年四月廿四日
本署著

内田外務大臣

松井大使

請才六三七号

幣原次友一。

紐育ヨリ。

Tokio cables, elements

Pottemers cables, Kobu-ai service from

Shanghai stopped. We are negotiating with the Communications Department.

ナル平報接中レタル趣ヲ以テ、今

あるよう。

テ、ヨリ其職業上重大ノ問題ナルニ
付事情承知致シ度旨申出タリ。何分
ノ御回答ヲ請フ。

同信部

法

十

第

十

五

分發

土肥、并
望見

立支
十情公使

五
六
八

内田大兄

本	電	第	五	三	號	時
六	送	七	五	三	號	時
日	大	八	年	四	月	廿
繼	正	八	年	四	月	廿
						分發

第
門

以月五日才地路透通信員 Weavne

多東京路透社二 Please dont telegraph

Chinese news whereon Tokio news generally

inquired, usually incorrect. 卜電報に來

リタに類を付 幣を改言する 〇ケネデー

之ヲ

電報し事係善後、要するに因に日人、意

見え、市力乏、要、同人より東京、不降社に

阿部

宛、Weavne、電報、南、又、直接倫敦、

〇社、廣、係、

本社及上海、本件通信、支、可、本、告、電

報、シ、同、時、二、傳、取、本、社、三、對、し、北、京、通、信

員、ノ、態、度、不、穩、當、た、リ、非、難、し、此、善、後、

東京本社、意：香久の事も不致取有直
東京三電報（久）吉吉面り致し久致返
電了了（久）事書上
右上げ、新入るる

No. 3

KOKUSAI CABLE

(Received Message Form)

Class		Original		Received		Address	
Office		Peking		Time: 7:30 PM		Date: 5/14	
No. 1509		Words 15		By 2400		Remarks	
Date 5/14		Time 10.50				Tokusai	
TOKIO							
<p>Please don't telegraph Chinese heads elsewhere to be as usual generally</p> <p>impaired usually incorrect</p> <p>Center</p>							

新中陸軍部

秘

内田外務大臣

車末
平井大使

在在少陽公使

第三七號

第門

要複書

濟

五月二十八日米國公使と面會し際同公使
ハ自分ノ云フ通り下ニ全刊セラル居ル
新聞紙ニ日本ニ對スル誤報掲載セラル
レタル場合ニハ其ノ都度豫メ報ヲ得ハ
日本公使館ヨリノ申越シニ依ルトセズ單
ニ自分側ノ計ヒトシテ訂正方如何様ニ取
濟シヒ差支無シト述ヘタル付（同公使ハ

電送第5003 號
昭和8年5月30日 午後4時

先頃モ同様ノコトヲ述ヘタルコトアリ
未使ハ其好意ヲ謝シ乍然米國關係
ノ新聞ニ日本反對ノ記事ノ現ハレ居
ルコトハ牧野ニ連ナク之ヲ一々指摘シテ
訂正ヲ求ムルカ如キハ殆ト日モ亦是ナリ
ルヘク又訂正ヲ出スモ更ニ之ニ批評ヲ加
フルモノアレハ尚モ之ニ反駁ノ必要ヲ生シ
到底其ノ煩ニ堪ヘサルヘシ要スルニ各新
聞經營者乃至執筆者ノ感情ヲ
止ヨリ直シテカ、ラサレハ何ニモナラヤ

ルヘシト答へタル処米國公使ハ平海發閣

社説所載濟南日報記事ニ

日本新聞之反米的記事ノ中
々多キニトヲ述ヘ相互之等無用ノ
暴言ハ之ヲ取締ル様注意シタク在英
米國人中ニハ從來ニ於ケル日本ノ施設
ニ對シ兎角ノ不滿ヲ抱ケルモノハ之アルヤ
計リ難キモ米國ハ元來支那ニ對シ
何等政治上ノ關係アルコトヲ不自分ノ

如キ日本、對支政策乃至措置に對
シ、毫毛異議ヲ有スルモノニアラスト附
言セリ、御未考也

片瀧清南、暗子、儘動也

大五

陳元
少儒公使

高田
高田

牙七四。号
身七九。号
少
右末五公使、

神出ハ戒ハ社實牙六七七号本大以陳
及郷音
米、供果カト毛存セラル、以定王申米各

公使
以使
別ん中出アリクハ一平ナルニ付中貴

奉天中繼	電送大正	第五〇七号	時
		八年六月二日	前六時分發

本田大也

快書

並

其他必要上認メテ、地方ノ

旦往電六十七號本大以聲收中轉電十千令方同標

力同標
告欲

轉手

1360

10

10

10

スル誤報等ノ傳ヘラレタルトキハ同公使ノ好意
ニ訴フルコトアンヘキ旨挨拶ニ置カレ度尚
今後著シキ實例アリタルトキハ米國公使
ニ之ヲ指摘ニ試ミニ同公使申出ノ如キ措
置ヲ依頼セラレ模様電報アリタシ
本署よりトシテ前記の如クニ御答アリタシ



石井

大正六年五月二十八日
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ

内田外務大臣

第七九〇号

五月二十八日米國公使ニ面會ノ際同公使

ハ自分「コントナール」下ニ發刊セラレタリ

新聞紙ニ日本ニ對スル誤報掲載スル

レタル場合ニハ其ノ都度豫メ報ヲ得ハ

日本公使館ヨリノ申越シニ依ルニハ

ニ自介信ノ計ヒトシテ訂正ヲ留標ニ取

計ヒ差支無シト述ヘタルニ付（同公使

ハ自介信ノ計ヒトシテ訂正ヲ留標ニ取

小幡公使

大正六年五月二十八日
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ
日本公使館ヨリノ申越
シニ依ルニハ

先頃モ同様ノコトヲ述ヘタルコトアリ
 本使ハ真好意ヲ謝シ乍然米國關係
 ノ新聞ニ日本反對ノ記事ノ現ハレ居
 ルコトハ牧拳ニ違ナク之ヲ一々指摘シテ
 訂正ヲ求ムルカ如シハ殆ト曰ヒ亦足ラサ
 ルヘク又訂正ヲ出スモ更ニ之ニ批評ヲ加
 フルモノアレハ尚モ之ニ反駁ノ必要ヲ生シ
 到底其ノ煩ニ堪ヘサルヘシ要スルニ各新
 聞經營者乃至執筆者ノ「減精」
 トヨリ直シテカ、ラサレハ何ニモナラサ

ルヘシト答ヘタル処米國公使ハ上海發閣
下宛電報^三四九号ハリスチャイナデリーリ、
ニリス社說所載濟南日報ノ記事ニ
言及シ日本新聞ニ反米的記事ノ中
々多キコトヲ述ヘ相互ニ之等無用ノ
暴言ハ之ヲ取締ル様注意シタク在支
米國人中ニハ從來ニ於ケル日本ノ施設
ニ對シ兎角ノ不滿ヲ抱ケルモノハ之アルヤ
計リ難キモ米國ハ元來支那ニ對シ
何等政治上ノ關係アルニアラス自分ノ

如キ日本ノ對支政策乃至措置ニ對
シ毫々異議ヲ有スルモノニアラスト附
言セリ、御參考迄
上海清南ハ暗号ノ儘郵送セリ

(五月二十九日後
奉天聖典)

大臣

次官

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

內閣外務大臣 小幡公使

第八節

貴電第七四〇號
關之
宋國公使

申公黃方之於八金然好矣

解也。凡此ノ如クナル處同。

公使團頃ノ選任ニ事
往電第七九日

錦申出ハ必ズ先方ヨリ何等力ノ問題

7
 提
 起
 スルノ
 前
 提
 タルニ
 外
 ナラズ
 其ノ中

新刊

出ハ實ハ甚ダ疑ハレト思考シテ亦便
ニ於テモ右社電報ヲ裁ノ如キ逆差ヲ為
之置キタル次第ナル處果セル哉濟
南日報問題ニ関シ同公使ハ當時ノ
余談ニ飽足ラズ同日書面ヲ以テ同紙
ニ訂正文掲載及將來ニ對スル戒飭
方ヲ求メ來リ次デ六月三日更ニ右論
説ニ關スル物儀ニ鑑ミ同日報社處前
方ヲ求メ來リ次デ第六号ルガ發社後(濟
南)ヨリ郵致スニ對シテハ相當處分

必要アリト認ムルモ米國公使來章
ハ夫々郵報ノ上ニ御診儀ヲ請ヒ置キ
タルニ付委細右ニテ御了急相成何
分ノ御回訓ヲ煩ヒ度ニ尚右等ノ問
題アル點際資電御來示ノ如ク閣下
ノ謝意ヲ同公使ニ致スハ聊カ如何力
ト存スルニ付右ハ暫ク差控置クスト
致不可ニ在米國側新聞紙等ノ記
事等著キ實例ヲ米公使ニ指摘
スルコトハ適宜之ヲ爲ス可ク申異通信

中著ニキモノ云付テハ既ニ右様取計
濟ナルモノアリ 帝來示ノ各領事ハノ
訓令ハ前記ノ次第ニ鑑ミ別電第八
一七號ノ通取計置キタリ

（大正八年六月五日 后云三〇）
奉天經由

電信課長

印

大臣

次官

古

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

九〇八
(旧音)

Handwritten notes and signatures in Japanese, including names like 方前, 通商, 人事, 會計, 文書, 參政官, 副參政官, and various dates and times.

外務省

秘受 6869號

大正八年六月九日 接獲

機密第 二四。號

大正八年六月四日

在支那

特命全權公使小幡西



外務大臣子爵内田康哉殿

濟南日報、排米論說ニ関スル米國公使、
來翰並中美通信排日記事ニ関スル同
公使宛申入、件

五月二十八日本使米國公使ニ面會、際先方ヨリ濟南
日報論說ニ言及シタル次第、大要ハ往電第七九
〇號ヲ以テ及報告置候處同日同公使ヨリ別

手

別紙添付

紙甲號寫ノ通申越候ニ付一方在濟南領事
ニ對シ別紙乙號寫ノ通申送ルト同時ニ他面
米國公使ニ對シテハ別紙丙號新聞切抜所
載中美通信記事ヲ添ヘ別紙丁號寫ノ
通申送置候間委細各別紙御査閱ノ上
御承悉相成度此段申進候也

追テ本件濟南日報切抜ハ在濟南領事ヨ
リ進達可及候也

機密第三號

大正八年六月四日

在支那

特命全權公使小幡酉吉

在濟南

領事代理山田友一郎殿

濟南日報ノ排米論説ニ関スル件

五月二十八日本使米國公使ニ面會ノ際先方ヨリ本件論説ニ
言及シタル次第ハ貴官、及郵送タル大臣宛往電第セ九。弗
ニテ御承知ノ通ニ有之候處同日同公使ヨリ別紙寫ノ
通申越候ニ付右茲ニ及御送付候間御査閱相
成度米國公使指摘ノ五月十七日濟南日報ノ論今日

之威總統ト題スル論説ハ徒ニ攻撃ヲ事トスルノ弊ノ免
レス本局上何等我ニ利スル所ナキ様ニ存就中友好國元首ニ
對スル論議ハ特ニ慎重注意ノ必要有之候ニ付同日報
社ニ對シ特ニ右米國公使ノ申出ニハ言及セスレテ嚴重戒
飭ヲ加ヘ右論説ニ對シ可然訂正文掲載方ヲ命セラレ
尚今後言議過渡ニ宜ラサル様御示達相成候様
致度此段申進候也。

追テ談論説抑拔貴方ヨリ大臣ノ参考ノ為御
郵送置相成度候也

本信寫送付先 内用外務大臣

PEKING,

May 28th, 1919.

My dear Colleague:

I have just been informed that on May 17th the Tsinan Jih Pao, a paper supposed to be owned by Japanese, published a scurrilous attack on the President of the United States, in which many libelous expressions were used. I hope that you will see your way to have this paper make some amends in future issued for the insulting language used and that it may be induced to refrain entirely from such personal attacks on the head of a friendly state.

With the highest regard, I remain,

Faithfully yours,

(S'd) Paul S. Reinsch,

His Excellency

Y. Obata,

Imperial Japanese Minister,

Peking.

青島問題之危急

國人速起爭之

中美通信社消息云政府接到巴黎議和專使來電謂我國在和會之情形極惡日人以縱橫閩閩之術旁攻側擊致青島

問題我國將歸失敗非惟不能直接交還亦且不受五大強國共同管理聽

中日兩國自行解決和會難以堅執公理以爲裁判據此惡耗傳來不啻青島之一

絕命書也然青島命運即吾國存亡問題吾國人當死生以之必不

已時亦當背城借一萬不可束手待斃一聽人魚肉也此中利害一般國民或尙有

未明不得不略爲述之蓋日人承襲德國之權利除青島外山東路礦悉在掌

握故青島問題即山東問題而山東爲京都咽喉據南北中樞日人侵入

我遼東據建瓴之勢我北京已岌岌可危今山東復爲所有則北京蓋在日人包圍

形勢中且燕趙地瘠財賦仰給東南日人

更得以山東而斷我南北之運繫則青島一去而山東不保山東不保北京亦不可保也然前代外患多在北方受其壓迫猶得偏安南渡今則局勢又一變矣倘中日以兵戎相見日人除以主力經由遼東

山東兩路攻入破我首都而外倚可由山東分略長江以協助其攻我

蘇皖及長江腹地之海軍再以一支勁旅海陸相輔由閩粵以牽制我南方援應

之師苟勢已至此雖求偏安亦不可得然則青島問題實我國存亡所繫

今日人既迫我於死地我國民豈甘朝

鮮之續其速起而爭之

they do into the same category, I believe that the undue apprehension on the part of the Chinese, to which you referred in the course of our conversation the other day, is enhanced to no small extent by such disquieting article. I am simply confident that I may permit myself to rely upon your judgment and influence in hoping that you will take necessary steps to cause the News Agency in question to refrain, for the sake of general order and tranquillity in China, from circulating such harmful articles.

With best regards,

Yours sincerely,

(Signed) Y. Obata.

June 3, 1919.

My dear Colleague,

With reference to your letter dated May 28 regarding an article in the Tsinan Jih Pao of the 17th ultimo, I have caused the Japanese Consul at Tsinan to communicate the contents of your request to the editor of the paper, and to give him due advice on the subject.

In communicating the above to you, I take this opportunity to send you the enclosed cuttings from two vernacular papers of May 2nd. The articles which are substantially the same are, as you will see from one of them, based upon a correspondence of the Sino-American News Agency, which I understand, is an American organization. It is highly instigating in substance as well as in tone, and many other articles ^{which are} constantly emanating from the same organ coming as

they

大正八年六月 十日接

警務局

第二課

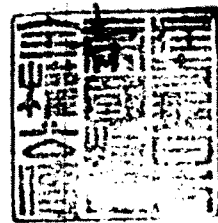
別紙添附

機密第二四四號

大正八年六月五日

在支那

特命全權公使小幡西



外務大臣子爵内田康哉殿

濟南日報排米論說ニ関シ更ニ

米國公使ヨリ申越ノ件

濟南日報排米論說ニ関シ米國公使ト往復ノ次第ハ
六月四日附機密第二四〇號往信ヲ以テ及報告置候
慶米國公使ヨリ更ニ別紙甲第寫ノ通英米法制
ニ於テハ外國元首侮辱ハ特種ノ犯罪ヲ構成スル

趣ヲ以テ日本ニ於テモ右様ノ規定存スルニ於テハ帝國
官憲ニ於テ右ニ基キ濟南日報ヲ處罰スル様取
計出来マシキヤトノ旨申越候ニ付不取敢別紙乙
紙寫ノ適當方ニ於テ取調ヘタル所ニヨレハ帝國法
制ニ於テハ右英米法ニ於ケル如キ一般の規定存在
セズ乍去同公使來示ノ次第ハ帝國政府ノ考慮ニ
附シ置キタル旨回答致置候

濟南日報ノ該論說ハ前記往信追書ノ通在濟
南領事ヨリ可及送付候間右ニ依リ仰了知
相成度候處元來右ハ何等具體的事件ニ
關係ナク漫然米國大統領ニ對シ惡罵ヲ加ヘ
タルモノニシテ同日報社ヲシテ今後ヲ慎マシムル
ハ勿論右論說自体ニ對シテモ何等カノ制裁ヲ

加、置クト大司上可然カト思料被致候ニ付右至
急御考慮ノ上在濟南領事一御電訓相成候
様致度尙濟南日報ヲ排外自ラ喜フ底ノ放縱ナ
ル中西一派ノ手ニ委シ置クハ頗ル心許ナク被感候ニ
付テハ同地新任總領事ニ對シテハ十分旨ヲ含メ
ラレ其監督ノ手ヲ緩メス指導スル様御内訓置
相成候様希望致候此段報告旁及稟請候也
追テ乍序共同通信社貴地發來電中ニハ時ニ隨
分排英排米ノ口調ヲ帶ナルモノ不少ト被認候ニ付其
邊今サシク自省セシナル途アラハ好都合ト存候
本信寫送付先在濟南山田領事代理

June 5, 1919.

My dear Colleague,

With reference to your letter of June 3rd regarding the article in the "Tsinan Jih Pao", which I presume crossed my letter on the subject of the same date, there is in the Japanese law, so far as I can ascertain here, no such general provision with particular regard to heads of foreign Governments as you point out as existing under American and English law. The personal abuse of the head of a foreign Government is punishable by indictment, only in the case that head of the Government is actually staying in Japan. I am however referring the contents of your letter to my Government for their consideration, and I shall not fail to communicate to you their reply as soon as it reaches me.

With best regards,

Yours sincerely,

(Signed) Y. Obata.



LEGATION OF THE
UNITED STATES OF AMERICA.

Peking,

June 3rd, 1919.

My dear Colleague:

The article in the Tsinan "Jih Pao" of May 17th about which I have already written to you has aroused very unfavorable comment. The direct libelous attack on the President of the United States is considered by all to go beyond the bounds of even the most violent unfriendly newspaper criticism. Under American and English law the personal abuse of heads of foreign governments is made criminal libel punishable by indictment. I should like to inquire whether your law has the same provision and whether the proper authorities would be inclined to proceed against the paper in this manner.

With the highest regard and best wishes,

I remain,

Faithfully yours,

(Signed) Paul S. Reinsch.

His Excellency

Y. Obata,

Minister for Japan,

Peking.

附屬書類添附

大正八年六月十四日接受

主政務局

第一課

號

大正八年六月七日

在海南

總領事代理山田左一郎

外務大臣寺內閣康成殿

海南日報、係從切按送付、中

在又小幡公使署、係從切按送付、七九年、

在又小幡公使署、係從切按送付、七九年、

在又小幡公使署、係從切按送付、七九年、

論說

論今日之威總統

(有心)

美國大總統威爾遜。假仁假義。大言不慚之流。亞也。藉倡世界永遠和平之名。爲執歐美亞洲牛耳之具。究其提倡諸事。無不爲伸張美國權力者。若海洋自由。所以握太平洋勢力也。人類自決。所以削各強國藩籬也。其他諸端。歷歷可指。自私自利之隱衷。一若司馬昭之心。路人皆見也。宜其今日在歐會席上。言語主張。毫不發生效力乎。當美國甫加入歐戰之初。威

氏之聲望固在也。故一言一動。頗爲世人所注目。彼弱小諸國。竟仰其鼻息。以賴其援助。而威氏亦以霸主自居。遂大言不慚。奢談人道。公理正義。諸大端。以愚當時。且首倡國際同盟。訂立和會條件。儼然有不可一世之概。觀其自居各國以上。若攬世界大權。縱齊桓之爲盟主。晉文所創霸業。亦未有如是之炫赫也。迨和會既開之後。威氏技倆漸露其蹤迹。故有所主張。各代表皆群起反對。有所發言。與議者皆不表贊同。吾知威氏至今日。必深恨其前日之所言。若公理。若人道。若正義。皆無法以收其成也。噫。威氏所創之霸業。不

猶。在。宋。襄。之。下。乎。
今。歐。和。會。議。中。所。列。各。議。案。
大。體。上。已。次。第。議。決。矣。彼。威。
氏。所。主。持。而。能。通。過。於。會。議。
者。尙。有。幾。事。乎。昭。昭。事。實。
有。目。共。覩。乃。威。氏。已。偃。旗。
息。鼓。垂。頭。喪。氣。千。百。萬。言。
不。能。實。踐。其。一。語。而。猶。覩。
顏。人。世。大。施。其。愚。弄。之。手。腕。
以。欺。各。國。隱。行。其。離。間。之。譎。
計。以。濟。私。圖。殊。不。知。聲。望。
既。墜。信。用。亦。失。曩。日。所。謂。
威。氏。者。至。此。而。無。威。矣。嗚。
乎。威。氏。至。今。日。吾。不。知。對。
前。言。作。如。何。之。收。場。耶。又。不。
知。對。和。會。作。如。何。之。表。示。耶。
更。不。知。平。日。仰。望。威。氏。信。賴。
威。氏。者。對。於。威。氏。今。日。之。景。
况。作。如。何。一。種。之。感。想。耶。
噫。嘻。是。可。謂。今。日。之。威。總。統。

次官 告白

癸酉年六月十八日起草

國務局 機密

大五

菊池 多々良

菊池

左支 小幡 公使

内田 大臣

11/13 表

高

高

貴電第八一六号ニ関シ

濟南日報社處罰ニ関シテハ貴官ヨリ

米國公使ハ回答ノ通り我法律上處罰

奉天中繼	電送	第 六 一 〇 號	時 發
大正	年 六 月 九 日	前 一 時	發

ノ道無ク米國公使ノ申出通り取計ヲ下

ヲ得サレモ此ノ權論ニ對シテハ十分監督

ノ要アルニ付濟南ヨリ貴官ヘ轉電スヘキ

本大臣癸山田總領事代理宛往電第

二二号ノ通り戒飭方刻令致置中タレニ

付右ノ趣米國公使ノ申入レラレ度ク尚貴

電後段米國公使ヘ申入ノ件ニ関シ御来

示ノ次第ニ應弗尤

三束シ然らば予が所より之ヲ利用スルノ方途ヲ尋テ下ルハ策ト思ヒテ是レ由テ
公使ヨリ斯ン申出アリタリ事ナリニ付適
當ノ機會ニ在米國公使ノ意嚮ハ本大臣
ニ於テ満足ノ意ヲ表スル旨可然申傳ヘ置
カルニ様致度ニ

宣統八年六月十八日

上

政務局長

呈

主濟南

内田大臣

山田總領事代理

第X二

六月

四月付貴官宛小幡公使往信機

密第三一號之關之濟南日報社對スル

戒飭方其後如何措置セラシムヤ至急

電送第X六一一號	分發
大正八年六月九日	時

國部

修案

呈

個人の批評

回電

要るん如はん場合に於て

心腹りし

如キハ絶對に避クヘキモノニシテ本件日報

社ノ言議ハ米國公使ノ申出アン迄モ無ク

不穩當ト認ラルルニ付同社ニ對シ

嚴重戒飭ヲ加ヘ今後ヲ慎マシムルト共ニ

社對十分指導及監督ヲ加ヘ

度ニ在

右北京へ轉電アリタシ

出ハ貴ハ甚ダ疑ハレト思考シテ亦便
ニ於テモ右往電可裁ノ如キ遲差ヲ為
シ置キタル次第ナル額果セル哉濟
南日報問題ニ関シ 同公使ハ當時ノ
會談ニ飽足ス夫 同日書面ヲ以テ同紙
ニ訂正文掲載及將來ニ對スル戒飭
方ヲ求メ來リ次デ又月三日更ニ右論
説ニ関スル物儀ニ經シ同日報社處新
方ヲ求メ來レルが第ナルが報社從價
南ニリ郵報スレニ對シテハ相當處介

必要アリト認ムルニ米國公使來章
ハ夫々鄭義ノ上ニ御診儀ヲ請ヒ置キ
タルニ付、安仁方ニ御了急相成何
分ノ御回訓ヲ進ニ度ニ、高岩等ノ問
題アリ、然、豫、美、安、御來示ニ如ク閣下
ノ謝意ヲ同公使ニ致スハ、聊カ如何力
ト存スルニ付、之ニ答シ、美、控、置、ク、ト、
致、ス、可、キ、也、又、新聞紙等ノ記
事、中、著、シ、テ、御、方、ニ、御、儀、ニ、指、摘
ス、ル、之、ハ、通、直、意、ヲ、為、ス、可、ク、中、美、通、信

中著ニキモノニ付テハ既ニ右様取計
濟ナルモノアリ 帝來示ノ各領事ヘノ
訓令ハ前記ノ次第ニ鑑ミ別電第八
一七號ノ通取計置キアリ

朱家榮
本年正月
台后
水

附屬書類
大正八年六月廿日

第19075号

公信第一四六號

大正八年六月廿日

警務局

第二課

高

別紙添付

高

大正八年六月十四日

在天津

總領事 船津辰一郎



外務大臣子爵内田康哉殿

排米排日新聞紙取締之件
在北京米國公使ラインズ氏が小幡公使ヲ訪詢
上日米兩國政府各自ノ管理ノ下ニアル新聞
ヲ相互的ニ排日排米ノ論議記事ヲ掲載
セシメタル様取締ル可キ申入レニ對シ同公使
ヲ承諾セシムルニ付取締方同公使ヲ御來訓

1 次第有三候之付別紙甲號寫、通り當垣米
國総領事、申入し、八處別紙乙號寫、通り
申越有三候條委曲右、就中御了義相成度
此段及御報告候 敬具

(本信寫差送先 在支公使)

甲
号
June 12, 1910.

Sir and dear Colleague,

I have the honour to inform you that I have got an instruction from the Japanese Minister at Peking.

According to this, the Japanese Minister had recently got a proposition from the Minister of the United States of America there to which the Japanese Minister, no doubt consented, that a strict supervision should be taken on both the newspapers under each Government's control not to write any articles inciting anti-American or anti-Japanese feeling. I shall be very much obliged to you if you be kind enough to supervise those newspapers here under your control as I have taken a strict measures towards Japanese papers here according to the agreement attained by both the Ministers at Peking.

I have the honour to be,

Sir and dear Colleague,

Your obedient servant,

K.Kamei (SND)

Acting Consul General of Japan

T.S.Heitzelman, Esquire,

Consul General for the United States of America,

Tientsin.

~~Sixxandx~~ June 13, 1919

Sir and dear Colleague,

I have the honour to acknowledge the receipt of your communication of June 12, 1919, stating that an understanding has been reached between the American and Japanese legations whereby the newspapers of our respective nationals in China are to be restrained from publishing articles calculated to incite anti-Japanese or anti-American feeling. You add that in line therewith, you have taken measures vis-a-vis the Japanese newspaperers in Tientsin, and you request me likewise to take action with respect to the American newspapers here.

In reply I beg to inform you that I have asked the American newspapers in this consular district to refrain from publishing anything of an unfriendly character, at ^{the} time calling their attention to the American Libel law which is enforceable against American citizens in China.

I have the honour to be,

Sir and dear Colleague,

Your obedient servant,

H.S. Heintzelman (SND)

American Consul General

K. Kamei, Esquire,

Acting Consul General of Japan,

Tientsin.

800

MT 1.3.1.4

1403

電信課長

大臣

次官

十

内田外務大臣

山田總領事代理

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

一〇八四三 (暗)

濟南發 大正八年七月 二日後一三〇
本省著 二日後九二五

第七六号

本官發在支公使宛電報第六六号

貴電第六六号ニ關シ濟南日報ノ論調ニ付テハ

既ニ嚴重戒飾ヲ加ヘ其ノ後充分取締ヲ實

行シツアルモ該論文取消ニ付テハ四圍ノ情況ニ

鑑ミ我体面上面白カラサルニ付之ヲ見合セ、次

々第ニシテ事毎ニ排日的宣傳ヲ爲シ居ル米

國宣教師等ニ對スル体面モアリ取消ニ出テ

札

スレテ何トカ他ノ方法ニテ解決出来間敷ヤ
何分ノ御電訓ヲ請フ
外務大臣へ電報セリ、



第七八號

支使公使署本官宛復報第六六號

六月四日付致各館三二號掛信末段要

最近又復來函公使自由裁決。決裁了

支使部報中述及現狀。請方在案。此致

龍。揚。業。等。貴。院。諸。君。幸。垂。察。焉。

外務省。外務部。參。事。進。同。官。入。格。電。了。此。致

內田外務大臣 山國領 一平次經

中省署 大正八年七月 三日 九日

粵

電信課長

大臣

次官

十

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

✓
一

河内奉
孝省省
孝年
昔在
三二〇
百前
九〇三

内閣外務大臣
山田總領事代理

第七八號

在立公使
平定宛第六八號

貴電第六六號

瑞南日報論說「六月五日取消」

外務大臣「電報」

電信課長

大臣

次官

七

政務

通商

人事

會計

文書

參政官

副參政官

一〇七二 (暗)

濟南發
本省着

大正八年七月
二日後
三日 前 〇.四〇

内田外務大臣

山田總領事代理

第七九号

在支公使ヨリ左ノ通

第六七号

貴電第六六号御申越ノ次第ハアルモ排日的宣

傳ヲ爲シ居ル米國人ニ對スル關係ヨリ云ヘハ

尚更談論説ノ如キハ速ニ取消彼等カ無用

ノ言批ニ作ラシメサルコト肝要ト認メ就テハ

往電第六六号ノ通取消方可成速ニ實

士

行セシメラレタシ尤其ノ用語ハ單ニ「五月十七日ノ何々
ト題スル論說ハ之ヲ取消ス」
支ヘナシ

外務大臣ノ參考迄ニ同大臣ヘ轉電アリタシ

附屬書類添附

大正八年七月拾五日

駐政務局

第三課

別紙添附

第 8554 號

在支那日本公使館

機密第

三〇九

號

大正八年七月十日

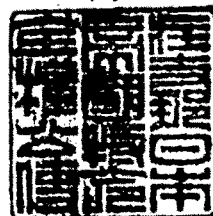
在支那

特命全權公使

小

幡

西



外務大臣子爵 內田 康 哉 殿

大正八年七月十日附在濟南山田總領事代理宛機密第三九號信寫送付

濟南日報監督方ニ關スル件

抄 88

MT 1.3.1.4

1410

機密

三九

號

大正八年七月十日

在支那

特命全權公使 小幡 酉吉

在 濟 南

總領事代理 山 田 友 一 郎 殿

濟南日報監督方ニ關スル件

濟南日報社幹部最近變更^シ佐藤知恭新ニ主筆トシテ入社スルコトニ決
シタル哉ノ趣ノ處御承知ノ通中西社ハ所謂浪人肌ノ人物ニテ其言行
往往注意周到ナラサルコトアリ然ルニ前記佐藤モ亦全ク同型ノ人物ニ
テ從來奇矯ノ言行ヲ收テセルコト勦カラス從テ該新聞ノ經營ヲ全然右
兩人ノ誘手ニ委スルコトハ聊カ心許無キ感無キニ非ス殊ニ目下對外關

係上最モ周到ナル注意ヲ要スル際萬一不慮ノ問題ヲ惹起スルカ如キコ
トアルニ於テハ頗ル遺憾ノ至ニ有之候ニ付テハ其涉固ヨリ御如才可無
之モ濟南日報今後ノ經營強ニ就テハ在青島民政部トモ聯絡シ格外御留
意ノ上嚴重ナル監督ヲ怠ラサル様御有之様致度此段心付ノ端申上
候也

本信寫送付先 内田外務大臣、

屬書類添附

大正八年九月廿七日接受

主政務局

第一課

別紙添付

29426

公金 三七六號

大正八年九月二十二日

在支那

特命全權公使小幡西



外務大臣子爵内田康哉殿

大正八年九月二十二日附在濟南森總領事館公第二〇號寫

送付

濟南日報記事取締方ニ関スル件

第二〇

大正八年九月二十二日

在支那

特命全權公使小幡酉吉

在濟南

總領事森安三郎殿

濟南日報記事取締方ニ関スル件

貴地濟南日報記事取締方ニ関シテハ屢次申進
置タル次第有之候處最近米國公使館ヨリ別紙寫
ノ通申出有之候ニ付委細ハ右ニ就キ御了悉ノ上同新
聞社ニ就キ該記事、出所明確ノ相成可然注意
方御取計結果並回報相成度此段申進候也

本信蜀送付先大臣

大正八年八月十六日濟南日報記事

內政干涉之一端

(鉄膽子)

奇極了。聽說駐濟美國總領事。致和函道署。謂(頃有華商糶米與日商。而貴署則派兵保護之。目下排日風潮未熄。這事恐不適時宜。祈速設法禁止之)云。你看這封信是混蛋不是混蛋

糶米不糶米。是買賣人自由貿易。官場不得干涉。干涉。保護不保護。是兩國平日親睦之結果。都不與美領有絲毫關係。今竟出而干涉之。豈非天下怪事。然則美領事。若公然運動中國之任命。取省長之位置而代之。豈不更為直接痛快。況糶米之禁。直否尚不可知。美領即已如是。倘或彰明較著事實發現。美領又

將何以處之。毋乃將省長撤消置以極刑乎。真乃咄咄
怪事。吾不禁為山東之行政權。嘆息不置。諸位。睜
開眼着。這才叫干涉內政咧。

(Tsinan Jih Pao issue of August 16, 1929.)

Interference in Internal Affairs.

An extraordinary surprise. I have heard that an unofficial letter was addressed to the Civil Governor by the American Consul General, at Tsinan, who stated that Chinese merchants bought rice for the Japanese under the protection of soldiers despatched by the Civil Governor and requested that action should be taken at once to forbid such transaction. That would be more in keeping with the times, as the anti-Japanese feeling has not as yet been extinguished. Do you not consider this letter putrid? As to the purchase of rice the merchants have freedom of trade which should not be interfered with by the authorities and as to the protection given by the soldiers to business this is to further the good relations between these two countries with which the American Consul is concerned in no manner whatsoever. Is it not a matter of surprise that the American Consul comes out and interfere in the matter? I suppose it would be better for the American Consul to have the Civil Governor removed and to induce the Chinese Government to publicly appoint him to the post of Civil Governor. That would give more happiness. Even before it is known whether the rice is bought for the Japanese, the American Consul does not hesitate to act in the above manner. If it actually turns out the rice was bought for the Japanese, what will the Consul do? Will he dismiss the Civil Governor and punish him? Surely it is a matter of surprise. Therefore I cannot prevent myself from feeling pessimistic over the sovereignty of Shantung. You, Gentlemen, should open your eyes. This means interference in Chinese internal affairs.

LEGATION OF THE
UNITED STATES OF AMERICA

Peking.

September 17, 1919.

My dear Mr. Minister:

In your note of June 28th last you were good enough to inform Mr. Reinsch, in connection with the attack on President Wilson appearing in the "Tsinan Jih Pao", that the Japanese Consulat Tsinan had been instructed severely to admonish that paper. You added that your Government had instructed your Consuls at the different ports in China to exercise the necessary restriction over Japanese newspapers under their control.

I regret again to have to call attention to the "Tsinan Jih Pao". On August 16th this paper published an entirely false and malicious attack on the American Consul at Tsinan; unfortunately I have no copy of the Chinese text of this article, but I enclose a translation. You will recall that it was this same paper which published an article stating that the American Consul at Tsinan was engaged in opium smuggling. In fact this paper makes a regular practice of publishing attacks on the local American Consul.

I realize fully that it is a matter of great difficulty to exercise effective control over newspaper publications, and with this in mind the Legation has never made complaint of criticisms directed against our Government or its policies no matter how unrestrained the language. But it would seem that it should be possible in some way to prevent a paper making it a point of policy to publish false and insulting attacks on an official of a friendly government in his official capacity. I should hesitate again to trouble you with such distasteful incidents, were it not that these continued attacks on our officials are a constant source of irritation in the United States and are having a most unfortunate effect on public opinion there.

Your kind note of June 28th was communicated to the Department of State, and my Government is much gratified at the friendly and helpful attitude adopted by the Japanese Government as instanced by the instructions to its Consuls mentioned above. It is greatly regretted that the "Tsinan Jih Pao" continues to adopt an attitude so entirely at variance with the views of the Imperial Government.

With the highest regards, I am, my dear Mr. Minister,

Sincerely yours,

(S'd) Charles D. Tenney,

Chargé d'Affaires,
American Legation.

His Excellency,

Y. Obata,

Minister for Japan,

Peking.

Mr 1.5.1.4

1419

大正八年拾月廿參日接受

主政務局

第一課

別紙添附

受32320號

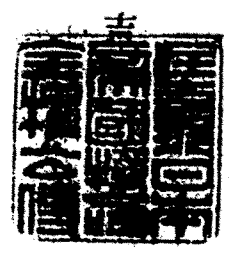
公第 四〇四 號

大正八年十月十七日

在 支 那

特命全權公使 小 幡 酉

外務大臣子爵 內 田 康 哉 殿



濟南日報記事取締方申出ニ對シ

米國代理公使へ回答ノ件

本件ニ關シ米國代理公使ヨリ申出ノ次第ハ客月廿二日附公第三七六號ヲ以テ及送付置候同日附在濟南總領事宛公第二〇號拙信ノ通ニ有之候處右ニ對シ同總領事ヨリ別紙甲號寫ノ通り回報有之候ニ付一面

米國代理公使ニ對シ別紙乙號寫ノ通り之レカ回答ヲ爲スノ序ヲ以テ從來米國側ニ於テハ兎角自國新聞ノ取締ニ關シ回避的言辭ヲ用フルニ不拘本邦側新聞ノ取締ニ就テハ相當嚴格ニ申出ツルノ感アルニ鑑ミ寧ロ本件回答ヲ利用シテ暗ニ此點ヲ指摘シ排日及排米の新聞記事ノ取締ニ對シテハ法規上ノ問題ハ扱テ置キ兩國官憲ニ於テ相互的ニ充分ナル取計ヲ爲スノ必要ナルコトヲ申入置候ニ付委細ハ各別紙寫ニ就キ御了悉相成度此段申進候也

本信寫送付先 濟 南、



公第二五號

大正八年十月一日

在 濟 南 森 總 領 事

在 支 那 小 幡 公 使 宛

濟南日報記事取締方ニ關スル件

本件ニ關シ九月廿二日附公第二〇號ヲ以テ御照會ノ趣敬承致候右ニ關
シ直ニ濟南日報社ニ就キ取調候處該記事ハ同社編輯人佐藤知恭ノ草案
シタルモノニ有之モ同人ハ目下山東問題等ニ關スル請願委員トシテ上
京中ニ有之其出處等不明ノ趣回答有之タルニ付早速之カ取調ヲ爲ス事
尙今後其外交問題ヲ引起スカ如キ記事ノ掲載ヲ斷シテ爲ササル事ヲ更
ニ嚴命致置候條右ニ御了知相成候様致度此段御回答申進候 敬具

However, with reference to the misleading reports and undeserved criticisms directed against one another of the Governments of friendly Powers, which regrettably appear from time to time in newspapers of the respective nationalities, I am strongly convinced, like your predecessor, of their evil results upon the public opinions in the two countries as well as in China. Therefore, I am in perfect concurrence with your statement that in some way our respective Legations should exercise as much influence as they deem possible to prevent the newspapers from publishing undesirable articles of the sort. With this idea in mind, I shall ever be glad, as in the past, to have you inform me, should you have reason to think that a mis-statement of fact or undue criticism is being made in some newspaper or another published by the Japanese.

With high regards,

I remain,

Yours sincerely,

(S'd) Y. Obata.



October 9th, 1919.

My dear Colleague,

Immediately on the receipt of your Note of September 17th concerning a certain article which appeared in the "Tsinan Jih Pao" of August 16th last, I transmitted your request to the Japanese Consul-General at Tsinan, from whom I am now in receipt of a report stating that he has already brought ~~the matter to the notice of the publisher with due warning for~~ the future.

In this connexion, you will recall that to the similar representation I had previously made with regard to with the false reports and unrestrained criticism directed against my Government and myself often circulated by the "Chun Mei News Agency", His Excellency Dr. Reinsch was good enough to inform me in his Note of June 30th last that, while the American Legation "has no control over it nor any American publication in China, yet such an Agency or newspaper is, under the American law, responsible in actions of libel before the American Court." Likewise, this Legation is in no way in a better position than your Legation in so far as the control of newspapers is concerned, especially in view of the fact that the Publication Law of Japan is not, under the Japanese Judicial System, applied in China.

Dr. Charles D. Tenney,

Chargé d'Affaires for The United States of America,

P E K I N G.

附屬書類添附

大正八年吉 五日接受

主政務局 第一課

政機第百六十四號

秘受13943號

在濟南日本領事館

大正八年十一月二十五日

在濟南

總領事 森 安三郎

外務大臣子爵内田康哉殿

公信寫送付ノ件

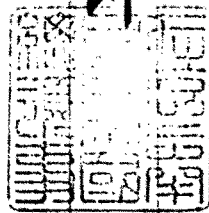
大正八年十一月二十五日付 小幡公使 宛 機案

20 號 拙信 寫

件 名

一、米國派新聞記事取締方ニ關スル件

第



五〇

大正八年十一月二十五日

在濟南

總領事

森安三郎

在支

特命全權公使小幡酉吉殿

米國派新聞記事取締方ニ關スル件

本年五月二十九日附機密第二九號、六月四日附同三一號及七月五日附同三六號貴信ヲ以テ日本新聞紙カ友好國ニ關スル誤報記載ニ關シ其取締方御訓令相成濟南日報記載事項取締方ニ關シテハ當時

既ニ關係者ニ對シ記載事項ニ注意シ不必要ナル惡
感ヲ招クカ如キ記事ヲ掲載セサル様嚴達シ置キタ
ルカ當地濟南新聞社幹部ハ目下旅行中ニテ殆ト支
那人記者ニ編輯ヲ一任シ居リ日本人記者ハ事實記載
事項サヘ承知セサルカ如キコト往々有之隨テ現時未
夕完全ニ右御訓示ノ趣意ヲ實現シ得サルモ當館ニ
於テハ絶エス同社留守代表者ニ對シ注意ヲ與ヘ居リ
候然ルニ本月十一日當地ニ於テ創刊シタル大民主報ハ
合衆國「ネバタ」州ニ藉ヲ有シ米支人ノ合辦經營
ニ係ルハ頁新聞ナルカ發刊勿々ヨリ公然排日貨ヲ獎
勵スルカ如キ記事ヲ連載シ居ルカ去ル十七日發行ノ同
紙ニハ別紙寫ノ通「關於日人方面之交涉一束」ト題シ
日本將校ヲ最近薩摩丸ニテ南部式短銃ヲ輸送シ來

リ之ヲ山東沿線ノ一驛ナル張店ニ於テ支那人馬賊ノ首
領ナル顧德鄰ノ日本人顧問ニ賣渡シタルコト及本年
七月濟南守備隊交代ノ際同隊ヨリ三八式歩兵銃數百
挺ヲ張某ニ代賣セシメタル趣ヲ掲載シ宛モ帝國軍憲
カ暗ニ裡ニ馬賊ヲ援助シ居ルカ如キ記事ヲ掲載シタ
ルヲ以テ當館ニ於テハ前記ノ西項ハ全部守備軍ニ關係
スル事項ナルヲ以テ直ニ當地駐在武官目下中佐ニ照會ス
ルト共ニ一方守備軍司令官ニ打電シ實否ヲ調査シタル
ニ司令官ヨリハ右記事ハ全部捏造ナルニ付取消方ニ關
シ嚴重ナル交渉相成度シトノ回答アリ又目下中佐ヨリモ
守備隊ニ於テハ全然兵器ヲ賣渡シタル事無之ヒ日回答
有之候

本紙ハ發刊以前ヨリ既ニ排日ヲ煽動スルヲ以テ主旨トス

ルモノ、如ク一般支那官民間ニモ認定セラレ居リシ處ニ有
之其發刊以後ニ於テハ之ヲ體現シテ無根ノ事實ヲ揭
載シ以テ帝國ノ威信ヲ傷ケント欲スルモノニ有之候ニ就
テハ右速ニ米國公使ニ本記事ノ取消及今後ノ取締ニ
関シ御交渉相成膏テ同公使ト御商議ノ趣旨ヲ米國
側新聞ニモ實行セシムル様御取計相成候様致度此
段及稟申候敬具

本信寫送付先

外務大臣

本省特載

●關於日人方面之交涉一束

▲運槍彈接濟顧德鄰

▲守備兵臨行賣軍機

▲日本兒與雞蛋湯之糾葛

目前吾魯之匪風日熾到處橫行者多由於槍彈之充實而槍彈所以充實者則多取給於日本人之販軍若當道不設法絕其來源恐將來在魯豫數省必鬧成土匪世界而商民無噍類矣昨據某方面秘密報告日本薩摩丸郵船於九號開至青島隨船來者有日本將校四名兵士四名由船上押來日本南部式快槍二十箱每箱二十四枝每枝子彈二百粒於十二號既即送至張店十五箱交與著名積匪顧德鄰之日本顧問運

往直魯一帶接濟顧匪供其虞發難之用此接濟匪械之新聞一也。又有駐濟南守備兵於交替之時有明治三十八年式槍七百五十枝每枝附帶子彈一百九十粒託張某秘密代賣目前已否賣出尚無確問現已由某機關暗派密查四人切實調查此接濟匪機之新二也。以上均係張明較著為此不利於地方不利於商民之事揆諸輔車唇齒之友誼殊嫌未合記者甚願日本領事克盡維持邦交之責任苟有此種事實發現莫待我國官吏之查禁即先嚴重阻止是吾人所殷盼者也。又今日(十六)發生一極微細之事又幾乎引起中日之交涉在日人方面未免太近於橫暴而吾華人之被凌於日人者亦幾々乎沿成一種慣例此不能不令吾人短氣者也。緣今日有文陞園飯館之徒弟手捧梅

兒湯（即雞蛋湯）一碗送與望平。即某家途中有兩日。本兒彼此打鬧。與文陞園之徒弟相撞。致雞蛋湯潑撒湯及日本兒。此原無關重輕之事也。緣該湯自館中擎出。又行至街上。其熱度已低。萬不至燙出重傷。况係彼兒相打致撞。更非有意為之。乃該日兒之父原田及原田之妻見其兒被燙。即馳出從文陞園內將文陞園之徒弟抓獲。拽其髮辮。如獲盜賊。即送至日本憲兵部。為其兒洩憤。幸有人出為調停。如該兒傷重。由文陞園負完全責任。輕則由原田自己療養。乃由文園陞具保。從日本憲兵部將其徒弟保出。此事雖微。然以吾中國人而任日人自由蹂躪。且一有交涉。日本憲兵部即起而代操其權。日久天長。尚復成何事體。此記者所以太息痛恨於外交之示弱故。

雖對此細微之事亦不得不詳細記載以促我魯省各界之覺悟用防患於未然也

大正九年正月六日 接受

駐政務局

第一號

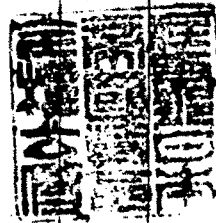
專

五三二號

大正八年十二月二十九日

在支那

特命全權公使 小幡酉吉



外務大臣子爵內田康哉殿

米國系新聞紙ノ排日の記事ニ関シ

米國代理公使ニ申入ノ件

濟南ニ於テ發行スル米國人經營ノ漢字新聞

大民主報排日記事ヲ取締リ付米國公使館ニ

交渉方同地森總領事ヲ申越ノ次第有之候

處右ハ當地及天津ニ於テ發行スル益世報及ハ大

各々、スタイルニ就テモ同様ノ有様ナルニ顧ミ今般米
國代理公使ニ對シ半公信ヲ以テ別紙寫ノ通リ申
入レ之等煽動的排日記事ノ國交上ニ及ス害毒
ニ付先方ノ注意ヲ喚起致置候條委細右ニ就キ
御詳悉相成度此段申進候也
本信屬送付先濟南、天津

Date	Kind	Caption
Dec.17	Article	Japanese still Unenlightened. ()
Dec.17	Editorial	Boycott and Preparation for Its Continuance ()
Dec.19	Editorial	Japanese Policy of Flattery ^{ing} East and Attacking West. ()
Dec.21	Editorial	Anti-Japanism - the Keynote of Japan's Policy. (xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx) Anti-Japanism - the Keynote of China's National Policy.

"Yi Shi Pao" Peking.

Date	Kind	Caption
Oct. 3	Editorial	Be-ware of Japanese Friendship. ()
Nov. 17	Editorial	Japanese Intrigues with Mohamedans. ()
Nov. 18	Editorial	"Sino-Japanese Friendship" ()
Nov. 21	Editorial	Foochow Incident-Japanese Emnity toward China and Curse toward America. ()
Nov. 24	Editorial	Deport Japanese and Dismiss Yang. ()
Nov. 26	Editorial	Just Course of Boycotting Japanese Goods. ()
Nov. 29	Editorial	How to prevent Repetition of Foochow Incident. ((()
Nov. 30	Editorial	Real Drama of Sino-Japanese Friendship. ()
Nov. 30	Article	Traitors always pleads Patriotism. ()
Dec. 1	Editorial	Possibility of Declaring War owing to Foochow Incident. ()
Dec. 5	Editorial	Refuse the Demand for Supression of Anti-Japanese Boycott. ()
Dec. 6	Editorial	The Great Mass-Meeting. ()
Dec. 10	Article	Japanese China Policy Deplorable. ()
Dec. 10	Article	Admirable Peking Merchants. ()
Dec. 11	Article	Japanese Minister makes another unreasonable Demands. ()
Dec. 12	Editorial	Patriotism and Anti-Japaneseism. ()
Dec. 12	Editorial	Advice to the Patriotic Students ()
Dec. 16	Editorial	Peking Authorities Utterly Incapable. ()

this communication to you I do not intend in the least to request your Legation of anything beyond its power, I should be much obliged if you would be good enough to consider the seriousness of the harms that are being done by these unrestrained articles to the international relationship between the United States, Japan, and China.

Yours sincerely,

(s.d.) Y. Obata

it accused the Japanese Consul-General of contemplating the establishment of another police stall in the open mart.

The "North China Star" of December 20 appears to have made another remarkable display of its support, or rather encouragement, for the unrestrained anti-Japanese demonstrations by publishing in its front page an article entitled "Patriotic Mass-Meeting to be held this afternoon at Nankai Grounds", accompanied by a portrait of the chairman of the Chinese Tientsin Chamber of Commerce. From the tone of the whole article, or instigating call rather, as it is evidenced by, for instance, such lines as "All Citizens of Chinese Republic and Nationals of friendly countries are invited to assemble at 1.P.M." at the sub-heading and "The Japanese are earnestly and pressingly invited to remain away to obviate untoward incidents", in its conclusion, it would appear as if the paper itself is actually participating in the demonstration.

Your Legation is perhaps aware that both of the Peking and Tientsin editions of "Yi Shi Pao", which is, I understand, also owned and published by an American corporation registered under the law of the state of Nevada, is taking a prominent part in the present anti-Japanese movements as is evidenced from the enclosed list of their more recent articles and comments maliciously accusing or attaching my Government and myself, as well as my nationals.

I would not trouble you on such an unpleasant subject, if it were not for the fact that such unrestrained attitude on the part of the American owned newspapers in China would give the Chinese public an impression that the United States is actually interested in the present demonstrations, be it lawful or unlawful, and thus materially contributing in jeopardising the friendly relations between Japan and China, and further reflects, as you mentioned in your Note of September 17th last, upon the public opinion in Japan. Although in writing

My dear Colleague,

Availing myself of the fair spirit in which correspondence has recently been exchanged between our Legations concerning the desirability of mutually restraining newspapers under respective jurisdiction from publishing unfriendly and instigating articles against one another of the most friendly nations, I hereby beg to draw your kind attention to the following cases which appear to be illustrative of the general tone of articles appearing from time to time in some of the newspapers known to be owned and published by your nationals.

The Japanese Consul-General at Tainan has recently sent me several reports complaining that, in spite of his continuous exercising of all possible efforts, in accordance with instructions, to refrain the often-mentioned "Tainan Jih Pao" from publishing any unfriendly articles towards the United States, the same efforts are apparently lacking on the part of the "Ta Min Chu Pao", a venerable newspaper published there by an American corporation. He particularly refers to the false reports published by that paper in its issue of November 7 maliciously charging the Japanese military authorities of supplying several hundred rifles to the bandits in Shantung; in that of December 7, charging the same authorities of dispatching a battalion of cavalry to Tainan, and the Japanese Consul-General of approaching the Chinese authorities for the establishment of a police stall near the Japanese school. Again this paper, in its issue of December 17, published another false report, claiming to have been originated from the Chun Mei Agency, in which

Monsieur Dr. Charles D. Tenney,

it

Chargé d'Affaires for the United States of America,

卜
務
全

大正八年九月五日 變

陸軍大臣 田中義一

陸軍大臣 田中義一

陸普筭三三七號

秋山民政長官、雜誌寄書ニ関スル件通牒

大正八年九月四日

陸軍大臣 田中義一

外務大臣 子爵 内田 康成 殿

雜誌大觀九月號登載、青島の將來を想望して軟弱外

交を難すナル記事ニ就テ調査、秋山民政長官、同雜誌

記者ニ對シテ何等本件ニ関シテ言明シタルコトナク又寄書シタルコト

ニ勿論無之次第ニ矣、余為念通牒矣也

大正八年九月五日

大正八年九月五日

26820

第 門

大臣

次官

授受18571號

大正七年三月八日

接受

主政務局第二課

海軍

官房機密第一六四四號ノ二

大正七年十一月八日

海軍次官 枋内會次郎

外務次官 幣原喜重郎殿

新聞記事ニ關スル件

本月八日發行東京朝日新聞第一萬一千六百三十號所載「對獨休戰條
 件海軍に關する分」ト題スル記事ハ重大ナル軍事上ノ機密ニ關スル
 事項ヲ掲載シタルモノニシテ大正三年海軍省令第八號ニ牴觸スルモ
 ノト認メ當省副官ヨリ東京地方裁判所檢事正へ告發致置候條御了知
 相成度
 右通知ス

(終)

(裏田附)



秘



新受 9361第

上

海時事報

第 二 二 號 第 103

一九二八年八月二日 接受 主政務局 第 課

大正八年七月二十三日

在上海

陸軍歩兵少佐 佐藤三郎

十 縣 監 署 二 科 一 課 一 係 一 監 察 本

要目付了

上海共同租界局、新聞取締規則ニ就テ

支那、共和成立以來上海ハ東洋ニ於ケル陰謀

画策、中心地ト目セラレ歳ヲ重ヌルニ後ヒ其

横暴愈々甚タシキヨリ租界ノ秩序維持上之ヲ

自然ニ放擲シ置クヲ危険トシ先ツ佛、租界

ハ六月二十日附テ新聞條例ヲ公布シ曰、英米

其他、共同租界工部局亦出版物取締ニ関ス

ル新規則ヲ立案シ既ニ納稅者會議ヲ通過セシ

米國、及對強硬ニシテ領事團ノ承認ヲ得ル
見込ナク目下行惱ノ状態ニ在リ其概況ヲ記ス
レハ左ノ如シ

一、工部局提案ノ改正印刷出版並新商
取締規則

(一) 何人ト虽モ先ツ第一ニ工部局ノ免許ヲ得ル
ニ非サレハ並外玉人ナレハ工部局ノ免許ト所
屬領事ノ副署ヲ得ルニ非サレハ活版印刷業
石版印刷業若シハ彫刻業又ハ各種新聞
定期刊行物ノ發行若ハ公衆ノ眼ニ觸ルハキ
報道事項若ハ類似ノ出来事ニ関スル其他事
項ヲ印刷又ハ發表スル事ヲ行フヲ得ス斯ル

免許ニ関シテ工部局ハ免許料ヲ徴收シ年
次若ハ臨時納税者會議ノ裁可ヲ經テ諸
條件ヲ設定スルヲ得ヘシ但シ此等條件設
定ハ領事團ノ認可ヲ經ヘキモノトス

(二) 何人ト虽モ本附屬法ノ規定ニ違反スル者ハ
三百弗以内ノ罰金若ハ科料ニ處シ或ハ其當
事者ノ服役スヘキ法規ニ從テ處罰サルヘシ又
署名ナキ活版、石版、彫刻、印刷物、新聞定
期刊行物若ハ其他、印刷物、發行若ハ配
布ニ干典セル者ハ二十五弗以内ノ罰金ヲ課シ
若ハ多事者ノ服役スヘキ法規ニ從テ處罰サ
ルヘシ上記印刷物カ二枚以上ヨリ成ル場合
ハ最後ノ一枚ニ署名スヘキモノトス

別ニ右取締規則ノ施行細則トモ目スヘキ細部
規定七項アルモ茲ニ省略ス

ニ臨時納税者會議ニ於ケル右

取締規則ノ通過

共同租界工部局ハ七月十日臨時納税者會議
ヲ開キ右取締規則ヲ審議セシカ其賛否ヲ
ホムルニ先ツキ共同租界行政委員長英人「ピ
アース」氏ハ右議案提出ノ理由ヲ説明スルニ特
別ノ關係ニ在ル上海ハ英米兩國全權ノ觀念
ヲ以テ律スル能ハス宜シク土地ニ適合シタル
取締法ヲ設ケサルヘカラストテ佛租界カ最近之
カ取締法ヲ設ケシコト及天津、漢口ノ英租界モ

亦全様免許権ヲ得居ルコトヲ述ヘ以テ吾人ハ
害毒ヲ流ス新聞ヲ取締ラサルヘキラサント云
自由意思發表ヲ阻止スルモノニ非ス彼ノ日本
人ヲ飯食物中ニ毒ヲ投ヤシ等ノ虚偽ニシテ存
害ナル風説ノ流布セラル、ヲ黙許シテ差支ナキ
ヤ又最近騒動ノ原因ヲナシ而モ無事ノ支那
人若ハ日本人ヲ攻撃スル原因タリシ各種ノ風
説ヲ流布スル印刷物ヲ見逃シ置クヘキモノナル
ヤ外ハ人居住ノ為設置セラレシ此租界地力
學生団ヤ政界ノ不平連ヤ果タ又煽動者ノ
爲メ攪乱セラレ或ハ我等租界在留者ノ市場
カ閉鎖セラレ或ハ商業、工業ヲ停止スルノ止ムナ
キニ至リ帝ニ彼等ノ左右スル所トナルヘキモノナ

ルヤ 恰モ我租界地カ支那人ノ政治ノ實物タル
ノ親アルヲ坐視スヘキモノナルヤトテ盛ニ熱辯
ヲ揮ヒ更ニ進テ今ヤ支那ハ將サニ燭カ天ニ朝
セントシツ、アリ 此燭ノ閃ク何ヲ意味スルヤハ諸
君ノ然知スル所ナリ 本取締規則ハ實ニ此病ヲ
治スヘキ萬能藥ニアラスト結ヒ之ニ對シ何人
モ反對議論ヲ試ムルモノナカリシヨリ直ニ表決ト
ナリシカ反對者一五九ニ對スル賛成者二六九ノ
多數ニテ無事通過シ引續キ本規則施行細
則七條ヲ討論シ是亦大ナル故障ナク通過セ
リ

因ニ當日日本人存続有出席數約百名ニシテ元ヨリ
全部通過賛成者ナリキ

三、本取締規則設定ニ對スル米、支人、及對
（一）本新聞取締規則設定ニ及對シ米、支商業
會議所并米人協會ハ七月八日其委員會ニ
於テ左ノ通り決議シ之ヲ工部局ニ通告スル
ト共ニ上海各新聞ニ発表セリ

本會ハ常ニ證據ヲ發起スル虞アル出版物
ニ對シ適確正當ナル法律の取締ノ形式ヲ
ランクトヲ賛スルモノナルニ米國ノ主義ニ及シ
提出ノ目的遂行不可能ナル今回ノ工部局
新聞取締規則ニハ援助ヲ與フル能ハス

（二）在支米、支公使ノ該取締規則及對ニ関スル
書簡トシテ米、支商業會議所秘書役ノ発表
セシモノ左ノ如シ

揮啓六月二十八日附貴翰ト共ニ全封ノ上海工
部局宛抗議書正ニ受領仕候小官ノ意見
トシテハ今回米國商業會議所ノ採ル手帳
ハ絶対的正確ナルノミナラス米玉ノ法律並
政策ニ齟齬セサルモノナリトテ茲ニ前陳仕候
出来得ヘクシハ新規則ハ稅納者ノ投票以前
ニ之ヲ撤回スルカ或ハ納稅者カ之ヲ否決サレ
シコトヲ希望致候若シ萬一進シテ領事ノ義
認ヲ求ムルニ至ラハ米玉行動ノ關係スル範
圍由ニ於テ能ク迄之ヲ拒絕スルノ一途アルノミ
ニ候

尚同秘書役ハ右書局ニ附加スルニ在リ梅米玉
總領事亦過去ニ於テ常ニ新聞取締法ニ

反對に來リタルヲ併セテ言明スルヲ以テセリ

(13) 上海米商人ノ機關紙シル大陸報(「チャイナ・プレス」)ハ連日反對海況ヲ掲ゲタルカ其骨子ヲスル所ハ一、斯ル規定ヲ設クルハ自由主義ノ原則ニ及ス 二、必要ナリ 三、必要トスルモ效果ニシ四、必要且ツ有効ナリトスルモ秩序ヲ維持スルヨリ却テ秩序ヲ紊乱スル結果トナルヘシト海工部局カ綴令斯ル取締規則ヲ設定スルモ何レノ程度迄之ヲ勵行シ得ルヤハ大ナル疑問ナリト説キ領事裁判權ヲ享テ有スル條約國ノ新聞紙ハ本規則ニ依リ如何トモナシ能ハサルヘシト柳翰セリ

(14) 上海支那書業報紙聯合會ハ米國商業

會議所、主張セルト全様、主旨ニ於テ反對ノ
陳述書ヲ納稅者ニ配布セシカ其文句中ニ
今次工部局、企テタルト全様、條例ハ世界ニ
於テ独逸ト日本ニ於テモ見ルノミト相変
ラス、毒口ヲ附加セリ
支那新聞、ヨクハ上記大陸報ノ反對論況ヲ
譯載シ、ルモ英武ニ氣兼ねテカ何等特別ノ論
議ヲ敢テセザリキ

元來本取締規則ハ英人ノ突意主張ニ係ルモ、
ナルカ照一般學生運動ノ愈々暴的性質ヲ帶フ
ルノ秋ニ當リ米國行政委員ハ其委員會ニ於テ
之ヲ取締ニ關シ常ニ軟弱ノ態度ヲ持シ遂ニ

上海租界ヲシテ一時全ク秩序ヲ紊乱セシムルニ
至リ累テ一般在留民ニ及ホセシヨリ工部局ノ主權
ヲ挫レル英領ハ支那殊ニ上海ニ於ケル過激思想
ノ傳播ヲ恐ルハト共ニ米人ヲ背景トスル學生ノ餘
リニ暴威ヲ逞フスルヲ快トセム租界ノ秩序維持上
新規則制定ノ必要ヲ認メタル如ク解セラル、モ更
ニ深く立入り英人ノ意圖ヲ時度スルニ冒頭述ヘタ
ル如ク佛領租界カ既ニ該取締令ヲ發表セシタマ
事實工部局ヲ主宰スル英人ハ過般ノ證據ニ顧
ミ將來ノ為從令形式的ニモセヨ何等カ取締規則
ヲ設定セサルハ外部ニ對シ申訳ナキ羽目ニ陷リシ
ヨリ一般在留民ニ對スル辯解ノ意味ニア本規則
制定ヲ主張セシモノニアラサルカ蓋シ工部局ノ規

則ハ條例ニ非サル以上條約ニ根據シテ享有セ
ル領事裁判權ヲ制限スル能ハサルハ明カニシテ該
規則ハ徹底的ニ拘束力ヲ發揮シ得ルハ單ニ支
即ノ新聞并印刷物ト無條約ニ夫レトニ限ル
ヘシ然ルニ支即ニハ民國三十四年四月二日發布ノ報紙
條例アリテ前記工部局案ノ新聞取締規則ヨ
リ又違カニ峻嚴ナリ故ニ工部局ニシテ更ニ取締ヲ
勵行セントセハ租界内ノ支即人裁判所タル會審
衙門ニ於テ右支即ノ報紙條例ヲ適用シ嚴
重ニ處罰シ得ヘリ何ヲ苦ニテ工部局カ右罰則
ヨリ又低級ナル新規定ヲ設クル要ナケレハナリ
然リ而シテ莫可カ新取締規則制定ニ着手セル動
機ハ何レニアルニヤ曰陰謀ノ源泉地タル上海租界ノ

公安ヲ維持シ各種陰謀ノ宣傳ニ欽ノヘカラサル出
牧物ヲ取締ルヘキ新規則ノ公布セラル、コトハ
何レノ方面ヨリ観ルモ吾人ノ大ニ歡迎スル所ナリ
然レモ既述ノ如ク米玉ノ反対依然強硬ニシテ
領事団会議ニ於テハ^{一名}反対アルモ成立セサルヲ以テ
折角納税者會議ヲ通過セシ新規則モ今ヤ存
耶無耶ノ裏ニ蒸ラレントスル狀況ニ在ルハ遺憾ニ堪
ハス

附 記

佛國租界ノ制定セシ新聞取締條例

佛國領事館令

第一條 佛王總領事館ノ許可ヲ經スレテ雜誌小冊ヲ印刷物支那新聞等ノ發行所ヲ設クルヲ得ス

第二條 前條ニ關シテ許可ヲ請フ時ハ責任記者及其發行ノ目的ヲ明記シ且ツ出願ト同時ニ出版會社條例ニ基キ積立金ヲ爲スヘシ

第三條 若シ許可ヲ受ケタル場合ハ如何ナル印刷物雜誌新聞タリトモ印刷後直ニ佛國警察署及總領事館ニ其謄本一通ヲ提示セスシテ之ヲ配付スルヲ得ス

第四條 警官カ公安若クハ道德ヲ阻害スル印刷物ヲ発見スル場合ハ責任者タル記者若クハ作者并必要ノ場合ハ印刷者モ會審衙門之ヲ

検査ニ法律ニ従ヒ處罰スヘシ

第五條 第一條ノ規定ニ依リテ設置セラレタル
発行所ニ對シ警察ハ直ニ之ヲ閉鎖ヲ命ジ且
ツ會審衙門ニテ處罰スヘシ

第六條 本報令ハ發布ノ日ヨリ有効ナリトス
第七條 警察署ハ本報令執行ノ任ニ當ルヲ

ノトス

千九百十九年六月二十日

佛國總領事 ウイルゲン

秘



上海時事報第百三號

參戰第一一二號第10日

大正八年七月二十三日

上海

陸軍歩兵少佐佐藤三郎

十國公報二卷一頁一節（陸軍）

上海共同租界局、新聞取締規則ニ就テ

支那、共和成立以來上海ハ東洋ニ於ケル陰謀
画策、中心地ト目セラレ歳ヲ重ヌルニ後ヒ其
横暴愈々甚シキヨリ租界ノ秩序維持上之ヲ
自然ニ放擲シ置クヲ危険トシ先ツ佛、英、米
ハ六月二十日附ニテ新聞條例ヲ公布シ曰、英、米
其他、共同租界工部局亦出版物取締ニ関ス
ル新規則ヲ立案シ既ニ納稅者會議ヲ通過セシ

米國、反對強硬ニシテ領事團、承認ヲ得ル
見込ナク目下行惱ノ状態ニ在リ其概況ヲ記ス
レハ左ノ如シ

一、工部局提案ノ改正印刷出版並新聞
取締規則

(一) 何人ト虽モ先ツ第一ニ工部局ノ免許ヲ得ル
ニ非サレハ並外外人ナレハ工部局ノ免許ト所
屬領事ノ副署ヲ得ルニ非サレハ活版印刷業
石版印刷業若シハ彫刻業又ハ各種新聞
定期刊行物、發行若ハ公衆ノ眼ニ觸ルヘキ
報道事項若ハ類似ノ出来事ニ関スル其他事
項ヲ印刷又ハ發表スル事ヲ行フヲ得ス斯ル

免許ニ関シテ工部局ハ免許料ヲ徴收シ年
次若ハ臨時納税者会議ノ裁可ヲ經テ諸
條件ヲ設定スルヲ得ヘシ但シ此等條件設
定ハ領事団ノ認可ヲ經ヘキモノトス

(二) 何人ト虽モ本附屬法ノ規定ニ違反スル者ハ
三百弗以内ノ罰金若ハ科料ニ處シ或ハ其當
事者ノ服役スヘキ法規ニ從テ處罰サルヘシ又
署名ナキ活版、石版、彫刻、印刷物、新聞定
期刊行物若ハ其他、印刷物、發行若ハ配
布ニ干典セル者ハ二十五弗以内ノ罰金ヲ課シ
若ハ多事者ノ服役スヘキ法規ニ從テ處罰サ
ルヘシ上記印刷物カ二枚以上ヨリ成ル場合
ハ最後ノ一枚ニ署名スヘキモノトス

別ニ右取締規則ノ施行細則トモ目スヘキ細部
ノ規定七項アルモ茲ニ省略ス

ニ臨時納税者會議ニ於ケル右

取締規則ノ題置

共同租界工部局ハ七月十日臨時納税者會議
ヲ席中右取締規則ヲ審議セシカ其賛否ヲ
求ムルニ先ツテ共同租界行政委員長英人「ピ
アース」氏ハ右議案提出ノ理由ヲ説明スルニ特
別ノ關係ニ在ル上海ハ英米兩國今様ノ觀念
ヲ以テ律スル能ハス宜シク土地ニ適合シタル
取締法ヲ設ケサルヘカラストテ佛租界カ最近之
カ取締法ヲ設ケシコト及天津、漢口ノ英租界モ

亦全様免許権ヲ得居ルコトヲ述ヘ以テ吾人ハ
害毒ノ流ス新聞ヲ取締ラサルヘカラサント公衆
ノ自由意思發表ヲ阻止スルモノニ非ズ彼ノ日本
人ヲ敵食物中ニ毒ヲ投ヤシ等ノ虚偽ニシテ存
害ナル風説ノ流布セラル、ヲ黙許シテ差支ナキ
ヤ又最近騒動ノ原因ヲナシ而モ無事ノ支那
人若ハ日本人ヲ攻撃スル原因タリシ各種ノ風
説ヲ流布スル印刷物ヲ見逃シ置クヘキモノナル
ヤ外邦人居住ノ為設置セラレシ此租界地力
學生団々政界ノ不平連ヤ果タ又煽動者ノ
爲メ攪乱セラレ或ハ我等租界在留者ノ市場
カ閉鎖セラレ或ハ商業、工業カ停止スルノ止ムト
モ至リ帝ニ彼等ノ左右スル所トナルヘキモノナ

ルヤ 恰モ我租界地カ支那人ノ政治ノ實物タル
ノ親アルヲ坐視スヘキモノナルヤトテ盛ニ熱辨
ヲ揮ヒ更ニ進テ今ヤ支那ハ將チニ腐カ天ニ朝
セシトシツ、アリ此腐ノ内々何ヲ意味スルヤハ諸
君ノ然知スル所ナリ本取締規則ハ實ニ此病ヲ
治スヘキ萬能藥ニアラスヤト結ヒ之ニ對シ何人
モ反對議論ヲ試ムルモノナカリシヨリ直ニ表決ト
ナリシカ反對者一五九ニ對スル賛成者二六九ノ
多數ニテ無事通過シ引續キ本規則施行細
則七條ヲ討論シ是亦大ナル故障ナリ通過セ
リ

因ニ當日日本人存続有出席數約四百ニテ元ヨリ
全部通過賛成者ナリキ

三、本取締規則設定ニ對スル米、支人、及對
ハ本新聞取締規則設定ニ及對シ米、支商業
會議所并米人協會ハ七月八日其委員會ニ
於テ左ノ通り決議シ之ヲ工部局ニ通告スル
ト共ニ上海各新聞ニ發表セリ

本會ハ常ニ證據ヲ發起スル虞アル出版物
ニ對シ適確正當ナル法律の取締ノ形式ヲ
ランコトヲ缺負スルモノナルモ米國ノ主義ニ及シ
提出ノ目的遂行不可能ナル今回ノ工部局
新聞取締規則ニハ援助ヲ與フル能ハス

(2) 米、支米、支公使ノ該取締規則及對ニ關スル
書簡トシテ米、支商業會議所秘書役ノ發表
セシモノ左ノ如シ

拜啓 六月二十八日附貴翰ト共ニ全封ノ上海工
部局宛抗議書正ニ受領仕候小官ノ意見
トシテハ今回米國商業會議所ノ採レル手帳
ハ絶対的正確ナルノミナラス米玉ノ法律系
政策ニ齟齬セサルモノナルコトヲ茲ニ前陳仕候
出来得ヘクンハ新規則ハ稅納者ノ投票以前
ニ之ヲ撤回スルカ或ハ納稅者カ之ヲ否決サレ
ンコトヲ希望致候若レ萬一進ンテ領事ノ美
認ヲ求ムルニ至ラハ米玉行動ノ關係スル範
圍由ニ於テ能ク迄之ヲ拒絕スルノ一途アルノミ
ニ候

尚同秘書役ハ右書簡ニ附加スルニ在リ海米玉
總領事亦過去ニ於テ常ニ新章取締法ニ

反對に來リタルヲ併セテ言明スルヲ以テセリ

(3) 上海米商人ノ機關紙タル大陸報(「チャイナ・プレス」)ハ連日反對海況ヲ掲ケタルカ其骨子トスル所ハ一、斯ル規定ヲ設クルハ自由主義ノ原則ニ及ス 二、不必要ナリ 三、必要トスルモ效果ニシ四、必要且ツ有効ナリトスルモ秩序ヲ維持スルヨリ却テ秩序ヲ紊乱スル結果トナルヘシト海陸高工部局カ擬令斯ル取締規則ヲ設定スルモ何レノ程度迄之ヲ勵行シ得ルヤハ大ナル疑問ナリト説キ領事裁判權ヲ享有スル條約國ノ新聞紙ハ本規則ニ依リ如何トモナシ能ハサルヘシト柳翰セリ

(4) 上海支那書業報紙聯合會ハ米國商業

會議所、主張セルト全様、主旨ニ於テ反對ノ
陳述書ヲ納税者ニ配布セシカ其文句中ニ
今次工部局、企テタルト全様、條例ハ世界ニ
於テ独逸ト日本ニ於テ也ヲ見ルノミト相変
ラス、毒口ヲ附加セリ
支那新聞、ヨクハ上記大陸報ノ反對論説ヲ
譯載シタルモ英紙ニ氣兼ねテカ何等特別ノ論
議ヲ敢テセザリキ

元素本取締規則ハ英人ノ突意主張ニ係ルモ、
ナルカ照一般學生運動ノ愈々暴的性質ヲ帶フ
ル、秋ニ当リ米玉行政委員ハ其委員會ニ於テ
之ヲ取締ニ關シ常ニ軟弱ノ態度ヲ持シ遂ニ

上海租界ヲシテ一時全ク秩序ヲ紊乱セシムルニ
至リ果テ一般在留民ニ及ホセシヨリ工部局ノ主權
ヲ握レル英領ハ支那殊ニ上海ニ於ケル過激思想
ノ傳播ヲ恐ル、ト共ニ米人ヲ背景トスル學生、餘
リニ暴威ヲ逞フスルヲ快トセス租界ノ秩序維持上
新規則制定ノ必要ヲ認メタル如ク解セラル、又更
ニ深ク立入り英人ノ意圖ヲ時度スルニ冒頭述ヘタ
ル如ク佛領租界カ既ニ該取締令ヲ發表セシメタ
事實工部局ヲ主宰スル英人ハ過般ノ證據ニ顧
ミ將來、爲從令形式的ニモセヨ何等カ取締規則
ヲ設定セサルハ外部ニ對シ申訳ナキ羽目ニ陷リレ
ヨリ一般在留民ニ對スル辯解ノ意味ニア本規則
制定ヲ主張セシモノニアラサルカ蓋シ工部局ノ規

則ハ條約ニ非サル以上條約ニ根據シテ享有セ
ル領事裁判權ヲ制限スル能ハサルハ明カニシテ該
規則ハ徹底的ニ拘束力ヲ發揮シ得ルハ單ニ支
即ノ新聞并印刷物ト無條約否ノ夫レトニ限ル
ヘシ然ルニ支即ニ民國三十四年四月二日發布ノ報紙
條例アリテ前記工部局案ノ新聞取締規則ヨ
リ又違カニ峻嚴ナリ故ニ工部局ニシテ眞ニ取締ヲ
勵行セントセハ租界内ノ支即人裁判所タル全審
衙門ニ於テ右支即ノ報紙條例ヲ適用シ嚴
重ニ處罰シ得ヘリ何ヲ苦ニテ工部局カ右罰則
ヨリ又低級ナル新規定ヲ設クル要ナケレハナリ
然リ而シテ莫可カ新取締規則制定ニ着手セル動
機ハ何レニアルニヤヨ陰謀ノ源泉地タル上海租界ノ

公安ヲ維持シ各種陰謀ノ宣傳ニ缺クヘカラサル出
牧物ヲ取締ルハ新規則ノ公布セラルコトハ
何レ方面ヨリ觀ルモ吾人ノ大ニ歡迎スル所ナリ
然レモ既述ノ如ク米玉ノ反対依然強硬ニシテ
領事団會議ニ於テハ^名反対アルモ成立セサルヲ以テ
折角納税者會議ヲ通過セシ新規則モ今ヤ存
耶無耶ノ裏ニ藁ヲレントスル狀況ニ在ルハ遺憾ニ堪

ハス

時 記

佛國租界ノ制定セシ新聞取締條例

佛國領事館令

第一條 佛王總領事館ノ許可ヲ經スレテ雜
誌小冊子印刷物支那新聞等ノ發行所ヲ設
クルヲ得ス

第二條 前條ニ關シテ許可ヲ請フ時ハ責任記
者及其發行ノ目的ヲ明記シ且ツ出願ト同時
ニ出版會社條例ニ基キ積立金ヲ爲スヘシ

第三條 若シ許可ヲ受ケタル場合ハ如何ナル
印刷物雜誌新聞タリトモ印刷後直ニ佛國
警察署及總領事館ニ其謄本一通ヲ提示セス
シテ之ヲ配付スルヲ得ス

第四條 警官カ公安若クハ道德ヲ阻害スル印
刷物ヲ発見スル場合ハ責任者タル記者若クハ
作者并必要ノ場合ハ印刷者ニ會審衙門之ヲ

検査ニ法律ニ反ヒ處罰スヘシ

第五條 第一條ノ規定ニ背キテ設置セラレタル

発行所ニ對シ警察ハ直ニ之カ閉鎖ヲ命シ且

ツ會審衙門ニテ處罰スヘシ

第六條 本報令ハ發布ノ日ヨリ有効ナリトス

第七條 警察署ハ本報令執行ノ任ニ當ルヲ

ノトス

チ九百十九年六月二十日

佛國總領事 ウイルゲン

外務省

一〇六

外務省
本省着

大正七年八月

廿四日 前八、三〇

外務大臣

佐藤總領事

第四五九號

郡司より大臣へ

第一六五號

（不明）より村長へ
おのづから取り次ぐ

販賣し始
ては、おのづから取り次ぐ

送付
ては、おのづから取り次ぐ

新聞
ては、おのづから取り次ぐ

寛政
ては、おのづから取り次ぐ

（留）
（番）

ハ我等過激派ト同様ノ見解ナリ
シ其此播トシテ東京及横濱ノ社会党
員ハ寄セテハ書状ナリヲ掲載ニ居リ
右新聞ハ御参考ニ為テ郵送ス

（長春經由八月廿五日）
（自一、四〇）

附屬書類添附

大正七年八月

主計課

第二課

第24141號

公第一九號

大正七年八月二十二日

在黑河

外務書記生 郡司 智 啓

要目付了

第二課 庶務

外務大臣男爵後藤新平殿

由後方

ウエルフネウジンスク市費以新市

送附之件

往電第一六五號以之中進出

ウエルフネウジンスク市費以新市費及市送

附費条子七ウ配計市成配付中

進修教員

要翻譯

大正七年 九月九日 起草 皇山沢

送第

號

主任

主管

(一九百十年八月 曹発行露我^{ラッエントロシベリ}中央西伯利^レ掲載)

西伯利出兵ニ反対^{ナル}日本社会主義者

日本社会主義者ハ第一次日露戦争ニ反対セト同シク

第二次日露戦争ニモ反対ナリ。

總テ

吾人ハ一九百五年朝鮮ニ於テ戦端ヲ開始セシ日本政府

ニ對シテ爲セル日本社会主義者、断然タル抗議ヲ記憶ス。
（明カニ）

吾人、此断然タル抗議が日本政府側ヨリ未ダ悔ミ無キ

苛酷ナル追及ヲ受ケタル事ヲ知ル。
（白露） 戦中 現今戦後

日本政府、常ニ数多ノ不平ヲ惹起セン事ヲ恐レタリ。然

レ共、程経テ反動ハ各方面ニ現ハレタリ、即チ總テノ社会

主義的新聞紙ハ、（刊） 廃セラル、總テノ社会主義者、過激主

義者等、團體ハ解散セラルタリ。
（ヲ余） 所謂土羊徳事件

ハ此反動ノ最モ極端ナルモノナリキ。我等、善喜哀ナル日本

裁判モナリ、訴追モナリ

同族^肥或ハ死刑ニ変セウレ、或ハ獄ニ投セウレタリ。其時ヨリ

日本ニ何等ノ社会主義的團體モ無カリキ、各伯ノ社会

（西路玉）

主義者ハ^コロマノフ朝時代ニ於ケルヨリモ一層苦酷ナル追跡ヲ

受ケツアリ。然レ共社会主義ハ滅セザリキ、然リ社会主義ハ

滅スルヲ得ザリキ。何々、小ナル社会主義的團體ハ各都市

例ハ東京、横濱ニ存在ス。下記ノ露玉同族^肥ニ此テタル

書面ハ横濱及東京社会主義者團體ノ最初統一聯合會

能新^{ナリ}。横濱及東京ノ社会主義者ハ西伯利出

ト 務 目

ボリニエヴィスム

兵ニ反対シテ起テリ。彼等ハ露國過激主義ノ見解ヲ持セリ。

最モ保守的^た國家ニ於テ社会主義者が全世^界革命ノ重要向

題ニ對スル自己ノ見解ハ正確ナル特徴ヲ発輝シテ起テハ吾人ノ

非常ニ快トスル事ナリ。

尚一層吾人ノ快トスル事ハ中産階級者、新南ノ間断ナキ

罵詈ヲモ拘ラズ我過激思想が斯クノ如キ大ナル影響ヲ日^本

本勞働者ニ對シテ與ヘタルノ事ナリ。

日本勞働者ハ現時ニ於テハ西伯利出兵ヲ防止スルニ足ルノ力

ヲ有ヤズ。幾百ノ社会主義的著書ハ日本ニ於テ最近四

十年前ヨリ燃棄セリタリ。然レ共其ヲ日本ニ於ケルフストライ

キレノ起ル事幾百ナリシヤヲ知ラズ。或暴動ハ無カヲ以テ

鎮壓セリ、流血、死傷ノ惨劇ヲ演ゼリ。帝ハ日本国民

ニ課スルニ重キ枷ヲ以テセリ。日本労働者ハ漸クニシテ自己ノ力

ヲ認メ始メタル。然レ共彼等ハ既ニ革命的精神ヲ表現セリ。
(ニ過キス)

此精神ハ成長スレ、而シテ外部ニ向ワテ爆発セシ。

吾人ハ我日本ノ同胞ヲ歡迎ス。彼等ハ深キ同情ト衷心ヨリ

ノ同感トテ受ケタル事ハ吾人ノ光榮トスル処ナリ。

千九百十八年七月十九日

露國同胞諸君、

露國革命ノ最初ヨリ吾人ハ喜悅ト深甚ナル同情ノ念

トヲ以テ貴下等ノ敢為ナル行動ヲ看タリ。貴下等活動

ハ吾人ノ心理ニ大ナル影響ヲ與ヘタリ。

現時吾人ハ各種ノ理由ニ依リテ我政府ノ西伯利出兵ニ對シテ

死心嘆ヲ以テ接セリ。此ハ勿論、貴下等ノ自由ナル進取ヲ阻

革命ノ進取ノ

害。スルモノナレハナリ。吾人ハ貴下等ヲ威嚇シワール吾帝王主
義政府ノ行動ヲ防止スベキ力ヲ有セザリシヲ事ヲ
深ク遺憾
トス。

吾人ハ何事ヲモ為シ得ザルノ状態ニ在リ、政府ハ吾人ヲ追
及スル事急ナレハナリ。

然リト雖モ吾人ハ確信ス、革命ノ赤旗ハ近キ将来ニ
日本全國ニ飛ランコトヲ。

此書函ト共ニ吾人ハ貴下等ニ贈ルニ
此書函ト共ニ吾人ハ貴下等ニ
吾人が千九百十七年五月

一日、会合ニ於テ、議決セシ革命軍告発書、寫テ以テス。

茲三
東京及横濱、又華社会主義者團委會ハ革命
的歡迎ノ意ヲ致ス。

日本社会主義者團委會、革命軍告発書

吾人、日本社会主義者ハ、千九百十七年五月一日、東京ニ会

合シ、吾人ノ露西革命ニ對スル深甚ナル同感ノ意ヲ

表シ、~~並~~併セテ吾人ハ露西革命ノ主義ニ服スル者ナル事ヲ明ス。

露國革命ハ一面 中世紀、專政主義ニ反シテ立テル 市民、政治的革
命タルト同時ニ他面 現代、資本主義ニ反シテ起テル 細民、革命
ナル事ヲ認ム。

露國革命ヲシテ 全世界的社会革命^(改)タル事ハ 只ニ 露國社会
主義者ノ事業タルノミナラズ、實ニ 全世界ノ社会主義者ノ使
命ナリ。

資本階級ハ 既ニ 現在ニ於テ 最大ノ発達ヲ 遂ゲタリ。 全然資本
主義ノ時代ハ 到来セリ。

世界ノ社会主義者ニシテ ^{資本主義} 階級主義ノ理想家ニ欺カルヲ欲セザ

ルナラバ宜シク世界主義ノ見地ヲ強固^ニ持セザルベカラズ。世界細

民ハ全カヲ尽シテ吾人共^ニ同ノ仇敵タル國際的資本主義

ニ對抗セザルベカラズ。斯ル手段ニヨリテノミ細民ハ自己ノ歴史的

使命ヲ全フス事ヲ得ベシ。

露^日及全世界ノ社会主義者ハ全カヲ尽シテ戦争ヲ終結セ

シメ、^{且つ細民ヲシテ} 漸進的ニテ^現今同胞ト戦ヒ、アル武器ヲ自己本国ノ

上^流階級ニ向ケシムルヲ助カセザルベカラズ。

吾人「露」社會主義者並世界同胞、勇剛ヲ信賴ス。
吾人「衷」革命精神、斷一書十千傳播ヲ確信ス。

東京社會主義者團実行委員會

文書課長

大正七年九月十一日

接

16

大正一年

月

日起草

別紙

同七年

九月

十一日

附

大正七年九月十一日發送済

松屋

贈送第

六七號

第

表

主管



第門

第二課

小橋内務次官

幣原次官

ウエルフネウジンスク市発行

針ヶ江に、スミハ件

本件：卷二 集三 五 郎司

書記生果主 貴 覽 雲

之 同 官 日 不 武 行 丁

武 送 附 后 部 亥 二 付 祇 文 丁

送 之 右 茲 二 及 卿 送 附 亥 也

造 而 新 守 武 二 卿 用 諸 上 六 卿 送

庚 卯 來 渡 亥

王 思 公 卿 司 書 記 生 果 主 不 第 一 五 卿

附錄新丁或五
六文軍
附
1



T

8

2

大正八年三月十日 接受

陸軍省

第三課

陸同文

三月七日

電報

三月七日 午後二時 午後七時十五分 發

次長

宛

在

東少將

支極秘第九九号

昨日發共同通信ハ對支軍策破ルト題シ四ノ閣議ニ於

テ對支問題詳議サレ有藤中將及以西少將ハ無論國防

軍練成中我將校ハ返還サルヘシタト朝日新聞ノ記事ヲ

電報シ来タリ又三ノ五東京通信トシテ日本カ表面ハ和平ニ

賛成シツソ裏面ニ於テ北方對新報支持ニツツカ如ク世間

ニテ吹聴シ居ルニヨリ差當リ目下北京ニ於テ群疑ノ焦

點トナリ居ル有藤中將ニ返還ハ登ストノ記事朝日ノ新聞

ニ掲載セラル 又有藤中將ニ對スル外字新聞ノ記事ハ略モ

第 門

電報

號02633受發

我公使始々日本ノ支對策ヲ最モ熾ニ攻撃セシメ、二月中
 旬ニ於テ青島中將ハ二十萬圓ノ秘密借款ヲ支那側ト協議
 シツアリト記シ又他ノ新聞紙ニ軍事協約ノ改訂ナク走シ
 ツツアリトノ記事ヲ記載セシメ其後何等記載スル所ナシ
 然ルニ其後日本内地通信ハ故テ群疑ハ遂々生リタル中
 外人ノ疑惑ヲ起シタル様相動スルハ眞ニ奇怪堪ヘス此
 等ノ疑惑因テナシ昨ヨリ新民國報ハ新濟報（濟南）
 ノ記事ナリトシテ一齋藤中將ハ西原龜藏ト共同

山東ニ於テ獨逸ノ權利ヲ継承シタルハク
 最近蒙古ニアル露國ノ權利ヲ継承セントシ全ク日本政府ノ意
 圖外ニ在テ行動シツツアル等掲載スルニ至リ以テハ頻々トシテ日本

通信力同中將ヲ中傷スル結果八日本ノ威信ヲ傷ケ外人ヲシテ
日英離間ノ策ヲ逞クセシムル結果トナリ甚タ憂フヘキコトナリ
依テ昨夏後支極秘第九ノ事ノ如ク何等ノ取締ノ方法ヲ
講セシメタリ

社友極秘ノ十六號

海外へノ通信及電ノ取締ヲ要ス

受29923

二〇二

大正八年九月二十二日

在揮春

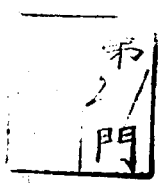
副領事

秋洲郁三郎

外務大臣子爵内田康哉殿

醒世小説英雄淚送附二周スル件

別包添附ニ係ル醒世小説英雄淚一鶴林冷血生著
上海廣益書局總發行所ナル不穩出版物當地
西門内露店本子玉ナル者之ヲ發賣致居候ニ付
購買一覽見致候處其ノ内容不隱ニシテ時局柄
支鮮人ノ好奇心ヲ煽リ鮮人ノ不逞思想ヲ激發



スルモノト認メ候ニ付不取敢支那側ニ對シ右書冊
ノ發賣頒布禁止方交渉致置候右ハ既他館
ヨリノ報告モ有之候ユトト存候得共一應報告旁
此段申進候敬具
本信字發送先
在文公使

大正八年七月

福州

福州閩報劉宗偉攻擊事件

卜
房
自

大臣

次官

七

政務

通商

人事

會計

文書

條約

號

一三六
(勝)

北京發
本省署
大正六年七月
十音五五。

内田外務大臣 小幡公使

第九九一号

本官發福州宛電報、七月十二日

第四五五号

貴地發行、國報が過般來福、電

氣公司總理劉崇偉、攻敵手セル件

二閣、目下未燕中、同公司重役劉

崇倫ヨリ交通部中山顧問ニ張明陳情

抄
14

ノ次第アリタル處、右國報政擊ハ素ヨ
リ大臣宛機密ナリ。貴信ニモ所記ノ通り
劉崇倫ハ排日運動ノ主謀者ト目サレ
居ル關係ニモ依ルベク又之ヲオシメ
劉崇倫ノ辯明何處迄信ヲ置クベキ
ヤ不明ナルモ宛ニ角我々ノ新聞紙ニ於
テ同公司ト日本側トハ出費關係其他、
内情ニ至ル迄發キ立ルハ如何ニモ不利登
ト認メラルルニ付タル不取敢右ノ真ニ付
國報ニモ抑留置置アリタク、尚妥細

八上日發送ノ機密第一二号杜信ニ添付
セル中山顧問ノ報告ニテ帝査閱ノ上
実情ニ應ジ、然ルハク結果何分ノ帝國
報アリタレ。

外務大臣ヘ電報セリ。

(奉天經由七月十二日午後七時)

文書課長

大正八年七月廿五日接受

56



大正八年七月廿四日起草

同年八月廿五日附

別紙

大正八年七月廿三日發送

送第

第一課

主



軍公信体

主管

在支

小幡公使

在福

市林領事代理

駐米政府局長



村松益、西溪祥、馬牛、應順、
陳石、福知、同教、力劉、崇信、攻、
リ、建、路、シ、延、リ、日、本、側、ニ、不、利、甚、カ、
影、響、ノ、興、ハ、一、件、同、シ、ハ、本
日、本、友、リ、到、陣、軍、ノ、通、リ、新、信、ノ、
下、村、以、以、長、友、中、入、レ、軍、ノ、衆、
軍、ノ、衆、中、村、松、江、等、其、為、十、五、
村、松、江、等、其、為、十、五、

信、松、江、等、其、為、十、五、
村、松、江、等、其、為、十、五、

再回

二
文書課長

大正八年七月廿五日接覽

317

大正八年七月廿四日起草

レレ七廿五

大正八年七月廿五日發送濟

政務局長 伍

第一

植原政務局長

台灣總督府

下村民政長官宛

初像 物像



相原益、以漢祥、以奉慶頌
以陳若美降懷會神助下、福



州於之發行、之國報、先級
表其紙上、於之類、初則電燈
公社及長創案、對之攻擊、如
且之公社、内怪殊、之日本例
ト、資本國係及借款國係、紙上
於之、其、之日本例、及、不
利益、之影響、之、之、之、
日領事代理、之、之、之、
之、之、之、之、之、之、

對レ雨三注意ヲ興ハルニ拘ルベシ
 高ホキ態度ヲ改メサル由ニ有之カ
 今報、劉崇偉攻撃ハ劉力這回
 排運動、首謀者アリト云フ、職由
 不儀カトモ被考者一若ク攻撃力
 延テ知人ノ事業ニ妨害ヲ興アルニ主
 觀點スヘカラン
 又今報ノ監督ハ恒ニ

夕 月 今

之ヲ欲奉ニ依ルニ山中主

群ニ在リテ充分其義ヲ示ス

ルハ其ト考ヘリニ拘ラズ金ヲ領

事ノ方針ヲ顧念スルニエトナリ思慮

ナキ群衆ヲ強統シ居ルカキハ

講心也北ノ至リ有レ以テハ貴

討ノ以テ方針トモ皆致スル儀ト

在信外亦欲事ヲ求ム此上進

方公然之取綽、措置之執ル、已
以得サハニ至ラシム、ナカニカ
國下ニ傳、山中ニ符、對シ可
此意、興ニシ、標布、爲ニ、
其、乃、以、依、賴、中、道、行、
智、見、

ふに於ル一を不ト考へるに於て是を言ふ所ノ一
針ヲ船名タルトモ思ハレ得ル針ヲ船名タル
やキハ遠慮しむる事ト爲るに非ざる針ハ
昔年教をり給ト云行りて今も其ノ上通るに然
るに其ノ針ハ昔年教をり給ト云行りて今も其
ヤカウと云ふ事ト云ふ事ト云ふ事ト云ふ事
リ與へるに於て是を言ふ所ノ一を不ト考へる
ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

針の針

針の針

針の針

針の針

卷之五

卷之四

王下人

被授10745號

大正八年九月九日接受

要旨

陸務局 7 第一課

審部



臺參謀第二二。號

大正八年八月十日

臺灣總督府陸軍參謀部

南支特報第三一號

福州閩報，劉宗偉攻擊閩省問題

福州「閩報」ノ劉崇偉攻撃ニ關スル問題

在福州電燈會社社長劉崇偉カ排日ヲ煽動シ親日派ノ商務總會長黃秉榮ヲ陷レタル行爲ニ對シ「閩報」ハ憤慨ノ餘リ攻撃ノ銳鋒ヲ電燈會社ニ差シ向ケシカ之カ爲中華電業會社社長小松謙次郎ヨリ遞信省米田通信局長宛ニテ閩報記事取締方ヲ要望シ又北京中山技師ヨリ下村民政長官宛別紙ノ如キ來翰アリシ爲民政部側ヨリ「閩報」社ニ注意スル所アリシカ主筆山中寛太郎ハ終ニ辭意ヲ漏スニ至リ一問題トナラムトセシモ臺灣銀行ノ斡旋挽留ニ依リ辭意ハ思ヒ止マレリ然レトモ森領事ト山中主筆トノ連絡協同意ノ如クナリアラス今ニ了解セサル點アル爲新聞記事ニ於テモ今回ノ如キ問題ヲ惹起スル

ニ至レルヲ察知セル下村長官ハ之カ善後策ノ一ツトシテ陸軍部派遣將校ノ
斡旋調訂ヲ依頼シ來レリ依テ小見山大尉ニ個人トシテ相互ノ間ニ斡旋シ互
ニ意志ヲ疎通セシムル如ク盡力スヘキヲ注意シタリ兎角出先キノ日本人ハ
些細ノ事ヨリ確執反目スル風アルハ豈ニ福州ノミニアラサルナリ
此ノ團結心ニ缺ケル點ハ即チ今回ノ排日行爲ニ對シ斷固タル對抗策ヲ爲シ
得サリシ一原因ヲナセルモノナリト信ス

【大正八年七月十日附中山龍次發、民政長官宛拔萃】

第一 福州電燈會社重役 崇倫談話ノ大要

一 閩報ノ劉崇偉（電燈會社社長）ニ對スル攻撃

六月以來殆ト毎日閩報紙ハ劉崇偉並電燈會社ニ對シ極力攻撃シツツアルハ別紙閩報ニ見ルカ如シ其ノ大要ニ

イ 福州電燈會社ノ用フル電燈機械、材料ハ凡テ是日本製ナリ石炭モ亦日本炭ナリ若排日貨ノ目的ヲ徹底セムト欲セハ宜シク劉ノ所有スル電線機械ハ是ヲ燒却スヘシ石炭ハ之ヲ河中ニ投スヘシ而シテ之ニ代フルニ米國炭ヲ使用スヘシ云云

ロ 最近ニ至リ閩報ハ電燈會社ト日本ノ關係即チ日本ヨリ出資シ居ルコト又ハ幾何ノ借款アルコト等ヲ紙上ニ發キタル爲北京交通部ノ最近方針一電燈會社ノ資本中ニ外國ノ出資ヲ許サス又營業權ノ抵當ヲ許サス

若之アルトキハ此ノ際執照ヲ下附セストノコトニ依リ許可ノ取消ニ
遇フヘキヤモ知ルヘカラス然ルニ從來電燈會社ハ社長初メ重役ハ凡テ
日本留學生ニシテ日本ノ資本ニ依リ日本ノ機械材料ノミヲ使用シ現ニ
昨年住友銀行ヨリ支那興業會社ヲ仲介シ銀二十五萬弗ノ借款ヲ起シ又
三井ヨリ約二十萬兩ノ材料ヲ購入シ其ノ大部分ハ今尙未濟ニ屬セリ此
ノ如キ密接ナル關係アルニ係ラス日本新聞ヨリ前記ノ如ク攻撃セラレ
所有ノ材料ヲ燒失セヨトカ海中ニ投セヨトカ煽動的文字ヲ列記セラレ
萬一其ノ災難ニ遇フトキハ未濟ノ代金ニ對シ何人カ果シテ責任ヲ負フ
ヘキヤ

二 劉崇偉攻劉ノ原因

閩報カ劉崇偉ヲ攻撃スル原因三アリ

其ノ一 劉崇偉及林天民等ハ今回排日ノ張本人タル林長氏ト相應シ福州ニ於テ排日運動ヲ爲シタリト誤解シタルト（劉崇偉ハ崇偉等カ排日運動ヲ爲ス云云ハ誤傳ナリト辨解セリ）

其ノ二 閩報ハ劉崇偉及反對ノ人ヨリ金錢ヲ受ケ居ルニ相違ナシ

其ノ三 日本人ノ電機材料販賣店ニ平和洋行ナルモノアリ盜電方法凡ソ十七種ヲ工夫シ該盜電法ヲ支那人ニ傳授シ且之カ取付ヲ爲シ現ニ昨年一箇年ニ於テ二十萬圓以上ノ材料機械ヲ販賣シタル惡德商人ナリ彼ノ

友人ナル公隆洋行カ先頃盜電セルコトヲ發見シタルヲ以テ會社ハ直ニ
送電ヲ停止シタルニ該洋行ハ大ニ憤慨シ後雖ノ目的ヲ以テ電燈會社ニ
對シ非難攻撃ヲ逞フセリ

以上ノ如キ原因ヨリ閩報ハ劉宗偉ヲ非難攻撃スルモノナルカ若之ヲ此ノ
儘ニ放任スルトキハ却テ一般ノ排日氣運ヲ煽動スルノ結果ニ陷ルモノナ
レハ日本側ニ於テ閩報ニ對シ相當取締ノ途ヲ講セラレタシ云云

三 將來ニ及ホス影響ニ就テ

閩報カ日本留學生タル劉宗偉ヲ攻撃シ且彼ノ所有スル日本製機械材料等
ノ燒失ヲ煽動スルカ如キハ劉ノ排日運動ニ對スル後難的行爲ニ外ナラサ

ルヘキモ昨今閩報ノ攻撃ハ稍脱線ノ氣味アリ即チ電燈會社トノ借款關係ヲ素破抜クニ至ツテハ不知不識ノ間ニ日本ニ不利益ナル影響ヲ齎スニ至ルカ故ニ大ニ注意ヲ要スル所ナリ左ニ其ノ事實ヲ記セムニ
其ノ一 懸案中ノ借款問題

中華電業會社社長小松謙次郎氏ノ來信ニ依レハ

今回福州電燈會社ハ一百萬圓ノ借款ヲ起サムトシ中華電業會社ニ於テ之ヲ引受クルコトニ交渉シタルカ最初中華電業會社ハ會社ノ營業權ヲ擔保トシテ提供スルコトヲ要求シタルニ最近交通部ハ全國電燈會社ニ命シ營業權ヲ擔保トスルコトヲ嚴禁シタリ之カ爲電燈會社ヨリハ

「營業權ハ官廳ノ許認ヲ得難キニ付擔保ヨリ除クモ後日官廳ノ許認ヲ得ル時機ニ至ラハ直ニ擔保ニ供スルコト」

ノ覺書ヲ取り契約ヲ締結スルコトニ内定シタリ然ルニ突然劉崇倫ヨリ電話ニテ

「交通部ハ督軍ヲシテ會社ノ資本中ニ日本ノ出資アルヤ否ヤ營業權ヲ抵當ニ提供シアルヤ否ヤヲ内密ニ調査セシメツツアリ交通部ノ目的は邊ニアルヤ不明ナルモ何分不安ナルニ付契約ハ一時見合セ劉崇倫ハ之カ爲北京ニ急行ス」トノ報アリ右内情承知シタシ云云

右小松社長ノ來信ト劉崇倫トノ談話トヲ綜合スルニ聞報紙上ニ借款關係

ヲ曝露セラレタル爲電燈會社ハ一面ニ於テハ進行中ノ契約ヲ一時見合セ
又一面ニ於テハ交通部ニ辨解ノ爲~~劉~~崇倫ヲ出京セシメタルニ外ナラス
前述ノ如~~劉~~等ハ一面ニ於テ排日運動ヲ爲スモ一面ニ於テハ從來モ亦今
モ尙日本資本ニ依リ事業ヲ經營セムトシツツアルノ事實ニ鑑ミ閩報紙ノ
攻撃ハ其ノ程度ニ於テ極メテ慎重ノ考慮ヲ要スルモノト認ム

第二 林長民ノ計畫セル福建水力電氣事業該事業ノ如キハ資本金二千萬
圓ヲ要スルノ大事業ニシテ林ハ專ラ米國ノ資本ニ依ラムトシテ運動シ
ツツアリト聞ク而シテ本事業ノ如キハ何トカシテ本邦ノ資本ト技術ト
ニ依ラシムル様我官民ノ努力ヲ要スルモノナルカ今日ノ場合斯ル問題

ニ就キ林長民ニ接近スルコトハ極メテ困難ナルハ言ヲ俟タス。唯此ノ際
採ルヘキ手段ノ一トシテハ福州電燈會社ノ劉林一派ヲ通シテ關係ノ端緒
緒ヲ開カシムルニアリ果シテ然リトセハ今日ノ場合該電燈會社トノ借
款關係其ノ他ニ就テハ慎重ノ態度ヲ採ルヘキモノト認ム又劉崇倫ノ談
話ヨリ察スルモ今日トナリテハ閩報力溫和ナル態度ヲ採ルコトヲ熱心
ニ希望シツツアルカ如シ故ニ此ノ場合ニ於テ閩報ト劉一派トノ間ヲ融
和セシムル様適當ナル仲裁者ヲ得ルハ時機ニ適シタルモノニアチスヤ
ト思考ス

追テ本文ハ小幡公使及通信局長ニモ提出致置候爲念

陸	參	
軍	謀	發
次	次	送
官	長	先

外務省

文書課
長檢印

政一送第

四四號

大正八年九月拾壹日 發送済

大正八年

九月

十一日

大正八年九月拾壹日 接受

印

外務省事務課

政務局才一課

別紙

福川周助
劉宗清次子問題

川濟二付及御返戻候也

別紙

初受一〇七四五号
要安取

其儘添附

大正八年九月

奉天

奉天蒙文報記載文取締方ニ関スル件

圖書類添附

秘授10536號

大正八年九月三日

主計政務局

第二課

幾字

三七四

號

大正八年八月廿八日

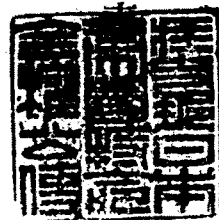
在支那

特命全權公使

小

幡

四



外務大臣子爵 内田 康 哉 殿

大正八年八月廿八日附在奉天赤塚總領事宛機密 第六一號寫
送付

奉天蒙文報記載文取締方ニ關スル件

別紙添附

寫

機密第六一號

大正八年八月二十八日

在支那

特命全權公使 小幡 幽吉

在奉天

總領事 赤塚 正助 殿

奉天蒙文報記載文取締方ニ關スル件

貴地發行ノ蒙文報ノ件ニ關シ過般外交部員本使來訪ノ際日本人力奉天
ニ於テ支那本國人ノ未々發行セサル蒙古文新聞ヲ發刊シ蒙古族獨立ヲ
嚮導セルカ如キ論文記事ヲ掲載シ蒙古人ニ對シ煽動の言論アルハ支那
政府ノ甚々迷惑ヲ感スル處ナリトテ奉天督軍ヨリ中央政府ニ對シ送付
シ來レル別紙添付ノ漢譯文ヲ提示シ日本官憲ニ於テ可然取締方取計ヲ

在支那日本公使官

別紙添附

煩シ度旨申出候依テ本使ハ日本人力奉天ニ於テ蒙文報ヲ發行スルハ尙
外國人カ支那各地ニ於テ漢英佛文等ノ新聞ヲ發刊スルト同様何等異ナ
ル所ナク該報ハ主ニ蒙古ノ開闢蒙古人ノ智識普及ヲ趣旨トシテ發行シ
居レルモノト認メラルル處提示アリタル譯文ニ依レハ文意穩當ヲ缺ク
ノ嫌ヒアルニ付蒙文力果シテ譯文ノ通リナルニ於テハ今後相當注意取
締方可然取計ハシムヘキ旨答ヘ置キ候就テハ別紙寫ノ譯文力果シテ蒙
文ノ原文ト相違ナキヤ一應取調ノ上若シ右譯文ニ誤リナシトセハ該文
ノ如キハ獨リ支那政府ニ對シ穩當ヲ缺クノミナラス朝鮮人ノ米國大統
領ニ對スル上書ヲ引用スル等我方ニ於テモ相當注意ヲ要スヘキ次第ニ
付貴官ヨリ該報經營者ニ對シ嚴重戒告ヲ與ヘラレ尙蒙文ノ全部ヲ蒙文
ニ通セル日本人ヲシテ豫メ査閲セシメ日支兩國ノ邦交ニ障害アリ又ハ
過激ノ評論記事ヲ記載セサル様御注意ノ上相當取締方御取計相煩度此
段申進候也

本信寫送付先 内田外務大臣、

譯 奉天學大報第三十五號
中華民國八年四月五日載

(後)

南方自主與外蒙建國

當國家改革內政之時凡百待興諸務刷新庶政舉此意中
事也返觀中國則何如自改建以來內則黨爭未已外則邊疆頻
警中央政府目前寔無撫綏平定之能力如仍因循依倖於
此而不自謀則非愚即顛耳通月以來南北兩方似有覺悟均
以外交危急如不速謀內國平和甚恐國家亂亡不免乃由雙
方各舉激議和代表遣赴滬濱南北和會甫經開幕不意北方
側屬陝西督軍陳樹藩將在陝南軍指定為匪攻之南軍司令
于右任當急電飛聞唐紹儀後南方當局暨各代表均以北
廷毫無誠意言和於是南北和平會議遽遭停頓
現在護法諸省均行倡言自主論調南方側屬廣東廣西福

連雲南桂卅四川等省聯絡一體現正竭力運動自主此南方之現狀也

北方羣雄得悉南派實情亦行籌備對峙方法今忽發現奉天直隸河南安徽山東五省聯絡一致行動之事再長江三督軍亦預備宣告中立於南北不作左右袒

由此觀之且不言共和五族若何即以中國本部漢族而論外人不亡而自亡之外人不分而自分之嗚呼惜矣

南北執政諸公惟以權利意見之爭竟敢違反輿論不顧人民犧牲國家是誠何心是誠何心

吾族同胞試思若夫甘為奴隸夫復何言專候與漢族同為奴隸已耳倘不承認為奴為隸吾族請從今日始急起直追步外蒙暨波里雅脫之後塵出成吉思汗子孫於水深火熱之中進而建設邦國使蒙古二字再興於天下是乃克享永久的幸福矣

至其進行策略不似先前危險不必預備軍事行動更無須背
叛中國不觀外蒙政府乎現已派妥專員遣赴法都巴黎萬國和
平會議擬不久即向主持正義各國提出建設蒙古獨立國情形
於公會要求承認（此事前曾登載本報係中國駐歐特使電政府者）於此切望我內蒙王公大爵特
別注意來外蒙將建國問題提出公會時機可共同向駐京各
國公使運動誠為最有希望之事一載一時機不可失機不
可失

譯

奉天蒙文報第三十三號
中華民國八年五月廿三載

(後)

波里雅脫建國與蒙族之關係

我蒙族猛醒我蒙族猛醒此非可酣睡正濃之時也世界最有威名歷史最有榮譽之種族將淪胥矣現在歐洲大戰已停強德武力已屈尊重文明之協約各國已獲十五分最後勝利噫此已非弱肉強食之時矣

協約國為維持人道尊重文明計毅然犧牲無數生命財產所以謀世界永久的和平也

強暴德國既未得逞其宰制世界之野心協約國勝利後在法都巴黎開萬國和平會議其會長為美總統威爾遜氏曾宣言公會云為鞏固世界永久的和平起見予各小弱國以自立權其有寔力者並予以建國權自此宣言發表後世界已亡之各小弱國

各小弱民族迭聽臆歡額手稱慶均謂上帝加福無量英屬愛蘭
脫離英人自行建國英被分於協約國之猶太民族亦向協約國請
准自主現正預備在伯利士坦建設政府暨俄屬芬蘭亦是我國內
亂機會再造新邦政府組織已經就緒矣

此外有無實力之各小弱亡國因其不能獨立乃向其保護國要求
得有種種重要條件抑乃英之屬也而能於此次歐戰之役供給
最多數之軍隊協助宗國戰勝勁敵緣此去冬英政府改組內閣時
俾印人商賈一席此事實屬創聞此即導環球小弱民族自決之
先聲也餘如高麗亦曾上書威大總統請願自主韓人之事不易成功
雖然其人民之中豈非尚有愛其種族之人乎願我蒙族其猛醒哉
值此世界縱橫使節往還之際千金一刻稍縱即失既往者之不可
究知來者之猶可追茲聞東亞波里雅脫種族運動獨立大概不
久即須告厥成功考波里雅脫種族前史實係我蒙族之支派當

滿清肇興之時興安嶺迤南蒙族羨有清軍^軍威來歸者即今之波里雅脫是也時有蒙古豪傑噶拉坦氏愛惜種族不令亡於他族乃率其部落在俄國極東中國極北自成一波里雅脫族與元朝遺民同入俄籍將二百年矣余(記者自稱)在民國元年自庫倫陸路赴俄轉查波里雅脫生活狀態於我蒙古固有風俗習慣仍然存在並未更改此亦無非以佛教及文字言語維繫之故耳又因煊染俄人之文明故能有建國之實力也前此本報屢載波里雅脫運動獨立情形閱者注意綜而言之波里雅脫如能建設獨立國家實與我蒙族前途有至大之利益愿我熱血同胞急起直追也可

大正八年十月

53
唯一日報論說ニ關スル件

康武田

受29905頁

大正八年十月 貳日接獲

警察廳

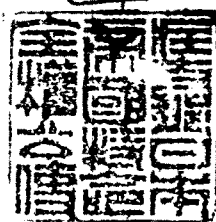
第一課

公第三七八號

大正八年九月二十日

在支那

特命全權公使中樞



外務大臣子爵内田康武致

惟一口報、少危機、恐之、海況、報告、件

各地漢字、形、印、中、實、發、件、表、比較、的、完、備

一、二、少、穩、健、主、義、之、持、之、惟、一、口、報、人、九月、二十

一、二、少、社、會、權、一、君、九、十、一、區、名、一、口、報、人、危機、レ

題、ス、人、東、京、通、信、之、招、義、我、各、候、處、有、多

分、在、東、京、西、學、生、通、信、レ、覺、レ、比、較、的、真

面目ノ論評主張ニシテ其物質上精神上
日本ノ危機ヲ指摘シ日本國民政府ノ徹底
セム改悛ヲ希望シ真正ナル支ノ善善ヲ提
ノ機會アリトシ如待セムハ其結論四ヶ條
声咽レ共ニ他山ノ石トシテ其價値アルヲ認
軍閥官僚攻撃ノ辭ヲ奪回氏ヲ討切ニ革命
ノ鼓吹スルノ嫌ヤムノ一カヲ事旧思想ノ革
老一節ノ故ヲ我國侍ノ攪乱セシメスノ一
語性々不敬ニ涉リ或ハ附會曲解ノ言ヲ弄ス
ム意アリ甚々遺憾ノ極ニ付右ハ篤ニ研究嚴
正糾明ノ方ヲ講スベクモ不取敢右全文別紙
通譯此上告査閱候也

日本ノ危機

東京君左通信

吾人ノ日本ノ危機ヲ言フニツノ意味アルナリ
明白ノ説カサレハカラスンニナリ

第一 凡ク人類ノ幸災樂禍ノ根性ナシ相互
扶助友愛的ナリ其猜忌怨恨スルノ至ルハ一
味ノ誤解ト野心ノ過キズ吾人カ日本ノ危機ヲ
説シハ日本ノ擾亂ヲ喜フ、即チ日本ノ自カ
覺悟ヲ希望シ然レ後日本西國カ提携ノ
機會アルコトヲ知スナリ

第二 日本西國ハ國際的ニ一種看透セサル處
アリ、看透スル能ハス許多ノ誤解ヲ生ズルハ
以テ許多ノ誤解アリ許多ノ愚観ヲ生ズル
ニ至リ是ハ支交患ノ根本的の原因ナリ其看透

支トシテハ支那人ハ只タ日本ノ強ク知ラシ其ノ
 危機ノ伏在スルヲ知ラズヤ本ノ人只タ支那ノ
 弱ク知ラシ其與國ノ強ク知ラズヤ其ナリ後
 言セバ日本ノ人ハ自己ノ強ク知ラシ而己ノ危
 険ヲ知ラズ支那人ハ只タ自己ノ弱ク知ラシ而
 己ノ大ニ為スルヲ知ラズ其ナリ是ト都テ楯ノ半
 面ヲ見ルハ吾人ハ今楯ノ面ヲ見ニレス故ハ
 日本ノ危機ハ構ヘヤ日本ノ人ノ知レキ事ナリ
 ナス即チ是レ支那人ト云フ知ルキ事ナリ孫
 子曰ハク己ノ知リ彼ヲ知ル而後百勝スト是ナリ
 第三支那人ノ元來一變ノ畏留癖アリ外國ノ
 強ク聞クテ之ヲ羨望スルモ摸倣セニトセス外
 田ノ己ノ弱キヲ聞ケハ乃チ驕傲ニシテ皆ナ拒シ

其ノミテ愛ナレシ醉生夢死、カシ送ル希清ノ
 末代、其最々金ニナリ、我々今ヲ將、其事
 既ス人國人、其枕ノ上、腰リク黄梁ノ大夢ヲ
 希サス、其サ精神ヲ、創新シテ主義ヲ定メ人ノ
 希己ノ想ハレム、存ク如斯ニシテ、初メテ吾人カ事
 題、負カサレモ、言ク、今中華人民、大団今、体
 度、シテ以下先ツ、其事、危機ノ流カレ
 其事、危機、西種、第一種、物質上ノ危機
 ナイ、其事、全西種、其ノ四、川一、大、過キス
 テ人、只ハ三千万ヨリ、五千五百万ノ多キ、至リ生産物
 ハ供給不足ニ加フル、其、其、以來、国内ノ工業、其
 カ、場、原料、人、其、不足、シテ、其、外國、仰ヤサレ
 カラス、近年、其事、有、歳、ノ、一、八、自給、自足、改、集

少福フルル土地限リテ工ヲ奏ス今ヤ物價騰
 貴レ生活ノ程受細音ト相等ト我東幸々
 雞卵一個十銭、ヲ毎食ノ漬菜、十銭ヲ要ス
 一斑ヲ知ルヤ、衣ノ食ノ生活ノ最要件ナリ
 日事々機導火線ハ乃チ衣ト食ト、隱在
 ス諸君吾人ノ毎口食フモノハ米ナリヤ亦四五
 來米凶熟ノ為ニ、幾多ノ人ヲ救ヒ幾多ノ
 亂シ隠ヤリ去年、寺内内閣ノ瓦解スル亦是
 ト米ノ為ナリ今年豊高而郭官吏ノ殺人案無
 タ米、凶ス初年ノ米騒動ハ幾トレヤ本全田、
 大華命ト考ラントモ、要スル、ヤ本ハ田小、人多シ
 米ト穀穀トハ比例供給ニカタク勢ヒ之ヲ外
 田、仰カサム、カラス、色ハ安南東、印、支那

才徳殺人
ノ法

洋群島及支那ノ如キ諸ナ是レハ米ノ
 供給スル地方タルニ或ハ輸出禁止或ハ天災
 人事ニテ之ノ米ノ收穫ノ得ス其ノ他朝鮮人
 僅カ、白足スルノ米ヲ賣シテ多ク米ノ故
 ハス四才國人民或ハ餓鬼ノ像ナキ、此ノ故
 日本專任ノ内閣第一政集トシテ乃チ米ノ救濟
 方法、苦心ス今ノ幕内閣ハ寧ラ北京政府ノ
 援助ヲ請ヒタルニ幸ヒシテ者漢人ノ民意
 順々解禁ヲ否決シタルヲ日本國民ハ益
 々恐慌ヲ起スル現ニ米價ハ一石四才今五
 圓以上ニシテ一般人民ノ苦々堪ヘタチ
 躍然トシテ動カシスルニ而テ今日本會ノ方
 面ハ、如斯更ハ「衣」ノ方面ヲ領ヘレカ
 衣ノ材料

中欠シハカサムハ棉花ト羊毛ナリ日本ハ棉花ト
 羊毛ナレ朝鮮支那棉花ハ日本ノ要力、計シテ強
 コレ杯水車薪ノ一之ヲ我國ノ仰ク、外他諸ナレ
 羊毛ノ如ク各國ノ供給ヲ仰クナリ支那ノ供給
 因ノナリ民國六年中棉花羊毛ノ日本ノ輸入レタ
 シ棉花ハ七億。五百万斤、羊毛ハ三億二千
 一百万圓、羊毛三千万圓、十三万斤、羊毛ハ五千
 二百万圓、ナリ其巨ヲ見ルニ、但ヤ日本人ノ長クハ
 輸入ノ棉花ハ羊毛ハ半分以上加工製造シ、上兩
 之、輸出スル、ナリ、輸出十ノ七八ハ乃チ支那ノ
 費消サレ故、支那ハ日本ノ原料供給國ナリト爲ル
 而カ、支那ノ貿易ノ收税ハ支那ハ毎年輸入超過セ
 リ是レ恥ナリ羊毛ニ至ルハ日本ノ獎勵計西ニヨ

二十五年後、毎年羊毛四百五十万斤ヲ繰ぐキ、
底需用ノ衣々ハ融ハルナリ、以上ハ等ノ衣食ノ
料ノ不足ハ、孰クヲ云フナリ

今日世界ノ強國ト稱スモノハ全ク器械、特ニ器
械ノ動力ハ全ク石炭石油、特ニナリ斯ク見來ル
石炭石油ハ燃料中ノ重要地位ヲ占ムモノナ
ラス又近代物質文明ノ衣食ニテ今ヲ繋鉄ニ
其後鐵汽船瓦多器流車、高船軍船等
隨傳松張セラル、鐵ハ燃料ノ需用亦増加ス
日本ノ以テ強キモノナリ、石炭ノ消費毎年約二
千五百万吨ニシテ、日本全國ノ石炭坑、其產額
豫計ハ九十億トン、ト既掘ノ十七億四千万吨
ヲ引去ルハ残スル五十三億三千万トンナリ、其年四分

一、實收操船数レスル、只十三億ト云ノ一又
 今日ノ製鉄工業、後進國等ノ毎年ノ擴張ノ
 趨勢ヲ按スル、石炭ノ消費ハ毎十年ハ一倍ノ増
 スル之、又、穀類、日本ノ石炭ハ向後三十年
 ニシテ空盡トナルナリ、石油、原料油ノ產出ハ
 年約三十五万吨、其原料油ノ製成ニシテ石油ハ
 約十萬噸ナリ、若シ全部ノ其海軍平時ノ用
 供スルモ三分ノ二ニ足ラス、故、日本政府ハ自國
 産油ハ之ヲ冬後ノ工業、海軍、商船、民用ナル
 其海軍用ハ之ヲホムネシ、蘭領ヲ買入ル
 輸入約二十萬噸、是スレバ明年々ハ之ヲ米
 田、仰^キ、海陸海軍ノ元ノ如様、軍用、海軍
 船ノ用ニ備ヘシス、其用意ハナラザルモノレシ
 入

鉛錫 運送アルモノニ一筆、至ルモノ事、有クハ極
 シ、少シ是レハ事ヲ或モ製造ノ原料ノ不足、致イ
 シモノナリ

上記ノ各端ニテハ事柄變上ノ不足ヲ証明スル
 是レハ事物質上ノ危機ナリ、故令ハ不食原料ノ
 不足、至ルモノ事、因テハ多ク凍餓ノ憂アリ、燃料亦
 料ノ不足ハ精巧ナル機械ノ完善、使用レ難ナル
 ナリ、或モ製造ノ原料ノ不足ハ手ニ寸鉄ナリ
 空拳、或モ事ヲ欺服スル能ハサルナリ、故、其種々
 ノ不足ハ日本ノ死命ヲ制スルモノナリ、此ハ如何ナル事
 ニシテ野心ヲ再生セザレム、レハ日本若シテ前非ヲ痛改
 スルハ、疾苦ニ其山ニ窮水盡ルノ日ハ便ナレ
 臨終易策ノ時々々ニシテ然リ、日本ノ危機ハ尚ホ

止る者なり以下更に其精神上之危機ヲ説カ
須シクシテ物質上之危機ハ萬事補救ノ法アルニ而
カモ革命的主動原因タル精神上之危機に至ル
到底物質上之危機ノ比シテ非人ナリ佛國ノ革命ハ
貴族專横横税ノ苛重國民ノ不平不満ヲ致
シタル一原因スレタリ而シテ一ノ革命ハ自由民權
説ノ鼓吹タルニ非ズハ故ノ初後而八十年来之
大亂ヲ興出セリヤ今ヤ日本ハ表面上平安無事
ノ如キモ吾人其裏面ヲ考ヘ察スルニ其
八世紀末葉佛國ノ如ク其物質上之精神
上ノ危機或ハ更ニ甚シキニ至リテ吾人ハ信ス十
年ナラズシテ必ス其爆發一曰アラビヤニコレヲ
心注目スルニキレナリ

年終上急機吾人ハ之ヲ要一カヲ復ス

第一 平等國際地位之變遷（二十年來各國人心）

明治維新後日本世界

雄飛古今各強一國士人哉

好田運レ云ハ之是レ吾人ノ新言ノカ如ク

支那人ハ只カ事ヲ強ク知ラズ其危機ヲ伏在ス

知る言ふ以て吾人に新言を以て命ぜらる

ケル愈急シト何ノ故ヤ蓋レ四才ノ強一富并

然リ——入
是レ文明の強
ナリ野蠻の弱

ナリ
換言スルニ
米國式強ハ
冰スレヲ
独逸式ノ

強くしては、奴隷解放運動の強

日本人民土地之侵奪之修強十之其種

強人長久
結人共力
今中正義
的大旗
W

海内、田土の勢力ハ一日、膨張ス。而テ、
幾個野心家、軍閥官僚ト一般ノ軍閥主ニ死
守、守者ニテ、惜イ哉、今ハ十八世紀、即チ十九世紀
ノ野心家、一勢ノ怪物カ久シカラズ。而テ、皆チ、星ノ穴ノ
ノ時、其時、日本ハ必ス一萬ノ大乱ヲ生シ、請フ
之ヲ推テ、見ヨ、ウイルヘルムニセハ、チエノ博識ノ
信レテ、自ラ超人ナリトシ、全世界ノ人、類ヲ征服セニ
トス。其種ノ妄想、到底成ルヤ否、ナリ。日本ハ独
逸ノ遠征、其勢、ホク、僞造、東方ノ独逸ヲ以テ、自
命シカトシ、博識ノ独逸、其運轉、エラ、支那、數倍
ノ野心ヲ抱キ、世界征服ノ執念、有ス。今ヤ、独逸ノ一
敗、其運、ム、ヤ、事ハ又、改頭換面、去リ、米田ノ
崇ブ、而カモ、四支、兩國ノ幸福、一途、至シ、人、依然トシ

旧傳ノ改メス、我々裂々其ノ未タ人ソセキス能ハズ

先ツ己レ自ラ乱ル、コレヲ

第二、日本ノ世界ノ潮流、變動セラル、世界ノ潮流ハ

一種ノ流多ドレラ世界各國ノ真トシテ順老スルモノナリ

仅今ハ新清末季支那一般ノ人ハ皆ナ滿清政府ソ

恨一、半佛ニ因ノ共和シ美ク、於是共和の潮流ハ支

那、輸入シ支那人之、順老カ、今ノ世界の潮流ハ共

和民主國家ナリ、共和主義、其國ノ人、皆是レ一國

ノ主ナリ、皇帝ハ狗屁ノ一錢、位ニス、其族又順レ伸

ハ錢ノ有スルヲ用シ易サルナリ、是ノ共和民主國家ノ

先覺ハ半國ナリ、佛國之、以テ其後ハ乃チ我々民

華中國ナリ、憐々、以テ我々共和國ハ五六、這

キサリシ、今ヤ大國中共和國タラサニモ、政ニハ美國

支那ハ世界
中ニ在リ
ナリ

世ハハ事アル一、美國ハ中々急進、激シアルニドハ
 將キ其ミレラ自ラ其和國レナントレガフヘ常勤皆
 級驛候休ス久レカラス革命サレト預測サレ
 日本ハ更ニ必スレ流カス日本ハ天皇ハ少数ノ舊人
 ト美人カノ御方シ紙ムル昔者信服スル以外有
 議ノ士ハ出カズ服中、還カス多数ハ共和式主シ
 希望ス其中軍人ハ尤モ甚クシ去年ノ米騒動
 許多ノ軍人ハ暗申、殺シ傳ヘ革命ノ鼓吹
 シ改府、殺サ下記ノ一事ハ以テ日本軍人ノ
 心理ヲ代表スレ一日我朋友ト共、東京ノ支
 那料理店、飲酒チ隣室、数人ノ軍官ニ
 ナリク一面、酒ヲ飲、其語人我之ヲ戦ク、曰ハシ
 我等ノ西伯利亞、新ハ露ヲ追ハ散派シ我ハ國

家ノ弟ト人言ハ必竟我等ノ頼ハサズカナリ何レナレハ
 彼等ノ智識ハ我等より高ク彼等ハ我等ノ社
 会和民主的の原理ヲ滿シ人類互助ノ精神ヲ
 滿シ要ハ我等ノ如ク慚死セムモノナリ云々ト四事
 ノ軍人セカル如ク如斯其他ハ以テ起見ルセシ
 種々世界潮流ハ今ヤ已ニ四事一流到キ四事ハ其
 潮流ハ變動セシ久カラズ革命ノ起サセ我等ハ
 惟々共和民主國家ノ萬歳ヲ高呼セシ
 第三四事旧思想ハ革新セリ四事ハ從來ノ君主
 田ノ一位ノ天皇アリ共和天皇ハ萬世一系ト稱シ
 憲法上ハ天皇ハ神聖ニシテ侵ハカラスレハ一條
 アリ一義ノ憲法ハ國家組織的ノ要理ヲ知ラズ
 天皇ヲ祀ルニト佛像ノ如ク被等祀先シ置レシ

時レシ之ヲ解セサニモ若レ入リ天皇ヲ躡蹠スル
ノアレハ孰チ死シ以テ之ヲ争フ莫ニ可謂「傷冠」
天皇少き怒人モナリ是レ却テ深ク怪ニス蓋
刃持ノ天皇ハ是レ二千年來ノ遺品ニテ「丑容易」
少破スハナク亦ス也夕有敵ノ士ハ皆ナ漸々天
皇ヲ輕視シ來リ我カ最モ敬服スル一人ノ法學
博士是我ノ先生ナリ是レハ事最著多「建武中興」
者ナリ故即チ云フ「天皇神聖マレシ」犯スハカラストハ
誤リ建シ是レ果シテ神ナシハ或ハ犯スハカラスレモ
但シ天皇ハ明々白々「是レ人ナリ」決レテ犯スハカラス
也ナレシ故ノ以テ「舊法」ハ無形中「傳播」スル
少ナク其ノ愛ハ事ノ天皇ハ蓋名ヲ有スルハ過キス
レシ故令ハ木腦鼓ノ劇ヲ演スルハ等シク都テ

一ノ人間カ幕中、存多ヲ持シ主持シ改換シ終操
スルヲ第一是ハ老テ死セサル元老第二罪大惡極
コノ軍閥第三幕恥辱ナ官僚ナリ彼等ノ
信スルハトライチケノ軍閥主長政治世ナリ
奉ルハスルハウイムムニ世ノ侵略主長ナリ
其種ノ思想ハ早シ存多ノ餘地ナキ義ナリ故
今ヤナチ一般ノ新人物ハナチノ改革ヲ望ムナリ
ト元老軍閥官僚ト宣義ナリ彼等ノ計画ハ先ツ
筆ヲ用ヒ後銃ヲ用フ新思想ニ因テ出版物ハ
實、少カラス仅令ハ筆閥會滿漢集批評新
社會、社會主義研究、社會問題研究、改造、新
解放、集等ナリ是レ最近出版ノ雜誌ニシ他
許多ノ新思想、因テ書籍、ノ枚擧、ノ事ナ

る其も着し其詳に知ることを請ふ故書に來し我
に其書付し以て參政、供としたり

第四日本國民生活ノ不安ナリ之を初説ノ日本
衣食常料ノ不足に相関係ス人類ノ生活ノ為ニ
生活ノ原料ヲ要ス吾人毎ク衣食住ハ欠クカラン
故に生活上ノ不安ハ乃チ我等生命ノ不安ナリ
然カモ我種人カ生活非常ノ豊富奢侈ニレテ我
等生活ノ水平線以下幾百人ノ低キ存リレバ世
界ノ不平ニ之過クルナレ已て不平ナリ報復シ國人
報復シ國人相互戦争セバ不能ハス我等ノ世
ノスノ諸階級争門是レナリ日本ノ階級制度
ノ最深キ田家、シヤ事階級ハ五種、今
(一)皇室 (二)貴族 (三)士族 (四)平民 (五)特種部

後ナリ皇座ハ登口純念ノ外ハ全無其頭角セ
況ハサハス皇族ハ信然其有貴者ヲ指スミナ又
士族ハ乃チ支那ノ讀書人トシテ之ノク持種部族ハ
九列レ其地多ク其一部ノ土著者ヲ指レ其ハ平民ハ
何田ト云指テリ其ハ皇族ハ平民ハ七八人ニ極
少ナル一兩件ニ代リク、睡眠ニ毎日毎夜ニ場
働キ其賃金ハ其トク知スル能ハサル、彼ノ貴族ハ
皇座ハ高樓大厦、住、嬌妻美妾ヲ抱キ肥魚
大肉ヲ吃シ自働車馬車、坐ス其ハ平民ハ幾
帳ノ借メタル斯ク知レ来レ一方ノ生活ハ大
方ノ生活ハ大不安ニシ將來ハ平民ハ貴族ト宣
ノ時ハ便シ是レハ本國式ヲ生活ノ妙法ヲ解決ス
ル時也去年ノ米騒動ハ乃チ是レハ本國式ノ生活

大正八年九月九日 星期一 主政務局 第二課

三八九號

大正八年九月

存支那

特命全權公使小幡西十



外務大臣子爵岡田、來、去、致

惟一日報、社論、閣、外交部、

交渉、件

九月廿二日、惟一日報、社論、ハ、全譯、上、么、信

第三七八号、以、申、通、次第、有、之、後、委

事件、閣、不、取、敢、別、紙、通、通、リ、外、交、

部、交渉、之、開始、對、應、後、向、委、細、一、執、

御
 高
 奏
 相
 成
 一
 西
 寺
 邦
 一
 折
 ケ
 元
 君
 左
 十
 人
 區
 名
 別
 辨
 一
 支
 那
 通
 代
 者
 御
 取
 調
 上
 可
 然
 御
 取
 計
 相
 成
 候
 様
 致
 受
 此
 故
 申
 直
 信
 平

以書稿致政上候傳者本解九月廿二日北京
 之發多ノ惟一日本報ハ日本ノ危機ト題ス
 論文ヲ掲載セリ右ハ君左ハ匿名ニテ東京ヨ
 リ寄稿セリ新聞社ハ社論トシテ之ヲ掲載
 セタル有之候處其末段我皇室ニ對シ
 往々不敬ノ筆鋒ヲ弄セルハ本使ノ深
 ク之ヲ遺憾トシ到底看過シ得サレバ多
 分乃チ其日本ノ精神上ノ危機ヲ論セル第
 二項中「皇帝狗屁不值錢」トハ少シ其貴
 國友好國ノ皇帝ヲ惡罵タルミナ又
 日本ノ天皇、除少數愚民、和幾位祇御庇
 服の學者信服外、有識之士、尚且不把他
 放在眼上、大家都希望的是共相是

民主，其中洋人尤甚

云々レ記レ其第三項、

日本向來是君主國，憲法上寫有「天皇為神聖不可侵犯」一條，一般國民不懂得國家組織的合理的，把天皇告言淺看，待罵他們的祖宗，他們有時還不理會，若有人覬覦天皇，可就要和你拚命，真所謂「衝冠一怒為天皇」了，這却也不能怪因為日本的天皇是二千年以來的遺品，不容易一旦打破，但是有識之士都漸漸輕視天皇起來了，我最佩服的一位法學博士是我伯先生，他是日本最著名的憲法學者，他就說「天皇為神聖不可侵犯」的

不對、因為如果人是神、或者不可侵犯、但天皇明明白々是人、決無不可侵犯之理、他這種說法無形中、已傳播不少的人了、其實

日本的天皇不過虛有其名

云々云々、至るところ、是正、亮唐無稽、辭シ

弄レ我團體ト國民心ヲ攪亂シ不敬ヲ

我天皇、加フルモノ云々、其國刑律第

百二十條、所謂外國ノ君主或ハ大統領、

對スル不敬ノ言論行為十々、該條ス

ル様存セラル條決惟一報カ已、其社

會レシラ之ヲ搦テ裁スル以上告發其責任

負ハサル、カササル次第ニ付可然處罰ニ力

御取計相變、將又決通信力果シテ東

右支那日本郵便

寄稿 せしめん 其 寄稿 者 々
君 左 々 者 々 姓 名 住 址 決 新 聞 社 就 牛
御 託 書 上 御 回 報 御 交 々
右 何 方 御 回 答 相 煩 交 々 改 臨 會 得 美
意 候 級 矣

大正八年九月廿七日

小 橋 公 使

陳 外 交 部 務 代 理 宛

文書課長

文書課
長檢印

大正八年十月十六日

大正八年十月十三日起草
同年十月二十日附

改

送第五七六號

大正八年十月十六日
別紙
第一課
主任

次官
再回
快

政務局長

主管

125

植原次官

小橋内務次官

漢字新聞唯一日報ノ論説

ニ関スル件

北京ニ於テ發行スル漢字新聞唯一日報

ニ君尤ナル匿名ヲ以テ日本ノ危機ト題
スル東京通信ヲ掲載シタル件ニ関シ別
紙寫ノ通り左支小幡公使ヨリ報告ノ次
第有之條候委細右寫ニ就キ御閱悉
ノ上前記匿名ノ通信者御取調
御回報相煩度此段申進候也

小幡公使來信云才三七八号家持射、

機

密

文書課長 羽地

大正八年十二月五日 接受

大正八年十一月九日 起草

同 八年 一月 一日 附

大正八年十二月五日 發送濟

機密送第九號

主任

主管

年

在立

小幡公使

内田大臣

件 昨一日報、荷設、因是

當地漢字新圖一曰被揭載、
日本、危橋、題、將、復、國、之、本
年九月二十四日付、出、才、三、七、八、号
及、全、十、月、一、日、付、出、才、三、八、九、号、半、信
、以、之、以、按、告、次、方、有、一、右、理、論
、從、証、文、ハ、並、ハ、此、節、ハ、稿、錄、ハ、上、段
、通、信、者、即、詢、方、並、ハ、向、後、ハ、取、端
、乃、及、他、報、並、ハ、是、ハ、此、節、ハ、取、端

搜查上卷書中，大抵有全
北齊志，不文，父安，知市，
案，松，可，怎，以，送，付，新，本，或，為，唯，一
口，故，初，長，白，女，留，學，生，也，身，
似，上，卷，之，姓，名，五，：，出，身，林，名
等，歸，也，：，以，回，故，多，中，或，此，為
山，中，也，

警視總監官房外事係長

警視廳警部 原 二 吉

青五
代
表

夕
利
行

手為下

33867

大正八年二月六日 接受

公 四一三

主務局

第一課

大正八年十一月

在支那

特命全權公使小幡 周

外務大臣于密附由田 承武 致

惟一月報不敬事 件之因之件

本年九月廿二日 惟一月報 外務大臣于密附由田 承武 致 李毛機ト顯人 社論中 語辭不敬 涉 御園秀 悔 其後 李使 外交 部 對 抗議 的 警告 並 會 之 為 之 人



次第ハ幾升カ第三八九号ノ面々カ有三口ノ
外交部接見日傳外交部後代継人未作ハ
己ノ内務部、移勝レ可然取計ハレシ
ハヒ^{速ニ}ナリシカ内務部ニ事ノ関係重要ナ
シトシ、帝師教習寮ナ、訓令レテ起請ノ手
續ヲ為サレシ一面各新聞社、社ニ其種外
田元希、社不敵、歩ルカ如キ記事ヲ前
文ノ掲載、ハ格外慎重ノ待遇、出シ
ト^{速ニ}特^ニ第^ニ一二号布告シ、後シ帝師地方
権^ニ寮^ニハ十月十五日決新報、記者編輯
主任傳村重シ相引レ一夜取納ト云
ト掲載シ、十月十七日之シ、京師地方審判
ト送^シル、然ル、先是、美米中傷記者

單乃々北京天津タイムス、ハースヤイナス
 等ハ故意ニ事件ノ内容ニ曲説シ事件
 前文ハ何等不敬ノ誤トキナキ、又李公使
 ハ外交部、對其封禁ヲ返リタイ是レ
 言論自由、對其ニ在ルナリ、抑例、多ク非
 難ノ記述シ為レタム、抑々（勿論夫、又該
 取消等ノ手續ニ為ル）此乃萬判、確、ホラ
 ハ十月廿五日刑律第二百二十條ノ規定、タイ
 罰金四百圓ノ判決シ下レタイ十月三十日ノ推
 一、報人特、事件ノ商、一、母ノ社、海、揚、
 李、年、元、素、君、友、人、一、區、名、ノ、導、可、籍、一、係、
 王、其、海、商、事、社、ノ、主、張、レ、合、致、ス、ル、ソ、以、テ、特、
 社、商、ト、シ、揚、ク、タ、ム、ナ、リ、故、ル、ハ、月、事、公、使、

指橋を渡して有罪ノ判決ヲ受クルハ幸レ
 リ事社ハ事記義ノ能迄博理研究のミレラ
 毫ミ不致ノ意ナク充分上訴ノ理由ハ餘地
 ナク天眞掲義ノ眞精神ハ遠ノロ支西國ノ
 眞執善ノ如スル存クニカ爲ノ徒ラ事
 件シ繁重ニルシ難ク又支那多改司
 法事合ノ苦衷ノ諦トシテ断然服罪ノ
 決意ヲ爲シタル旨ヲ表白致シ該被告ハ奏
 任官ニ係伴~~釋~~証シ立シ釋放~~カ~~ラシムル由
 候何レ外交部ノ正式回答次第判~~可~~及
 報告々事件結末ノ次第一應上報~~告~~一
 及候也

秋

外秘

第四

二

局長

事務

大正八年十一月八日

漢字新聞唯一日報發行者方三関件

北京ニ於テ發行スル漢字新聞唯一日報ニ君左

ナル匿名ニテ日本ニ對シテ顯ニ關心ハ激ナル言辭

ヲ列ス我國情ヲ攪亂スル七箇ノ遺信ニ投稿スル者

ナル趣ヲ以テ本月三日附ク新聞第七〇九號御照會

ニ基キ内偵スルニ由來本邦人ノ自己ノ雅号別名等

ニ名クルニ其生地ノ地名ニ因ミテ公稱スルノ慣習アル

ヲ以テ君左ニ亦或ハ如斯モノハ非サルカ即チ湖南省

洞庭湖吾山ニ因ミテ名スル者ニハ之ヲ推シ

先チ湖南省出身者ノ中ニ就チテ調査ノ步ヲ進メ

ト令時ニ一面支那留日學生監督江庸其他留學
生等各方面ニ君左ノ何人ナルヲ確メシムニ湖南
省出身者ニシテ早大生易某ト称スルモノ時ニ君左
ノ匿名ヲ以テ本國新聞社ニ投稿セシメトアリト
聞ハリ此方針ニ據リテ益搜查ノ歩ヲ進メタルニ本
年八月十日飯國セシ支那留學生中易家鉞ナルモノ
アリ即チ

住所府下戸塚町字諏訪一七三松山莊方

湖南省漢壽縣人

早稻田大學生

易家鉞

廿三年

ナレトニ各視察員報告一教員ニ至レリ

Handwritten text in Chinese characters, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are somewhat faded and difficult to decipher, but appear to be a formal record or report. A circular stamp or seal is visible in the center-right area of the page.

大正八年七月拾日 接受

主務局

第一課

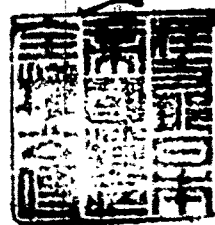
別紙添

機密第 四四三 號

大正八年十一月五日

在支那

特命全權公使小幡酉士



外務大臣子爵内田康哉殿

惟一日報不敬、記事ニ関スル件

本件ニ関シ支那政府ニ申入、次第ハ本月一日

附機密第 四一三 號ヲ以テ及報告置候處同

シク當地ニ於テ發行スル英字新聞「北京リーダー」

ハ本月二十五日ノ紙上ヨリ惟一日報ヨリノ記載トシテ

The Crisis of Japan ト題シテ別紙甲號切

校ノ通本件論文英譯ヲ其終連載シ始メタル
 ニ依リ之レカ取締方ニ関シ同乙弭寫ノ通リ
 支那側ノ注意喚起セル結果本件譯文ハ二日
 間ニ亘リ前半ヲ掲載セルノミニテ以後ノ部分ハ
 之ヲ中止スルニ至リ、北京リーダーハ廿八日ノ紙上ニ
 於テ之レカ理由トシテ別紙丙號切抜ノ通リ
 記載致居候委細ハ各別紙ニ就キ御了悉相
 成度此段申進候也

第ニニニ號

大正八年十月二十七日

陳外交總長代理 小幡公使

以書翰致啟上候陳者北京ニ於テ發行スル惟
 一日報カ客月二十一日及二十二日ノ兩日ニ亘リ其社
 説欄ニ掲載セル「日本ノ危機」ト題スル一論文
 中往々我皇室ニ對シ不敬ノ筆鋒ヲ弄セル
 ニ関シ本使ハ當時直ニ貴國政府ノ深甚ナ
 ル注意ヲ邀フルト共ニ法規ニ照ラシ當該責
 任者ノ查辦處罰方及照會置タル次第有之
 候處同シク當地ニ於テ發行スル英字新聞
 北京導報ハ本月二十五日ノ紙上ヨリ右惟一日報

ヨリノ轉載トシテニ

Japanese

Cruice ト題シ本件

論文ノ英譯ヲ連載シ始メ候右ハ既ニ貴部
ニ於テモ御心附ノ事トハ候、共全然其内容
ヲ一ニスル譯文カ等シク貴國官憲ノ取締、
下ニアル他ノ新聞紙上ニ掲載セラルルハ本使ノ
深ク遺憾トスル所ニ有之候幸ニシテ本日迄ノ
紙上ニ譯載サレタル所ハ本件論文ノ前半ニ
シテ本使ノ指摘セル諸點ヲ含マサル部分ナル
モ明日以後、紙上尚引續キ之レカ譯載ヲ
見ルニ於テハ自然之等、箇所ニモ可及至急
右取締方可然御取計相成度尚其結果
惟一日報ニ関スル前記照會ト共ニ何分、
御回報相煩ハシ度此段照會得貴意候敬具

右ノ用目スルハ何處

大 正 8 年 10 月 28 日 發 行

件 名

新 聞 名

Peking Leader

Owing to an alleged complaint lodged at the Foreign Office by Mr. Obata, the Japanese Minister, we will not reproduce for the time being the further instalment of the translation of *The Crises of Japan* from *Wei I Jih Pao* rendered by Mr. M. Sun, editor of the *China Sun*. Mr. Obata seems to object especially to the reprinting of the concluding part of the article in which the inviolability of the Emperor of Japan is questioned or discussed by a certain Japanese professor.



(二) 件 名

新聞名

Peking Leader

The Crises of Japan.

(From "Wei I Jih Pao.")

V

(Continued from yesterday.)

Is it not a well-known fact that the so-called strong nations in the world of to-day are all entirely dependent upon the powers of mechanics? Is it not only to coal and kerosene oil that mechanics owes its powers? If so, not only do coal and kerosene oil occupy an important place among the materials of fuel, but also they form a starting point of the modern material civilization. With the continuous advancement in the industry of iron, railways, steamships, aeroplanes, trains, mercantile transports and men-of-war, the use of fuel is always on the increase and, for instance, the consumption of coal in Japan alone now has already reached 25,000,000 tons every year.

The total amount of coal mine in the whole country of Japan is estimated at less than 9,000,000,000 tons and as 1,740,000,000 tons have been dug out, what is still left untouched under the ground is only 5,350,000,000 tons. If it be taken for granted that one-fourth of such untouched amount of coal can be only 1,300,000,000 tons. Again in accordance with the speed with which the industry of iron, railways, steamships etc. are increased annually, the amount of coal consumed must be doubled every ten years, and so if the coal-supply of Japan wholly rested on her own resources, the Japanese coal mine would all be cleaned thirty years hence. The annual product of petroleum in Japan is about 359,000 tons from which nearly 100,000 tons of kerosene oil can be manufactured and if the whole amount of

this manufactured oil were intended for the normal use of her navy, there would be a shortage of 66 $\frac{2}{3}$ per cent. Therefore, the Japanese government has devoted her own product of kerosene oil to the use of various industries, aeroplanes, railways and mercantile transports, and all what is employed by her navy is bought from the district of Beulnea (?) in Holland about 200,000 tons in quantity, which are, however, still not enough. Beginning from next year, it has decided to purchase a large quantity of kerosene oil from the United States for the use of her army, navy, aeroplanes, military trains, etc. in time of war, and its ambition is wild indeed.

VI

The most violent of mechanical products are the munitions of war, which seem to be the protecting charm of an individual and the stimulative dose of a country. The reverse side of justice is the munitions of war and the actual force at the back of justice is also the munitions of war. And then how heinous to the cause of humanity they are! For the manufacture of munitions of war iron, lead, tin and antimony are all the most principal materials. In Japan, the whole amount of iron deposit is said to be 70,000,000 tons. According to the report of the Iron Investigation Society, the total quantity of iron demanded by Japan in 1923 will be 4,517,200 tons and that in 1926 will be 6,132,400 tons. If the average quantity for annual use be, thus, put at 4,500,000 tons, there would be not an inch of iron left in Japan after seventeen years. In Korea, the deposit of iron is also not much and only about 30,000,000 tons in total. If Japan did not count on the export from other countries, there would be no trace of iron throughout the country in twenty-four years, and with regard to

lead, tin, zinc and antimony, her own products are very scarce as well.

The above several items may serve to testify to the paucity of materials in Japan, which has virtually amounted to material crises. For if the materials of clothes and food are not sufficient, the Japanese people will mostly suffer death from hunger and cold and if the fuel materials are not enough, Japan will not be able to make use of her mechanical devices, however dexterious they may be. Furthermore, if the raw materials for the manufacture of munitions of war are not adequate, Japan will have not an inch of iron in her hand, and then how could she aggress us with empty fists? The scarcity of these several kinds of materials will certainly prove fatal to her and compel her to give up all the ulterior designs, and should she make no attempt to redress her faults, I am afraid that when all her resources were exhausted, she would utterly come to ruin. Nevertheless, Japan's crises do not consist in these only and we have to further describe her mental crises,

standard of living has nearly emulated that in New York.

III.

Living here in Tokyo, I have to pay ten cents for an egg for breakfast and ten cents for a handful of cabbage for dinner, and you can imagine what becomes of the rest. Moreover, clothes and food are all necessities of living and can hardly be wanted by one day. If we had no clothes and food, we would have suffered death from cold and hunger, and the first spark of Japan's dangers which is ready to ignite at every moment is just lurking behind the question of clothes and food. Don't you know that what we eat every day is rice? During the past five years, owing to the question of clothes and food, not a few Japanese have been driven to death and not a few disturbances have taken place. The downfall of the Terauchi's cabinet last year was caused by rice and the serious case of human-slaughtering committed by the Ministry of Agriculture and Commerce this year was also due to rice. In the year before last the rice riot had nearly led to a nationwide revolution and the rice question is terrible indeed. But what is the real cause after all? As Japan is small in size and large in population, the supply of rice as well as other grains is not proportionately adequate and therefore, the demand of society cannot be met without the support of foreign countries. Tonkin in Annam, India, the Nanyang Archipelago and China are all the places where Japan used to derive her support of rice. But now inasmuch as embargo has been laid on the export of rice in some of these places and famine prevails in others, and also inasmuch as the rice in Korea is not enough for the need of herself and that in Formosa is scarce, Japan will soon be seen severely suffering from starvation. And this is the reason why the first object of every Japanese cabinet has usually centered in the discussion of the method as to how to relieve the dangers of rice.

IV.

The present Premier Mr. Nishihara

has once maneuvered for the aid of Peking, but as the Provincial Assemblies refuse to permit the lifting of rice embargo, the situation in Japan is growing more serious. The existing price of rice is more than 50 yen per *Shih*. With so high a life the people can in no way bear and it is no wonder that they are ready to rise in revolt. This is the general outlook of Japan's food and let us further go to dwell on the condition of her clothes. For the making of clothes the most important materials are cotton and wool but in Japan there are no such products at all. To supply the social demand of Japan for cotton with the produce in Korea is just like putting out the fire of a wagon's grass with a cup of water and is of no avail. In this respect, Japan can do nothing but to depend upon China for her support. With regard to wool, she has also to count on the supply of all the wool-producing countries and China is one of them. In the year 1917, the quantity of cotton exported from various countries to Japan was 705,000,000 catties worth 321,000,000 yen and that of wool was 39,630,000 catties worth 52,110,000 yen. It can thus be shown that the demand of Japan is big, but there is a surpassing power in her which we must not neglect to mention and that is this. Among the cotton and wool thus imported the greater part was turned into manufactures and re-exported and out of these re-exported goods nearly ninety per cent, entered China. Hence, although China is a country from which Japan obtains most of her raw materials, the statistic of Sino-Japanese trade shows that the annual amount of Chinese import always exceeds that of her export, and don't you think that it is a great disgrace? According to the Japanese scheme for the encouragement of sheep-raising, the annual product of wool will be 4,500,000 catties after twenty-five years but that much is still not sufficient.

件 名

新聞 名

*Peking Leader***The Crises of Japan.**

(From "Wei I Jih Pao.")

I

In discoursing upon the crises of Japan, I have three ideas to be explicitly expressed. First, the characteristic of man is not the enjoyment of others's misfortune and disaster but mutual aid and love, whilst the chief cause of suspicion and hatred is misunderstanding and ambition. When we refer to the crises of Japan, we do not mean to enjoy any serious disturbances arising from that country, but on the contrary, hope for her awakening to her own crises, so that China and Japan may have the opportunity to join hand in hand.

Secondly, in the relation between China and Japan there is a certain point which neither of the two countries has been able to thoroughly understand, and on this account, there has come about a great deal of misunderstanding and ill-feeling between the two nations. And there really lies the basic cause for their estrangement. What then is the point which as I have said neither of them has been able to thoroughly understand? and that is: China only knows that Japan is strong but not where her crises are lurking and on the other hand, Japan only knows that China is weak but not that she is possessed the potentialities of regeneration. In other word, Japan is just conscious of her own strength but not her own crises, whereas China is just conscious of her own weakness but not her own potentialities of improvement. This is a one-sided view and what we have to do is to see from both sides of view. Hence, not only ought Japan to realize her own crises but China should make out her crises as well, Sun Tzu said "If

you know yourself as well as others, you will win as many times as you fight." and I share with him thus truth.

II

Thirdly, Chinese have a bad habit: when they learned that foreigners are stronger they would highly admire them instead of trying to imitate and when they heard that foreigners are weaker, they would be blindly proud of themselves without any anxiety and passed away their time with recklessness. At the end of Ching dynasty, this habit was more prevalent. As I am going to point out the crises of Japan, I hope that instead of sleeping on the high pillows and dreaming the long dreams, our country people will exert themselves to shape their own destiny. They have to make a close observation of others and give a serious consideration to themselves so that the topic I am writing on may not pass unheeded, and then their attitude can be admitted as one of the great people of the Republic of China.

The crises of Japan can be classified under two categories.

(a) The material crises.

The whole area of Japan is only about as large as the Province of Szechuan in China, and in recent years, her population has increased from 30,000,000 to 50,000,000. That her product is not sufficient to meet her own demand is within our expectation, and because of the rapid advance in her industry during the European war, her want of material has become more keen. If she wishes to have a sufficient supply, she has to depend upon other nations. During the past several years, intelligent Japanese have been doing their level best to carry out the policy of self-support, but owing to the narrowness of territory, never attain any success. At present, the prices of all articles are excessively high and the

秋

新 12903 授

大正八年十月拾日 接受

外秘乙第四十二號

主務局

第一課

警視總監官局長宛

大正八年十月八日

津厚新聞社 報致謝意 奉復 方之関件

北京ニ於テ本行及社員等ノ新聞紙 報ニ寄リテ

ナリ一區名ニテ 寄リテ 謝意 奉復 方之関件

ヲ列シテ 謝意 奉復 方之関件

ノル趣ニテ 謝意 奉復 方之関件

ニ基キ 謝意 奉復 方之関件

ニ名クルニ 謝意 奉復 方之関件

ヲ以テ 謝意 奉復 方之関件

洞度洞島山ニ 謝意 奉復 方之関件

先ニ 謝意 奉復 方之関件

右者北京公立第一

度來七日語語無不

二年生十父六易服

日清戰時不日即

上上無不

整潔

後

院

一

陸

陸

臺灣商務印書館

民國二十一年

五月

二十

日

星期五

晴

風和

雲少

溫潤

飛

叩

飛

叩

飛

叩

飛

叩

飛

叩

[illegible]

VT 1.3,1.4 1610

1-2-3-4

1612

1613

文書課長菊地

大正八年十二月十四日接受

28

大正八年十二月十一日起草

別紙

同年十二月十一日附

大正八年十二月十五日發送

機密送第一六號

主任

第一課

次友
機密

主管
警察局長

笑

第

付

在支

小幡公使

内田大臣

惟一報不敬記事

同件

手回

橫斗桑日集細別號：新日清義
刻本外元妙為下道非也

（
於視然道東橋外故之部曰七二多
早訓智像付，要）

快

要再四

文書課長 文書課
檢印

大正八年 十二月十四日接

大正八年十一月十一日起草
同 八年 月 日 附

送第六十三號

大正八年十二月十五日發送

別紙

第一課

政務局長
主管

（Handwritten signature/initials）

小橋内務局長

（Handwritten signature/initials）

漢字新聞報一日報

（Handwritten signature/initials）

（Seal/Stamp）

中列我軍進退
日係生羽大軍
亦和度其勇下
所進水也

小幡公使來信
公才也一三
萬軍深付
安

大正八年七月廿四日接受

主文部
管正子后

第二課

第13501號

機

四六一

大正八年七月十八日

在支那

特命全權公使小幡西十



外務大臣子爵岡田康成殿

北京導報ハ惟一口報不敷其論評致ノ年
事件ノ内ハ外交部ニ對シ注意文ヲ
件ハ其年ハ機密第四四三號ノ以テ及
告彼等外交ヲハ十月十三日附書面
シテ其師範學堂ニテ取浦レタル
ハ右ハ十月廿四日ヨリ三十一日
至天津華洋

么前、英文報リ、轉教、
轉教、譯、
之、還、
部、
么、
報、修、也

(寫)

這後者勿准

並備十月廿三日北平各報登載

Japanese Review

一其內容與前次惟一報所載各節相

同取幸這報今日亦載為決項論文之利

半事么侯初可指稿諸君尚未譯載請

急速取稿勿再延緩登載等因前來即

經本部轉傳各官師警察六人飭決報

即行停止登載決項論文去後茲准決

六覆報此案已傳決報經理人到六飭

令勿再延緩登載並據報以項論說

停轉錄天津華洋公報英文報至第六

節止等語茲將十月廿四日至三十日華洋

公府呈覽奉之復換並要情飭決
前後對於轉錄事作務須慎重
等語初迄函覆
奉公使查照可也順頌

日社

中華民國十年十一月十三日

外交部啟

附屬書類添附

大正八年十二月廿四日接受

主政務局

第一課

四三六

大正八年十一月

在支那

特命全權公使
少懷兩

外祿大臣于爵内田禾或錢

卷之六

惟
X
韋
涉
說
、
闕
之
件

本件、前より附政一様密送第一五七

是事
御申
了承
事件
商

卷土重來
附么第
四三
信報
告

通川新商編纂主任陳村勉
八十月廿五

事師地方爲判六ノ折三罰金四百元ノ判夫ソ

割取皮

服部ノ旨ナリレ處其後上月十二日本使カ陳外
支那務外理一面會ノ机口代理人ト頭ヲ以テ
以上ノ様ノ次第ノ面會セラルルノ付事使ハ支
那當局官憲ハ本年審判ノ對ニ誠意ヲ諄
トス旨相告置候

將又該商說辱久迄付可致ナリ承知ノ刻
紙切取事能ク保存ノ方美進候條御
用際ノ上ハ至急申出送相成度該商ノ新
聞ハ今日ミテハ種々手ナリ盡シ候得共入手
レ得サレ次第候

追テ事件被害陳ハ其尤ナクモハ一處名ノ條
其件兩姓名ノ承知セサル旨ヲ強辯レ審判
ノミテ候々追完セサリレ由將又該社長顧

養吾十九で人事名澄レ移レ江蘇ノ格致書
院卒業後又人事二四復転居レタムエト
一京ノ學藉ノ有レタムコトナレト
タムと實際ノ人深ク之際人告るコト
有之候也殿中席

大正八年十二月廿六日接受

警務局 第一課

警視總監ヨリ局長宛

外秘乙知照

漢字新聞唯日報

既報(本月八日)外秘乙知照漢字新聞唯

日報掲載致金主(一)元横一五二有(右左)

何人ナリ方(北京)一(一)元横一五二有(右左)際被害

陳樹勳(前新)一(一)元横一五二有(右左)其(匿名者)ナリ

故ヲ以テ結局言明(七)元横一五二有(右左)四(金四百元)判

決ヲ受テ服罪セル旨小幡支那公使ヨリ外務
大臣宛通報アリ

追テ右ノ君左ハ支那湖南瀏陽縣人早稻田
大學生易家ハ一當廿二歳ニナルヲ以テ既報如シ

文書課長

大正八年十二月廿七日接受

附屬書類添附

大正八年十二月廿六日接受

主務課

文書課

四六四

大正八年十二月廿九日

特命全權公使十橋



機密送第一九二號

大正八年十二月廿八日發送

惟一日報判決

外交事務代理... 惟一日報不取敢... 次第入不取敢... 告一通... 答覆...

大正八年十二月廿八日

内之儀ノ推探、レタル、本年ノ如キハ親好回
 元高、一対之ム不敬、レニ殊、幸使ノ指摘文
 涉、待、追、ミナク支那ノ責任官憲、ノ於、
 道、レテ撫摩、處罰、ミナキ本年ナリ、今日
 ノ我々結果、答覆、シ書面、一貽、ス、其体裁
 上、勝、カタル、レ、ミ、存、幸使、ミ種々、
 ミ、ミ、事、故、在、ケ、其、意、シ、書、面、
 追、加、セ、サ、リ、レ、次第、ニ、祝、参、事、力、
 命、シ、受、ケ、止、知、通、譯、官、迄、内、送、ミ、
 件、判決、書、其、他、係、言、類、判、紙、
 送、付、供、者、宛、信、也、
 厚、文、馬

收京師警察廳函

八年十月廿九日

逕復者接准

貴部函開准日本公使照會內稱本年九月二十一二兩日北京惟一日報載有日本之危機社論一則託名君左由東京寄稿內多惡罵本國天皇之語殊屬不敬本使對於此事實難默視^{該報}登此項社論即應負責當受貴國刑律第一百廿條之處罰再該論稿如果係由東京寄發^{此者}並請將該寄稿人君左姓名住址訊明一併照復等因前來查此次惟一日報社論欄內對於友邦元首多有不敬之言論實屬有背國際禮儀似應施以相當之處罰再此事實竟有無寄稿之人並須一併澈查相應將日使來照鈔送查照即希查明實情依法辦理並希轉知他報不得輕卒登載此種論說以重國際禮儀爲要等因並奉內務部令同前因當經函請京師地方檢察廳依法辦理並希布告各報館嗣後此種論說務當加意審慎不得輕卒登載去後茲准地方檢察廳復稱前准函送北京惟一日報載日本危機社論觸犯刑律請依法辦理一件本廳當即查傳該報編輯主任陳樹勳到案訊據供稱伊在惟一日報社充編輯主任兼發

行人九月廿一廿二等日報上所登日本危機社論係有自稱君左此者於九月十九日由東京郵寄而來伊一時冒昧據以登載至該投稿人君左係何姓名在東居住何處伊均不知道等語反復研詰矢口不移本廳派警會同外右四區警察署赴該報社搜查該社論稿件無着盾之陳樹勳據稱因明友報轉傳觀致被去失等語查陳樹勳所登社論對於日本天皇語多侮慢殊屬不敬之行爲觸犯刑律第一百廿條之罪除由本廳依法起訴外爲此函請貴廳查照等因到廳除呈復

內務部外相應函復

貴部卽希

查照此致

外交部

收京師警察廳函 十一月九日

逕啓者准京師地方檢察廳函開本年十月六日准貴廳函送北京惟一日報妨害國交一案並准函請見復等因查此案業經同級審判廳判決陳樹勳處罰金肆百元除由本廳依法執行外相應抄錄該案判決書送請查照等因到廳查前准

貴部函開准日本公使照會內稱本年九月廿一二兩日北京惟一日載有日本之危機社論一則內有對於日本天皇之不敬之語有背國際禮儀請查照依法辨理等因並奉內務部令同前因當經函准京師地方檢察廳復稱北京惟一日報載日本危機社論觸犯刑律應由本廳依法起訴等因業經函復貴部查照在案茲准前因除呈復內務部外相應抄錄判決書函達查照此致

計抄錄判決書一紙

京師地方審判廳刑事第一庭

第九一七號

被告人陳樹勳年三十三歲順義縣人住香爐營頭條

惟一日報社編輯主任

右被告人因妨害國交案經級檢察廳檢察官提起公訴本廳審理判決如左

主 文

陳樹勳對外國君主不敬之所爲處罰金四百元

事 實

緣陳樹勳向在惟一日報社充當編輯主任兼發行人本年九月廿二日該報登載日本之危機社論一則對於日本天皇語多褻慢如謂「皇帝是狗屁不值錢了」「日本的天皇除少數愚民和幾位紙御屁股的學者信服以外有識之士尙且不把他放在眼上」「日本的天皇不過虛有其名比如唱木腦殼戲的一切動作都有一個真人在幕裡主持」各等語貽毀日皇寔屬不敬當經日本公使照會外交部轉咨京師警察廳送由同級檢察廳起訴到廳訊據陳樹勳供認伊在惟一日報社充當編輯主任兼發行人上

月廿二日該報所登日本之危機社論一則經伊閱核發交印刷不諱應即認爲確定事實

理由

本案被告陳樹勳對外國君主有不敬之行爲係犯暫行刑律第一百廿條之罪雖據該被告抗辯理由以該論原稿係由日本東京寄來的對於日皇未有什麼損害關係等語查該被告該報之編輯主任兼發行人且原稿經伊閱後發交印刷自應負完全之罪責至本罪之成立祇有不敬之行爲已足構成並不問其實際上有無損害關係此種抗辯殊無理由應依第壹百貳拾條所定處刑範圍內處以罰金四百元特爲判決如主文

本案經同級檢察廳檢察官高熙吳奉璋先後蒞庭執行檢察官之職務
中華民國八年十月廿五日

京師地方審判廳刑事第一庭

審判長推事李受益印

推事係崔瑛印

推事黃炳道印

書記官 周 召 棠 印

書記官 周 佑 棠 印

要
車
回

文書課長

文書課
長檢印

大正八年三月五日

發

44

大正八年十二月

五

日起

大正八年三月五日

發送

同 年 月

日附

送
第
五
四
號

主任

政務局長

主管

政務局長

了

在支

小幡公使

内田大臣

序

惟一口被切後返送件

冬月十七付公才記三六号

品字印送付青牛升恒一日鼓
端说切按以十廿、修、在、及
送送中

本主十幅公使事信付房，
日午之页梯下顺至切按
原付送送

大正九年貳月拾七日接受

管正務局

第二課

森

機密 五七

大正九年二月十日

在支那

特命全權公使小幡酉



外務大臣于魯内田承成致

（圓）

中國國是論

譯稿

參議院議員楊以儉（天津警察局長楊以儉）
弟一專主幹經營之東方日報人昨
年刊以來每對外強硬論之倡其
西之國內題山東向題一特別
著海卓說之鼓吹之程ナリレカ

中國是命運之連戴者否否

評也、
如文、
高係、
齒、
齒、
人、
共責、
全、
然、
不、
何、

ミ
存
レ
レ
等
ヲ
抛
レ
刃
木
人
ヲ
抛
ス
ル
ハ
支
那
國
是

夕
ス
人
×
夕
ス
ト
新
遠
と
夕
人
僻
下
十
九
乙
其
列
峯

上
標
名
事
振
自
之
他
山
石
天

邦人、
及、
要、
之、
此、
候、
付、
大、
政、

卷一
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

致多步少

卷之五

力其衆之也。伊其衆衆。
高業爲生。愛且。

新歲交換教育事

提攜ノ希クシテ日本ノ國力及日本人ノ天性ハ
 決シテ其種平和思想抱レ偉大ノ抱負ナレバ本
 人ハ精神上物質上均シク中国人ヲ指違スル
 其軍國主義侵略ヲ逞クセシメ、過キト斷シテ
 彼等華人ノ支那ニ對シテ大高價大工場ノ外支
 那人一切ノ貿易政策ハ毫モ侵奪セサズ、試ミ
 南洋大陸一帯ヲ見ル其大小商業ハ已ニ日本
 依リ盡サセシキハ連夫馬丁屠沽負販、至モ
 支那人ノ幾レカ食ノ餘地ナク、日本人ノ到ル
 所、食料出マラズ、本國品ヲ用ヒテ支那產ヲ購
 買セスレ、稀レ更ニ、筆鋒ヲ轉シテ云フ

又其時者軍人、支那政府領向、元ル者ハ
 支那ノ政情ヲ訪知シテ本國ニ報告スルヲ探
 偵シ「支那ノ俸祿ヲ吃レ日本ノ事ヲ辨スル」又シ
 多數ノ新聞記者ヤ商人、仮若ク「國事」探偵
 ハ支那ノ政客流氓ト結ビ、陰謀ヲ監賣レモル
 ヒヤン密輸スル等種々流毒病民ノ事ヲ為ス
 青島ヨリ本台領後、独逸、經官ノ世子校、教舎
 病院、圖書館ハ多シ、畫ヲ日本ノ流娼、賊民
 還入レヌ故、震一浪人ヲ使、援レテ支那人ト
 畫ヲ開カレシ藉、テ僱金ヲ要ホス世人、良トスレハ
 曰「日本ハ第二ニ独逸ナリ」其言、日本ノ度量
 腹力ハ遠シ、独逸入、及ハカシ、其陰險、卑劣ナ
 人、独逸ニ如シ

ト移レ 諸君ハ 漢ハ 嘗テ 親ロソ 主ク 義レシ 之ヲ 倡遠レ
 華人ニシテ 今更 政未ク 愛シヤ 李ノ 仇視 スルモ
 昨人々 今レシ 其大 謬ナン 知ル、 至クハ 日本 人ハ
 支那ノ 富強 其達 ハ 日本 國家ノ 膨張、 妨ケル
 也レレシ 之ヲ 希望セザルモ 要スル、 日本 國家ノ 膨
 漲、 支那 國民ノ 生存、 之ノ 兩、 相容レザル ナリ、 漸シ
 更テ、 我邦、 於テ 北、 南、 道、 或ハ 亞細亞 モニ、 一 説
 ヲ 採稿シタマヘ 後
 西、 義 驛、 カ、 我人、 ヤ 李ハ 視シテ 千七百ノ 一 遇レ 爲レ 独
 勢 驅除、 藉ロシテ 我、 迫ッテ 千、 條ノ 承 認セレ
 ノ 年、 政 未、 東、 餉、 敵、 大、 千、 年、 支 那、 大、 今、 援
 乱、 シテ 漢、 方、 利、 ソ 耶、 時、 民、 売、 ヲ 煽、 動、 シテ 官 僚、
 威、 脅、 シ、 官 僚、 ヲ 援、 ケル、 以、 テ 民、 売、 ヲ 慫、 恿、 シ、 時、
 二

事也、一聯絡ニシテ、民國ノ破壞セシメ、氏党ノ官
傳事ヲ党員ノ其犠牲トナリ、然ルニ、田氏ノ
痛若セリム

トシ、更ニ、カキ、軍内ノ結合シテ、最近、關係ノ各
種ノ利権、借款、關係ノ権柄、是レ寧北支那
全部ノ危ノミナシ、又カ、本民族ハ、我カ
中國ホク、而シテ、有害有シ、一利ノナシ、ナリ、斷ニ、最後
ニ、東亞ニ、對シ、論及シ、其能ク、直接交渉シ、
拒絶シ、國際聯盟ノ所アレ、レ、結論セリ
要ス、事、論、カキ、事、生、業、及、婦、動、集、米、紙
妓、妹、ノ、論、カキ、日、カキ、人、ノ、支、那、カキ、人、ノ、支、那、人
民、カキ、食、糧、地、カキ、ナカ、レ、ム、カキ、至、カキ、云、カキ、遠、カキ、相
當、有、派、支、那、人、向、カキ、折、シ、カキ、海、面、及、震、セ、カキ、ル、

館使公本日那支在

説、レ、妻、之、再、之、次第、と、有、之、大、く、
 重、餘、地、之、説、存、セ、ラ、レ、候、而、其、學、論、の、
 中、僻、論、の、比較、的、対、本、位、序、好、意、を、有、ス
 二、事、統、紙、上、に、表、セ、ラ、レ、再、々、研、究、の、餘
 地、を、有、ス
 右、及、嘉、永、候、也

門	1
類	3
號	8

視受12109第

大正八年十月十五日接受

警務局 第一課

十月十五日

電報

十月十三日午後二、四五分發
十四日午前一、四〇分着

總機

宛

在天津

軍司令官

天電一九四

在天津米國人經營英字新聞「ハース・チャイナ・スター」

十月十二日ノ記事ニ在ノ要旨ノコトアリ

昨朝支那教養寮ハ米人經營ニ係ル益世報

及英人經營ノ京津「タイムズ」漢字版ニ發行停止ヲ

命ス可シト威嚇シタルヲ以テ英米兩國領事ハ益世報

及「タイムズ」ノ爲メ強硬ナル抗議ヲ提出セリ而シテ米國

領事ハ益世報支配人ノ申出ニ應ジ直ニ電報ヲ

「米軍司令官ニ支那教養寮カ巡教ヲ派シテ



所ヲ鎖セシムルカ如キストアハ一時兵ヲ差遣スルニ
ヲモ辞セサルヘシトノ意味ヲ通知ス。場以德ノ
言ニ依ルハ当然。益世報。米國人ニ京津タイムスハ
英國人ニ關係アルトハ案知。居リト云ヘル表面の
關係無カリシモ係ス。多少不利益ノ事アルヤ。英
米領事ノ態度ハ横暴ナル行動ハ哩。棄ニ値スル
ト憤慨シ居レリ。

自本年七月
至同十五年一月

新聞雜誌等出版物取締
關係雜件
四

十三、露國新聞、
クラスノエ、スミナール、
ヤ、
関スル
件



情報部

歐米情報部 第二課

機密第三一號

大正十四年七月二日

外國新

(辛號用紙)



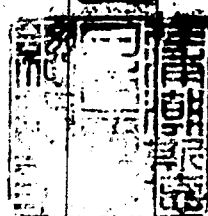
三

左浦潮斯德

左



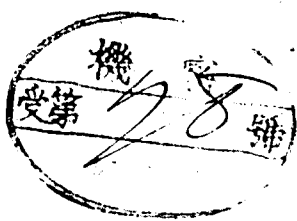
總領事小柳雪生



外務大臣男爵幣原喜重郎殿

新聞雜誌輸入禁止ニ関スル件

本年二月六日日露郵便交換復旧ト共ニ兩國間ノ通信ハ自由ニ行ハル、ニ至レルモ新聞雜誌ノ如キ出版物ノ輸入ニ付テハ依然ル國官憲側ニ於テ嚴重取締リ當地我



一般事情ヲ知ルニ由ナク不尠不便不利益
ト苦痛ヲ忍ビ来レルカ新聞ニ付テハ當
館及民會側ニ於テ極力運動ノ結果我
浦潮日報社ニ對シ四月十日當地外國貿易
部及縣教育部ヨリ「リテンヤ」及許可書
ヲ與ヘ之ヲ輸入ヲ許可シ同月末日迄ハ何
等故障ヲ生セザリシカ五月四日嘉義丸
便ノ新聞ヲ税關ニ於テ突然抑留セリ
右ハ小官ヨリ外務代官ニ交渉シ無事解
決ヲ告ゲタリト雖モ同月十一日以降再ヒ輸
入ヲ禁止シ爾來今日ニ至ルモ未解決ノ
狀態ニアリ依テ小官ハ本月一日外務代

官代理「デミードフ」ヲ往訪シ右新聞ノ輸入ニ
 付テハ(一)當該官憲ノ正當許可書アルニ拘ラス突
 然之ヲ輸入シ絶對禁止セル理由(二)若シ新
 聞記事ニシテ露側ニ取り不利益ト認メラル、
 個所アラハ之ヲ抹殺切抜クコトハ已ムヲ得サル
 ヘキモ全然之ヲ抑留スルノ不當ナルコト又
 (三)内地ニ於ケル經濟狀態及一般政情ヲ基礎
 トシ當方面ニ活動スル我實業家殊ニ鮮
 銀ノ如キ銀行業者ニトリ新聞ノ必要ナ
 ル理由ヲ説述シ延テハ兩國經濟的關係
 ノ利益ノ爲ニ之ヲ輸入許可ヲ希望スルト
 共ニ之ヲ禁止ハ日露國交復旧ノ今日善
 隣兩國ノ爲ニ甚ク遺憾トスル旨ヲ述ヘ

・Y
・L
・H
・K
・M
・N
・O
・P
・Q
・R
・S
・T
・U
・V
・W
・X
・Y
・Z

多處同代理ハ露國ニ於テハ現下之書乃至
 印刷物ノ検閲ヲ爲シ居ラス從フテ之カ抹
 殺又ハ切拔キハ不可能ナルト及本件ハ
 相互關係ニ基クモノニシテ當地縣機關紙
 トラスノエズナリヤ一郵送乃至輸入ハ
 日本側ニ於テモ之ヲ禁止シ居ルニ非スヤト
 反駁シタルニ付小官ハ更ニ同紙ノ輸入禁止
 止ニ付テハ的確ニ承知セサルモ「モスコウ」
 發刊「イズウスケ」「ポラウダ」「エコー」
 スカヤ「ジュー」等ノ如キ官報乃至經濟
 新聞ハ何等故障ナク日本ハ輸入サレ
 居リ從テ二三ノ我方新聞輸入ハ相互關
 係ニ於テモ當然輸入許可セラルヘキ旨ヲ

日各
二下
二内
二省

述へタルニ同代理ハ結局本件ハ當地限リニ
テハ到底解決困難ノ事情アリ既ニ中央
及駐日コソフ大使、移牒済ニ付中央乃至東
京ニ於テ解決ノ外ナシト逃ケタリ
右新聞輸入禁止ハ我一般在留邦人ノ
不便不利益ト苦痛ヲ感シ居ル處ニシ
テ叙上ノ如ク當地ニ於テハ到底解決
困難ノ状況ニ立至リ居ルニ付テハ本省ニ
於テモ相當事考慮ニ置カレ右輸入
解禁方何分抑配慮相煩度尚雜誌
ニ付テハ當地書店潰坂重一ナル者當地
外國貿易部ヨリ別添所載ノ雜誌
輸入ニ付「リテンヤ」ヲ得一時輸入シ

許可セラル居タルモ新聞ト同時ニ之亦絶
對輸入ヲ禁止セラル、ニ至リ前記濱坂ヲ
リ當縣教育部宛願書寫添付當館ニ
願出ノ次第アリタルニ付テ、右併セテ
市高配相煥ニ度此段申進ス



普通
受第 997 號 391
14.914

情報部 第二課

警保局圖發乙第 1027 號

大正十四年九月十一日

内務省 警保局

外務省 歐米局長殿

露國發行新聞紙調査ノ件

目下露國浦鹽ニ於テ發行ニ係ル共產黨機關紙「クラスノエズナ」
ミヤールハ大正九年四月八日新聞紙法第二十四條第二項ニ依リ内務
大臣ニ於テ輸入禁止處分ニ附セラレタルモノト同一ノ新聞紙ト認
メ現在引續キ其ノ輸入ヲ禁止シツ、有之候然ルニ最近ニ至リ右新



内務省

聞紙ハ當時輸入禁止處分ニ附セラレタルモノトハ全然別種ノ新聞
紙ナリトノ聞込アルモ其ノ系統、題號、號數等ニ徴スルモ別種ノ
新聞紙トハ難認候モ今後ニ於ケル取締ノ次第モ有之候條至急眞偽
ノ事實御調査ノ上御回報相煩度

文書課長

大正拾四年九月拾八日接

(甲號用紙)

文書課發送

大正十四年九月拾九日發送

淨書

正校(原稿)

(淨書)

主情報部

主任

第一課

大正十四年九月十九日

附屬書

報一機密第三

號

大正十四年九月十九日附

通

受信

在浦塩

發信

人名

幣原大任

小柳總領事代理

件名

グラスノエスナーミヤ紙ニ就キ

級達名

今般内務省ヨリ照会アリタルニツキ申付

般内行ノグラスノエスナーミヤ紙ニ就キ左記

各項調査ノ上至急申回報アリタシ

要再回

手付金
局長
事務
係
長
等

公信案

外務省

一、大正九年四月頃ノクラスノエヌナリーミヤ紙ト

現在ノ夫ト同一新聞紙ナリヤ否ヤ

二、異同何レノ場合ニ於テカ

イ、出現ノ由來ト創刊年月日

ロ、長期ニ亘リ体刊シタヘコトアラハ

其期間及理由

ハ、経営者及主義ノ上ニ変更

アリタラハ其経過

(乙 號用紙) 宛納

外務省



凡上

警保局圖發乙第一〇二七號

大正十四年十一月十六日

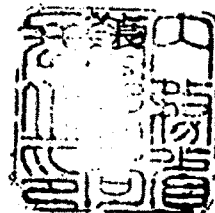
內務省警保局

外務省歐米局長殿



露國發行新聞紙調查ノ件

本年九月十一日附警保局圖發乙第一〇二七號ヲ以テ露國浦鹽ニ於
テ發行ニ係ル共產黨機關紙「クラスノエズナーミヤ」ニ關シ照會
致置候處今尙御回報ニ接セス取扱上差支居候條至急御運ヒ相煩度
重テ及照會候也



內務省

文書課長

文書課發送

淨書

正校(原稿)

(淨書)

(甲號用紙)

主管

秘書長

主任

第二課長

(起草大正十四年十一月十七日)

機密第二

號

大正十四年十一月十七日

附

附屬書

通

受信

在浦塩

發信

人

渡邊

渡邊領事

人名

幣原大臣

件名

新聞、赤旗、自由、件

綴込名

機密

18/ 次者局長

赤旗、不用ナラハ

件名、件名、件名

件名、件名、件名

再回

公信案

赤旗、件名、件名

赤旗、件名、件名

九月十九日附報二機密第三六号ヲ以テヤ述

日星ナル事件調査至急提出相成タシ

赤旗、件名、件名

外務省

南經山學卷八

(乙 號用紙) 園納

外
務
省

Handwritten mark at top right.

Handwritten text at top center: 欧米局長

張再回

文書課長

文書課

受

受

(甲號用紙)

情 1121 三

文書課發送

大正十一年十二月廿

送済

淨書

正校(原稿)小室

(淨書)

主管

文書課長

主任

第二課

(起草大正十一年十一月十八日)

登

報二

普通第七十八

號大正十一年

日附

附屬書

通

受信

内務省

人名

警保局長

發信

人名

小村次長

件名

五

浦塩行新聞調査件

綴名

浦塩行

浦塩行新聞調査件

件名

一〇三七号

公信

外務省

師中越 ¹ 越了 本件調査ニ就テハ ¹ 長表 2

師照會ノ旨 在浦塩總領ノニ對シ

訓令ヲ受ケテ居ルナリ 右報告ヲ俟ツ

師回答ニ 成及メテ 第ナリ 尚未先般

浦塩總領ノニ對シ 小重ナル 督促シ

置キタルルニ 右報告 揚到 師中越 及テ 右ナリ

右 在 師中越 申出ス

情報部第二課

機密第七七號

綴込名

大正十四年十一月五日

在浦調新總

總領事 渡邊理直



外務大臣閣下 勢原喜重郎殿

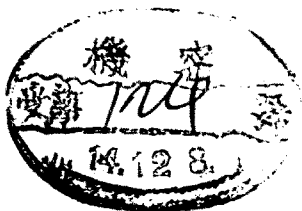
ク、ス、エ、ス、ト、一、エ、ヤ、紙、三、葉、三、件、

本件、ノ、事、ハ、本年九月十九日付報二枚、第三六
號、貴館、中、下、列、一、題、敬、承、即、チ、為、報、取、調、結、果、

左、ニ、回、答、申、出、ス、

左記

一、大正九年八月一日一系統、新、時、ナリ



212
長



十年
 八月
 五日
 在
 立

日山、今堂、縣、年、今、並、如、縣、執、り、年、今、(政)
 及、者、縣、職、業、組、合、縣、合、局、合、同、機、界、即、々、事
 官、半、公、御、用、紙、タ、リ、主、義、之、種、々、事、々、資、本、帝
 主、義、主、義、之、對、し、反、對、的、之、外、不、武、力、干、渉、
 中、日、本、縣、之、官、軍、以、節、之、對、し、猛、烈、ナル、排、外、
 政、策、的、的、義、々、持、シ、斗、ウ、タ、ル、也、以、後、後、交、後、ハ
 大、作、之、種、々、對、し、悠、々、々、々、之、年、齡、一、過、去、
 比、著、々、々、々、和、ル、ヲ、知、ハ、

情報部 第二課
歐米局

機密第七八號

送達

大正十一年十一月三十日

事務

欧米局

外務大臣官邸原喜重郎殿

書付

本邦新守難徳ノ為難輸入ト為難

聯系者旅抵、本邦輸入解禁方ニ乗出



本邦新守難徳ノ為難輸入（難）船乃本邦便

能運上ニ中露側則、為難止セリ之方、為難留

却人、非常、本邦上、若、感、シ、コト、及、本邦

止、理、由、力、我、由、務、和、為難、為難、本邦、旅、抵、

14.12.9

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

次長

少血 歐米局

要再回

文書課發送

大正十四年三月拾貳日發送濟

淨書



正(原稿)

小室

(淨書)



主 管 情

主 任 第 二 課 長

大正十四年三月九日

登

第七六四號

大正十四年三月九日

附

附屬書

通

受信

内務省



人名

松村警察保局長

發信

人名

小村情報部次長

件名

浦塩新軍「クラスノエ」スナミヤ
三浦ル件

綴 込 名

本件三浦ル十一月二十四日附報二普通第七一八号ヲ以

テ一應回答ニ及ヒ置キタル処今般在浦塩渡

辺總領事ヨリ回報有之右報告照前ニ付

公 信 案

外 務 省

米~~ル~~ 委曲 右~~ニ~~ 知相成タシ

右 同 筆 下 時 分

浦 塩 来 信

キミツ 第七号
十一月三十日附

寫 下 係 附 ノ 記 ト

友友 11

洋林セシ
係改更
歐米の長

26/xii
第二課長

要
三
回

文書課長

文書課發送

主

管轄

主
任

主

任

(起草大正十四年十二月二十五日)

大正十四年十二月二十八日附

附屬書

通

青甘八日發

淨書

滴水

校(原稿)

(淨書)

(甲號用紙)

接受

67

受信

人名

川内

内務次友

發信

人名

出淵次友

件名

露國新タラスノエスナ
ミヤ輸入禁止ニ関スル件

込

本件：関シ今般在浦塩波邊總領事

ヨリ別紙寫ノ通表申越、次第アリタルニ

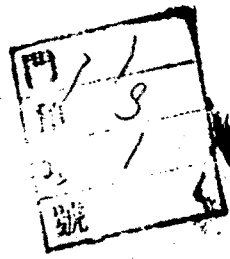
付右表送付本

※

公
信
案

外
務
省

付特ニ以差支十々限り該新丁或輸入解
禁方可然以取計在又或様致在何分ノ
義以回示お煩交



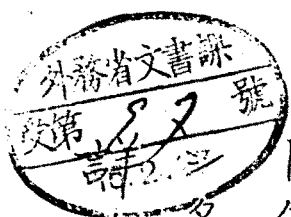
情報部 第二課

高警第六四七號

大正十五年二月二十三日

朝鮮總督府警務局長

勞農官憲、外國新聞雜誌輸入解禁說ニ関スル件



從來勞農露國ニ於テハ共產主義系統以外ノ新聞雜誌其
他統有刊行物ノ輸入竝其購讀ヲ絶對ニ禁止シ来リタル
處今田之ヲ解禁スル旨沿海縣執行委員會ヨリ發表スル
ト今時ニ南部烏蘇利地方各区域會ニ對シ左ノ通牒ヲ發
タルヤノ間込アル旨咸鏡北道ヨリ報告有之候條眞偽
カナラサルモ何等御参考迄及通報候也

左記

爾今日本新聞雜誌其他資本主義的出版物ト雖特ニ公

經送名 外務省

開ヲ許スヘカラサル記事アルモノ、外敢ヘテ之ヲ購
讀ヲ禁止スルノ必要ナシ寧ロ共產主義ヲ人民ニ徹底
セシムルニハ若干ノ反共產主義的出版物ヲ購讀セシ
メ以テ其長短ヲ比較研究セシムルヲ得策トスベシ云

送先々

拓殖局長、亞細亞局長、警保局長、警視總監、在支公使、閩島、哈爾賓、
吉林、奉天、天津、上海總領事、關東之警務局長、安東、鉄嶺、滿洲里、
長春領事、頭道溝、琿春、百草溝、局子街分館主任

朝鮮軍司令官、公憲兵隊司令官、各道知事、玄田、中不務事務及、
右沙委員



張米印長了

内務大臣 若槻禮次郎殿
外務大臣 幣原喜重郎殿
指定廳府縣長官 殿

143
長書

大正十五年三月十七日

外高秘乙第一六四號

情報部 第三課

顧込名

福井縣知事 豊田勝藏

田中大將事件ニ関スル露字
新聞記事ニ関スル件

這般衆議院ニ於テ論議サレタル田中大
將事件ニ関シ本月九日付浦塩ニ於テ發
行露字新聞クラスノ一エスナリミヤ
ル第



一六六九號ハ日本ノ田中將軍ハ幾何
ノ露國金塊ヲ盜ミシヤト題シ東京タ
ツス通信トシテ左記ノ如ク掲載シ居レリ
右及申(通)報候也

左記

東京、三月八日(タス)

日本ノ政府與党タル憲政會領袖中野正剛
氏ハ議會ニ於テ政友會總裁田中將軍其他ノ
軍閥ガ西比利出兵當時巨額ノ貨幣ヲ私シタ
トイフ事ニ就キ詳細ヲ發イタ、

中野正剛氏ハ西比利亞派遣日本軍第十四
師團ガ沒收シタ一千万圓ノ露西亞金貨ノ
行方不明ナルコト並ニ田中大將ガ政友會

入黨ニ際シ神戸ノ或ル富豪ヨリ三百万圓
ヲ受領シタルコト、及同大將ノ陸軍大臣在職
中張作霖ニ賣却シタル軍需品代金數百
万圓ノ行方不明ナルコトヲ述ベタ、
議會ハ大多數ヲ以テ中野氏ノ提議ヲ採擇
シ、コノ事件ヲ審議スルタノニ委員會ヲ
設クルコトニ決定シタ。

次

官

歐米局長
三

電信課長



電信案

主管情報部長

主任情報部第二課

(起草大正十三年三月二十三日)

武彦



(原議用紙甲) 國納

件名 クラスノエスナーミヤノ件

名込綴

宛 在浦塩 液辺総領事

幣原大臣

暗

第四六號

(至急)

宛年七月二十九日ノ「クラスノエスナーミヤ」紙上ニ

代議士中野正剛が本邦ニ於ケル赤化

宣傳ノ爲露國側ヨリ十萬円ヲ受領

セリトノ記事 客年七月二十九日イハケラ

本ノ本不才ニマヤリニ 掲載セラレ居ハトテ目

電送第一八九六號云

一九二三年三月廿七日 午後七時 發

電信案

外務省



下議會ノ問題トナリ居ル
事ノ有無以取調ノ上
事大要併々折返回電アリタシ

（若し有ラバ同）

何等

（開折せん）

（代議士）
（原議用紙を）
（麗納）

クラスノエ、スナリヲヤ一件
(中野代議士関係)

May 1, 1926

I beg to acknowledge receipt
of your letter of the other day together
with the copies of
the newspaper "Krasnoie Znamia"
from July 29th to August 30th, 1925
(nos. 1485 - 1512), and I am now
returning the same ^{to you} with many
thanks for your special courtesy
and trouble.

I beg to remain,

Yours very truly

Ple. Kindly accept my ~~deep~~ sincere
appreciation of your special courtesy.

March 24. 1926

N. LEVITT

INTERPRETER OF THE EMBASSY OF THE UNION
OF SOVIET SOCIALIST REPUBLICS

ラズ/エ.ス+ーヰ

TOKYO

AMBASSADE DE L'UNION
DES RÉPUBLIQUES
SOVIÉTISTES SOCIALISTES.

Dear Mr. Muto

According to the request
of Mr. Nagasaki, which you trans-
mitted to the Embassy some time
ago, I have the pleasure to
send you herewith the numbers
of the newspaper "Krasnoie
Znamia" from July 29th to
August 30th, 1925 (No 1485 to
No 1512 incl.)

Yours very truly

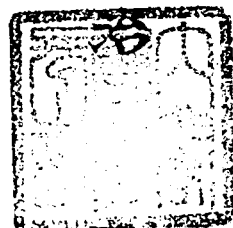
N. Levitzky

書

衆甲 一

大正十五年三月二十三日

内閣書記官長塚本清



外務次官出淵勝次殿

別紙寫、通衆議院議長ヨリ請求有之候ニ付
談新聞至急御送付相成度候

情報部

歐米局長
ヨリ
四月九日

内閣

寫

日本曆大正十四年七月二十九日發刊

露國新聞「クラスナヤズナニ」

右ハ本院「議員梅田寛一君」行動ニ関スル調査
ノ件委員會ニ於テ審査上必要ニ候條至急
御送付相成度此段及請求候也

大正十五年三月二十二日

衆議院議長 粕谷義三

内閣總理大臣若槻禮次郎殿

至急

次

宿

歐米局長

延

大至

長

文書課長

文書課發送

公 信 案

大正十五年三月廿四日接受

(甲號用紙)

主 管 情報部次長

主 任 情報部第二課

三月廿三日 武彦

正 校 (原稿) 淨書

正 校 (原稿) 淨書

淨書

三

號 大正十五年三月廿三日附

附屬書

通

受信

内閣書記官長

發信

出

渡次友

人名

塚本清治

人名

件名

露國新タクラスノ工

級 込 名

不ナニヤニ関スル件

本件：関シ大正十五年三月二十三日附象

甲 或一第ヲ以テ以申越ノ次第アリタル

要 大正十四年七月十九日 附 北 札 切 示 路

公 信 案

外 務 省

國新タ「クラスノエズナミヤ」ハ内務省ニ於テ

用新タ「薪」ハ禁止モ居ル結果ハ勸告

省ニ於テ入手致シ居ラサルニ付右州以テ

知事或ハハ回答中進ス



安公分

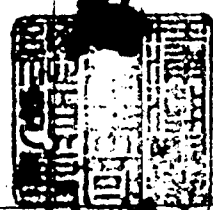
大 次 長 外 務 省 歐 米 局 長

情報部 第二課

大正十五年三月十三日

在浦潮斯德

總領事 渡邊理重



外務大臣男爵幣原喜重郎殿



本邦新聞雜誌當縣輸入ト當縣機關
亦旗紙ノ本邦輸入解禁方ニ関スル件

本件ニ関シテハ客年十一月三十日附機密第七八號
拙信ヲ以テ詳細具請及置キタル處其後御交渉
ノ結果内務省側ニ於テモ亦旗紙ノ輸入禁止ヲ
解除スル事ニ決定セルヤニ内閣致シ居タル處

正前明日本帝國總領事官



當地在留民中ニモ右消息ヲ漏レ聞キタルニヤ彼等
加知字新聞雜誌ノ購讀復舊ヲ渴望スル餘
爾來屢々本官ニ願出居リ事情尤モト被認ニ付キ
甚少恐縮ノ至リ乍ラ可成至急本件解決方御詮
議相煩度以故稟テ稟請ス

追テ本件本省ニ於テ直接御交渉ノ儀何等御
不便ノ關係モ之ハハ場合ハ内務省が書禮紙ノ輸
入解禁ニ決定ノ事實御回報ニ接セハ便宜當方ニ
於テ知字新聞類ノ輸入解禁交渉可致ニ付右為
急申諭

方川

次官

歐米局長

欧米第一課長



要再回

12

文書課長

文書課發送

大正十五年四月十七日

淨書



正(原稿)

淨書

號用紙

主管 情報部次長

主任 第二課長

大正十五年四月十二日



機密 第一

大正十五年四月二十六日附

附屬書

通

受信

人名

川崎内務次官

發信

人名

出洋次官

件名

露米新聞の輸入禁止の件

縫込名

本件は周知の客年十二月二十八日附報二機密第

二五一號抄録ヲ以テ申進置キタル處今般在浦塩

渡辺總領事ヨリ同地在留民が邦字新聞雜

公信案

外務省



誌ノ購讀復舊ヲ渴望ニ其ノ同地輸入解禁

(厚紙)

手配方ヲ願出ツル事情尤モト認メラルニ

之カ先決問題ニテ其換紙輸入解禁方至急可計ニ成テ

再進

ヲ以テ本件至急解決方稟請越ノ次第アリタル

煩文

何分ノ儀可成至急申出相成様致度



事

警言保局長松村義一殿

露西亞新聞輸入現況調査ノ件



首題ニ関シ客月二十三日圖發甲第一二號、警
局長貴官ヨリ照會アリタルカ目下判明セル分
記ノ通りニ有之及回答候

外秘第一三四五號

情報部第二課

大正十五年五月二十九日

警視總監 太田 政 弘



新聞紙名	発行地	職業	購読者住所氏名	部数
ポラウダ	莫斯科		ソウイ エト大使館	二
全	全	元日露校全 學校々長	豊多摩郡杉並町高円寺六五三 井田孝平	一
シラエボナミヤ	浦塩		朝鮮銀行	一
全	全		赤阪已氷川町四 日露通信社	一
全	全	羅紗行商人	牛込已通寺町五七村上方 フイリッホギマナン	一
カペイカ	哈爾賓	全	府下滝川町字田端五四四 ワレリアン、ワニエエフ	一
全	全	全	府下代々幡町山谷三〇五 ワガ一ポフ	一
全	全	全	下谷已花園町不忍旅館 ナウ一モフ	一
全	全	全	本郷已藍染町清秀館内 ドルネフ	一
全	全	華製服商	赤阪已氷川町四日露通信社内 イワン、レリメワシエ	一

全	全	全	全 チイホ、オケアンヌ、 ズウエー、ズグ	全	全	全	全	全	全	全	全	ザ リ ヤ
全	全	全	哈 府	全	全	全	全	全	全	全	全	哈 商 業 羅 紗 行 商 人
				全	羅 紗 行 商 人	獨 逸 語 教 師	全	全	全	全	全	神 田 区 西 紅 梅 町 四
	赤 阪 区 番 池 町 三。			浅 草 区 向 原 町 一 ノ 中 村 方	下 谷 区 花 園 町 不 忍 旅 館	赤 阪 区 松 町 六	赤 阪 区 氷 川 町 四	下 谷 区 長 者 町 二 ノ 五	本 郷 区 富 士 前 町 六 四	全	カ ザ ン ツ エ フ	
日 露 協 會	日 露 商 事 仲 介 所	日 露 通 信 社	露 領 水 産 組 合	マ フ メ ツ ト、 ハ サ ー ノ フ	イ ワ ン、 ベ ス ボ ー ド フ	オ ツ ト、 シ ユ ミ ツ ト	イ ワ ン、 レ リ メ ツ シ ユ	ト ク タ ミ ー シ ョ フ	ド ル ゴ フ	ア フ ア ナ シ エ フ	一	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	

1701

トルゴウオ、 ゾハイレンヤカダ	莫斯科			日	露	協	會	一			
エコノミチエスカヤ、 チーズニ	全			日	露	通	信	社	一		
全	全			日	露	協	會	一			
イウオスチチズニ	哈爾濱		赤阪区福池三。	日	露	商	事	仲	介	所	一
全	全			日	露	協	會	一			
全	全	外語學校教授		ハ	杉	貞	利	一			
全	全	陸軍士官學校		山	田	實	二				
全	全	陸軍少尉	工兵第四大隊	河	野	武	雄	一			
グドク	莫斯科			シヤ、ジ、ツ、リ、ス、ト、ヒ、ユ、ロ				一			
ルスキー、ゴロス	哈爾濱			東京外國語學校				一			
全	全	羅紗行商人	府下尾久町船方三四一	クセニヤ、ススロフ				一			

以上

文書課長印

大正十五年六月四日 接受

(甲 號用紙)

文書課發送

大正十五年六月四日

淨書 中村

正校 (原稿)

(淨書)

主管 情報部次長

主任 第二課長

(起草 大正十五年六月一日)

報

機密

第五三七號

大正十五年六月五日附

附屬書

通

次官

受信 人名

川崎内務次官

發信 人名

出津次官

件名

露島新聞「クラムエ、ブナーニヤ」
輸入禁止の虞を件

縫込名

欧米局長

欧米第一課長

本件、閣下、本年四月二十六日附報二機密牙

三八二號拙信ヲ以テ申進置キ、
慶客付テ九

日附太田警視總監發松村警長保局長宛外秘

(報告)

公 信 案

外 務 省

1等
第62
三

第一三四五號 露西亞新聞輸入現況調査ノ件

ニ依リバ 朝鮮銀行、日露通信社及羅紗行

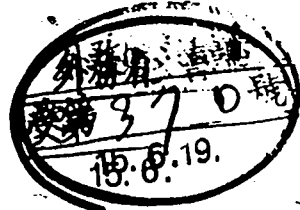
商人「フィリッポ、ギマナン」ハ 現ニ「赤旗紙」ヲ輸

入シ居ル趣 ~~ハ~~ 露布ニ關シ 条件成行等可成

キ事 市面未相煩 庫モ ナルカ 右ハ如何ナル事

怯ニ基リモノナルヤ 曰紙解禁方 未滿ノ關係モアル存
佐浦塩總領事ヨリ督促ノ函アリ

當方参考ニ 玉事何分ノハ 子 右 煩 宜



24/11 課長 課長

次官

9

情報部 第二課

内務省外普第一六二號

大正十五年六月十八日

情報部次長

川崎

内務次官



出淵外務次官殿

露國新聞「クラスノエ、ズナーミヤ」輸入

ニ關スル件回答

六月五日付報二機密第五三七號ヲ以テ御照會相成タル表記ノ件ニ
關シ朝鮮銀行日露通信社及「フイリツポ、ギマナン」ニ輸入サル

綴込名

赤



内務省

トノ件警視總監ヨリノ報告書ニ記載シアルハ購讀申込ノ義ニテ右
ハ發見ノ都度差押ヲナシ居ルモノニ有之候間御了知相成度候

情報部第二課

外高秘乙第七五七號

般込名

大正十五年十月二十八日

福井縣知事市村慶三



内務大臣濱口雄幸殿
 外務大臣幣原喜重郎殿

警視廳、北海道、兵庫、
 石川、山口、各廳縣長官殿



輸入禁止露字新聞差押二箇不件

本月二十二日浦塩ヨリ教賀入港ノ定期

船嘉義丸ノ齋ヲセル外國郵便物中

二左記宛名ニ係ル浦塩ニ於テ發行



輸出禁止新聞紙、クラーズ、エ、ブナ
ミヤ、在中セルヲ、敦賀郵便局ニ於テ
發見之ヲ、花押ハ即日、越後省ニ進
達セル趣
右及申(通)報候也

記

神戸露國領事館

六通

同館員エリネフォーム

六通

東京露國大使館

六通

同館員イジール

三通

東京日露貿易通信社

六通

函館露國通商局出張員

六通

計

三十三通

字

報二機密第六一六號

昭和二年六月三日

外務次官 出淵 勝次

内務次官 安河 内麻吉 殿

露國「赤旗」紙輸入解禁方ニ關スル件

曩ニ大正十五年四月二十六日附報二機密第三八二號ヲ以テ申進置タル浦潮「赤旗」紙ノ本邦輸入解禁方ニ關シ未タ御回報ニ接セサル處同地渡邊總領事ニ對スル回答ノ都合モアルニ付何分ノ儀可成至急御回示相成度

(赤
粹
紙)



外
務
省

情二八



拜啓陳者昨十六日貴課ヨリ電話ヲ以テ御照會相成タル浦潮赤旗紙輸入解禁方ニ關スル當方往信寫二通別添御送付申上候間御查收ノ上何分ノ儀可成至急御回示相願度此段得貴意候 敬具

昭和二年六月十七日

外務省情報部第二課長

内務省警保局圖書課長殿

(赤
粹
紙)



外
務
省

十四、英國副領事、關於記事正誤方、件

たうす 九月十七日
在 英 目 々 廿 七

問題の某外國人

渡島半島に出没す

何の爲の調査か其の行動や怪し

堀内中將の憤慨

中であり、更に建、輕、海、陸の日本、海、口、に當る、飛、白、神、海、陸、の、要、然、前、地方、で、奇、怪、な、行、動、あり、と、て、當時、問題、を、思、ひ、た、が、同、氏、は、去、る、七、月、上、旬、本、郷、に、回、り、自、動、車、を、買、切、り、で、幾、日、間、に、航、た、は、る、中、山、峠、に、現、れ、長、時、間、中、で、何、處、か、行、む、の、後、數、日、を、經、て、更、に、江、差、向、に、自、動、車、を、飛、は、し、た、事、實、が、あ、り、當、時、海、軍、局、は、東、海、方、面、か、ら、の、有、名、者、の、來、道、が、鐵、々、と、あ、つ、た、の、で、こ、の、方、に、氣、を、奪、は、れ、某、氏、が、江、差、向、道、に、行、つ、た、事、實、を、悉、く、知、ら、な、い、で、た、ら、し、く、斷、言、を、出、し、た、事、實、は、同、氏、は、去、る、五、月、來、道、を、され、江、差、地、方、に、放、置、さ、れ、た、の、は、事、實、で、あ、る、が、同、氏、は、植、物、學、者、で、あ、る、か、ら、植、物、の、採、集、に、來、た、も、の、で、あ、ら、う

中、將、堀、内、文、次、郎、氏、は、語、る、語、つ、て、る、た、又、北、海、道、旅、行、中、の、隨、軍、

團、で、見、て、も、勝、る、や、う、に、中、山、峠、は、函、館、本、線、本、郷、驛、と、江、差、に、通、ず、る、海、路、の、中、間、に、あ、る、分、水、嶺、で、あ、る、日、本、海、方、面、と、津、輕、海、陸、の、連、絡、上、重、事、的、に、も、極、め、て、重、要、な、る、地、點、で、あ、る、が、從、等、の、傍、若、無、人、の、趣、度、に、は、呆、れ、る

江、差、向、輕、鐵、道、は、國、防、上、重、要、地、點、目、下、大、間、虎、尾、方、面、に、對、し、城、土、軍、進、行、

新 聞

(可認物與電報三第)

號八十六百九千七万一第

(TRANSLATION)

From "Tokyo Nichi-nichi Shimbun" of 12/9/1926.

(The Hokkaido Special Edition)

A certain Foreigner in question.

Appears here and there in Oshima Province

What is he investigating? Actions suspicious.

Indignation of General Horiuchi.

A certain person on the staff of a certain Consulate-General at Yokohama, whose movements in the important district of Matsumae on Tsugaru Strait have given rise to suspicion in previous years when he was Consul at Hakodate appeared again in the early part of last July, when he hired a special car from the Omnibus Company at Hongô station and was seen on the Oshima Province Pass at Nakayama where he spent many hours in some unknown pursuit. A few days later he is known to have made a hurried trip by motor to Esashi. At that time the attention of the Police Authorities was fully occupied by a succession of important visitors from Tokyo, and they appear to have remained in complete ignorance of this foreigner's secret expedition over the Esashi high-road.

According to Mr. Hatanaka, Interpreter at the British Vice-Consulate, Hakodate, it is quite true that Mr. Greatrex came to Hakodate last month and made the trip to Esashi, but being a botanist he presumably came to collect botanical specimens.

Lieutenant-General Bunjirô Horiuchi, while travelling in Hokkaidô, expressed his views as follows:-

"I do not understand Mr. Greatrex's actions. Not being an expert I do not know what rare materials for the botanist there may be in that district, but as can be seen from the map the Nakayama Pass is on the divide midway between Hongô station on the main railway line and Esashi, and is an important strategical point connecting the Japan Sea area and the Tsugaru Strait area."

audacious "I am amazed at the behaviour of such shameless persons."

Tsugaru Strait is an important zone in the defence scheme of the country, and great fortification works are in progress of construction in the Oma and Shiriya districts. Further it is understood that Capes Tatsubi and Shirakami are to be included in the fortified zone and that defensive works are to be constructed there in the near future. Consequently this foreigner's appearances on the scene at this particular time deserve serious attention.

in deploring the publication of such an irresponsible and wholly unwarrantable attack on a British Government official resident in Japan and I venture to hope that steps may be taken, by reference to the Municipal Office at Esashi or otherwise, to secure the insertion of a full démenti by the newspaper in question.

Believe me, my dear M^r Debuchi.

Yours sincerely

Maurice Peterson

British Embassy,

Tokyo,

October 4th, 1926.

信
Dear Mr. Debuchi,

封
I recently took an opportunity to invite your attention to an objectionable article appearing in the "Tokyo Nichi Nichi" of September 12th which insinuates that H. M. Vice-Consul at Yokohama, who is mentioned by name, had been guilty of espionage in the neighbourhood of Esashi during a visit which he paid to the Hokkaido last summer.

The article asserts that H. M. Vice-Consul contrived to elude the notice of the police although the newspaper's correspondent could easily have ascertained, had he so wished, that the British official had called both at the Municipal Office and at the police station at Esashi and had kindly been furnished by the former with an official guide to assist him in the very harmless botanising expeditions which afford the pretext for the attack.

The Ambassador is sure you will agree

in/

His Excellency

The Vice-Minister for Foreign Affairs.

次官 務

政永局長 延

秘書官 官

至急 34 印 34 34 34

文書課長

文書課發送

主情報部長 事務

主任第二課長

(起草大正十一年十月五日)

淨書

正校(原稿)

(淨書)

(甲號用紙)

機密 普通第

號 大正十一年十月六日

附

附屬書

通

受信 東京日々新聞社 第下

發信 人名

外務大臣秘書官

件名

美領事館記事正誤方件

綴込名

(單之外務大臣秘書官姓名ヲ要トス)

有公陳若貴社若川東京日々新聞

用北地通揮去版本年九月十一日

張之於手橫濱駐在英領事

公信案

外務省

公信案

力本年七月下旬北海道注遊ノ際

警察當局力注意セラルニ東ニ植物

研究ト稱シテ江差街道ニ窓行ニ

何事カ奇怪ノ行動アリタルモノナキ

記事掲載セラルタルニ同副領事

現ニ同所沒場及警察署ヲ訪問シ

同沒場ノ好意ニヨリ案内者ヲ附セ

うレタル位ニテ右記事、事實相違ノ
趣ヲ以テ左ト却テ英國大使館ヨリ之ガ
正誤方ハ信賴域、決テ有ラズ候ニ付
併ニ同記事^所取消^所有^所年^所採^所取^所
方々^所中^所進^所修^所ヤ

新聞紙法

明治四十二年五月六日
法律第四十一號

第十七條 新聞紙ニ掲載シタル事項ノ錯誤ニ付キ其ノ事項ニ關スル

本人又ハ直接關係者ヨリ正誤又ハ正誤書辯駁書ノ掲載ヲ請求シタルトキハ其請求ヲ受タル後次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲナシ又ハ正誤書辯駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ

正誤、辯駁ハ原文ト同號ノ活字ヲ用フヘシ

正誤、辯駁ノ趣旨法令ニ違反スルトキ又ハ請求者ノ氏名、住所ヲ明記セサルトキハ之ヲ掲載スルコトヲ要セス

正誤書、辯駁書ノ字數原文ノ字數ヲ超過シタルトキハ其超過字數ニ付キ發行人ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ料金を要求スルコト

ヲ得

第三十五條 第十七條第一項、第二項又ハ第十八條ニ違反シタルト

キハ編輯人ヲ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ私事ニ係ル場合ニ於テ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

(参考) 此等紙法ヲ二十三條ハ内務大臣ニ對シテ掲載事項カ

治安ヲ秩序ヲ紊シ又ハ風俗ヲ害スルモノト認メタルハ
其ノ發表及録布ヲ禁止スル權能ヲ具ヘ

又予二十七條ハ陸軍大臣及外務大臣ニ對シテ
軍事又ハ外交ニ關スル記事ノ掲載ヲ禁止又ハ制限

スルノ權能ヲ与ヘ居ンモ

何レモ本件ニ適用ナシトナレハ本件記事ハ何レ

治安ヲ秩序又ハ風俗ヲ害スルモノトモ認メケラス又

軍事又ハ外交ニ關スル記事トモモアザルハ也

外 務 省

刑法

第三十四章

名譽ニ對スル罪

第二百三十條 公然事實ヲ揭示シ人ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ其ノ事實ノ有無ヲ問ハス一年以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

死者ノ名譽ヲ毀損シタル者ハ誣罔ニ出ツルニ非サレハ之ヲ罰セス。

第二百三十一條 事實ヲ揭示セスト雖モ公然人ヲ侮辱シタル者ハ拘留又ハ科料ニ處ス。

第二百三十二條 本章ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス。

日本之法律關係

日本之法律關係、法規上別紙、特南紙、第十七條及
刑法、第二百三十一條（有罪判決、場合之民
事上ノ附帶訴訟、トシテ損害賠償請求
ヲ爲スルコトヲ得ヘシ）ノ外、救済方法ナシ
日本刑法ニ、國交ニ關スル罪（第四十章）ノ規定、正ニ
同規定ニ、外王ノ君主又ハ大統領、外王ノ使節、外王
ノ國旗、ニ對シテ侮辱ニ關スル制裁ヲ規定スルニ、外王
領事ヲ包含スル規定ナシ

ベーター博士意見要領

英王の於ける回玉紙の外に領事その他

官吏又ハ私人の印捺ナリ一行爲に於て記す

リ掲げたる場合の外に政府又ハ代表者ヨリ抗議

セラルトモ其に政府に之を對シテ何等責任ヲ

有セズ又其内情上之に正誤又ハ其過ヲ爲サレ

リテも機能ヲモ又ハ其效力ヲ有セズ

Remedy *Judicial Remedy*

此場合唯一の救済方法ハ裁判上ノ救済方法

ニ止マリ行政上ノ手段ナシ
 即チ其被害者
 自身又ハ直接関係者ヲ
 直接損害
 支給ニ對シ正誤ノ請求ヲ爲ス力然ラズ
 ハ同然タリ故ニ之ヲ裁判所ニLibel
 caseヲ提起スルノ外ナシ
 (libel caseニ民事上並
 刑事上ノ兩救済ヲ併フ
 而シテ裁判所力ニ對シ不當ノ裁判ヲ爲シ
 各々場合ニ於テ始メテ
 政府ノ責任ヲ
 問ヒ得ヘシ

米、先例

一八二八年三月二十九日米王下院外交委員会ハ
駐伯米王代理公使 *Aguet* ガ伯王新王紙上同人ニ
関スル收購事件ノ記事掲載ニ對シ根拠ナキ
ナリトシテ下院ノ審査ヲ請求シ對シ
單ナニ新王紙上ノ米王代表者 (*Aguet*) ニ對スル政
略ニ下院クテ何お措置ヲ執ルニハナク
ノ理由ナラズト報告セリ

正誤

拜啓陳者貴社發行東

京日日新聞北海道樺太版本年九月十二日紙上において横濱駐在英國副領事が本年七月上旬北海道往遊の際警察當局が注意せざるに乘じ植物研究と稱して江差街道に密行し何等か奇怪の行動ありたるものの如き記事掲載せられたる處同副領事は囑に同町役場及び警察署を訪問し同役場の好意により案内者を付せられたる位にて右記事は事實相違の趣を以て在邦英國大使館より之が正誤方依頼の大理有之候に付同記事御取消相成様致度此段申進候也大正十五年十月六日外務大臣秘書官東京日日新聞社御申

大正十五年十月十六日

東京日々新聞

(北海道樺太版)

Copy

October 16th, 1920.

Dear Mr. Peterson,

Referring to your letter of the 4th instant addressed to the Vice-Minister Mr. Debuchi, I am directed to forward to you enclosed herewith a clipping of the correction published in the Tokyo Nichi Nichi of October 16th.

Yours sincerely,

(Signed) K. Wakasugi

Chief of the 1st & 2nd
Sections of the
Intelligence Bureau.

Mr. Maurice Peterson,

1st Secretary of the
British Embassy.

情報部次長事務

次官

British Embassy,

Tokyo,

November 3rd, 1926.

Dear Mr. Wakasugi,

I must apologise for my delay, due to absence from Tokyo, in acknowledging receipt of your letter of October 16th in which you were so good as to forward to me a clipping from the "Tokyo Nichi Nichi" of that date.

Yours sincerely,

Janice Peterson

110

K. Wakasugi, Esquire,

Chief of the 1st and 2nd Sections

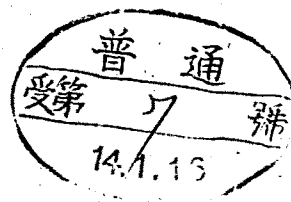
of the Intelligence Bureau,

Tokyo.



18
5
7
14

1.3
外國新聞電報取締委員會設置件



情報部 第二課



込名

海軍



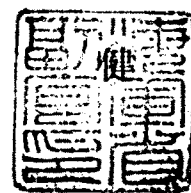
官庁第一二八海

大正十四年一月十五



海軍省副官 寺島

外務省情報部第二課長 芦田均 殿



外國新聞電報取締ニ關シ委員會設置ノ件

一月九日開催國際情報電信調查委員會ニ於テ遞信省提案首題委員會設置ニ關シ當省ニ於テハ異存無之左記ノ通委員指定セラレ候條可然御取計相成度

右回答旁通知ス

記

海軍

委員		職官		氏名		電話番號	
海軍省副官		海軍大佐	寺島健			所屬	自宅
同		海軍少佐	副島大助			同右	同三三七四

終

大正四年貳月廿參日接受

甲號用紙

淨書
卷四

正校
(原稿)

(淨書)

主管
情報部次長
事務主任
情報
乙

主 任
情 乙

(起算大正十四年乙卯十二月十二日)

機密
普通
第

二二號

大正
24
年

二月三日

附

附
屬
書

酒

受信
通信
通信
通信
通信

發信 情部次長
人名 小村欣一

人名

人名

件名 外、~~母~~新支電報檢閱委員會

名 込 縫

外、行、秘、女、電、報、換、閱、年、女、口、指、筆、方、師、依、賴、一、趣、3、承、傳、

在記西各全女會の二維れ致ひ了也、承知置相成、此段、

1st
12)
 $\frac{2}{12}$
h.
y.

公
信
案

外
務
省

情外於情
通於情

14.2.23

1732

MT 1.3.1.4

左記

情報部 平澤長

外務書記 萩田 勇介

同 平澤長

外務書記 萩田 勇介

萩田 勇介

課長

大正十四年貳月

(申號用紙)

文書課發送 大正十四年貳月

參日發送

淨書

正校(原稿)

(淨書)

主管

情報部長

主任

第二課長

(起草大正十四年 月 日)

報

一機密第

九

號

大正十四年

二月

二日

附

附屬書

通

受信

人名

通信次官

發信

人名

出開次官

件名

外國電報檢閱

綴

清和行、天行社

實川時次郎

今日、小田、銅、長島、隆二、筆主裁、下二

村、未、主、戰、同、盟

組織

計畫、本、日、上

大至急

再回

野、精、美、良、軒、之、於、之、か、及、會、式、ヲ、掌、行、ス

實信案

外務省

檢閱



ル趣ノ処 右ノ南ニ報道ハ達ラズ 米国人ノ

感情ヲ刺戟シ 我々米政策ニ障害ヲ及ビ 日米向ノ国交ヲ益用ニ阻

害スルノ嫌有之ハ付テハ事件外國向

電報ハ一切止檢閲ヲ^上一^常應其其信ヲ

差止ルハ可然由配慮相煩度此段及

由依頼候也

15
 15

藤田

（日 號 川 紙）

拜啓太平洋上に於ける我國の海軍大演習は我國に對する一大示威運動であり挑戰的の行動であると思ひます斯の如き暴慢不遜の態度に對して私共は皇國の臣民として斷じてこれを寛容し默視する所以を知りません故に此場合私共は我國も對抗的行動に出づるか當然の歸結と信じて居ります。此旨趣精神を以て對米主戰同盟を組織し廣く先づの士の結合を計り政府を鞭撻すると同時に國民的大運動を起したいと思ひます。以上旨趣精神に御賛成下さるならはどうか結盟に御參加を御願ひいたします。

◎日時 二月三日 午後五時
 ◎場所 上野精養軒
 ◎會費 貳圓（當日持參）

人 順
 岡 治 松田 輔
 岡元 五 實川時 治郎
 小山田 劍南 重松又太郎
 金内良輔 清水行之助
 上村市之丞 日高 彦彦
 長島隆二 鈴木正吾
 松林 亮 荒川精一

下谷 上野精養軒内
 對米主戰同盟
 御 中

外 務 省

附屬書類添附

情報部 第二課

通信雜件

機密第八號

大正十四年七月十八日

在米

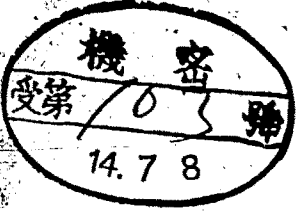
特命全權大使松平恒雄

外務大臣秘書長青木宣親殿

新聞電報遲延之件

在米國日本大使館

数日前本使「アソシエーテッド・プレス」社長 Frank B. Boyer
 氏ト會談、際偶々同氏ハ本館ヨリ「新聞電報」北
 京ヨリ「電報」比シ著敷遲着勝ミテ而シテ右ハ日本
 内地ニ於ケル遲延ニ基因スルモノト思ハルニ旨語リタル事



在米國日本大使館

参考ノ為其ノ實際ノ狀況ヲ具體的ニ承知致度旨
 申述ヘ置キタニ處別找字ノ通リ通信所要時間實
 地試驗ノ結果ニ關シ同社通信部長ノ報告送附
 越有之俄委細ノ右報告ニ就キ詳悉可有之處右果
 シテ事實ナルニ於テハ本館ニ取リテ甚タ不利益ナルコト
 有之殊ニ北京及東京ヨリ米國ニ到ル新聞電報ノ所
 要時間ニ別找報告ノ如ク多大ノ懸隔アルハ大ニ注意
 値スヘク就テハ本件ヲ取調ノ上先方ヘ一應答振テ
 回示相成候様致度右報告旁方此中進候

THE ASSOCIATED PRESS.
New York

June 12, 1925.

Mr. Cooper,

The transmission test between Tokio and Peking via the Great Northern to New York and via the Pacific to San Francisco, has shown that from Peking, the Great Northern route is very much faster, while the contrary is true of the Tokio filing.

Sample messages have been as follows: -

Via Great Northern to
New York

Via Pacific to San Francisco

TOKIO

May 23 -- 4 hrs. 32 min.	2 hrs. 20 min.
" 25 -- 2 " 41 "	1 hr. 20 "
" 29 -- 3 " 10 "	1 " 10 "

PEKING

May 24 -- 56 min.	2 hrs. 40 min.
" 25 -- 1 hr. 12 "	1 hr. 56 "
June 5 -- 1 " 10 "	6 hrs. 35 "

On the slowness from Tokio being called to the attention of Mills at Moscow, we received word that the Great Northern Shanghai and Nagasaki Stations pointed out that the operators at Tokio were inclined to delay press matter between 6 o'clock P.M. and 11 o'clock P.M. Japanese time, owing to the pressure of full rated traffic. The suggestion was made that a few press-rated tests outside those hours be made. Tokio was instructed to file, but the only dispatch on which there was a comparison was that of May 29th and you will see that on that date the Pacific route was approximately two hours faster than the Great Northern.

Milton Garges,

Chief Traffic Department.

Peking is now filing via Great Northern exclusively.

M C

THE ASSOCIATED PRESS

President's Office
Star Building, Washington, D.C.

June 13, 1925.

H.E. The Japanese Ambassador,
Washington, D.C.

My dear Mr. Ambassador:

I enclose herewith a report I have just received from the head of our Traffic Department showing the relative time of transmission from Tokyo and Peking.

I find that I was mistaken except as to an isolated case not reported here in the time being eight hours from Tokyo over the Great Northern but you will note that it is very much more than that required from Peking.

With cordial regards,

Sincerely,

(Signed) Frank B. Noyes.

Enclosure.

Received
June 13, 1925
H.E. The Japanese Ambassador
Washington, D.C.

次官

送收
通商局

西支海國

文書課長 文書課 長檢印

大正四年七月拾日 接受

案 6分

(甲號用紙)

4710

文書課發送

大正四年七月拾日發送濟

淨書

正校(原稿)

(甲號用紙)

主 管 主 任

主 任

(起草大正四年七月九日)

機密 第九號

大正四年七月九日

附屬書 通

受信 人名

遞信次官

發信 人名

外務次官

件名

日米向新同電報遞送回件

級 達 名

通信雜件

本件因今般在米松平大使引別紙寫一通

來信 付委細 右三張了悉 上一應

出張調相或 結果出張回示相煩 度此陳

公務案

外務省

外交部中

六月十日附在末大使來信撥官及金号及附扁其文

寫作製造附(1)



普通郵便
第68號
14. 8. 10.

情報部

第三課

有添付物

通信

通信部

通信

外信第五三五五號

大正十四年八月八日

外務次官殿

遞信次官



東京

日米間新聞電報遲延ニ關スル件

北平

北平

ヨリ大北會社線ヲ經由シ紐育ニ至ル電報力東京ヨリ同地ニ至ルモ

ノヨリ遲延勝チナルハ日本内地ノ取扱ニ基因スルモノニ非ラスヤトノ

趣ヲ以テ取調方松平駐米大使ヨリ申越アリタル旨客月十一日報ニ機密

第九九號ヲ以テ御照會ノ趣了承右ハ左記ニ依リ御諒知ノ上同大使へ可

然御回答方相煩度候

一、北京ヨリ英米ニ至ル電報ハ大北會社力支那及露國ヨリ借入レ専用

ニ送ル北京、賣買城、西比利亞、歐露ノ陸線ニ依リ瑞典又オ丁抹ヨ

リ倫敦、北京、倫敦、中繼箇所ハ僅ニ三四ヶ所ニ過キス然ルニ日本ヨリ大北

會社線經由ニテ發送セラル、場合ハ日本北京間ニ於ケル中繼例ヘ
ハ東京發信ニ付テハ東京―長崎―長崎（大北會社局）―上海―上
海―芝罘―芝罘―北京（場合ニ依リ上海―北京）ノ中繼ヲ要スル
カ故ニ日本發信カ北京發信ヨリ遅延スルハ現在ノ電信回線ノ組織
上已ムヲ得サルモノトス

二、東京ヨリ太平洋商業海底電信會社ノ線路ヲ經由シ紐育ニ至ル電報
ハ東京ヨリ直接「ダワム」ニ至リ夫レヨリ桑港ニ出テ桑港ヨリ直
接紐育ヘ傳送セラルルヲ以テ北京發太平洋經由ノ電報ヨリ東京發
ノ方速達スル譯ナリ

三、新聞電報ノ傳送ハ國際電信業務規則ニ依リ特ニ之ニ關シ關係電信
主管廳間ニ協定アル場合ノ外午後六時ヨリ翌日午前九時迄ノ間ニ
於テ私報ト交互ニ傳送スルコトトナリ居ルモ本邦ニ於テ此ノ規定
ニ依ラス能フ限り新聞電報ノ速達ヲ圖リ居レリ

尙「アツソシエーテツド、プレス」社ヨリ松平大使宛書翰ニ參考ト

シテ添付シアル「ミルトン、ガージエス」ヨリノ書面末段ニ「大北
會社ノ上海及長崎兩電信局ハ日本局ニテハ通常電報ノ幅輦ニ因リ新
聞電報ヲ午後六時ヨリ同十一時迄ノ間ニ傳送スル傾向アリトノ旨ヲ
指摘シタリ」云々ノ記事有之候モ右ハ事實ニ在ラス

尙日本ヨリノ新聞電報ニシテ日米間ノ無線電信ニ依リ傳送セラル、
モノ尠カラス例ヘハ東京發紐育着電報ハ東京ヨリ磐城無線局ニ至リ
夫レヨリ布哇及桑港ヲ經テ「ウエスターン、ユニオン」電信會社ノ
陸線ニ依リ紐育ニ達スルモノニシテ其ノ所要時間及正確ナルコトハ
有線ニ比シ毫モ遜色無之候右御參考迄茲ニ申添候

公 信 案

大正十四年八月拾一日受 8

文書課長

(甲 號用紙)

文書課發送

大正十四年八月拾四日發送済

淨書

正校(原稿)

(淨書)

主 管

情報部次長

主 任

情報部第三課

(起草大正十四年八月十一日)

報二

機密 第一

號

大正

14年

8月

14日

附一

附屬書

通

波 信

受信

人名

左米松平大使

發信

人名

幣原大臣

件名

新電報遞延ニ
關スル件

級 込 名

通信
情報雜件

本件ニ關ス大正十四年六月十八日附核密

茅八五弼貴信ヲ以テ市來申ノ次茅

了承右ニ關シ通信者ニ照會ニ及置

公 信 案

外 務 省

キタル 貴 今般 同省ヨリ 別紙 写ノ 通 回

答ノ 次 茅アリタルニ 付 委曲 右ニテ 以 承

悉ノ 上 先方へ 應 答方 取 討ハレ 交シ

附 屬 書 大正十四年八月八日 附 本 信

通 信 次 官 来 信 外 信 茅 五 三 五 五 号 号 号

添 付 ノ 一

文書課長

文書課發送

淨書

正校(原稿)

(淨書)

(甲號用紙)

主管 情報部長

主 任 第一課長 (起草大正十四年七月廿五日)

半信

機密第

號 大正十四年七月廿七日附

附屬書

通

受信

通信者

人名

外信課長

發信

情報部

人名

田書記官

件名

禁止電報解禁件

名込綴

附

本年一月廿日憲政會總會に於ける加美首相演説及び上

海騷擾事件之虞に外務大臣談話内容に於ける禁電

トシテ被逐セラレん 新聞記事

御依頼致送外知最早の経過ノタメソノ父西女ヲ認メズ解

公信案

外

ト務被逐外知

要再回

禁松成、
文代
段及寺
通和
い
ヤ

柳

依金

MT 1.3.1.4



外信第一〇一〇九號

大正十四年九月三日

外務省情報部

芦田書記官殿

逓信省電務局外國電信課長



電報取締方解除ノ件

本件ニ關シ七月二十五日附貴信御申越ノ趣了承、右ニ關シテハ相當措置致置候條御了知相成度

逓信省

子... 取...



清野

事務

大川
知第

電報檢閲

(乙 號用紙) 國納

大正拾四年三月廿一日

武登

十二月十六日 電ノ在留外國通信員ノ電報

中奉天ニ於ケル我駐屯軍補充増員ニ関

ハ凡テ

スル部分送停送セラレ居ルコト十七日

後

右ハ外務省トシテハ寧口外國ニ周知ヲ希望スル性

内密檢閲ノ際 見シテ以テ早速通信

省電務局外國電信課牛澤事務友ニ電

外務省

シ報ノ情

MT 1.3.1.4

1755

話ヲ以テ其ノ理由ヲ質問シタル處、同友ノ

説明ニ依レバ十六日 陸軍省國分大尉ヨリ

右情報ノ傳送^要停止方依頼ノ次第アリ、同日

夕刻再び軍務局林大佐ヨリ右ハ外務省

ニ於テモ差止希望ノ事項ナルヲ以テ、是々モ

傳送停止方取計ハレ交シト、念ヲ押シテ申越

ノ次第アリタルヲ以テ、其ノ通處置ニタルモ

ノナリト云フ。仍テ当方トシテハ本件ハ明カニ

外交事項ニシテ然モ当方トシテハ寧ロ外國

ニ周知方希望ノ事柄ナルニ通信者ニ

於テ何等ノ協議ナク傳送停止セラレタルハ

遺憾ナリ何故一應当方ニお談セラレザリシ

ヤト問ヒタルニ同友ハ陸軍ヨリ外務省モ

希望スル要ナル旨語アリタルヲ以テ斯ク

信ニ停止セルモノナリトノコトナリキ

一方情報部、亞細亞局其ノ他ニ付陸軍側

ト右様ノ話合ノ有否ヲ確カメタルニ右ノ如キ

事実全然之ヲ判明シタルヲ以テ十二月

十八日木村亞細亞局長、~~如~~外務大臣ノ

命ニ依リ畑軍務局長ヲ訪問、陸軍ノ

專断ヲ以テ何等其ノ權限ニ屬セサル措置

ヲ爲セルハ甚不合理且ツ外務省ノ迷惑スル

所ナル旨述ヘタルニ軍務局長ハ大イニ驚キ

右^同局長ノ命^{令ニ依}ルモノニ非サルコト~~及~~爾今

右様ノ行動ヲ爲サルハキコトヲ述ヘ遺憾ノ意

ヲ表~~出~~シ且今後若シ必要アラハ必ス外

務当局ト協議^シ外務省^{ニ於テ}必要ノ措

置ヲ講スルコトニ同意^ス旨通信省ヘ通

達スハキエトラ約セリ

尙
十九日爲念右ノ次第牛澤通信事務友ニ

通知セリ

外務省

RTP PRESS

Via Bonin

Dec 16

ASSOCIATED SANFRANCISCO

41230 last add 41220 FO understands Changs mercenary troops
near revolt numerous lootings reported stop strictest
measures deemed necessary prevent loss lives property nationals
foreigners stop until present warfare concluded understood
Mukden under absolute control Japanese military stop
advices state Chang previously removed most arms munitions
exarsenal